5月10日（土）

口頭発表	A会場（全学教育棟 C-13）		B会場（全学教育棟 C-15）		C会場（全学教育棟 C-23）		D会場（全学教育棟 C-25）	
司会	太田　陽子		坂井　美日		鴻野　知暁		中川　奈津子	
13:30 ｜ 14:10	A-1 p. 1	思考動詞と共起する「NPのこと」の使用メカニズム ―「考える」を手掛かりに― 徐　筱琦（関西学院大学学生）	B-1 p. 31	中古和文資料における地の文の連体形終止 泉　沙希（筑波大学学生）	C-1 p. 61	『清議報』日本語翻訳記事から見た「国民」「人民」の中国への伝播 古谷　創（明治大学学生）	D-1 p. 91	作文からみる中学生のジェンダー意識の変遷 加藤　恵梨（愛知教育大学） 角谷　昌範（碧南市立大浜小学校）
14:20 ｜ 15:00	A-2 p. 7	形容詞語幹を語基とする複合・派生に着目したコーパス駆動型品詞論の方法 鯨井　綾希（就実大学）	B-2 p. 37	「せっかく」における〈擬似述語用法〉の成立 許　燕（名古屋大学）	C-2 p. 67	漢語「鉛直」の成立と展開 奥山　光（東京大学学生）	D-2 p. 97	東京アクセントの尾高型の共時的・通時的分析 中澤　光平（信州大学）
15:10 ｜ 15:50	A-3 p. 13	BCCWJとCEJCにおける自他対応動詞の使用傾向 ―自他対応に着目して― 新谷　知佳（大阪大学）	B-3 p. 43	タリ・タ形が用いられる連体節とその参照節の時間的関係 末吉　勇貴（関西大学学生）	C-3 p. 73	訓読に用いられた平安期和文口語・歌語 ―「さもあらばあれ」を例として― 中山　大輔（放送大学学生）	D-3 p. 103	岐阜県西美濃方言における動詞否定辞ン・ヘンの使い分け ―人称制限と意志性に注目して― Molarius　Milla（大阪大学学生）
司会	堤　良一		久保薗　愛		佐伯　暁子		小川　晋史	
16:10 ｜ 16:50	A-4 p. 19	文末名詞文「気だ」の構文としての意味 ―「観察」という文法概念の精緻化に向けて― 阿久澤　弘陽（京都大学）	B-4 p. 49	古代語における「まし」「べし」「ましじ」の関係について 古川　大悟（九州大学）	C-4 p. 79	「候体語」について 山本　久（東京大学学生）	D-4 p. 109	鳥取県倉吉方言における理由の接続助詞「ケー」の終助詞化 阪上　健夫（東京大学学生）
17:00 ｜ 17:40	A-5 p. 25	いわゆる〈有対動詞〉における下一段活用動詞の可能動詞化について 浅川　哲也（東京都立大学）	B-5 p. 55	ラレ構文「行はる」の変遷 ―主催・尊敬から非情主語受身へ― 志波　彩子（名古屋大学）	C-5 p. 85	享保十三年写「ハニヤシ行ノホジ」に見える空点の用法をめぐって ―洋野町種市に伝存する修験道文献の表記一斑― 米谷　隆史（熊本県立大学）	D-5 p. 115	ヴァーチャル方言の出現要因 ―テレビドラマ『エール』の実証的分析を通して― 佐藤　未依奈（東北大学学生）
豊田講堂　シンポジオン								
18:00	**懇親会** 司会：矢田　勉							

5月11日（日）

ワークショップ

	A会場（全学教育棟 C-13）		B会場（全学教育棟 C-15）		C会場（全学教育棟 C-23）		D会場（全学教育棟 C-25）	
会場担当	庵　功雄		池上　尚		幸松　英恵		矢田　勉	
9:30 ｜ 11:00	W-1 p. 169	**ワークショップ1** **介護用語の見直しを目指して ー介護のことばの難解さと 未整理の現状からー** 遠藤 織枝（元文教大学） 黄 海洪（大阪大学） 吉永 尚（園田学園大学）	W-2 p. 183	**ワークショップ2** **エゴフォリシティーと体験の日本語文法** 定延 利之（京都大学） 鈴木 泰（東京大学名誉教授） 井上 優（日本大学）	W-3 p. 197	**ワークショップ3** **ことばの技巧を外から拓く ー会話・物語・マンガにおける言語使用ー** 甲田 直美（東北大学） 太田 有紀（作新学院大学） 鯨井 綾希（就実大学） 出原 健一（滋賀大学）	W-4 p. 211	**ワークショップ4** **東北方言のヴォイスから考える 日本語の述語膠着性 ー伝統的な国語学と日本語学、 そして理論言語学との交流の視座からー** 高橋 英也（岩手県立大学） 佐々 智将（岩手県立大学） 江村 健介（岩手県立大学） 中嶌 崇（（一社）やまどり学園）

ポスター発表・学生セッション（全学教育棟　S12、S13、S14、S15）

	宮澤　太聡		池上　尚		幸松　英恵		田村　早苗	
11:10 ｜ 12:10	P-1 p. 121	生成AIがエッセイでどのような語彙を使っているのか ―ChatGPTとI-JASの母語話者産出データの比較を通して― 麻　子軒（京都外国語大学）	P-3 p. 133	山東直砥『新撰山東玉篇　英語挿入』における漢音・呉音について 中澤　信幸（山形大学） 石山　裕慈（神戸大学） 岩城　裕之（高知大学） 加藤　大鶴（早稲田大学）	P-5 p. 145	機械学習を用いた異なるシソーラスに対する効果検証および評価 ―機能表現の使い分けタスクを中心にした分析― 陳　柏丞（総合研究大学院大学学生）	P-7 p. 157	「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の拡張とその設計 山崎　誠（国立国語研究所） 髙橋　雄太（国立国語研究所） 小木曽　智信（国立国語研究所）
	P-2 p. 127	外国語により記述された日本語研究の動向 ―「日本語研究・日本語教育文献データベース」を基に― 今村　志紀（国立国語研究所） 高田　智和（国立国語研究所） 石黒　圭（国立国語研究所）	P-4 p. 139	日本語日常会話コーパスに見られる談話標識「いや」の使用実態 ―話者の社会的属性と出現位置に着目して― 彭　津（東京外国語大学学生）	P-6 p. 151	人物を表す「文の包摂」の形式的・意味的な特徴 ー「かまってちゃん」「相方どうかしてるぜ芸人」「やだやだ星人」― 泉　大輔（立教大学）	P-8 p. 163	新型コロナウイルス感染症の関連用語に対する社会的許容度の短期継続調査 朝日 祥之（国立国語研究所） 相澤 正夫（国立国語研究所） 石橋 拳（専修大学） 久屋 愛実（立命館大学） 久野 雅樹（電気通信大学） 田中 牧郎（明治大学） 田中 祐輔（筑波大学） 前田 忠彦（統計数理研究所） 鍵水 兼貴（国立国語研究所） 横山 詔一（国立国語研究所）
	G-1 なし	類義語の分類に関する研究 ―『分類語彙表』の段落を例に― 大下　由乃（立教大学学生）	G-3 なし	人はなぜ概数表現を好むか 張　琴琴（北海道大学学生）	G-5 なし	受身文における主語指向（感情）副詞 Santosa　Kurniawan（大阪大学学生）	G-7 なし	形容詞述語文のテンス形式とその解釈について 蕭　暄（一橋大学学生）
	G-2 なし	ハの使用から見た和文・訓読文・変体漢文の文体差 ―説話集を中心とした― 小玉　花菜（北海道大学学生）	G-4 なし	品詞構成率と文章の特性との対応に関する批判的検討 佐藤　龍弥（筑波大学学生）	G-6 なし	小説の地の文における「のだった」について 藤本　莉穂（大阪大学学生）	G-8 なし	日本語受身文における動作主マーカーについての記述的研究 ―カラ格を中心に― 李　曼彦（名古屋大学学生）

シンポジウム　豊田講堂　ホール

14:00 ｜ 17:00	S p. 225	**シンポジウム** **「会話文」とは何か** なぜ「会話文」が問われるのか？　半沢　幹一（共立女子大学名誉教授） 会話と「会話文」―小説の会話文の相対化をめざして―　髙崎　みどり（お茶の水女子大学名誉教授） 話法の連続性からみる地の文と「会話文」―文学作品と新聞記事の比較をもとに―　松木　正恵（早稲田大学） 企画担当　苅宿　紀子（和光大学）　鴻野　知暁（大阪大学）

思考動詞と共起する「NP のこと」の使用メカニズム
―「考える」を手掛かりに―

徐 筱琦（ジョ ショウキ）（関西学院大学大学院）

1. はじめに

現代日本語において、形式名詞「こと」は目的語である名詞句に後接して現れる場合があり、「名詞句＋の＋こと」（以下「NP のこと」と示す）という構成となっている。この「NP のこと」の出現については、主に２つのパターンに分けられる。（１）のように「のこと」がなければ不自然な文となる場合もあれば、（２）のように「のこと」の介在を問わず自然な解釈になる場合もある。本発表では、（１）のような思考動詞と共起し、必要とされている「NP のこと」に焦点を当て、考察を進める。

（１）太郎は花子（？？φ/のこと）を考えている。

（２）太郎は花子（φ/のこと）を愛している。(作例)

従来の研究では、「考える」のような思考活動を表す動詞について、（３）のように、「コト性」を持たない名詞（「人」「本」）と共起する場合、その名詞句に「のこと」を補う必要があるとされているが、「事件」のような「コト性」を持つ名詞においては「のこと」の後接が必要ではないと指摘されている（寺村 1968、日高 2003、2006)。しかし、実際の用例を見てみると、（４）（５）のように、「考える」といった思考動詞が「コト性」を持たない名詞を伴う際、必ずしも「のこと」を伴って現れるとは限らない。なぜ（４）（５）のような例が可能となるのであろうか。また、（６）のように、本来はコト名詞であるはずの「ニュース」が「のこと」を伴って現れることがあるため、「コト性」の有無が名詞句に「のこと」を付加する条件であるとは言えない。

（３）a.その｛事件[＋コト]／*人[－コト]／*本[－コト]｝を考える。
　　b.その｛事件／人／本｝のことを考える。(日高 2003, p.69)

（４）出産すれば一線を外されるの？　警告に聞こえ、子どもを考えることは先延ばしになりました。(『朝日新聞』2020 年)

（５）花入もそれに合わせた花器を考え、より花の映えるものを選ぶことが、花の美しさを引き立てるという意味でも大切だ。(永井宗圭『椿をいける』)

（６）洗面台に少し水を溜めて顔を洗いながら、夕方に見た能登の被災地の水不足のニュースのことを考える。(『朝日新聞』2024 年)

「考える」のような述語と共起する「のこと」の意味機能や生起条件については、「コト性」の補充から論じられている寺村（1968)、日高（2003、2006）が挙げられるほか、高橋（2007)、湯本（2015）などは「のこと」の付加によって名詞句の意味がどのように変化するのかを指摘している。このうち、高橋（2007）は、「考える」において、「のこと」が付加されるかどうかが「考える」の意味の違いに関与し、「のこと」を付加することで、名詞句の指示範囲が拡大すると指摘している。その他、湯本（2015）では「考える」が「基本的にコトを目的語にとる動詞」とされ、（７）のように「『思考・認識動詞』が裸目的語をとることができるのは、対象がモノとしてではなく、コトとしての解釈を受けるためである」(p.58）と指摘されている。また、単独でもコト的解釈が可能であった名詞句に「のこと」を伴うと、「さらなる事態を引き出すことになる」(p.57）とされている。しかし、指示範囲の拡大または「コト的解釈」などのような説明によって本当にすべての「のこと」の付加を解釈できるのであろうか。もしできるのであれば、なぜそのような解釈ができるのかについても明らかにされるべきである。しかし、先行研究では

その根拠が明らかにされておらず、「のこと」の付加によって、名詞句には一体どのような意味的なニュアンスが生じるのかは、それぞれの研究者の直感に基づくもののようにも見受けられる。

（7）方法／アイディア／献立／例を考える。(湯本 2015, p.57)

そこで、本発表は、名詞研究をメインとするクオリア構造（Qualia Structure）の理論を用い、先行研究の解釈を再検証したうえで、「NP（のこと）を考える」構文を手掛かりに、「のこと」の生起条件を理論的かつ論理的に明らかにすることを目的とする。

2. クオリア構造による先行研究の再解釈

クオリア構造は Pustejovsky（1995）が「生成語彙論(Generative Lexicon)」を論じる際に提案した理論であり、名詞が持つ語彙情報を「形式クオリア」「構成クオリア」「目的クオリア」「主体クオリア」という４つのタイプに分けている。この４つのタイプは、名詞そのものを x とすると、「x は何か」、「x は何でできているか」、「x は何のためにあるか」、「x はどのようにできたか」といった４つの質問に答えることで区別されている（小野 2008, p.267)。ここでは、名詞句のクオリア構造から、先行研究の解釈を再検証してみる。

例えば、上述の（7）における「方法」「アイディア」などといった「創作物」が「のこと」を伴わずに「考える」の目的語の位置に現れる理由は、これらの名詞が、「方法をどのようにするかを考える」などのように、コト的に解釈することができるからであるとされている（湯本 2015, p.57)。しかし、なぜ「創作物」を表す名詞が裸のままでコト的に解釈できるとされる一方、「花子」や「本」のような名詞ではそう簡単にコト的解釈を引き出すことができないのかが説明されていない。その答えはこのクオリア構造を用いて見出すことができると思われる。「方法」、「花子」のクオリア構造は、概略的に（8）のように表示できる[1]。

（8）	a.「方法」	b.「花子」[2]
形式クオリア：	抽象物（x）	人間（x）
構成クオリア：	誰が、いつ、どのようになど	頭、手、足など
目的クオリア：	[　]x で目的を達成する	
主体クオリア：	[　]y が[　]x を生み出す	

（8）を見れば、「方法」はある目的を達成するために、誰か（y）によって生み出したものということが分かる。仮に「考える」を「基本的にコトを目的語にとる動詞」とすれば、本来「創作物」を表す「方法」は、「作業」や「仕事」のような典型的な行為や出来事を表すものわけではないため[3]、目的語に「コト」を求める「考える」とはミスマッチであるように見える。しかし、「方法」はその主体クオリアで記述されたように、誰かによって生み出したという出来事を

---

[1] クオリア構造を用いて分析する際には、すべての語についてこの４つのタイプで記述することが困難な場合もある。小野（2008, pp.267－268）が指摘したように、重要なのは、「その語をもっともよく説明する」情報を示すことである。例えば、自然物である「石」において、それが何のためにあるかという情報（目的クオリア）は重要ではないが、人工物である「ナイフ」の場合、人がそれを作った理由があるため、目的クオリアが重要な情報となる。このような観点から、本発表では、その名詞句が用いられる際に重要となる情報のみを記述することとする。

[2] 固有名詞である「花子」には存在する目的や成り立ちは特にないため、目的クオリア、主体クオリアでは空欄にしている。

[3] 寺村（1992）では、「方法」は「作業」や「仕事」などのような名詞と一緒に「コト名詞」として扱われていることがある。しかし、「３時間の作業」、「３時間の仕事」は言えるが、「３時間の方法」は言えないように、継続時間を表す表現を付加することができるかどうかという統語的な特徴によって、「作業」や「仕事」などのような動作や出来事を表すものとは異なる。そのため、本発表では、「方法」のような「創作物」を表す名詞を、「作業」、「仕事」と同じ性質を持つコト名詞として扱わないこととする。

表す情報を含意している。そのため、クオリアの情報が名詞の意味として与えられることによって、「方法」に含まれている出来事の情報が「考える」とのつながりの中で読み取ることができるのである。これを Pustejovsky（1995）はタイプ強制（type coercion）と呼ぶ。つまり、「方法」は表面上の意味だけでは「考える」の目的語である名詞句に対する要求を満たさないが、このタイプ強制によって、「方法」の内部構造（クオリア構造）にまで踏み込んだ生成的プロセスが働いているということである。その結果、「方法」は「考える」とのつながりの中で、「方法をどのようにするかを考える」という出来事としての解釈を生じさせ、ミスマッチが解消されるのである。それに対し、そのようなミスマッチを解消できる出来事の情報が「花子」のような固有名詞のクオリア構造からは得られないため、「花子」はそのままでは適格な「コト的解釈」が読み取られにくく、「のこと」を付加する必要がある。一方、人を表す名詞は、必ずしも裸のままで「考える」の目的語として現れないとは限らない。例えば、（９）のように、「子ども」の主体クオリアから「母親が x を産む」という出来事の情報が得られるため、人を表す名詞も「のこと」を伴わずに現れることが可能であり、「子どもを産むことを考える」という適格なコト的解釈が読み取られると考えられる。

（９）出産すれば一線を外されるの？　警告に聞こえ、子どもを考えることは先延ばしになりました。（例４の再掲）

以上、「のこと」の付加に関する先行研究の説明を、クオリア構造を用いて検証した。裸名詞のままで「コト的解釈」が引き出せるかどうかには、名詞句のクオリア構造が関与していることが分かる。しかし、「コト的解釈」の観点からでは説明できない例も見られる。例えば、(10) では、湯本（2015）によると、(10a) は「音楽を何にするかを考える」のに対し、(10c) は「のこと」の付加によって、「音楽と文化との関係など、音楽に関することについて考えている」のように、「さらなる事態を引き出すことになる」と解釈されている。しかし、(10b) は「のこと」を伴わなくても、「音楽に関することについて考える」を意味し、(10c) とは差異は見られない。

(10) a. 京都市で 11、12 日、ダンスにおける音楽を考えるフォーラムも開く。（『朝日新聞』2005 年）

b. 幅広い視点から音楽を考える坂本の姿勢に作田忠司・ポポロ館長が共感。（『朝日新聞』2012 年）

c. 「様々な文化、歴史、自分たちの生活と絡め、音楽のことを考える聴衆を育てたい」と船山さんに語った。（『朝日新聞』2024 年）

このように、「考える」と共起する「のこと」の使用条件は十分に解明されていないところがあると言える。本発表では、「のこと」の付加に対する動詞の意味の関与を明確にしたうえで、名詞句のクオリア構造から、「(NP) のこと」の生起条件を再考する。

3.「考える」と共起する「(NP) のこと」の生起条件

3.1「NP を考える」構文の多義性からみる「のこと」の生起

(11) 日下広太監督から「続ける理由を考えてほしい」と諭され、学生コーチへ転身した。（『朝日新聞』2024 年）

(12) ５年以上交際した女性と結婚を考え、父のことを告げた。（『朝日新聞』2016 年）

(13) 幅広い視点から音楽を考える坂本の姿勢に作田忠司・ポポロ館長が共感。（例 10b の再掲）

(14) 同県の 50 代女性は「病気になっても、お金を考える前に医者にかかれる世の中に。……」。（『朝日新聞』2009 年）

(11)′ ？？続ける理由のことを考えてほしい。

(12)′ ？？５年以上交際した女性と結婚のことを考え、父のことを告げた。

(13)′ 幅広い視点から音楽のことを考える坂本の姿勢に作田忠司・ポポロ館長が共感。

(14)′ 病気になっても、お金のことを考える前に医者にかかれる世の中に。

(11)(12)では、「理由」「結婚」を「理由のこと」「結婚のこと」に置き換えると、文として不自然な解釈になる。それに対し、(13)(14)では、その名詞句に「のこと」を付け加えても自然な解釈が得られる。このように、「のこと」の生起は確かに「考える」の意味の関与を受けていると考えられる。(11)(12)における「考える」と「NP」の意味関係と、(13)(14)はどこが異なるのかを明らかにするため、本研究では、動詞と共起する「NP」との関係を基に、「NP を考える」構文の意味を検討する。

まず、(11)の「理由を考える」は「理由を何にするかを考える」に置き換えることが可能であり、また、たとえこの「理由」が「野球が好きだ」であっても、「理由を考える」を「野球が好きであることを考える」には言い換えられない。つまり、この場合の「NP」は名詞句のように見えるが、意味的には Wh-疑問文の機能を果たし、西山(2003)が提唱する「変項名詞句」と考えられる。この場合の「NP を考える」は「X が NP である」という X の値を特定することを表していると解釈できる。

次に、(12)の「結婚を考える」は、「結婚をしようと決める」を意味し、「NP」の指示対象は思考の結果を表す点で(11)と共通している。しかし、「V ている」の形式で表した際に、「結婚を考えている」は結婚をする意志を持ち続けているという状態の継続を表すのに対し、「理由を考えている」は思考の動作を続けていることを表す点で両者は異なっている。つまり、(12)の「考える」は状態を表すのに対し、(11)は動作行為を表すものである。この場合の「NP を考える」は「NP を決める」ことを表していると考えられる。

また、(13)は以上とは異なり、「音楽を特定するや決める」という意味を表すのではなく、この「音楽」を「トルコ行進曲」に置き換えても成り立つ。「音楽を考える」は「音楽はどのようなものであるか、音楽をどのように表現するかを思ったり考慮したりする」という意味を表すため、この場合の「NP を考える」は「NP について思考する」ことを表していると言える。

最後に「お金を考える」は「具体的な金額がどのぐらいであるかを考える」とも言い換えにくい。(14)において、「考える」のは、具体的な数字ではなく、金欠による影響や制限であると解釈すべきであろう。つまり、「お金を考える前に医者にかかれる」は「お金の負担を気にせずに医者にかかれる」を意味すると考えられる。この場合の「NP を考える」は「NP を気遣う」ことを表していると考えられる。

以上のように、「NP を考える」という構文には、異なるタイプがあり、①「X が NP である」という X の値を特定すること、②NP を決めることを表す場合には、「のこと」との共起は容認されていないのに対し、③NP について思考すること、④NP を気遣うこと表す場合には、「のこと」を伴うことが可能である。次節では、なぜそのような違いが生じるのかについて焦点を当て、クオリア構造を用いて「のこと」の生起条件を検討していく。

3.2 クオリア構造からみる「のこと」の生起

まず、タイプ①、②における「理由」「結婚」のクオリア構造は、(15)のように表示できる。

(15)

	①「理由」	②「結婚」
形式クオリア：	抽象物 (x)	デキゴト (x)
構成クオリア：	意図、因果関係など	配偶者、手続き、結婚式など

目的クオリア：　事態の発生を説明する　　配偶関係を結ぶ
主体クオリア：　[　]y が[　]x を作る　　結婚届を提出する

（15）に示したように、「理由」は、意図や因果関係などによる事態の発生を説明するために、作られたものである。「理由を考える」は「理由を何にするかを考える」を意味するため、この「理由」は構成クオリアや目的クオリアなどではなく、形式クオリアに該当する。②の「結婚を考える」も同じように、「結婚するということを決める」という意味を表すため、「結婚」も形式クオリアに該当する。つまり、①、②において、「NP」はいずれもその形式クオリアに該当し、「考える」という思考活動は「NP」そのものにしか関与していないため、「NP を考える」のみ使用できると思われる。

次に、タイプ③、④における「音楽」「お金」のクオリア構造を見てみる。

（16）

	③「音楽」	④「お金」
形式クオリア：	抽象物、人工物（x）	具象物、人工物（x）
構成クオリア：	音、リズムなど	硬貨、お札
目的クオリア：	人間の感情を表現する	物を買ったり、サービスを受けたりする
主体クオリア：	[　]y が[　]x を作る	[　]y が[　]x を稼ぐ

タイプ①の意味において、「音楽を考える」は「音楽を何にするかを考える」を意味し、（10a）のように、「（ダンスにおける）音楽」は他の曲から特定されるものとして捉えられるため、この「音楽」はその外的分類を示す形式クオリアに該当する。それに対し、タイプ③において、（10b）は「音楽をどのように表現すればいいかを考える」を意味するため、この「音楽」はその機能や役割を示す目的クオリアに該当する。つまり、「NP」の形式クオリアが前景化する場合、「NP」の指示する対象は「NP」そのものであり、「NP を考える」のみ使用できる。それに対し、「NP」の形式クオリアが背景化し、目的クオリアが前景化する場合、「NP」の指示する対象は「NP」そのものではなくなると言える。このようなタイプにおいては、「のこと」の付加が許容されると考えられる。

タイプ④で検証してみると、「お金を考える」は単に「お金が具体的にどのぐらいかかるかを考える」ことではなく、「金欠による影響や負担を考慮する」という意味を表している。そのため、この「お金」は目的クオリアに該当する。つまり、このタイプにおける「NP」の指示する対象も「NP」そのものではない。この場合、「考える」という思考活動は、「NP」そのものに関与していないため、「NP のことを考える」が使用できるようになるのである。

以上のように、「のこと」の使用は、「NP」のクオリア構造のどの部分に注目するかによって制限されることが明らかとなった。「NP」の形式クオリアに注目する場合、「NP を考える」が使用できるが、「NP のことを考える」は許容されていない。「NP」の形式クオリアに注目しない場合には、「NP を考える」と「NP のことを考える」の両方が使用できる。最後に、この「NP」の形式クオリアに注目しない場合における、「のこと」の付加による意味的差異を確認してみる。

（17）a. 幅広い視点から音楽を考える。（例 10b の再掲）
　　b. 音楽のことを考える聴衆を育てたい。（例 10c の再掲）

（17）において、「音楽を考える」「音楽のことを考える」はいずれも「音楽を何にするかを考える」という意味ではない。ここでの「NP」は明らかに外的分類を示す形式クオリアに注目していないにも関わらず、「NP を考える」が使われているのはなぜであろうか。クオリア構造で考えてみると、「音楽」は音やリズムを組み合わせて人間の思想や感情を表現するものであるが、（17a）は「音楽という抽象物そのものを考える」ことではなく、「音楽をどのように表現すればいいかを考える」と解釈されやすい。この解釈は、「音楽」の目的クオリアを通じて得られてい

る。つまり、(17a) の「音楽」の指示する対象は「音楽」そのものではなく、「音楽は何のためにあるか」という役割や機能であるという「指示のずれ」[4]が生じるのである。要するに、ここの「NP」は「NP」そのものを表さないが、「NP」が持つ語彙情報に関与しているため、「NP を考える」が使用できるようになるのである。一方、(17b) の「音楽のことを考える」は、音楽と文化や歴史、さらには自分たちの生活との関係など、音楽にまつわる事柄を考えるということになり、必ずしも「音楽」の目的・機能や成り立ちなど、「音楽」自身が持つ語彙情報に関与しているのではないと思われる。

4. おわりに

本発表では、クオリア構造を用いて、「のこと」の付加に関する先行研究の解釈を再検証したうえで、動詞の意味の関与と名詞句の意味的性質に注目し、「考える」と共起する「のこと」の生起条件を考察した。その結果、「のこと」の付加は、「NP を考える」構文の多義性と「NP」のクオリア構造のどの部分に注目するかによって制限されることが明らかとなった。具体的には、「NP」の形式クオリアに注目する場合、「のこと」の使用は許容されていないが、「NP」の形式クオリアに注目しない場合、「NP を考える」と「NP のことを考える」の両方が使用できる。この場合、「NP」は「NP そのものの役割や機能、成り立ち」などの意味を持つのに対し、「NP のこと」は「NP にまつわる事柄」を表し、必ずしも「NP」自身が持つ語彙情報に関与しているわけではない、という意味の差が生じることも明らかになった。

このように、名詞句のクオリア構造に着目すると、今まで言われてきた「コト性」は、名詞句自身が持つ語彙情報から読み取れるものと、名詞句にまつわる事柄から付与されるものに分けられることが窺える。しかし、本発表では「NP を考える」構文のみを取り上げて分析しているため、思考動詞と共起する「のこと」の使用条件はどこまで一般化できるのかは他の動詞構文においてさらに検討する必要がある。これを今後の課題としたい。

参考文献

小野尚之　2005　生成語彙意味論. くろしお出版.
小野尚之　2008　クオリア構造入門. レキシコンフォーラム 4, pp. 265-290.
高橋圭介　2007　現代日本語における思考動詞の意味分析. 名古屋大学博士学位論文.
寺村秀夫　1968　日本語名詞の下位分類. 日本語教育 12, pp. 42-57.
寺村秀夫　1992　寺村秀夫論文集Ⅰ―日本語文法編. くろしお出版.
西山佑司　2003　日本語名詞句の意味論と語用論―指示的名詞句と非指示的名詞句―. ひつじ書房.
日高水穂　2003　「のこと」とトコの文法化の方向性―標準語と方言の文法化現象の対照研究―. 日本語文法 3-1, pp. 7-82.
日高水穂　2006　「のこと」の機能―話し言葉における新しい格表示―. 日本語文法の新地平 1 形態・叙述内容編, pp. 83-101.
湯本かほり　2015　現代日本語における「こと」の研究―ノコト目的語およびN ノコトダカラ構文を中心に―. 筑波大学博士学位論文.
Pustejovsky James　1995　The generative lexicon. MIT Press.

[4] 「指示のずれ」といった概念は小野 (2005, p. 74) を参照のこと。

形容詞語幹を語基とする複合・派生に着目した コーパス駆動型品詞論の方法

鯨井綾希（就実大学）

１．はじめに

本発表は、理論的・定性的な記述を軸としていた品詞論にコーパス駆動型研究の手法を導入し、定量的な観点からの品詞記述の可能性を示すことを目的とする。従来の品詞論は、意味・形態・統語という三つの観点による分析のいずれも、理論的な考察に基づきつつ、少数の個別例の具体的記述を交えることが中心だった。多量の語群の用法分布をデータから見出し、そのまとまりや傾向から品詞性を考察していく研究は決して多くない。しかし、理論的・定性的な研究を裏付けるためには、大規模なデータを用いた分類の検証が不可欠であり、その点でデータに基づく量的傾向の把握も品詞論の研究として重要である。

本研究では、BCCWJ の DVD 版データを用いた定量的な品詞論を展開する。特に、形容詞語幹を語基とする種々の語を網羅的に集め、各語基の複合・派生傾向を見出し、それらの総合的な分布を定量的に分析・記述していく。それにより、形容詞語幹から見たときの各品詞の相互関係やそこに見られる語基の集合的位置を明らかにする。

２．先行研究

２．１ 方法論に関するもの

言語学の一領域であるコーパス言語学では、その重要な考え方の一つとしてコーパス駆動型と呼ばれる探索的な方法論が示される（石川 2012 など）。コーパス駆動型という用語は、データサイエンスの研究基盤にあるデータ駆動型と呼ばれる汎用的な方法論の言語研究への応用であると言え、そのデータ駆動型は以下の三つの視点で構成されるという。

（1）a. 豊富に用意された行動の変容に関係する条件とその結果のペアをビッグデータから大量に得る
　　b. データを整理することで対応関係を作成する
　　c. 整理した対応関係から未来の行動を予測する　　北川・竹村編（2021：12）

（1）を見ると、（1c）の「予測」という観点に若干の物珍しさはあるものの、基本的には伝統的な日本語学の分析視座と大きく変わらないことが分かる。実際、乙武・高丸（2023）や高丸・乙武（2023）、近藤（2023）、北崎（2024）など、近年は大規模言語モデルという AI 研究の成果を活用したデータサイエンスの方法論的導入が盛んである。また、近藤（2023）や中俣（2024）は、表現の「形」に特化した統計的分析の結果が言語表現のある種の本質的意味に届きうることを示す点で重要である。その方法論が拡大しつつある現在では、同様の観点からの分析可能性の模索がより一層積極的に試みられるべきである。

２．２ 研究対象に関するもの

本発表では、形容詞語幹に着目して、それを起点とした共通部分の拡張関係を論じる。

分析対象は形容詞語幹から取り出されるが、活用を問題としないため、以降は共通部分を語基とみなして分析する。また、語基からの複合・派生のあり方は森岡（1987）や斎藤（1992）などで詳細に検討されているが、本研究では語基からの複合・派生とみなしうるものを全て（ラフに）取り扱っている。現状、本発表にはその点の課題が残っている。

形容詞語幹を語基としてその複合・派生を論じた研究として、上述した斎藤（1992）を挙げる。斎藤（1992）の主眼は形式と意味との関係を探る中で、合成語とその構成要素の間に存する形成プロセスや構造を理論的・実証的に解明していく点にある。形容詞語幹については、例えば形容詞語幹とそれを同根とする動詞の間に見られる意味上の対応関係や、「タカ（高）」を中心とした語基の複合・派生とその意味の多様性などが論じられる。

他方、本発表では、先行研究で論じられる可能態の分析ではなく現実態の量的記述を軸とする。理論的な精査を十分に加えないまま表層面の分析に終始する点で問題がないとは言えないが、今回は方法論の提示を兼ねているため、この点の詳細は今後考えたい。

３．研究の対象・資料・方法

３．１　研究の対象

本発表では、分析対象として形容詞語幹から抽出した 184 の語基（頻度 100 以上）を取り上げる。各語基と後接要素との組み合わせ（「語」相当）を定量化することで、品詞論という日本語学の研究課題とコーパス駆動型研究との連結を図る。ここでは、分析対象とする語基の収集と分析に関わる研究資料、ツール、方法、分析視点を述べていく。

３．２　研究資料と語の収集方法

研究資料は、データの規模と均衡性を考慮して、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（DVD版、以下「BCCWJ」と表記）の「書籍」（PBで始まるファイル群、可変長）を選ぶ。

BCCWJの分割基準は機械的な斉一性を確保しているが、基本的に「語」に準じる単位を分割単位としており、形態論的単位での分析を行う際にはその基準を適用できない。そこで、本発表では以下の（3）の手順でデータを抽出しなおす（いずれも長単位基準）。

（2）手順1. 形容詞の語彙素から語末の「い」を除き、それを語基とする。

手順2. 手順1の語基から始まり語彙素読みが共通である語を拾い、語基の後接する要素（頻度100以上）のリストをその語の品詞情報とともに記録する。

手順3. 語基と後接要素との組み合わせを全て数え、頻度表（頻度5以上）を作る。

上記の手順を経ることで、語基とその後接要素の組み合わせによって作られる語や品詞の頻度一覧が得られる。なお、品詞の頻度は、そのまま使うと主成分分析の際に頻度差の影響が出てしまうため、分析の前処理として値を特化係数に計算しなおしている。データの均質化を図る手法は一般的な標準化をはじめいくつか考えられるが、経験的に、品詞の分類研究では特化係数に基づく調整が最も適切な結果を作るようである。ただし、データの前処理＝定量化に関する理論的な妥当性の検討が今後必要であることも付記しておく。

以上の手続きを通じて形容詞語幹相当となる語基の定量的な記述を進め、データの網羅的な収集と記述に基づくデータ駆動型の品詞研究の方法論を示していく。

３．３　分析視点

３．３．１　収集する語基と実現した語との関係

本発表では 184 の語基を対象として（2）を実施し、分析を進める。（2）の手順 2 で後接要素を収集すると、語基と語構成要素の関係から次の三種類が取り出されることになる。

（3）a. 後接要素が自立語相当であり、複合語をなすもの（暗闇、細長い、強すぎる等）
　　b. 後接要素が付属語相当であり、派生語をなすもの（悔しさ、楽しげ、嬉しがる等）
　　c. 後接要素がなく、語基単独で語をなすもの（黒、丸、狡（ズル）等）

上記の区別は文法論的に重要であるが、本発表では形容詞語幹に基づく語基の語彙的・品詞的実現とその拡張を考察するため、すべて収集した。また、固有名詞は除いたが、それ以外にも低頻度の非標準的な形式が見られたため、頻度 5 以上を分析対象とした。

３．３．２　集計表の分析方法

はじめに、収集した語基とそれをもとに実現した語から、語基ごとの各品詞への複合・派生量を記述し、各語基の造語力の強弱を理解する。続けて、各語基から各品詞への複合・派生を特化係数に基づく主成分分析で整理し、品詞の分布を見出す。最後に、主成分分析で圧縮した軸に基づき、クラスター分析で各語基を分類し、各語基の拡張実態を示す。

４．分析と考察

４．１　記述統計に基づく各語幹の複合・派生量の分布

まず、各語基と具体的な語との関係を記録した集計表を使い、各語基の複合・派生量を見る。作成した集計表は表 1 のように語基と語とそれぞれの頻度が記述されている。表 1 のような一覧に基づき、各語基から形成される語の異なりの数を見る。例えば一番上の「辛」なら「ツライ」「ツラサ」「ツラスギル」の 3 語があることから、「辛」の異なりの複合・派生量は「3」と数えられる。同様にして「ぎこちな」なら複合・派生の量は「2」、「きつ」なら「4」と数えることができる。

表 1：語基ごとの実現の仕方

語基/語彙素読み	頻度
辛	**1298**
ツライ	1159
ツラサ	134
ツラスギル	5
ぎこちな	**106**
ギコチナイ	101
ギコチナサ	5
きつ	**502**
キツイ	476
キツサ	8
キツスギル	6
キツメ	12

この見方で各語基から作られる語の異なり語数を整理すると、表 2・図 1 および表 3 のような要約データが得られる。表 2 を見ると、語への複合・派生量は全体的に「3」から「4」を平均とし、半分が「2」から「5」の間に収まると言える。ただし、図 1 から最頻値は「2」であり、また「10」以上の語基も散見されることが分かる。ここで、上位群・中位群・下位群の語基の一部を示した表 3 を見ると、複合・派生量が多い上位群では色彩や空間に関するク活用型の形容詞語基という、形容詞としての典型性を持つものが出現していると分かる。また、中位群でシク活用型の形容詞が見られることや、下位群で既に複合・派生的な形成をなしている語基（接頭辞接続の扱いは今後の課題）が多くなっていることも見て取れる。

表 2：複合・派生量

最小値	1
第1四分位数	2
中央値	3
平　均	4.40
第3四分位数	5
最大値	19
標準偏差	3.88

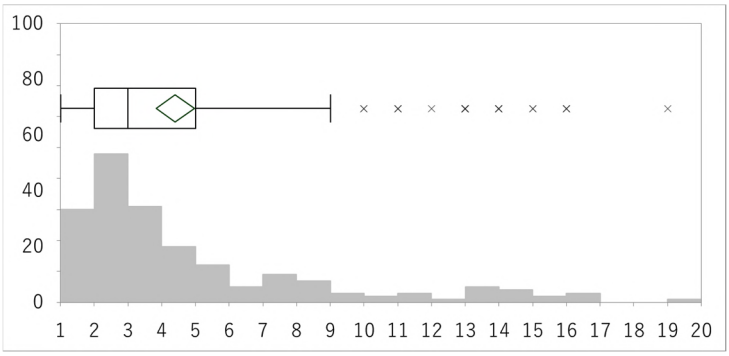


図 1：語基の複合・派生量(x 軸)と各量の該当数(y 軸)

表 3：複合・派生量の多い語基と中間的な語基と少ない語基の一部

赤	広	黒	薄	近	高	細	若	青	早
19	16	16	16	15	15	14	14	14	14
濃	美し	貧し	面白	幼	辛	危う	宜し	疑わし	恐ろし
4	4	4	4	4	3	3	3	3	3
やば	何気無	快	格好良	危な	険し	言い難	限り無	甲高	根強
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

４．２　主成分分析に基づく形容詞から他品詞への拡張方向と対応する語基の分布

本節では、各語基を用いて実現した語の品詞の頻度に基づいて、形容詞を軸とする語基の他品詞への拡張傾向を分析する。ここでは、特徴量の圧縮方法である主成分分析を用いて、各要素の連動を平面的な構図に記述しなおす。分析の結果を図 2 と図 3 に示す。

形容詞語幹に基づく語基の実現具合の分布を見ると、図 2 の第 1 主成分の分布から、複合・派生の方向性として形容詞に対置される最も重要な品詞は名詞と動詞であることが分かる（「形容詞　―　名詞・動詞」対立の第 1 軸）。また、第 2 主成分より、複合・派生傾向として「副詞　―　形状詞」の対立軸（第 2 軸）があることが分かる。さらに図 3 を見ると、それらと異なる指向性を持つ連体詞の軸（第 3 軸）が第 3 主成分より見出される。

第 2 軸の連体詞の位置に不満が残るものの、概略としては、第 1 軸で中核性の高い品詞（名詞・動詞・形容詞）が並び、第 2 軸で連用修飾の副詞、連体修飾または述語自体を形成する形状詞という、統語的位置に関する拡張方向の違いが浮き上がり、それらと異質な連体修飾特化の連体詞への拡張が第 3 軸に存在すると解釈できる。

次に図 2・図 3 の右側に示した語基の分布を見る。これらの語基は、図の左側の品詞分布に合わせて分布している。例えば「丸」は副詞への拡張性が強く、「眠」は名詞・動詞（やや動詞）への拡張性が強いと解釈できる。なお、「丸」については「まるで」の頻度の影響が強く出ている点に注意が必要である。「丸」が副詞寄りの語基であるとするかどうかは「まるで」の扱い次第であり、精緻化にあたってはその点の議論が必要である。

図 2 の分析結果を見てみると、前節で見た、実現した語の種類の多寡に基づく各語基の複合・派生量と同様に、他品詞への複合・派生傾向が強い（集合の周辺に飛び出ている）語基に形容詞らしい語基が分布しているという点が注目される。これは、従来から言われ

ている他品詞への拡張性の高さという形容詞としての特徴が、形容詞の持つ典型的な性質の一つであることを裏付ける結果であると考えられる。反対に、形容詞としての典型性が劣る語基は、形容詞という品詞を取りながら、その枠内に収まらざるをえないという点で形容詞という品詞の性質から見て「周辺的」であるという解釈が可能であろう。

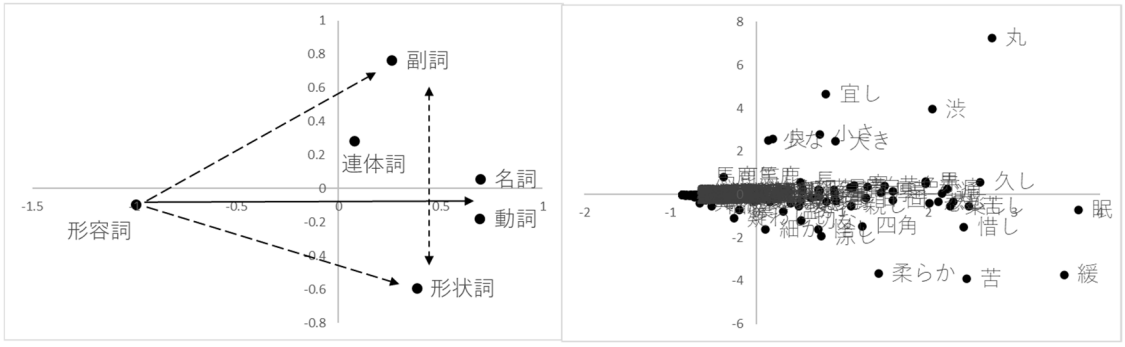


図 2：第 1 主成分-横軸と第 2 主成分-縦軸（左が品詞の位置・右が対応する語基の位置）

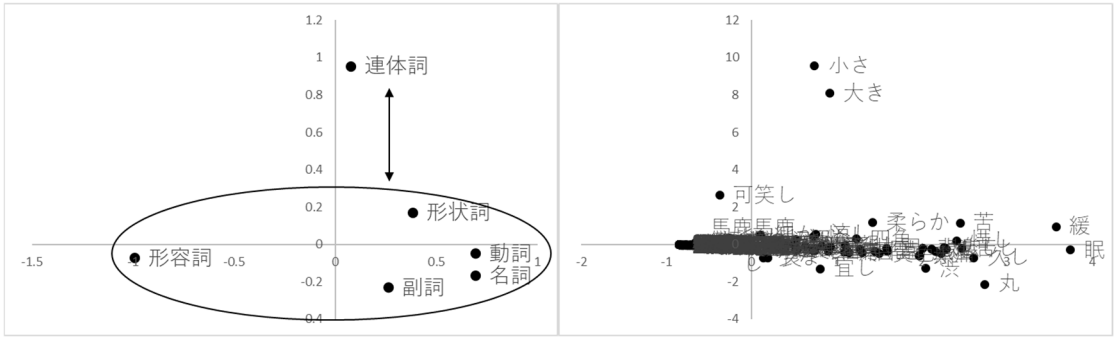


図 3：第 1 主成分-横軸と第 3 主成分-縦軸（左が品詞の位置・右が対応する語基の位置）

４．３　クラスター分析に基づく各語基の分類

本節では、前節の主成分分析の結果と解釈を踏まえ、第 1 主成分、第 2 主成分、第 3 主成分という 3 つの軸のそれぞれで各語基がとる値（主成分得点）に基づいたクラスター分析（ユークリッド平方距離、Word 法）を行い、対象とする語基を分類する。また、主成分分析の結果から、ここでは「形容詞保持」「名詞動詞拡張」「副詞拡張」「形状詞拡張」「連体詞拡張」という5つの分類を想定して計量する。分析結果を整理したものが表4である。

表 4 では、主成分分析の第 1 主成分の視点で 127 語基と 47 語基という大きなまとまりができている。既に複合・派生形式となっているものの扱いは先述した通り今後の議論が必要であるものの、そのような周辺性の高い語基（相当）が「形容詞保持」の枠にとどまっている点は注目される。また、そこに対置される「名詞動詞拡張」には形容詞（語幹）としての性質を生かして多くの複合・派生をなす語基が揃っていると考えることができる。

全体としては、色彩・空間・性質・形状的なものが「名詞動詞拡張」に含まれており、感情や評価に関わるものが「形容詞保持」にとどまる傾向にあるように見える。ただ、個別的に見ればどちらにもそれらの語基が存在しており、両者を分かつ質的基準は別途詳細に検討する必要がある。また、定量的な視点からは、ここでの分類と各語基の頻度の多寡との相関を分析していくことで、当該結果の要因を絞り込んでいけると考えられる。

表 4：クラスター分析によって分類された語基群

形容詞保持（127語基）

辛	嬉し	旨	相応し	怖	眩し
ぎこちな	気まず	止む無	尊	幅広	逞し
きつ	疑わし	弱々し	大人し	物凄	
さり気無	強	手早	淡	分かり易	
しつこ	恐ろし	醜	短	分かり難	
し易	狭	詳し	恥ずかし	分厚	
でか	興味深	情けな	遅	乏し	
めでた	空し	食べ易	注意深	忙し	
やば	軽	心地良	著し	望まし	
愛し	激し	新し	珍し	無	
悪	嫌らし	申し訳無	低	明る	
偉	賢	甚だし	程遠	面白	
鋭	険し	凄	程良	目覚まし	
汚	厳し	凄まじ	等し	勿体無	
奥深	言い難	成り易	軟らか	優し	
何気無	限り無	正し	難し	有り難	
可愛	好まし	生々し	熱	余儀無	
可愛らし	慌ただし	青白	濃	幼	
可笑し	甲高	脆	馬鹿馬鹿し	容易	
快	荒々し	浅	薄暗	欲し	
懐かし	酷	羨まし	煩	頼もし	
格好良	根強	素っ気な	美し	力強	
間違い無	細長	素晴らし	美味し	冷た	
危う	仕方無	素早	貧し	夥し	
危な	使い易	早	不味	狡	

名詞動詞拡張（47語基）

安	弱
暗	臭
遠	重
黄色	暑
温か	深
怪し	親し
悔し	青
楽し	惜し
寒	赤
甘	切な
久し	粗
近	多
苦し	太
古	長
固	痛
厚	鈍
広	白
荒	薄
高	悲し
黒	眠
細	涼し
細か	痒
四角	
若	
寂し	

副詞拡張（5語基）

丸
宜し
渋
少な
良

形状詞拡張（3語基）

緩
苦
柔らか

連体詞拡張（2語基）

小さ
大き

５．おわりに

本発表では、コーパス駆動型研究の視座から定量的な記述に基づく品詞分析の可能性を示すため、形容詞語幹をもととした語基とそれを用いた語への実現という形態的な特徴を利用した計量分析を行った。それにより、それぞれの語基の複合・派生に関する量的傾向と具体的な分布、形容詞と他の品詞との関係性などを見出した。また、計量分析の過程で、形態的な観点が連体・連用修飾といった統語的な観点へ拡張する様子も示した。

近年の高機能な検索システムによって、コーパスを利用した日本語研究は既存の検索システムありきの方法論が定着してしまっている。しかし、BCCWJ などの電子化データにはそうした方法論にとどまらない資料的価値がある。データサイエンスに基づくデータ駆動型研究を推進することで、コーパスを利用した新たな日本語研究を開拓していけるはずである。なお、本発表には語彙の選別法や計量方法、結果の質的な解釈の問題など、考えるべき課題が多々残されているが、それらは全て今後の課題としたい。

・先行研究

乙武北斗・高丸圭一（2023）「XAI 技術を用いた大規模言語資源の特徴可視化の試み―地方議会会議録横断検索「ぎ～みる」を例に―」『計量国語学』34-3／石川慎一郎（2012）『ベーシックコーパス言語学』ひつじ書房／北川源四郎・竹村彰通編（2021）『教養としてのデータサイエンス』講談社／北崎勇帆（2024）「単語ベクトルを用いた『天草版平家物語』と原拠本『平家物語』の対応付け」『日本語学会 2024 年秋季大会予稿集』／近藤泰弘（2023）「和歌集の歌風の言語的差異の記述―大規模言語モデルによる分析―」『日本語の研究』19-3／斎藤倫明（1992）『現代日本語の語構成論的研究―語における形と意味―』ひつじ書房／高丸圭一・乙武北斗（2023）「地方議会会議録における探索的方言調査の試み―機械学習と XAI 技術による方言研究―」『方言の研究』9」／中俣尚己（2024）「文法形式に基づいた日本語文体の多次元的抽出」『日本語文法学会第 25 回大会予稿集』／森岡健二（1987）『現代語研究シリーズ 1　語彙の形成』明治書院

（本発表は科研費 22K00549 の助成に基づく研究成果の一部である。）

BCCWJ と CEJC における自他対応動詞の使用傾向
―自他対応に着目して―

新谷知佳（大阪大学）

1. はじめに

本発表の目的は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）と『日本語日常会話コーパス』（以下、CEJC）の 2 つのコーパスを用いて、日本語の自他対応動詞の書き言葉と話し言葉における使用傾向の差異を明らかにすることである。本研究では、自他対応動詞における自動詞と他動詞の使用頻度の偏りを使用傾向と捉え、自他対応に着目してその傾向を分析する。たとえば、「増える：増やす」という自他対応動詞において、BCCWJ の「増える」の使用頻度は 184 件、「増やす」は 43 件、CEJC では「増える」が 249 件、「増やす」は 60 件で、いずれのコーパスにおいても自動詞の使用頻度が高いことがわかる。このことから、「増える：増やす」の使用傾向として使用環境を問わず自動詞が多く用いられる点が指摘できる。本発表では、このような自他対応動詞の使用傾向について、形態的特徴による分類に基づく分析およびカイ二乗検定による統計的分析から、両コーパスの共通点と相違点を考察する。

2. 先行研究

2. 1. 自他対応

本発表における自他対応動詞とは、「乾く：乾かす」「挟まる：挟む」のように、(1)に示す自他対応の定義を満たすものとする。(1)は、奥津(1967)および早津(1987)に基づき、定義されたものである。

(1)　①自動詞と他動詞が形態的に共通する部分をもつもの
　　②自動詞と他動詞の表す意味に同一性が見られるもの
　　③自動詞文のガ格が他動詞文の動作の対象を表すヲ格として現れるもの
　　（新谷 2022：74）

また、本発表では、影山(1993)の指摘を踏まえ、制御性（意図性）[1]の有無によって自動詞が区別されるという立場から議論を進める。この観点で自動詞の用例を見ると、次に示す(2ab)は自他対応を持つ用例であり、(3a)は自他対応を持たない用例[2]であると考えられる。

(2)　a.店の前に旗が<u>立つ</u>。
　　b.店の前に旗を<u>立てる</u>。

(3)　a.校長先生が壇上に立つ。
　　b.*校長先生を壇上に立てる。

コーパスを用いて自他対応動詞の分析を行った先行研究では、両者を含めて分析しているものが多く見られる。しかしながら、(2ab) (3a)のように用例によって対応の有無が異なることから、自他対応動詞の使用傾向をより正確に捉えるためには、一つ一つの用例を慎重に検討する必要があると考えられる。そこで本発表では、コーパスからデータを集めたのち、(3a)のような用例を除外する作業を行ってから、自動詞と他動詞の使用頻度を算出することとした。

2. 2. BCCWJ における自他の使用傾向

前節で示した用例の選別を行った上で、BCCWJ のコアデータを対象に、自他対応動詞の形態的特徴と使用傾向の分析を行った研究に、新谷(2022)がある。新谷(2022)では、ナロック他(2015)で挙げられている 548 対の日本語の自他対のうち、BCCWJ コアデータにおいて、(1)の自他対応の条件を満たす用例が 10 件以上確認できる自他対応動詞計 100 対を分析の対象としている。

奥津（1967）における分類に基づき、「乾く：乾かす」のように他動詞に形態素が付加したものを他動化、「挟まる：挟む」のように自動詞に形態素が付加したものを自動化、「直る：直す」のように自他それぞれに形態素が付加したもの、「流れる：流す」「立つ：立てる」のように自他いずれかに「-e-」という形態素が付加したものを両極化[3]とし、これら 3 つの形態的特徴と使用傾向の関係について指摘している。そして、「乾く：乾かす」の「乾かす」、「挟まる：挟む」の「挟まる」のように形態素が付加されている動詞の方がその使用比率が低くなる傾向があると結論づけている。

本発表では、この結論について、話し言葉のコーパスである CEJC のデータも加え、改めて検証を行う。そのため、新谷(2022)と同じく、100 対の自他対応動詞を対象とし、他動化、自動化、両極化という 3 つの形態的特徴による分類を用いて、分析を進める。

3. 分析対象

コーパス検索アプリケーション『中納言』の語彙素検索を用いて用例を集め、上述の選別作業を経て、両コーパスの自他対応動詞の使用頻度を求めた。表 1 に両コーパスの自動詞と他動詞の用例数を示す。表 1 の実数は使用頻度を、パーセンテージは両コーパスにおける自動詞と他動詞の使用比率を表している。本発表では、用例選別の都合上、約 110 万語からなる BCCWJ コアデータと、約 240 万語からなる CEJC 全データを用いる。尚、これ以後現れる「BCCWJ」は BCCWJ コアデータを指す。

表 1 BCCWJ と CEJC の分析対象とした用例数

	自動詞	他動詞	計
BCCWJ	3,246(48.3%)	3,480(51.7%)	6,726（100%）
CEJC	7,592(56.2%)	5,906(43.8%)	13,498（100%）
計	10,838	9,386	20,224

表 1 において、BCCWJ では自動詞の使用比率は 48.3%、他動詞の使用比率は 51.7%で、自他の偏りは見られない。一方、CEJC では、自動詞の使用比率は 56.2%、他動詞の使用比率は 43.8%で、自動詞の使用比率が高いことがわかる。したがって、全体的な傾向として、話し言葉のコーパスである CEJC の方が自動詞を多く使う傾向にあると考えられる。この点を踏まえ、次節以降、形態的特徴と使用傾向の関係、および使用頻度を用いたカイ二乗検定の結果に基づく個別の自他対応動詞に見られる使用傾向について考察する。

4. 形態的特徴と使用傾向の関係

本節では、他動化、自動化、両極化の 3 つの分類による分析を行い、形態的特徴と使用傾向の関係を考える。対象とする 100 対を分類すると、他動化は 27 対、自動化は 33 対、両極化は 40 対となる。両コーパスの、各形態的特徴をもつ自他対応動詞の自動詞比率の平均値[4]および中央値を表 2 に示す。

表 2 他動化・自動化・両極化の自動詞比率の平均値と中央値

		100 対	他動化	自動化	両極化
BCCWJ	平均値	48.5%	70.6%	35.4%	44.3%
	中央値	48.0%	81.1%	35.7%	44.5%
CEJC	平均値	52.9%	69.7%	43.2%	49.9%
	中央値	56.6%	78.2%	50.0%	50.4%

表 2 より、100 対全体において、BCCWJ の自動詞比率の平均値は 48.5%、CEJC は 52.9%であり、CEJC の自動詞比率が高いことがわかる。一方、他動化、自動化、両極化の各分類における自動詞比率の平均値を比較すると、BCCWJ と CEJC の傾向は類似していることが読み取れる。他動化では BCCWJ と CEJC のいずれも自動詞の使用比率が高く、自動化では低い。そして、両極化では自動詞と他動詞の使用比率に大きな差は見られない。この結果は、新谷(2022)の形態素の付加している動詞の使用比率は低いという考察と一致する。つまり、BCCWJ だけではなく、CEJC においても、形態的特徴と使用傾向の関係に同様の傾向が見られる。

ただし、両コーパスにおける各形態的特徴の自動詞比率を比較すると、他動化では BCCWJ で 70.6%、CEJC で 69.7%と近い値を示しているが、自動化では BCCWJ で 35.4%、CEJC で 43.2%と CEJC の方が高い。また、両極化においても BCCWJ で 44.3%、CEJC で 49.9%と、同じく CEJC の方が高い。したがって、表 1 の考

察と同じく、形態的特徴による分類に基づく考察からも、CEJC は自動詞の使用が多い傾向にあると言える。

また、両コーパスにおける他動化と自動化の自動詞比率の差異を見ると、BCCWJ では、自動化と他動化に 35.2 ポイントの開きがあるのに対し、CEJC では、26.5 ポイントと小さい。このことから、CEJC では BCCWJ ほどの形態的特徴による使用傾向の顕著な差は見られないと言える。

以上より、形態的特徴と使用傾向の関係について、他動化、自動化、両極化のいずれの形態においても BCCWJ と CEJC で使用傾向が類似していること、両コーパスの自動詞比率を比較すると、CEJC の自動詞比率が高い傾向にあることの 2 点が明らかとなった。

5. 個別の自他対応動詞に見られる使用傾向

本節では、個別の自他対応動詞の使用傾向を検討するため、動詞の自他とコーパスの種類という 2 つの変数に基づく独立したカイ二乗検定[5]を行う。前節で対象とした 100 対のうち、いずれかのコーパスにおける自動詞または他動詞の使用頻度が 10 未満であるもの、期待値が 5 未満であるものを除外し、残りの 34 対を考察対象とした。カイ二乗検定の結果、$p \geqq 0.10$ で有意な差が見られなかったものは 19 対、$0.05 \leqq p < 0.10$ で有意傾向が見られたものおよび $0.01 \leqq p < 0.05$ で有意な差が認められたものは 3 件、$p < 0.01$ で有意な差が認められたものは 12 対であった[6]。

まず、有意な差が見られなかった 19 対を(4)に、$0.01 \leqq p < 0.05$ で有意な差が認められたものおよび $0.05 \leqq p < 0.10$ で有意傾向が見られたもの 3 対を(5)に示す。

(4) 集まる：集める、落ちる：落とす、返る：返す、下がる：下げる、溜まる：溜める、付く：付ける、続く：続ける、整う：整える、飛ぶ：飛ばす、止まる：止める、始まる：始める、広がる：広げる、増える：増やす、回る：回す

(5) 当たる：当てる、立つ：立てる、流れる：流す

これらの 22 対は、BCCWJ と CEJC において使用傾向が類似しているものであり、対象とした 34 対の約 6 割に当たる。このことから、多くの自他対応動詞において、書き言葉であるか話し言葉であるかに関わらず、同様の使用傾向を示すことがわかる。

続いて、$p < 0.01$ で有意な差が認められた 12 対を使用頻度、p 値とともに示したものが表 3 である。12 対はカイ二乗値の大きい順に提示している。また、実数は使用頻度を、パーセンテージは両コーパスにおける自動詞と他動詞の使用比率を表している。

表 3 BCCWJ と CEJC で有意な差が認められる自他対応動詞 12 対

	BCCWJ		CEJC		p 値
動詞	自動詞	他動詞	自動詞	他動詞	
消える：消す	66(80%)	16(20%)	73(36%)	129(64%)	$p < 0.001$
上がる：上げる	76(29%)	188(71%)	282(52%)	257(48%)	$p < 0.001$
変わる：変える	167(50%)	169(50%)	760(68%)	353(32%)	$p < 0.001$
乗る：乗せる	41(34%)	78(66%)	216(66%)	112(34%)	$p < 0.001$
掛かる：掛ける	215(44%)	272(56%)	712(60%)	482(40%)	$p < 0.001$
進む：進める	136(38%)	224(62%)	84(64%)	48(36%)	$p < 0.001$
決まる：決める	96(33%)	198(67%)	338(50%)	337(50%)	$p < 0.001$
戻る：戻す	40(58%)	29(42%)	41(30%)	94(70%)	$p < 0.001$
並ぶ：並べる	89(79%)	24(21%)	46(53%)	40(47%)	$p < 0.001$
動く：動かす	28(37%)	47(63%)	120(59%)	85(41%)	$p = 0.003$
残る：残す	136(61%)	88(39%)	257(73%)	95(27%)	$p = 0.003$
直る：直す	28(62%)	17(38%)	83(40%)	127(60%)	$p = 0.009$

12 対の BCCWJ と CEJC の自動詞比率を見てみると、「上がる：上げる」「変わる：変える」「乗る：乗せる」「掛かる：掛ける」「進む：進める」「決まる：決める」「動く：動かす」「残る：残す」の 8 対において、BCCWJ より CEJC の自動詞比率の方が高い。たとえば、「上がる：上げる」では、BCCWJ の自動詞の使用比率は 29%であるのに対し、CEJC の自動詞の使用比率は 52%となっている。つまり、統計的に有意な差が見られる自他対応動詞において、CEJC の自動詞の使用比率が高い動詞の方が多いことがわかる。

以上より、対象とした自他対応動詞 34 対のうち 22 対において類似した使用傾向を示すこと、12 対においては有意に異なる使用傾向を示し、うち 8 対において CEJC の自動詞比率が高いという傾向が見られることが明らかとなった。

6. おわりに

本発表では、自他対応動詞の形態的特徴および統計的観点から、書き言葉のコーパスである BCCWJ と話し言葉のコーパスである CEJC の共通点と相違点を示した。

まず、共通点として、BCCWJ と CEJC の両コーパスにおいて、形態的特徴と使用傾向の関係を示した。書き言葉であるか話し言葉であるかに関わらず、形態素が付加した動詞の使用比率が低い傾向にあり、形態的特徴から各自他対応動詞の使用傾向をある程度推測することが可能であると言える。

次に、相違点として、BCCWJ に比べ、CEJC の自動詞の使用比率が高いことを示した。形態的特徴から見ると、自動化および両極化の自他対応動詞においてその傾向が見られ、各自他対応動詞を個別に見ると、他動化 1 対、自動化 4 対、両極化 3 対の計 8 対において自動詞の使用が有意に多いことがわかった。このことから、話し言葉では自動詞がより多く用いられる傾向にあることが示唆される。

今後の課題として、使用傾向に関わる形態的特徴以外の要因を明らかにするとともに、形態的特徴から推測される使用傾向とは異なる使用傾向を示す自他対応動詞についても、その要因のさらなる検討が必要であると考えられる。

参考文献

奥津敬一郎(1967)「自動化・他動化および両極化転形―自・他動詞の対応―」『国語学』70, pp.46-66, 国語学会.／影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房.／新谷知佳(2022)「自他対応をもつ動詞における自動詞と他動詞の使用比率に基づく分析―動詞対の形態的特徴に着目して―」『KLS Selected Papers 4』pp.73-88, 関西言語学会.／ナロック, ハイコ(2007)「日本語自他動詞対における有標性差の動機付け」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨（編）『他動性の通言語的研究』pp.295-306, くろしお出版／ナロック, ハイコ・パルデシ, プラシャント・影山太郎・赤瀬川史朗（2015)『現代語自他対一覧表 Excel 版』(https://watp.ninjal.ac.jp/resources/)／早津恵美子(1987)「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6, pp.79-109, 京都大学言語学研究会.／三宅知宏(2017)「日本語動詞における「制御性（意図性)」をめぐって−語彙的意味構造と統語構造−」森山卓郎・三宅知宏（編）『語彙論的統語論の新展開』pp.117-134, くろしお出版／Jacobsen, Wesley M(1991)‘*The Transitive Structure of Events in Japanese*.’Kurosio Publishers.

参考資料

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』／『日本語日常会話コーパス』

---

[1] 三宅(2017)

[2] 「生徒を隣の教室に動かす」のように、非能格動詞に対応する形で、他動詞が被使役者をヲ格で標示し，人の意志動作をひき起こす事態を表現する場合もあるが、本発表では、ヲ格が意志性を有している点で非対格動詞と対応する他動詞の用例とは異なるものとして扱う。

[3] 「流れる：流す」「立つ：立てる」のように、自他のいずれかに「-e-」を伴う自他対応動詞は、それぞれ自動化、他動化とする研究もある（Jacobsen1991、ナロック 2007 他）が、「-e-」が「-as-」「-ar-」と比べて形態的に短く、このタイプの自他対応動詞が歴史的には自他同形であったことを考慮し、両極化としている。

[4] 新谷(2022)と同じく、単純平均を用いることとした。

[5] 本研究では、Python 3.11.11 および scipy 1.14.1 を用いてカイ二乗検定を実施した。

[6] 参考資料として、34 対の検定結果と形態的特徴を整理したものを表 i に示す。

表 i 34 対の検定結果と形態的特徴

検定結果	他動化	自動化	両極化	計
$p \geqq 0.10$	3	6	10	19
$0.01 \leqq p < 0.10$	0	1	2	3
$p < 0.01$	2	4	6	12
計	5	11	18	34

文末名詞文「気だ」の構文としての意味

――「観察」という文法概念の精緻化に向けて――

阿久澤弘陽(京都大学)

1. はじめに

意図を表すモーダル的意味を持つ文末名詞文[1](例:「つもりだ」「気だ」)は多いが、動詞の語形変化(動詞接辞)と比べて周辺的なモーダル形式とされ、その意味記述は十分であるとはいい難い。本稿では、文末名詞文「気だ」を取り上げ、そこに構文的な意味的特徴として「観察」という心内行動が関与していることを明らかにする。その上で、本稿での「観察」を、従来様々な現象を説明するために用いられている同名の文法概念との比較を通して精緻化することを試み、そこから得られる理論的含意についても簡単に述べる。

2. 「気だ」の意味的特徴

2.1. 人称制限

「x は〜気だ」は、態度保持者 x の意図を表す文であり、「つもりだ」と似ている。しかし、よく知られているように、「気だ」には一人称主語が立たないという人称制限がある(=(1))(安達 1999; 新屋 2014 など)[2]。

(1) a. 私は転職する{*気/つもり}です。
　　b. 太郎は転職する{気/つもり}です。

意図を表すモーダル形式でありながら、話し手自身の意図を表せないことから「つもりだ」よりもさらに周辺的な形式とされ、「気だ」の意味はほとんど分析されていない。唯一、「気だ」の意味分析をしている安達(1999)は、「気」が「推測」という認識のモダリティ的意味を持っており、これが(1a)の不自然さを説明するとしている。これは、「気だ」の意味的性質をあくまでもモダリティの枠組み内で捉えようとする試みである。

しかし、「気だ」の一人称制限はいくつかの条件下ではその限りでなく、「推測」では説明がつかない。具体的には、①話し手自身を客体視していると考えられる場合(=(2))、②過去時点の話し手の意図を表す場合(=(3))、③「気だ」がテイル形の場合(=(4), 川島 2024)、④副詞的位置に出現する場合(=(5))、である。

(2) a. (?)私ですか？私は転職する気満々ですよ。
　　b. (?)言われなくても、私はすぐ仕事に取りかかる気ですから、心配無用です。

---

[1] 文末名詞とは、「連体部を必須とし、コピュラを伴って文末に位置し、主語と同値または包摂関係にない名詞」であり、この文末名詞を持つ文が文末名詞文である(新屋 2014: p.86)。なお本稿では、非現実(irrealis)の事態に関わる意味を広くモーダル的意味と呼んでいる。

[2] 文末名詞文による意図の表現は、動詞接辞による意図とは異なり、主節で用いられ、かつ、話し手の意図を表す場合は聞き手を必須とする(仁田 1991: pp.205-206)ことから、本稿では丁寧体を用いる。

(3) a. 私は、その時、実は転職する気でした。
b. 私は、試験前日は、徹夜で勉強する気でした。
(4) a. 私は転職する気でいます。
b. 私は就職するまでは親に頼る気でいます。
(5) (私は)死ぬ気で頑張ります。

ここから、「気だ」の人称制限は、発話時現在の一人称に対する基本原則であり、特定の条件下では解除される性質のものであるということが言える。

2.2. 主語の意図を表す「気だ」と観察

上記の言語事実を踏まえ、「気だ」には推測ではなく、「観察」という心内行動が関与していることを示す。大江(2021)は、(反復的)観察という話し手の心内行動が複数の文法現象に見られる共通したふるまいを捉えるのに有効だと指摘している。観察の特徴の一つは、自分自身は観察の対象にしにくいということである[3]。例えば、大江は、「P がちだ」という傾向を表す文が、単に事態 P が複数回生起することを意味しているのではなく、話し手が事態 P の生起を複数回観察したことを表しているとしている。したがって、一人称主語は立ちにくい(=(6))が、自己を客対視するような場合では容認されやすい(=(7))。さらに、「過去を回想する語りでは、…(中略)…現在の自分と切り離した存在として過去の自分の行動を改めて観察して述べている(pp.305-306)」ので、自身についても言及できる(=(8))と述べている。

(6) {?私/若者}はコンビニを利用しがちだ。
(7) 私はついついコンビニを利用してしまいがちだ。
(8) 私は、高校時代、コンビニを利用しがちだった。 ((6)(7), 大江 2021: p.306)

ここでの「観察」は認知的なもので、話し手がある事態を、事態の外から描出するという意味である。これに基づき、「気だ」の意味を(9)のように記述すると、前節で確認した「気だ」のふるまいの多くが説明できる。

(9) 「気だ」の意味的特徴：
態度保持者の意図を表す命題が、話し手の観察によって得られたことを表す[4]。

(2)は、話し手が話し手自身を客体視することで自身を観察しており、主語は一人称だが実質的には三人称と意味的に同質である。(3)は、過去の事態であることから、自身の意図を発話時に振り返って観察できるようになる。過去と観察がなじむのは、発話者が自身の意図を表す命題を客対視できるからである。

「気だ」が観察と関係していることの傍証として、「つもりだ」と比較して、眼前描写において観察対象者の意図を報告しやすいということも挙げられる(=(10))。

(10) あ、見てください！犯人が逃げる{気/?つもり}です！

[3] 大江(2021)は他にも、「瞬間的かつ1回的な事態は反復的に観察することができない」と「観察の対象にそぐわない事態である」を「観察」の特徴として挙げている。前者は、反復性に関わるもので、本稿の議論とは無関係なので扱わない。後者は、出来事の規則性や真理に関する事態(「太陽は東からのぼる」「1+1=2」)で、「気だ」が意図である以上こうした事態とそもそもなじまないので、こちらも扱わない。

[4] 「太郎は私が転職する気だと思っている」のように「気だ」が埋め込まれた場合は、主文述語の態度保持者による観察になるので、厳密には観察者は話し手に限られない。観察者が誰かは統語的な環境にも依る。

テイル形で一人称主語の意図に言及できる(=(4))のは、テイル形であることで、態度保持者の心的態度(=意図)が持続的なものとして解釈されるようになるからである。(11)が不自然なことからも分かるように、「気だ」は状態述語だが、態度保持者の瞬時的な意図を表す。

(11) ??さっきから太郎は退勤する気です。cf. さっきから太郎は部屋にいます。

中右(1994)は瞬間的現在時における心的態度は話し手のみしか接触することができないが、継続的現在時であれば、心的態度は発話時に先立って得られるようになるので、継続的現在時を表すテイル形であれば他者の心的態度を報告できると述べている(例:「太郎は次郎がスパイだと{*思う/思っている}」)。「気だ」は話し手が観察という手段によって情報を得たことを表すので、話し手のみにしか接触することができない瞬間的現在時を参照する「気だ」と観察はなじまない一方、継続的現在時を参照する「気でいる」であれば、心的態度が観察できるようになるというわけである[5]。

2.3. 主語の認識を表す「気だ」

「気だ」がテ形で文の副詞成分として生起する場合は人称制限がない(=(12))ため、「気だ」と観察は一見無関係に思えるかもしれない。

(12) (私は)死ぬ気で頑張ります。(=(5))

しかし、ここで重要なことは、「気だ」は、意図とは別に、命題の真偽に対する主語の認識を示すモーダル形式でもあるということである[6]。

(13) a. {私/太郎}は京都大学に受かる気でいます。
b. {私/太郎}はもうゲームに勝った気でいました。

(12)は、話し手に死ぬ意図があるわけではなく、「そうした心持ちで頑張る」という状態記述二次述部である。「気だ」が態度保持者の一時的な状態を表す名詞であるという文末名詞としての形態・意味的特徴が、(12)のような表現を可能にしている。つまり、(12)で一人称主語が立つのは、「気だ」が意図の表明ではなく、認識状態の描写になっているからである。以降本稿では、主語の認識を表す「気だ」は考察の対象としない。

3. 文末名詞文として意味:「気」を含む述語形式との比較

「気だ」は、形式名詞の「気」にコピュラの「だ」が結合した形式である。「気」を含む述語相当形式には「気がある」「気になる」「気がする」などがある。したがって、前節までの議論を「気」の意味的特徴に帰着させて、個々の形態の意味から全体の意味を導出するような、より分析的な記述を目指すという方針もありうる。しかし本稿では、「観察」は文末名詞文「気だ」の構文としての意味であり、形式名詞「気」の意味ではないと考える。

安達(1999)は、「意図を表す「つもり」が思考的であるのに対して、「気」はより情意的で

[5] テイルと観察の結びつきは、定延(2006)のエビデンシャルなテイルの議論と関連する。しかし、テイルが観察を表す形式であるとする立場は、「太郎は転職する{気です/気でいます}」のアスペクト的なパラダイムを捉えられず、また、既に「気だ」が観察を表す形式としていることから意味が冗長になりうる、といった課題がある。定延のエビデンシャリティの議論とここでの「観察」の異同は 4 節を参照されたい。

[6] 認識を表す「気だ」はテイル形や過去形である必要があるが、その理由は不明である。

あり、推論によってしか知り得ない情報を表すという性質を持つ(安達 1999: p.63)」と述べている。「推論」という概念が「気」の意味記述の鍵で、話し手が自身の意図を推論することはないので、これにより「気だ」の人称制限が説明される。安達は、この記述を支持するとして(14)を挙げている[7](pp.13-14)。すなわち、①情意的な「気」は、思考的な「つもり」とは異なり、状態への自発的な移行が自然であることから「気になる」が言える、②自動詞的な「N がする」では、N は知覚か無意識的な思考や情意に関わる名詞であることから、情意的な意味を持つ「気」が用いられるという主張である。

(14) a. (前略)ぼくは海に行ってみる{気/??つもり}になった。
b. 君が落ち込んでいるのをたまには見てみたい{気/*つもり}がする。

「気」が情意的であるという安達の記述は、「気になる」「気がする」という述語形式自体の存在を説明できる。しかし、情意と推論は独立した概念であり、その関係性が明らかにならない限り、「気」に複数の意味記述を与えただけに留まる。実際に、「気になる」には、「気だ」に見られる人称制限がないので推論は関与していない(=(15))。また、「気がする」は、既に新屋(2014: p.97)に指摘があるように、意図といっさい関係ない話し手の認識を表すモーダル形式であると考えた方が自然である(=(16))。

(15) 私は、なかなか運動する気になりません。

(16) 今日はなんだか雨がふる気がします。

「気になる」同様、所有形式の「気がある」にも人称制限がないことについて、尾崎(2003)は、「する気はない」に人称制限がないという安達の記述を前提に、それが、聞き手の推論的な文を否認するという過程を経ているからと述べている(p.55)。しかし、なぜ推論の否定が一人称主体の意図の表明につながるのかは自明ではない。そもそも、「行きますか」という推論が関与しない問いかけに対して、「行く気はあります」と返答するのは自然なので、「気がある」は推論とは無関係であると考えたほうがよい[8]。

よって、前節での記述にしたがい、補文が意志動詞のル形で文末位置に現れる「気だ」は、「気」を含む他の構文とは別構文と考えたほうがよい。単に同じ形式名詞述語と形態的に異なるというわけではなく、「形態上の相違がそれぞれの独自性をもたらしている(新屋 2014: p.97)」のである。

4. 「観察」という文法概念

本稿での「観察」は、事態を認知する認知主体の心内行動(大江 2021)であり、話し手に

[7] さらに、安達(1999)は、「気だ」が問いかけで使われると「つもりだ」とは異なり否定的なニュアンスが生じることが「気」が推論に基づく情意的気持ちを表すことの傍証としている。しかし、「つもりだ」の問いかけも話し手の批判的な態度を示すことが知られている(高梨 2016: pp.11-12)ため、ここでは割愛する。

[8] 尾崎(2004)の主張は、「気がある」は「気はない」以外では話し手の意図の表明に使われない(安達 1999: p.68)という前提に基づくが、「私としては十分行く気はあったが、病気が行かせてくれなかったまでのこと、(後略)。(BCCWJ, LBe1_00005)」という実例が見られる。よって、「気がある」は、安達や尾崎が言うところの推論とは無関係で、この形式が否定形で使われることが多いのは、対比の「は」を挿入できるという形態的な特徴に依ると考えたほうが自然である。

よる事態の認識的な捉え方の一つである。この点で、定延・マルチュコフ(2006)と定延(2006)がテイルを出来事の観察を表すエビデンシャリティ(「観察してみると現在これこれである(これこれのデキゴト情報がある)ということを表す(pp.173-173)」とよく似ている。ただし、エビデンシャリティでは、「【誰もいない実験室の証明を消して】*これで、実験室の中は真っ暗で、何も見えていません」が不自然なのは実験室に観察対象が不在だからという理屈からも明らかなように、観察者は話し手に限られない。その点で微妙なズレがあることに留意が必要である。

心内行動としての「観察」と似た概念として、池上(2011: p.52)が言うような「客観的把握(=(17))」がある。

(17)　話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする…(中略)…事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に(自己の分身を含む)事態を把握する。

「客観的」は多義的に使われうるので、ここでは小柳(2021)の呼び方を採用して「傍観者的把握」と呼んでおくと、本稿の「観察」は傍観者的把握の一種であると考えられる。しかし、眼前描写文の(10)は主観的把握の文なので、特定の文の類型(主観的か客観的か)を決める把握(construal)とは異なることにもまた、留意が必要である。

最後に、その他の「観察」という文法概念と本稿での「観察」を比較し、本稿での「観察」がいかなる概念かを明確にしておきたい。

第一に、「観察」は知覚とも密接に関わる。実際に、知覚に準ずる概念として「観察」を規定し、時間的に先行する事態がル形で出現するという原因・理由節の時制の分布(=(18))を説明する研究がある(岩崎 1994, 田村 2013 など)。(18)の従属節のル形は、(議論を極めて単純化してしまうと[9])太郎という観察者が従属節の事態を知覚しているという文意に基づく、ある種の節事態同士の時間的同時性から導かれる。

(18)　花子が泣くので、太郎はアメを与えてやった。(岩崎 1994: p.106)

この「観察」も、観察者(=主節の主語)と観察対象(=従属節の主語)が同じだと不自然になるなど、本稿での「観察」と一部重なる。しかし仮に、本稿での観察を同じように知覚の一類型と考えると、過去形やテイル形で一人称主語が自然になることに説明がつかない。知覚による「観察」と本稿での「観察」は本質的には異なるものである。

第二に、「観察」はいわゆる証拠性モダリティと密接な関わりがある。例えば、日本語記述文法研究会(2003)は、認識のモダリティの一類型に「証拠性」を挙げ、これを、「外部に存在する情報を観察したり取り入れたりすることを通じて、その認識が成立していることを表す形式(p.164)」としている[10]。これに基づき「気だ」を、「話し手が、態度保持者の意図を表す命題が真であるという証拠の存在を認識(=観察)する」という意図と認識の複合的

[9] 紙幅の都合上議論の詳細に踏み込めないので、詳しくは岩崎(1994)や田村(2013)を参照されたい。
[10] この定義は、証拠性モダリティが話し手の証拠に基づく推量を表すということを喚起するが、実際には推量とは無関係であることに注意されたい(三宅 2011: p.204)。

なモーダル形式であるとすることもできる。しかし、(3)で見たように、過去形では「気だ」の文が一人称主語でも容認されるという事実は、証拠性では説明できない。過去形でも、話し手が、主節時時点での自身の意図を、何らかの証拠に基づき表明するというのは不自然である(「*私は、その時、実は転職する{みたい/よう}でした」)からである。

「気だ」にはモダリティ論との関連で重要な含意もある。擬似的(二次的)モダリティである「気だ」(仁田 1991; 益岡 1991)は、態度保持者の意図という命題を観察(把握)していることになる。本稿の「観察」を話し手の命題の捉え方という意味で広義のモダリティだと仮定すると、意図という命題と観察という話し手の判断は不可分であるため、命題とモダリティを階層的に扱う立場ではこの言語形式の意味は捉え難いことになる。

5. まとめ

以上、文末名詞文「気だ」という構文に、「観察」という心内行動が関与していることを明らかにした。また、「観察」という心内行動が、知覚や証拠性モダリティといった概念とは似て非なる文法概念であることを見た。モダリティと認知主体の事態把握の接点にある述語である「気だ」の分析によって、従来から多く用いられている「観察」という文法概念の精緻化が可能になったと思われる。

人称制限がある意図を表す述語には「意向だ」「料簡(了見)だ」「魂胆だ」「狙いだ」などがあり(澤田 2014; 新屋 2014 など)、「気だ」が特異なのではなく、一つの文法カテゴリーが形成されていると考えられる[11]。こうした文法カテゴリーの背後にある心的メカニズムを明らかにすることは重要な課題の一つであろう。

【参照文献】■安達太郎(1999)「意志のモダリティと周辺形式」『広島女子大国文』16, 左 1-16/■池上嘉彦(2011)「日本語と主観性・主体性」澤田治美(編)『主観性と主体性』, 49-67. ひつじ書房/■岩崎卓(1994)「ノデ節、カラ節のテンスについて」『国語学』179, 114-103/■大江元貴(2021)「反復的観察と評価的意味」『日本言語学会第 165 回大会予稿集』, 304-309/■尾崎奈津(2003)「「スルツモリダ」の否定形について」『岡山大学言語学論叢』10, 45-56/■川島拓馬(2020)『歴史的観点から見た「文末名詞文」の研究』筑波大学博士論文/■川島拓馬(2024)「「〜する気だ」と「〜するつもりだ」に違いはありますか」国立国語研究所「ことば研究館」URL: https://kotobaken.jp/qa/yokuaru/qa-222/ (2025/01/20 閲覧)/■小柳智一(2021)「4種類の「主観」の用語法」天野みどり・早瀬尚子(編)『構文と主観性』, 33-52. くろしお出版/■定延利之(2006)「心内情報の帰属と管理:現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について」中川正之, 定延利之(編)『言語に現れる「世間」と「世界」』, 167-192. くろしお出版/■定延利之, アンドレイ・マルチュコフ(2006)「エビデンシャリティと現代日本語の「ている」構文」中川正之, 定延利之(編)『言語に現れる「世間」と「世界」』, 153-166. くろしお出版/■澤田浩子(2014)「知覚・思考・判断・意志を表す「文末名詞文」の使用実態:コロケーションから文型へ」『日本語／日本語教育研究』5, 57-73/■新屋映子(2014)『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房/■高梨信乃(2016)「「つもり(だ)」をめぐって:意志表現の指導の観点から」『神戸大学留学生センター紀要』22, 1-20/■田村早苗(2013)『認識視点と因果:日本語理由表現と時制の研究』くろしお出版/■中右実(1994)『認知意味論の原理』大修館書店/■仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房/■日本語記述文法研究会(2003)『現代日本語文法 4:第 8 部 モダリティ』くろしお出版/■益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版/■三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版

【付記】本稿の内容は JSPS 科研費 JP24K16053 の研究成果の一部である。

[11] 「気だ」の人称制限について、川島(2020, 2024)は、「気だ」が「つもりだ」と競合することによって、「気だ」が他者の意図を表す形式として用いられるようになったという歴史的な観点から説明を試みている。ただし、「気だ」以外にも同様の人称制限を持つ意図を表す文末名詞述語は存在するので、こうした述語が使用される文脈も視野に入れて分析を試みる必要があると思われる。

いわゆる〈有対動詞〉における下一段活用動詞の可能動詞化について

浅川 哲也(東京都立大学)

0, はじめに

浅川(2016)では、五段活用動詞から派生した下一段活用動詞（可能動詞)、ら抜き言葉、可能動詞に「れる」が接続したれ足す言葉、〈れれる言葉〉のいずれにおいても、可能の意味のほかに自発・受身・尊敬の意味用法の使用例が発生していることを指摘し、現代日本語において、可能動詞・ら抜き言葉・れ足す言葉などが可能専用の表現形式ではなくなっていることを明らかにした。

この調査に関連して、インターネット上で、Google などの検索エンジンを用いて用例を探しているときに、発表者（1964 年長野県生まれ）の理解語彙の範囲では違和感をおぼえるような例文を見かけることがある（用例文中の／は画面上の改行箇所)。

(1) 人工膝関節術後も膝をつけるの？ 最近、膝の外側の皮膚を切ることで神経を傷つけないようにして膝をつけるように工夫をしています。(人工関節の名医が解説 人工股関節・人工膝関節の最新知識 Copyright 2019、https://www.jinko-kansetsu-meii.com/blank-20)
(2) 飲食店の行列、どれくらいなら並べる？（フェリシモ モノコトづくりラボ、2019 年 5 月 20 日 https://www.felissimo.co.jp/monokotolabo/enq/039696.php)
(3)〔シロクリボー@shirokuriboh〕マクロコスモスが無制限だから起きた悲劇／※この後ちゃんと負けました　〔葉澄@hasumi13coj〕ここからどうやって負けるのか逆に気になる／デモンスミスとかで展開されて圧されたとかか？（Xでのリツイート、2025 年 3 月 15 日、https://x.com/hasumi13coj/status/1900799530817515960)
(4) 悩みの原因知れて良かった～！ 悩みも変わった！（ネイチャー生活倶楽部“髪・肌・全身の悩み”やっと原因が分かりました。https://www.nature-life-club.co.jp/report/01_nayami/)

これは発表者の内省の範囲であるが、(1)の例のように他動詞「つける」を単独で「(膝を) つけられる・(膝を) つけることができる」の意味に用いることはない。(2)の他動詞「並べる」が「並ぶことができる」の意味で使われていることは文脈上で理解できるが、発表者の使用語彙としては「並べる」は「椅子を並べる」のような他動詞の意味にとどまり、「並べる」を単独で可能の意味で用いることはない。(3)の下線部の自動詞「負ける」は文脈からみて「負けることができる」の意味で用いられているが、発表者は「負ける」を単独で「負けることができる」の意味で用いることはない。また、(4)の「知れる」は文脈から見て「知ることができる」の意味であるが、発表者には、五段活用動詞「知る」に可能の助動詞「れる」が接続したら抜き言葉に見える。発表者の使用語彙の「知れる」は「気が知れない・～かも知れない・会社に知れたら困る」のような自動詞としての用法のみであり、可能形の「知れる」ではない。

本発表では、有対自動詞・有対他動詞を総称するとき〈有対動詞〉とし、無対自動詞・無対他動詞を総称するとき〈無対動詞〉とする。〈有対動詞〉において、本来の下一段活用動詞と、四段活用動詞から派生した下一段活用の可能動詞との間に意味上の混乱の生じている例が見られることは、浅川(2021)において指摘したことがある。

可能動詞の定義を事典等で確認してみると、可能動詞とは、「『動きの主体がある動きを行おうとすればできる』という可能の意味を併せもつ、下一段活用の派生動詞」（渋谷 2014)・「四段あるいは五段に活用する普通（単純）動詞に対して、可能の意をもつ同種異形（異活用）の動詞、それ自体で可能の意を示す動詞は除外する」（杉本・岩淵 1994）とあり、動詞「できる」やら抜き言葉を可能動詞に含めるか否かは説が分かれるところであるが、〈有対動詞・無対動詞〉の下一段活用動詞は厳密には可能動詞ではない。しかし、四段活用動詞を派生上の由来としない下一段活用動詞に可能動詞と類似した意味用法が見られるので、広義での「可能動詞化」とした。

本発表では、動詞終止形の語尾が〈-eru〉となるものを便宜的に〈エル型動詞〉と称する。〈有対

動詞・無対動詞〉の国語辞典での〈エル型動詞〉の扱いについて確認するとともに、各種コーパスを主な資料に用いて、現代日本語における下一段活用動詞の可能動詞化の実態を明らかにするとともに、それが発生した背景について検討することを目的とする。

1.〈エル型動詞〉について

現代語において、下二段活用が一段化したことにより、終止形の語尾が「-eru」となった〈エル型動詞〉が〈有対動詞・無対動詞〉においてどのように分布しているかを確認しておく。【表１】は、〈有対動詞〉について、終止形の語尾の語形を基準にして古典語と現代語を対照したものである（浅川・竹部 2012）。〈無対動詞〉においても〈エル型動詞〉が生じているので、〈無対動詞〉についての古典語と現代語を対照したものが【表２】である。表中の網掛けをした箇所が〈エル型動詞〉である。

日本語の自動詞・他動詞と活用の種類との関係は複雑であり、自動詞・他動詞のそれぞれに四段活用動詞と下二段活用動詞などがある。現代語の〈エル型動詞〉は、〈有対動詞・無対動詞〉の自動詞のみならず、他動詞にも現われており、「寄せる」のように自他同形の動詞で自動詞・他動詞両方に〈エル型動詞〉が現われている語もある。四段活用動詞から派生した可能動詞は下一段活用になるので、可能動詞と下一段活用動詞の混乱はここに生じる可能性があるものと考えられる。

【表１　古典語・現代語の有対動詞対照】

古典語 終止形語尾		古典語 語例		現代語 終止形語尾		現代語 語例	
自動詞	他動詞	自動詞	他動詞	自動詞	他動詞	自動詞	他動詞
-u	-u	吹く（カ四）	吹く（カ四）	-u	-u	吹く（カ五）	吹く（カ五）
		開く（カ四）	開く（カ下二）	-u	-eru	開く（カ五）	開ける（カ下一）
		ならぶ（バ四）	ならぶ（バ下二）			ならぶ（バ五）	ならべる（バ下一）
		つく（カ四）	つく（カ下二）			つく（カ五）	つける（カ下一）
		たつ（タ四）	たつ（タ下二）			たつ（タ五）	たてる（タ下一）
		入（い）る（ラ四）	入（い）る（ラ下二）			入（い）る（カ五）	入（い）れる（ラ下一）
		くだく（カ下二）	くだく（カ四）	-eru	-u	くだける（カ下一）	くだく（カ五）
		をる（ラ下二）	をる（ラ四）	-eru	-ru	おれる（ラ下一）	おる（ラ五）
		わる（ラ下二）	わる（ラ四）			われる（ラ下一）	わる（ラ五）
		切る（ラ下二）	切る（ラ四）			切れる（ラ下一）	切る（ラ五）
		知る（ラ下一）	知る（ラ四）			知れる（ラ下一）	知る（ラ五）
		寄す（サ下二）	寄す（サ下二）	-eru	-eru	寄せる（サ下一）	寄せる（サ下一）
		とづ（ダ上二）	とづ（ダ上二）	-iru	-iru	とじる（ザ上一）	とじる（ザ上一）

古典語 終止形語尾		古典語 語例		現代語 終止形語尾		現代語 語例	
自動詞	他動詞	自動詞	他動詞	自動詞	他動詞	自動詞	他動詞
-aru	-u	あつまる（マ四）	あつむ（マ下二）	-aru	-eru	あつまる（マ五）	あつめる（マ下一）
		かさなる（ラ四）	かさぬ（ナ下二）			かさなる（ラ五）	かさねる（ナ下一）
		まがる（ラ四）	まぐ（ガ下二）			まがる（ラ五）	まげる（ガ下一）
		ふさがる（ラ四）	ふさぐ（ガ四）	-aru	-u	ふさがる（ラ五）	ふさぐ（ガ五）
-u	-su	うごく（カ四）	うごかす（サ四）	-u	-su	うごく（カ五）	うごかす（サ五）
		のぶ（バ上二）	のばす（サ四）	-iru	-asu	のびる（バ上一）	のばす（サ五）
		おつ（タ上二）	おとす（サ四）	-iru	-osu	おちる（タ上一）	おとす（サ五）
-ru	-su	なほる（ラ四）	なほす（サ四）	-ru	-su	なおる（ラ五）	なおす（サ五）
		まはる（ラ四）	まはす（サ四）			まわる（ラ五）	まわす（サ五）
		ながる（ラ下二）	ながす（サ四）	-eru	-su	ながれる（ラ下一）	ながす（サ五）
		ぬる（ラ下二）	ぬらす（サ四）			ぬれる（ラ下一）	ぬらす（サ五）
		たふる（ラ下二）	たふす（サ四）			たおれる（ラ下一）	たおす（サ五）
		おる（ラ上二）	おろす（サ四）	-iru	-osu	おりる（ラ上一）	おろす（サ五）
		のる（ラ四）	のす（サ下二）	-ru	-seru	のる（ラ五）	のせる（サ下一）

【表２　古典語・現代語の無対動詞対照】

古典語 終止形語尾		古典語 語例		現代語 終止形語尾		現代語 語例	
自動詞	他動詞	自動詞	他動詞	自動詞	他動詞	自動詞	他動詞
-u	-	ゆく・いく（カ四）	-	-u	-	ゆく・いく（カ五）	-
		飛ぶ（バ四）	-			飛ぶ（バ五）	-
		枯る（ラ下二）	-	-eru	-	枯れる（ラ下一）	-
		負く（カ下二）	-			負ける（カ下一）	-
		老ゆ（ヤ上二）	-	-iru	-	老いる（ヤ上一）	-
-	-u	-	読む（マ四）	-	-u	-	読む（マ五）
		-	殺す（サ四）			-	殺す（サ五）
		-	着る（カ上一）			-	着る（カ上一）
		-	見る（マ上一）			-	見る（マ上一）
		-	分く（カ下二）	-	-eru	-	分ける（カ下一）
		-	植う（ワ下二）			-	植える（ア下一）

２，国語辞典にある〈エル型動詞〉

国語辞典の中で、〈エル型動詞〉の見出し語の記述に「可能形」を多く示しているのは『明鏡国語辞典　第三版』（北原保雄編、2021 年 1 月、大修館書店）である（浅川 2016）。『明鏡国語辞典　第三版』の凡例には「五段動詞には、それから派生した可能動詞を可能欄に示す。ただし、複合動詞では省略する。」とあるが、五段動詞「つ・く」の項に「可能」の意味の記述はなく、下一段動詞「つ・ける」の項にはブランチとして「「付く」の可能形」を示すなど、必ずしも凡例の方針のとおりにはなっていない。『明鏡国語辞典　第三版』の見出し語についての記述を一部引用すると、次のとおりである。なお、可能形の例文としてあげられているものの多くは打消表現を伴う例である。

ちかづ・ける　「近づく」の可能形。近づくことができる。「怖くてそばには―・けない」
つ・ける　「付く」の可能形。付くことができる。「急進派には―・けない」
ど・ける　「退（ど）く」の可能形。どくことができる。
ふく・める　「含む」の可能形。含むことができる。「大きすぎて口には―・めない」
やぶ・れる　「破る」の可能形。破ることができる。「この布は丈夫でとても―・れない」

目視で数えたところ、『明鏡国語辞典　第三版』の見出し語にある〈エル型動詞〉は 1154 語であった。このうち、可能についての記述がみられたのは 62 語であった。この 62 語を基準として、手元にある 2021～2023 年の間に刊行された国語辞典と、1952～1995 年に刊行されたやや古い国語辞典の 15 種の見出し語にある〈エル型動詞〉に可能の意の記述があるか否かについて調査した。それを整理し、辞書の搭載数の上位 20 位まで示したものが【表３】である（見出し語になし―、見出し語にあり可能の意味記述あり○、見出し語にあるが可能の意味記述なし×）。

【表３　国語辞典にある可能形の語　上位】

順位	整理番号	語	研究社 ローマ字で引く国語新辞書 1952年	学研 国語大辞典 第二版 1988年	小学館 現代国語例解辞典 第二版 1993年	福武 国語辞典 1995年	新潮社 新潮国語辞典第二版 1995年	角川必携 国語辞典 1995年	集英社 国語辞典 第二版 2000年	日本国語大辞典 第二版 2003年	三省堂 現代新国語 第三版 2007年	明鏡国語辞典 第三版 2021年	岩波 国語辞典 第八版 2022年	三省堂国語辞典 第八版 2022年	新明解国語辞典 第八版 2022年	三省堂 例解新国語辞典 第十版 2022年	旺文社 国語辞典 第十二版 2023年	○の数
1	144	得る	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	15
2	313	切れる	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	13
3	319	食える	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	－	○	12
4	69	行ける	○	○	○	○	○	－	○	○	○	○	－	○	○	×	○	12
5	711	取れる	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	－	○	○	○	－	11
6	360	解せる	－	○	○	○	○	－	○	○	－	○	○	×	○	－	○	10
7	78	頂ける	×	○	○	○	○	－	○	○	－	○	×	－	○	－	○	9
8	1071	持てる	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	×	○	×	×	○	9
9	198	思える	－	○	×	○	－	×	○	○	○	○	－	○	×	○	○	9
10	589	使える	×	○	○	－	－	×	×	○	○	○	－	○	○	×	－	7
11	1149	笑える	－	－	×	－	○	－	－	○	○	○	－	○	○	○	×	7
12	142	売れる	×	×	○	×	×	×	×	○	×	○	×	○	×	×	○	5
13	626	つなげる	－	×	×	×	－	－	×	○	○	○	×	○	×	○	×	5
14	763	脱げる	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	○	○	－	○	5
15	152	果（おお）せる	－	×	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○	×	×	×	4
16	296	聞こえる	×	×	×	○	×	×	○	○	×	○	×	×	×	×	×	4
17	812	飲める	－	－	－	×	－	－	○	－	○	○	－	○	－	－	－	4
18	882	引ける	×	×	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○	×	×	×	4
19	897	開（ひら）ける	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	○	○	×	×	4
20	63	言える	－	○	－	－	○	－	－	－	－	○	－	○	×	×	－	4

上位６語の「得る・切れる・食える・行ける・取れる・解せる」のうち、下一段活用動詞の「得る」を除いて、「切れる・食える・行ける・取れる・解せる」は、四段活用動詞由来の可能動詞として定着している。上位 21 位以下の語例として複数の国語辞典に見出し語があるものは、「落ち着ける３、折れる３、さばける３、就ける３、釣れる３、解ける３、向ける３、めくれる３、着ける３、抜ける３、おられる２、焼ける２、沸かせる２、裂ける２、進める２、擦れる２、立てる２、飛ばせる２、並べる２、練れる２、見られる２、割れる２、休める２」（語の後の数字は可能形として示している辞書の数）の 23 語である。

『明鏡国語辞典　第三版』一書にのみ可能形が示されている語は、「浮かせる１、居られる１、ね

じれる１、ほどける１、くだける１、削れる１、炊ける１、近づける１、ちぎれる１、付ける１、どける１、成れる１、願える１、含める１、まぎらせる１、破れる１、抉れる１、もらえる１、煮える１」の 19 語である。

３，各種コーパスにある可能の意味の〈エル型動詞〉

〈エル型動詞〉で、文脈上可能の意味に用いられている例のあるものを各種コーパスから抽出した。主な調査資料は、「筑波ウェブコーパス（NINJAL-LWP for TWC)」・「現代日本語書き言葉均衡コーパス検索システム（BCCWJ)」・「日本語話し言葉コーパス（CSJ)」・「日本語日常会話コーパス（CEJC)」・「昭和話し言葉コーパス（SSC)」・「名大会話コーパス（NUCC)」・「日本語歴史コーパス（CHJ)」である。

〔-u:-eru〕

(5) 関節唇損傷時の症状は、その大きさや部位によっても異なりますが「突然、強い股関節痛を感じた。」「足がつけなかった。」「股関節がはずれた感じがした。」「股関節が抜けるような感じがした。」などです。（整形外科ドクター林の股関節の部屋、http://kokansetunoheya.sakura.ne.jp/disease1-2.html）

(6)「ごめんごめん、ごめん。どうした？」どうしたもこうしたも無い。鉛の弾が膝がしらに当って、よほどの怪我をしたのにきまっている。立てない様子だ。（太宰治『雀』、1946 年）

(7)「立てないんですよ。朝、起きると、足に力が入らなくて。なんとか立ちあがれば歩けるんですが、ひざを少し曲げるとまた倒れてしまう。（「かかりつけ医」を持っていますか？・つばさアーカイブ、http://hip.p1.bindsite.jp/tsubasa/1-10/07/07-1.html）

(8) 想像しましょう。人は想像（イメージ）する事で目標に近づけます。例えば、体力が増えて痛みを感じずに快適に過ごしている自分や元気に運動している自分を想像するのです。（コヤマカイロプラクティックオフィス、http://iwatsuki.web.fc2.com/chiro/knowledge-3.html）

〔-eru:-ru〕

(9)なんか、ジュニアと１歳もはなれてないのに、すごくいろんなことができるものだと感心しました。鶴とかびっくりです。紙飛行機も折れないですよ。。。（独身ですがママになりました：4 歳女児とは、http://blog.livedoor.jp/ruhruhlilia/archives/55490905.html）

(10)ガラスは石では割れない。車のガラスを割るには道具が必要。（M.Café 交通事故と眼、http://homepage2.nifty.com/medamacafe/J/TrfcAcdntEye.html）

〔-eru:-u〕

(11)最も多いのは体外衝撃波結石破砕術といって、体外から結石に衝撃波を当てて砕き、小さくなった石を尿とともに自然排出させるというもの。一度で砕けないときは数回行います。それでも砕けない場合は、尿道から内視鏡を入れ、鉗子（かんし）で石をはさんで取り出したり、レーザーなどで石を砕いたりします。（若い女性にも増えている尿路結石・goo ヘルスケア、http://health.goo.ne.jp/column/healthy/h003/0069.html）

(12)ササのように細長い葉に主脈はなく、多数の平行脈がある。引っ張ってもなかなかちぎれないため、男女の縁が切れないよう女性が葉を鏡の裏に入れる風習があったとも伝わる。（盆栽、http://bonsai.shikoku-np.co.jp/imperial/ja/post-29.html）

(13)弊社が求める人物像の二つ目は「殻を破れる人」です。昨今は経済の変化もめまぐるしく、企業には不断の改革が求められています。そうした時代にこそ、既存の枠にとらわれない、創造性豊かな発想が必要なのです。（基礎学力を考える・財団法人日本漢字能力検定協会 http://www.kanken.or.jp/kisogakuryoku/company/52.html）

〔-eru:-eru〕

(14)船頭さんは再びエンジンを絞った。どこだ？今度は左の方を見ている。しかし見えない。師匠

曰く「１０羽くらいいるよ」。全然見えない。そのうちなんだか水面にゴミのようなものがあるのに気付いた。それがカモ達であった。（中略）だんだんカモの群れに近づいていくが、なぜか波が高くなってくる。波が高いとザブンザブンと舟で音がたってしまうのである。その音に気付いたのか、群れの１羽が飛び立つ。するとそれにつられてか群れが一斉に飛び立っていった。「寄せねえなあ」船頭さんがつぶやく。（初めての猟、http://hungryhunter.life.coocan.jp/stories/first.html）

〔-eru:φ〕

(15)運動しても痩せない どうしても痩せない時は？ ウォーキングでも痩せない ジョギングで痩せない バナナダイエットで痩せない（運動しても痩せないのはナゼ？、http://yasenai.diet-yarikata.com/diet-hiketu/undou-yasenai.html）

コーパスによって調査したところ、〔-eru:-su〕の有対動詞（「流れる・濡れる・倒れる」など）、および、〔-aru:-eru〕の有対動詞（「集める・重ねる・曲げる」など）に可能の意味を有する〈エル型動詞〉を見出しがたいという傾向がある。

用例(15)のように、四段活用動詞を有対としてもたない下一段活用動詞単独の有対動詞においても打消表現を伴うと可能動詞と類似した用法が生じている。自動詞や自発表現の打消は不可能の意を表わすことがある。

４，下一段活用動詞と可能動詞の意味上の混乱発生の背景

下二段（下一段）活用動詞の可能動詞は、四段活用動詞の無対動詞から自動詞の空白を埋めるように発生し、それが有対動詞にも拡大したものとされている（青木2010）。

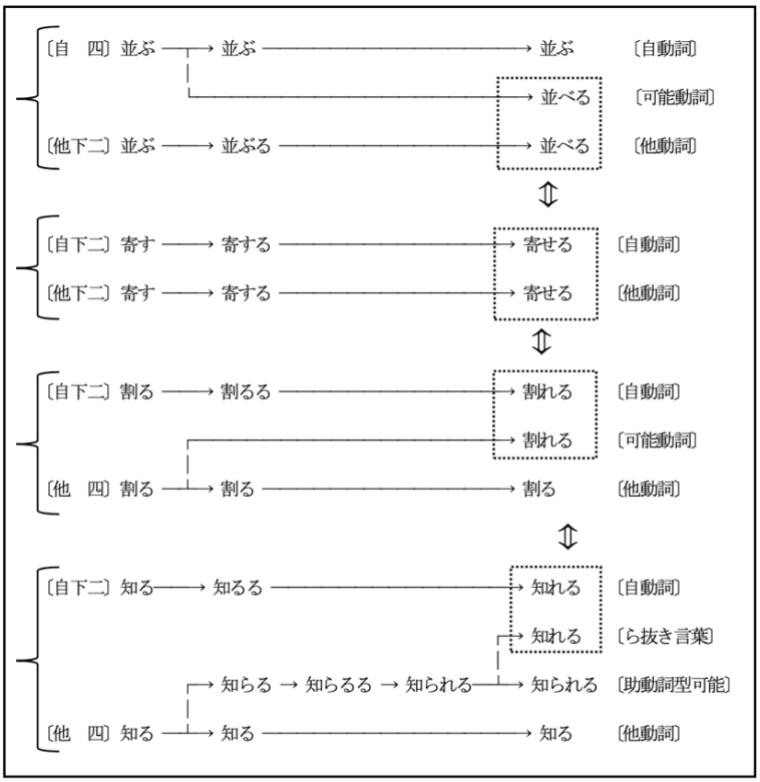
しかし、語形としての〈エル型動詞〉の発生には、四段活用動詞の下一段化（すなわち可能動詞の発生）のほかに、文法変化としての下二段活用動詞の一段化が前提としてある。四段活用動詞が下一段化したもの、自動詞で下二段活用動詞が下一段化したもの、他動詞で下二段活用動詞が下一段化したもの、さらにら抜き言葉との関係を図示すると【図１】のとおりである。併せて、【図２】に無対自動詞と可能動詞の関係、【図３】に無対他動詞と可能動詞の関係を示す。

有対動詞において、四段活用動詞から下一段活用の可能動詞が派生し、また、下二段活用動詞が二段活用の一段化を生じて下一段活用動詞になると、語形が外形上で同一となる。例を挙げると、「膝をつける」のように、下二段活用他動詞「つく」の下一段化「つける」と、四段活用自動詞の「つく」の可能動詞化「つける」との意味上の混乱が生じているのである。

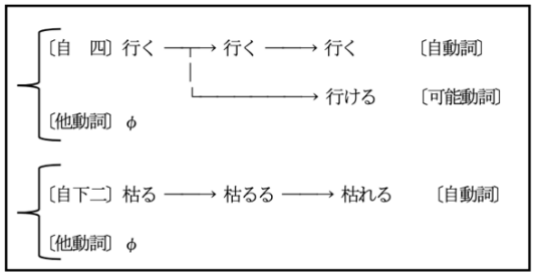
おわりに

現代日本語における有対動詞の下一段活用動詞の一部に、可能動詞に類似した可能の意味を表わす用法が発生している。

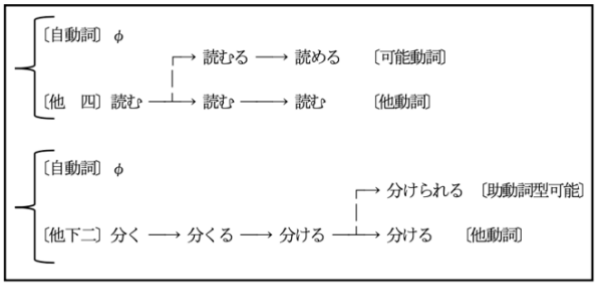
他動詞においても下一段活用動詞の場合に、可能表現としての意味を表わす例がみられるのは、下二段活用動詞から派生した下一段活用動詞が可能動詞と同形であるが故に、その語形の影響を受けて、本来、可能の意味をもたなかった〈有対動詞〉の下一段活用動詞に可能の意味が発生しているからである。つまり、下一段活用動詞の意味用法が、語形を同じくする可能動詞の影響を受けていくという傾向があるものと思われる。



【図1　有対自他動詞と可能動詞・ら抜き言葉の関係】



【図2　無対自動詞と可能動詞】



【図3　無対他動詞と可能動詞】

【参考文献】青木博史(2010)『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房、浅川哲也(2021)「ら抜き言葉と日本語教育」(『言語の研究』第8号)、浅川哲也(2018)「江戸時代末期人情本にみられる可能表現について―後期江戸語における可能動詞の使用実態―」(『近代語研究　第20集』武蔵野書院)、浅川哲也(2016)「ら抜き言葉と〈れれる言葉〉と可能動詞にみられる自発・受身・尊敬の用法について―振れれるのもいやだし・いじめれれる子供・女性にことわれ続け―」(『言語の研究』第2号)、浅川哲也・竹部歩美(2014)『歴史的変化から理解する現代日本語文法』おうふう、釘貫亨(1996)『古代日本語の形態変化』」(和泉書院)、渋谷勝己(2014)「可能動詞」(『日本語大事典』朝倉書店)、杉本つとむ・岩淵匡(1994)『新版日本語学辞典』おうふう、早津恵美子(2005)「動詞の自他」(『日本語大事典』朝倉書店)
【国語辞典】『研究社　ローマ字で引く国語新辞書』(1952年)、『学研国語大辞典　第二版』(1988年)、『小学館　現代国語例解辞典　第二版』(1993年)、『福武　国語辞典』(1995年)、『新潮社　新潮国語辞典第二版』(1995年)、『角川必携国語辞典』(1995年)、『集英社国語辞典　第二版』(2000年)、『日本国語大辞典第二版』(2003年)、『三省堂現代新国語　第三版』(2007年)、『明鏡国語辞典　第三版』(2021年)、『岩波国語辞典　第八版』(2022年)、『三省堂国語辞典　第八版』(2022年)、『新明解　国語辞典第八版』(2022年)、『三省堂例解新国語辞典　第十版』(2022年)、『旺文社国語辞典　第十二版』(2023年)

中古和文資料における地の文の連体形終止

泉 沙希（いずみ さき）（筑波大学大学院生）

1. はじめに

古典日本語の述語文には、(1) のように、文末に係る係助詞や疑問詞といった特殊な要因なしに文末が連体形となる連体形終止という現象が見られる。

(1)　六月ごろにひきかへて、めづらしき心地する[1]。　（讃岐典侍日記・下/地の文）

連体形終止は会話文に多く、中古和文資料における会話文の連体形終止の実態は土岐 (2005) により詳細に分析されるが、地の文における実態は明らかではない。そこで、本発表では、中古和文資料における地の文の連体形終止の実態について、会話文との比較を行いながら明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

連体形終止は、詠嘆、解説といった表現価値を有すると説明されることが多い（小池 1967、山内 2003 など)。一方、山内（2003）は、中古の資料における連体形終止には、特別の表現価値の感得できない例も存在することを指摘している。これを踏まえ、土岐（2005）は、中古和文の物語[2]における会話文中の平叙文に見られる連体形終止について、その実態や表現価値の本質を検討している。土岐（2005）は、連体形終止を、終止形終止、ナム、ゾ共起の係り結びと比較しながら分析し、以下のことを示した。

(i) 連体形終止は、助動詞を伴わない動詞文では、感情・思考・知覚動詞に多く、具体性のある現在時の事柄や話者の評価・解説を述べる場合に多い。
(ii) 連体形終止は、助動詞を伴わない形容詞文では、情緒的形容詞に偏る。
(iii) 連体形終止の助動詞文では、1. 感情・思考表出（ル、ラル、マホシ）2. 過去・完了（キ、ケリ、ツ、ヌ、タリ、リ）3. 推量（終止ナリ、ベシ、メリ、(マジ)）4. 否定（ズ、(マジ)）5. 断定（体言ナリ、連体ナリ）の順に連体形率が高い。

以上のことから、連体形終止の表現価値の本質は、発話者に当該の情報の絶対的優位性があることを示すことであると結論づけている。この絶対的優位性とは、「情報内容に関する確定権が常に一方の側にあり、もう一方は示された情報内容を否定することが出来ない状況にあること」

[1] 用例は、『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠り、用例の末尾の丸括弧内に、出典（資料名・巻名または巻番号/文の種類）を示す。また、強調のために、連体形終止となる部分に下線を引く場合がある。
[2] 『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『堤中納言物語』『落窪物語』『源氏物語』『宇津保物語』を対象としている。

（土岐 2005: 20）を意味する。しかし、土岐（2005）では、物語の会話文のみに着目しており、地の文における実態は明らかではない。そこで、本発表では、土岐（2005）を踏まえ、中古和文資料における地の文の連体形終止について、会話文との比較を行いながら検討する。なお、調査・分析に当たっては、物語のみならず、日記も対象として検討する。

3. 調査資料と調査方法

調査資料は、『日本語歴史コーパス平安時代編 I 仮名文学』における物語・日記の計 14 種とする[3]（物語：『竹取物語』『伊勢物語』『平中物語』『大和物語』『落窪物語』『源氏物語』『堤中納言物語』『大鏡』、日記：『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日記』）。本発表では、地の文と会話文の連体形終止を対象とする。連体形終止の用例を収集する際の『日本語歴史コーパス』における検索方法は、すべての資料において、①キーが文末から 2 語以内、活用形の大分類が連体形、②キーが活用形の大分類が連体形、後方共起 1 でキーから 1 語の書字形出現形が“」”、③キーが活用形の大分類が連体形、後方共起 1 でキーから 1 語の書字形出現形が“』”とする。小木曽（2015）では、連体形終止の調査方法として①の検索方法のみが示されているが、『日本語歴史コーパス』では、閉じ括弧の直前が文末として扱われていないこと、『新編日本古典文学全集』では、鉤括弧内に引用される文は二重鉤括弧で示されることから、閉じ括弧の直前に連体形終止が見られる（2）、（3）のような用例を収集するためには②③の検索も必要である。

(2)　「さらぬ法師ばらなどにも、みな言ひなすさまことにはべる」と聞こゆるにぞかかりたまへる。　（源氏物語・夕顔/会話文）

(3)　「帝、御覧じて、『なにごとぞ。これを心えぬ』とて僧都の君になむ見せたまひけると聞きしかば、かひなくなむありし」と語りたまひける。　（大和物語/会話文）

本発表では、終止形・連体形同形の例や、連体形終止か係り結びか判断し難く、係り結びの可能性がある例は連体形終止に含めない。また、（4）のような和歌の前に見られる和歌に関する説明や、（5）のような引き歌の一部は、連体形で終止することが多い特殊な環境であるため、連体形終止の対象から除外する。

(4)　さてよめる。

人しれぬわが通ひ路の関守はよひよひごとにうちも寝ななむ　（伊勢物語/地の文）

(5)　明けぬれば、「鳥の音つらき」とのたまはせて、やをら奉りておはしぬ。

（和泉式部日記/会話文）

調査の結果、各資料における地の文・会話文の連体形終止の用例数と割合は、表 1、表 2 のようになる（丸括弧外は用例数、丸括弧内は割合）。

[3]『枕草子』は文末に連体形が多用され、慎重に扱う必要があるため、伊坂（1994）と同様、除外する。

表 1　各資料における地の文・会話文の連体形終止の用例数と割合（物語）

物語	竹取	伊勢	平中	大和	落窪	源氏	堤	大鏡	全体
地の文	3(27%)	5(83%)	13(93%)	34(89%)	25(31%)	45(21%)	13(50%)	2(2%)	**140(29%)**
会話文	8(73%)	1(17%)	1(7%)	4(11%)	56(69%)	172(79%)	13(50%)	81(98%)	**336(71%)**
計	**11(100%)**	**6(100%)**	**14(100%)**	**38(100%)**	**81(100%)**	**217(100%)**	**26(100%)**	**83(100%)**	**476(100%)**

表 2　各資料における地の文・会話文の連体形終止の用例数と割合（日記）

日記	土佐	蜻蛉	和泉	紫	更級	讃岐	全体
地の文	2(100%)	6 (25%)	0(0%)	8(80%)	3(33%)	14(56%)	**33(45%)**
会話文	0(0%)	18(75%)	4(100%)	2(20%)	6(67%)	11(44%)	**41(55%)**
計	**2(100%)**	**24(100%)**	**4(100%)**	**10(100%)**	**9(100%)**	**25(100%)**	**74(100%)**

4. 地の文における助動詞を伴わない動詞述語文・形容詞述語文の連体形終止

土岐（2005）を踏まえ、地の文における助動詞を伴わない動詞述語文について、連体形終止となる本動詞、補助動詞前接動詞を感情・思考・知覚動詞、存在動詞、動作・変化動詞に分類すると表 3 のようになる[4]（丸括弧外は用例数、丸括弧内は割合）。

表 3　地の文における連体形終止となる本動詞、補助動詞前接動詞の種類ごとの用例数と割合

地の文	物語	日記	全体
感情・思考・知覚動詞	**8(50%)**	**7(70%)**	**15(58%)**
存在動詞	6(38%)	1(10%)	7(27%)
動作・変化動詞	2(13%)	2(20%)	4(15%)
計	16(100%)	10(100%)	26(100%)

表 3 から、地の文においても、会話文と同様、助動詞を伴わない動詞述語文の連体形終止では、感情・思考・知覚動詞が他の分類と比べて多く見られるといえる。

次に、助動詞を伴わない形容詞述語文について、吉田（1995）、安本（2009）をもとに連体形終止となる形容詞を分類する。吉田（1995）では「感情形容詞」「評価形容詞」「否定形容詞」「程度形容詞」「感覚形容詞」「時間形容詞」「次元形容詞」「色彩形容詞」「その他」の 9 つ、安本（2009）では「感情」「感覚」「評価」「程度」「状態」「否定」の 6 つの意味分類が示され、意味分類ごとに該当する形容詞が挙げられている。本発表の地の文の連体形終止の調査では、感情の形容詞が 1 例（物語 0 例・日記 1 例）、評価の形容詞が 3 例（物語 1 例・日記 2 例）であり、感情・評価の形容詞に偏っている。感情・評価の形容詞は、吉田（1995）では情意的な意味をもつ A 群とされ、土岐（2005）では情緒的形容詞とされる。従って、地の文においても、会話文と同様、助動詞を伴わない形容詞述語文の連体形終止は、情緒的形容詞に偏るといえる。

---

[4] 具体的な本動詞、補助動詞前接動詞の種類は以下のとおりである。

感情・思考・知覚動詞：〈本動詞〉「覚ゆ」「思し出づ」「思しくづほる」「心地す」「見ゆ」「聞こゆ」
〈補助動詞前接動詞〉「思ふ」「ながむ」「恋ひ悲しぶ」

存在動詞：〈本動詞〉「あり」「侍り」「おはす」　動作・変化動詞：〈本動詞〉「す」「経」「来」「定む」

なお、表 3 においては四捨五入の都合上、割合の合計が 100%にならない場合がある。

以上のことから、中古和文資料の地の文における助動詞を伴わない動詞述語文・形容詞述語文の連体形終止では、会話文と同様、感情・思考・知覚動詞、情緒的形容詞が他の分類と比べて多く見られるといえる。

5. 中古初期の連体形終止と中古中期以降の連体形終止

第 4 節では、地の文と会話文における連体形終止の傾向の共通点を指摘した。第 4 節を踏まえ、連体形終止の用例を、感情・思考・知覚・評価表現と状況説明の 2 つに分類すると、中古初期から中古中期にかけて、連体形終止が用いられる範囲が拡大している可能性を捉えることができる。以下、感情・思考・知覚動詞、情緒的形容詞・形容動詞（感情・評価の形容詞・形容動詞）、感情・思考・知覚・評価の表現に関わる意味で用いられている助動詞（「べし」、「終止なり」、「めり」など）が、連体形終止となる例や連体形終止となる補助動詞、助動詞に前接する例を感情・思考・知覚・評価表現の連体形終止とし、その他の例を状況説明の連体形終止とする。

5.1. 地の文の連体形終止と会話文の連体形終止の差異

中古初期の資料における地の文では、状況説明の連体形終止のみが見られる（(6)）。感情・思考・知覚・評価表現の連体形終止は見られず、終止形終止や係り結びの例が見られる（(7)(8)）。

(6) 小野のふさもりまうで来て、まう上るといふことを聞きて、歩み疾うする馬をもちて走らせ迎へさせたまふ時に、馬に乗りて、筑紫より、ただ七日にまうで来たる。
（竹取物語/地の文）

(7) かく呼び据ゑて、このたびはかならずあはむと嫗の心にも思ひをり。
（竹取物語/地の文）

(8) ただ、波の白きのみぞ見ゆる。（土佐日記/地の文）

地の文における感情・思考・知覚・評価表現の連体形終止は、中古中期以降の資料で見られるようになる（(9)(10)(11)(12)）。

(9) かくてありけることを、かむのくだり奏しければ、帝もかぎりなくあはれがりたまひける。
（大和物語/地の文）

(10) 中にも北の方、女どもは口の方に乗せて、我は後の方に乗りたりければ、こよなき。
（落窪物語/地の文）

(11) このごろ、雲のたたずまひ静心なくて、ともすれば、田子の裳裾思ひやらるる。
（蜻蛉日記・下/地の文）

(12) 使のかざしの花ささせたまひたる見るに、さま変はりてめでたき。
（讃岐典侍日記・下/地の文）

一方、会話文では、中古初期の資料において、既に、感情・思考・知覚・評価表現の連体形終止（(13)）、状況説明の連体形終止の両方が見られる（(14)）。

(13)　守る人々のいはく、「かばかりして守る所に、かはほり一つだにあらば、まづ射殺して、外にさらさむと思ひはべる」といふ。　(竹取物語/会話文)

(14)　大炊寮の飯炊く屋の棟に、つかの穴ごとに、燕は巣をくひはべる。　(竹取物語/会話文)

以上のことから、中古初期の資料において、会話文では、感情・思考・知覚・評価表現の連体形終止、状況説明の連体形終止の両方が見られるが、地の文では、状況説明の連体形終止のみが見られ、感情・思考・知覚・評価表現の連体形終止は、中古中期以降の資料で見られるようになるといえる。まとめると、表4のようになる（○は用例有り、×は用例無しを意味する）。

表4　地の文・会話文における連体形終止の種類と出現時期

	地の文		会話文	
	中古初期	中古中期以降	中古初期	中古中期以降
感情・思考・知覚・評価表現	×	○	○	○
状況説明	○	○	○	○

このことは、中古和文資料の地の文において、中古初期から中古中期にかけて、連体形終止が用いられる範囲が拡大していることを示唆している可能性がある。

5.2.　感情・思考・知覚の主体

また、中古中期以降の資料では、感情・思考・知覚の主体が文の表現主体ではない場合にも連体形終止が用いられるようになる。以下、会話文における発話者、物語の地の文における作者（語り手）、日記の地の文における日記の作者といった文の表現主体を「表現者」と呼ぶ。

本発表の調査で得られた中古初期の資料における会話文の感情・思考・知覚表現の連体形終止は、(13)、(15) のように、すべて表現者主体と考えられる例である。それに対し、非表現者主体の場合は、終止形終止や係り結びの例が見られる（(7)）。

(15)　昔、山にて見つけたる。　(竹取物語/会話文)

一方、中古中期以降の資料における感情・思考・知覚表現の連体形終止は、非表現者主体の場合にも用いられるようになる[5]。日記の地の文では、表現者主体と考えられる例のみが見られるが（(11)）、物語の地の文では、ほとんどが非表現者主体と考えられる例である。例えば、(9) の感情・思考・知覚の主体は、表現者でなく帝である。従って、感情・思考・知覚表現の連体形終止は、中古初期には表現者主体の場合のみで用いられていたが、中古中期以降の資料では非表現者主体の場合にも用いられるようになるといえる。以上のことから、中古初期から中古中期にかけて、連体形終止が用いられる範囲が拡大している可能性がある。地の文における感情・思考・知覚表現の連体形終止が、中古中期以降の資料で見られるようになること、物語の地の文では、ほとんどが非表現者主体の例であることを踏まえると、物語の地の文における連体形終止の実態は、土岐（2005）が述べる、会話文における「発話者の絶対的優位性」から自動的に導き出さ

[5] 中古和文資料における評価表現の連体形終止では、物語・日記ともに、非表現者主体の確かな例は見られず、表現者主体の例が見られる（(10)(12)）。(10) は『新編日本古典文学全集』の頭注で草子地とされる。

れる姿をしているわけではないといえる。

6. まとめ

本発表では、中古和文資料における地の文の連体形終止の実態について、会話文との比較を行いながら明らかにした。本発表では、以下の 4 点を指摘した。

(A) 中古和文資料の地の文における助動詞を伴わない動詞述語文・形容詞述語文の連体形終止では、会話文と同様、感情・思考・知覚動詞、情緒的形容詞が他の分類と比べて多く見られる。

(B) 中古初期の資料において、会話文では、感情・思考・知覚・評価表現の連体形終止、状況説明の連体形終止の両方が見られるが、地の文では、状況説明の連体形終止のみが見られ、感情・思考・知覚・評価表現の連体形終止は、中古中期以降の資料で見られるようになる。

(C) 中古中期以降の資料では、感情・思考・知覚表現の連体形終止が、表現者主体の場合のみならず、非表現者主体の場合にも用いられるようになる。

(D) (B)、(C) を踏まえると、中古和文資料において、中古初期から中古中期にかけて、連体形終止が用いられる範囲が拡大している可能性がある。

今後は、連体形終止の全体像を明らかにし、係り結びや終止形終止といった他の終止と比較しながら、連体形終止の機能や変遷、他の終止との関係について検討することが求められる。

調査資料

竹取物語・伊勢物語・土佐日記・大和物語・平中物語・蜻蛉日記・落窪物語・源氏物語・和泉式部日記・紫式部日記・堤中納言物語・更級日記・大鏡・讃岐典侍日記：『新編日本古典文学全集』（小学館）

※用例の収集には、国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス平安時代編 I 仮名文学』（バージョン 2023.3）https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html#kanabungaku（コーパス検索アプリケーション「中納言」（バージョン 2.7.2）を利用）（2025 年 3 月 31 日確認）を使用した。

参考文献

伊坂淳一（1994）「書記言語としての仮名文における連体形終止法の分布とその意義」森野宗明教授退官記念論集編集委員会（編）『森野宗明教授退官記念論集言語・文学・国語教育』1-14, 三省堂／小木曽智信（2015）「コーパス活用の勘所 第 17 回【日本語史】中古語の文法 (2) 係り結びと連体形終止」『日本語学』34(10), 68-73, 明治書院／小池清治（1967）「連体形終止法の表現効果―今昔物語集・源氏物語を中心に」『国文学言語と文芸』9(5), 12-21, 東京教育大学国語国文学会／土岐留美江（2005）「平安和文会話文における連体形終止文」『日本語の研究』1(4), 16-31, 日本語学会／安本真弓（2009）「構文的機能から見た中古形容詞の特徴―意味との関わりから―」『国語学研究』48, 119(28)-105(42), 東北大学大学院文学研究科国語学研究室内「国語学研究」刊行会／山内洋一郎（2003）『活用と活用形の通時的研究』清文堂／吉田光浩（1995）「平安期形容詞の意味と終止用法について―「枕草子」「源氏物語」「栄花物語」を資料として―」宮地裕・敦子先生古稀記念論集刊行会（編）『日本語の研究宮地裕・敦子先生古稀記念論集』112-145, 明治書院

「せっかく」における〈擬似述語用法〉の成立

許燕（きょえん，名古屋大学博士候補研究員）

１．はじめに

「せっかく」が日本に受容されたのは平安前期の 9 世紀(1)とされているが，〈擬似述語用法〉の発生は 1000 年以上後の明治初期の 19 世紀(2)になってからであると考えられる。

(1) （安澄）法師為人敏給，問答絶倫。西大寺律師泰演，特為仇敵，奉對竜顔，共争折角，弥勒出世，勝負定矣。（姚 2022: 22 (5)，『日本後紀』巻二十三逸文弘仁五年(814)三月戊申載『類聚国史』巻九十九）

(2) 其は折角の何ですが歸てから御馳走に成ませうまづ春の氣色を十分に見物爲様に成たけ早出掛ませうぢや御座いませんか（アーネスト・サトウ『春秋雑誌会話篇』第二冊第十六章，1873）

「せっかく」の用法は，以下の〈副詞用法〉〈連体用法〉〈擬似述語用法〉の 3 つに分類されている（許 2020，2024）が，なぜ〈擬似述語用法〉のみが 1000 年も後になってから発生してきたのか。本研究では，「せっかくだが」や「せっかくだから」に代表される，まともな主語が取れないという観点から名付けた〈擬似述語用法〉の成立について考察する。

〈**副詞用法**〉：下記の(3)(4)は連用修飾関係，(5)(6)は連体修飾関係（VN 構文）

(3) せっかくここまで調査してきたのに，やめることになってしまった。（許 2024: 363(3)）

(4) せっかく落ち着いているんだから，そっとしておいて。（許 2024: 363(4)）

(5) せっかくもらった休みも一日中寝て終わりだ。（許 2024: 363(5)）

(6) せっかく回ってきた運をここで使い果たすわけにはいかないじゃないか。（許 2024: 363(6)）

〈**連体用法**〉：せっかくの N（N：名詞およびそれに準ずる形式）

(7) せっかくのパーティーが台無しだ。（許 2024: 363(7)）

(8) せっかくのお正月なんだから初詣に行こうよ。（許 2024: 363(8)）

〈**擬似述語用法**〉：まともな主語が取れない述語

(9) せっかくだが，今回は参加しないことにした。（許 2024: 363(9)）

(10) せっかくだから，フォトウェディングくらいはやっておけば。（許 2024: 364(10)）

２．先行研究と本発表の立場

先行研究を概観するに，本研究における〈擬似述語用法〉を圧縮表現とし例文を提示するに留まっているもの（渡辺 1980, 国広ほか 1982, 森田 1989, 小矢野 1997, 飛田・浅田 2018, グループ・ジャマシイ 2023etc.）がほとんどである。また，代表的な国語辞典のうち『広辞苑』には例文のみ挙がっており，『日本国語大辞典』と『大辞林』には言及がなされていない。それに対して，河原崎（1976）ではただの圧縮表現ではなく，相手の厚意ありきの圧縮であるという点において他の研究と一線を画していると考えられる。

以上を踏まえ，本研究では「せっかく」における〈擬似述語用法〉の発生は明治期の言文一致による話し言葉の普及に関係すると考え，その成立から発展に至る過程を考察する。

３．研究対象および研究方法

本研究では，国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』および『日本語歴史コーパス CHJ』，新潮社の『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』および『CD-ROM 版新潮文庫の絶版 100 冊』，小学館の『新編日本古典文学全集』（全 88 巻）および『日本国語大辞典』の「せっかく」項目例文を含めた有効例 4468 例を研究対象とし分析する。図 1 に示したように，調査対象として平安前期から平成までをその期間とする。

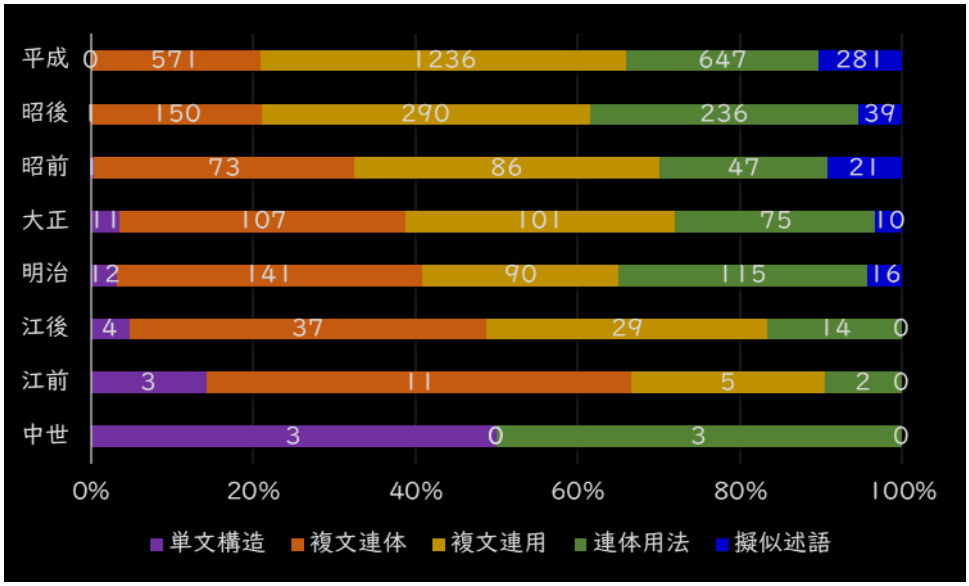


図１　「せっかく」の時代別用法分布

４．分析

以下の表 1 に示したように，明治初期に出現した〈擬似述語用法〉は，時代とともに使用例が概ね増加しているあると考えられる。

表１　〈擬似述語用法〉の逆接・順接関係の時代別分布

逆接・順接		明治	大正	昭前	昭後	平成
逆接		12	8	11	31	28
順接	未実現	4	2	10	6	209
	既実現	0	0	0	2	44
	小計 1	4	2	10	8	253
小計 2		16	10	21	39	281
逆・順割合		300.0	400.0	110.0	387.5	11.1
総計		374	304	228	716	2735
全体での割合		4.3	3.3	9.2	5.4	10.3

まず，明治から昭和戦後に至るまで逆接関係が順接関係に比べ優勢である。とりわけ，明治・大正・昭和戦後は逆接の使用例が順接の 3 ～ 4 倍に上る。これは，〈副詞用法〉や〈連体用法〉と同様の傾向を示している。しかし，平成になると，逆接と順接の関係は逆転する。順接の 253 例に対して，逆接はわずか 28 例と全体の 1 割程度である。全体に占める割合から見た場合，ほぼ同等の比率である昭和戦前（9.2%）と比較しても平成になって順接の〈擬似述語用法〉の使用が活発になってきたのは明らかである。

次に，順接関係の場合，「せっかくだから食べてみよう」のように，主節が未実現事態であることが自然であるとされている。しかし，昭和戦後になって「せっかくだから食べてみた」のように，主節が既実現事態を表す使用がわずかながら認められた。このような用法は平成になるとさらに増加傾向にある。

５．考察

先述したように〈擬似述語用法〉の成立には非常に長い時間を要した。では，なぜ明治時代になって〈擬似述語用法〉が出現するようになったのか。それは明治時代に起きた文語と口語の一致を目指した「言文一致運動」や，漢字と仮名を混ぜて用いる「漢字・仮名混じり文」の普及により，教育や出版物において一層口語に近い形式で表現するようになったのが一因であると推測される。

5.1　〈擬似述語用法〉における逆接と順接の相関

第 4 節で述べたように，〈擬似述語用法〉における逆接と順接は平成になると逆転しており，順接の使用が 9 割程度を占めるようになる。「せっかく」はなぜ〈擬似述語用法〉の場合のみ，逆接と順接が逆転する現象を見せるようになってきたのか。コミュニケーションの場における「お断り」や「前置き」といった決まり文句として用いられる「せっかくだが」や「せっかくだから」は，文語体にはなじまず口語体とより親和性が高いと考えられる。そのため明治期の言語改革の影響を受けてようやく成立し，ひいては謝礼の挨拶語や相手の厚意を受け入れたマーカーの役割を担う順接優勢の用法に変化してきているのではないだろうか。

(11) 「病室までお送り致しましょう」「折角ですが一人で帰ります。フランチェスコ師は目立つ事を良しとしないのです。（後略）」（高里椎奈『本当は知らない』）（許 2024: 367(24)）

(12) 「せっかくだから，ワイシャツを着て，ネクタイも結んで下さいね」ワイシャツとネクタイは，月梅が見つくろってくれたものだった。（山崎豊子『大地の子』）（許 2024: 367(25)）

果たさなくなった逆接の「断り」を表す「せっかくだが」は，徐々に「あいにくだが」に取って変わっていったとも考えられる。その根拠の一つとして、「あいにく」には「あいにくだから／なので」といった順接表現が存在しないことが挙げられる。これは，相手の厚意を受け入れる場合は「せっかくだから」を用い，相手の厚意を断る不都合な状況では「あい

にくだが」を用いるという，一種のすみ分けが行われているとも考えられる。

(13) a あいにくですが，今日は参加できそうにありません。(許 2024: 371(47))

b *あいにく｛ですから／なので｝，今日は参加できそうにありません。[1]

5.2 「あいにく」に連なる「せっかく」の発生と衰退

前小節の「あいにく」とのすみ分け論は，以下のような「せっかく」の実例からもその一端が窺える。明治期から昭和戦後にかけて「せっかく」には「あいにく」に相当する意味が派生したが，次第に衰退していき，現代では消失したと考えられる。

下記の(14)は，「お爺様が一々お改めなさいます」という時間と労力を掛けたにもかかわらず，「水物で御坐いますから」「隠しやうが有りません」という，《不本意》な結果になったことを表している。『日本国語大辞典』では，このような「せっかくさま」を独立見出し語としており，「相手の努力や期待が報われなくて残念であるという気持を丁寧にいう語。おあいにくさま。」という語釈がなされている。

(14) 夫りゃあ折角様で御坐いますが，彼のお爺様が一々お改めなさいますが，お改めの時水物で御坐いますから，隠しやうが有りません故（『日本国語大辞典』，落語: 柳家小さん三代『禁酒の番屋』，1897）

このように，「せっかくさま」は明治時代に出現し，当時は「おあいにくさま」と意味が近似していたと考えられる。その後，共通語には発展しておらず，東北や関西の方言の一部に残っていると見られる。『日本方言大辞典』にも類似の記述が認められており，「気の毒に感じること」という意味で，米沢市や大阪市の方言に用いられていると述べられている。具体的には，山形県米沢市・南置賜郡の「人の叱られる所を見てるとせっかくで」や，大阪市の「せっかくでおますけれど（おあいにくさま)」という使用が確認されている。

また，「せっかくさま」という形式ではないが「あいにく」に連続すると考えられる例に以下の 2 例がある。これらは刊行は昭和戦後であるが，江戸後期を題材とした歴史ものである。点線部分からも明白であるように，これらは相手の苦労や骨折りを鑑みての「せっかくでしたな」や「せっかくだが」ではなく，皮肉や嘲りを表す「せっかく」である。

(15) 玉之助は，人手不足の店の立て直しにかった。「せっかくでしたな。えろう頑張ってはりましたのに」番頭の伊兵衛は，にたにた笑って心にもないことをいった。(向山正家『天保山夢の川さらえ』，昭後)

(16) 「せっかくだが，親分，お前さんたちも当てがはずれたようだね。こんな作並などという淋しい温泉宿に，伊達様のご家来衆が集って大切な相談をするなど，あるわけがねえだろう」(村上元三『からす天狗』，昭後)

このような「せっかく」は現代に受け継がれることなく，「あいにく」にバトンを渡したのではないだろうか。「相手の苦労や努力を十分理解した上で，その行為を受け入れる意思」を表すのが「せっかくだから」であり，「タイミグによる不都合」や「皮肉・嘲笑」を表す

[1] 本研究では，例文を検討する際に「*」を非文であることを示す記号として用いる

のが「あいにくだが」であると言えよう。

5.3 「主節既実現事態生起」構文

「せっかく」における従来の研究では，順接関係の主節は「成立するという期待を前提」（渡辺 1980: 326）にすると述べられている。つまり，すでに実現した主節は「せっかく」においては不自然な文であるということになる。しかし，本研究では〈連体用法〉においては明治期，〈副詞用法〉においては大正期，〈擬似述語用法〉においては昭和戦後の使用に主節が既実現事態と生起する例が認められた。

〈擬似述語用法〉の場合，第 4 節の表 1 に提示したとおり，昭和戦後に 2 例，平成に 44 例の計 46 例確認された。使用形式の内訳をみると，「せっかくなので」が 28 例と最も多く，次いで「せっかくだから」16 例，「せっかくだし」1 例である。また，レジスターを確認すると 8 割強が「特定目的・ブログ／知恵袋」であることが明らかになった。さらに，(20)のように「てみる」という《試み》が実現した表現との親和性が高い。

(17) 「それは，いつのこと？」私は彼に訊ねた。「今日さ」「今日！」「そう，今日のことさ。電車に乗っていたら，横に坐ったおっさんが，こう大きく新聞を広げてね，せっかくだから横眼で読ませてもらったんだ，降りるまで。そこに出ていたのさ。（後略）」（沢木耕太郎『一瞬の夏』，昭和戦後）

(18) 「キャンセルが出たから，アンタが望むならビザ発給するけど，どう？必ず返事をよこせ。」みたいな内容でした。せっかくなので行ってきました。いい国でした。（『Yahoo!知恵袋』，2005）

(19) 法要も終わり，折角だから，夕方は海鮮バーベキューを皆でしました。（『Yahoo!ブログ』，2008）

(20) とっても食べられない！と言われて，食べるのをやめようと思ったんですが，せっかくですし，食べないことには話にならないと言うことで，挑戦してみました。（『Yahoo!ブログ』，2008）

このように，主節が既実現事態と生起する使用は「せっかく」の〈復古用法〉であると考えられる。それは(21)のように〈単文構造〉に用いられて，「申ておりました」というすでに実現した事態を表す江戸後期の使用例が見られたためである。〈単文構造〉の「せっかく」の場合，「せっかく勉強したまへ」のような話し手の《依頼・願望》が一般的であるが，そこから主節が既実現事態である用法が派生したと考えられる。上述したような〈単文構造〉における「主節未実現事態生起」構文が時代とともに発展を遂げ，〈複文構造〉の主節に表れるようになってきたのではないだろうか。このような考察を踏まえ，本研究では(17)～(20)のような使用を「せっかく」の〈復古用法〉であると見なす。

(21) きのふあなたがお出なさつたら一しほ大賑に御坐りませふものおとなあ姉さんさいのう折角申ておりましたさあ拙も昨日は爰へ来るつもりで太左ゑ門橋すじへ向け（洒落本・最一挙六『南遊記』, 1800）

5.4 「せっかくだからと」の一語化

「せっかく」は，副詞用法においてわずかながら「せっかくと」の形式が見られた。このような「と」を後接する使い方は，現代における順接の〈擬似述語用法〉にも見られた。本

研究の調査対象に限って言えば,「せっかくだからと」が 10 例,「せっかくだからというので」(24)が 4 例,「せっかくだし」(25)が 2 例確認された。「せっかくだからと」の場合 10 例中 9 例が『Yahoo!ブログ』の例であった。

「せっかくだからと」に代表されるこのような使用は,明治期の(22)のような使用がさらに圧縮・短縮された結果,平成になって(23)のように一語化してきたと考えられる。(23)〜(25)の例から分かるように,これらの「せっかくだからと」はいずれも不特定多数に向けた《報告》の意味が顕著に表れていると言えよう。これは,「せっかくだからと」がほぼ『Yahoo!ブログ』などのウェブ媒体に用いられていることからも明らかである。

(22) 襟を掻き合せたり,煙草入を収つたりして,腰を浮せたが,「これは,折角何ですから—」とワツプルを二つ,懐紙に包んで袂に入れて(後略)(『太陽』1909-4,三津木春影『産婆』)

(23) そのライブの途中,降ってきたシルバーのテープ,係員さんが一生懸命拾っては,観客に配ってたんです, せっかくだからと記念に 1 本頂きました。(『Yahoo!ブログ』,2008)

(24) あ風の強い日に,ベランダに洗濯物干してたんです。飛んでいくんじゃないかって気になりましたけど,陽気がいいからせっかくだからってんでほっといたんですよ。(桂さと子『のほほん市中探検記』)

(25) 「宣伝にもなるから工事させてほしい」と割安で営業マンがもちかけてきました　通常の半額と聞き,せっかくだしと工事を依頼しました(安田啓一・西野一『「リフォーム」が危ない!』)

(26) 併しそんな事を思つた所でぢつとしてはゐられませんので,二度の奉公へ出て行きました,折角だがとその家でも斷られました(『太陽』1925-7,加治時次郎『産兒制限を求むる人々』)

なお,逆接の〈擬似述語用法〉の例は大正末期の「せっかくだがと」(26)1 例のみである。

６．おわりに

以上「せっかく」の〈擬似述語用法〉の成立における逆接・順接の相関,「あいにく」との連続性,「主節既実現事態生起」構文,「せっかくだからと」の一語化について考察した。

引用文献

河原崎幹夫(1976)「副詞の導入の具体的研究 2「せっかく」(付「わざわざ」)」,『日本語学校論集』3,79-90／許燕(2020)「現代日本語における副詞「せっかく」の意味・機能をめぐって」『桜美林論考.言語文化研究』11,73-93／許燕(2024)「「せっかく」の〈評価性〉をめぐる考察—「あいにく」との比較を中心に—」『名古屋大学人文学フォーラム』(7),361-376／国広哲弥ほか(1982)『ことばの意味 3—辞書に書いてないこと—』平凡社／グループ・ジャマシイ編著(2023)『日本語文型辞典』〔改訂版〕くろしお出版／小矢野哲夫(1997)「副詞「せっかく」の用法」『日本語・日本文化研究』7,1-16／飛田良文・浅田秀子(2018)『現代副詞用法辞典』〔新装版〕東京堂出版／森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店／姚尭(2022)「「折角」の歴史的変遷と変化の類型性」『訓点語と訓点資料』148,19-37／渡辺実(1980)「見越しの評価「せっかく」をめぐって—国語学から言語学へ—」『月刊言語』9(2)〔再録:渡辺実(2002)『国語意味論』,317-332,塙書房〕

タリ・タ形が用いられる連体節とその参照節の時間的関係

末吉勇貴(関西大学大学院生)

1　はじめに

本発表は相対テンス表現が現れた理由を、タリ・タ形が用いられる複文を対象にして、明らかにするものである。現代語の複文では、絶対テンスと相対テンスが併用される。一方、古代語の複文について、井島正博(2011：14 章)や黒木邦彦(2007)は、中古において少なくともトキ節を用いた複文は絶対テンスであると結論付けている。しかし、古代語の絶対テンスのみが用いられると思われる体系から現代語の絶対テンスと相対テンスが併用される体系に移行するプロセスは未だ明らかではない。

相対テンス表現が現れ始めた時期については末吉勇貴(2024・2025)で、ノチ節・トキ節の調査から相対テンス表現は中世前期までは見られず、中世後期頃に現れ始めたということを示した。そこで本発表では「なぜ中世後期に相対テンス表現が現れたのか」という問題を設定し、特に中世後期に起こった大きな変化であるテンス形式がキ・ケリ形からタリ形を由来とするタ形に移行したことが関係している可能性を考える。

2　研究の枠組み

2.1　論証の手立て―複文における時間的関係―

絶対テンスは発話時を基準としてテンス形式が選択される。一方、相対テンスにおいては主節時を基準としてテンス形式が選択される。そのため、相対テンス表現の誕生を考えるためには従属節の主節との時間的関係に着目し、これを通時的に調査する必要があると考えた。今回は一定の用例数が見込める連体節と、その連体節事態が時間的に参照している節(以後、参照節[1])の 2 節の時間的な関係を見ていきたい。

本発表では節同士の時間的関係を、工藤真由美(1995：4 章)を参考に、以下の 4 つに分類する。表 1 を元にキ・タリ・タ形が用いられる連体節と参照節の時間的関係を比較する。

表 1　本発表における連体節事態と参照節事態の時間的関係

名称	時間的関係
全体重複	連体節事態と参照節事態の開始・終了が一致する
部分重複	連体節事態の開始・終了の間に参照節事態の開始・終了がある
接触	連体節事態の終了と参照節事態の開始が同時である
非接触	連体節事態の終了と参照節事態の開始に時間的な隔たりがある

[1] 黒木邦彦(2007)は「時間的な面で従属節が参照する節。終止法の述語をとる主節とは、必ずしも一致しない。」と定義している。古代語資料においては節の区切りが判然としないこともあるため、連体節が時間的に参照する節を主節の代替として用いることにした。

2.2　調査方法

本発表の調査では、日本語歴史コーパスから『平安時代編Ⅰ　仮名文学』及び鎌倉時代編と室町時代編の全てを使用した。(検索条件＝キー：品詞の大分類が動詞　後方共起条件 1：キーから 1 語の語彙素読みがキ・タリ・タかつ品詞の大分類が助動詞　後方共起条件 2：キーから 2 語の品詞の大分類が名詞　本文種別：会話文) また、抄物の調査には『史記抄』(住谷芳幸氏のテキストデータ)と『毛詩抄』(岩波書店)を用いた。

ここで得られた全例の中から連体節と参照節が認められるものを抜き出し、両節の時間的関係を文意から表 1 の定義により全体重複・部分重複・接触・非接触の 4 つに分類した[2]。

3　タリ・タ形が用いられる連体節とその参照節の時間的関係

以下の表 2 に各時代・資料の連体節と参照節の時間関係をまとめて示す。「判別不能」は文脈的に 2 種類の時間的関係が想定できるものを分類している。また、表中で背景に色を付している部分は相対テンス表現が見られた箇所である (キリシタンに 1 例、狂言に 14 例)。

表 2　キ・タリ・タ形が用いられる連体節とその参照節の時間的関係

時代	資料	連体節形式	時間的関係					計
			全体重複	部分重複	接触	非接触	判別不能	
中古	CHJ所収資料	キ	13 (11%)	17 (15%)	44 (38%)	41 (36%)	0	115
中世前期			5 (7%)	7 (10%)	33 (49%)	17 (25%)	5 (7%)	67
中古	CHJ所収資料	タリ	55 (41%)	56 (42%)	23 (17%)	0	0	134
中世前期			10 (19%)	37 (59%)	15 (24%)	0	1 (2%)	63
中世後期	史記抄	タ	8 (8%)	6 (6%)	69 (69%)	14 (14%)	3 (3%)	100
	毛詩抄		17 (13%)	15 (11%)	64 (48%)	20 (15%)	16 (12%)	132
中世末期	キリシタン資料	タ	5 (11%)	9 (20%)	12 (27%)	18 (40%)	1 (2%)	45
	虎明本狂言集		2 (1%)	27 (16%)	97 (57%)	36 (21%)	8 (5%)	170

3.1　連体節にキ・タリ形が用いられる場合の時間的関係

以下に用例を挙げながら詳しく見ていきたい。まず中古・中世前期では、連体節がキ形の場合、時間的関係は接触・非接触が中心である(中古・中世前期いずれも合わせて約 75%)。

(1) 局をたたきしほど、からうじて寝おびれ起きたりしけしき、いらへのはしたなき。【局を叩いたところ、(留守居の女が)やっと寝ぼけて起きてきた様子、対応の決まりの悪いこと。】(枕草子　20-枕草 1001_00079,9870)

(2) 彼の冥途にして見し所の女を尋む。【あの冥途で見た女を訪ねよう。】(今昔物語集 30-今昔 1100_17026,12970)

[2] 以下に該当するものは具体的な動作が想定されないとして調査対象から除外した。 a 否定・禁止及び疑問の表現/b 存在動詞または意味的に存在を示すと認められる動詞/c 引用部分/d 文脈上恒常的であると認められるもの/e 述語が感情を表しているもの/f 連体節が慣用的な表現・成句であると認められるもの/

(1)は、局を叩いたことで留守居の女が起きてきたという時間的関係であるため、２つの事態は接触的であると言える。(2)は、冥途から帰ってきた(死んでから生き返った)男が冥途で出会って同じく生き返っていると思われる女を訪ねようという文意である。「冥途で女を見る」と「その女を訪ねる」は場面が異なっているため時間的な隔たりがあると言える。

一方、連体節がタリ形の場合、ほとんどの時間的関係が全体重複か部分重複のどちらかとなる(中古・中世前期いずれも合わせて約 80%)。

(3) かく心やすき御住まひは、ただいとうちとけたるさまに、ふくみ萎えたるこそよけれ。【このような気兼ねのない住まいは、ただ気楽な様子でふっくらと柔らかいものを着るのが良いのです。】(源氏物語・初音　20-源氏 1010_00023,47970)

(4) (明石入道は)かの絶えたる峰に移ろひたまひにし。【明石入道は人跡の絶えた峰に移りました。】(源氏・若菜上　20-源氏 1010_00034,363070)

(3)の「慣れている」と「柔らかくなっている」は共に服の様子について述べたものであり、この２つの事態に時間的な差は見られない。いずれも一定の期間が想定されるため、全体重複だと認定できる。(4)は、山に人跡が絶えてから発話時までそれが続いているが、明石入道は発話時以前にその山に入った、という文意となる。連体節事態は継続しているが、参照節事態は既に終了していると解釈できるため部分重複と認定できる。おおよそ参照節の述語の時間的な幅によって、全体重複となるか部分重複となるかは変わってくるが、連体節にタリ形が用いられる場合は、このように事態が重複する時間的関係となることが多い。

また、今回の調査では連体節がタリ形の場合に非接触の時間的関係が見られなかった。

3.2　連体節にタ形が用いられる場合の時間的関係(史記抄・毛詩抄)

次に、中世後期の史記抄・毛詩抄ではテンス形式がタ形に移る。中古・中世前期のタリ形との相違としては全体重複・部分重複が少なく、接触が増加している。ただし、本発表の調査範囲では相対テンス表現は見られなかった。

(5) (子供が)いつのまにやら生まれた程に、母の肝をつぶいたぞ。(毛詩抄巻 4　p346)

(6) 大乗をほめよと云われた程に、百巻論を作って大乗を説いたそ。(史記抄テキスト 10 冊　46 ウ)

(5)は、子供が知らないうちに生まれたことで、母親が驚くという事態が引き起こされているため、両事態は接触的であると言える。また、(6)も「大乗を褒めろ」という命令があった上で「大乗を説く」という時間的な関係であるため、こちらも事態は接触的である。さらに中古・中世前期の連体節タリ形では見られなかった「非接触」も用いられるようになる。

(7) (昔、伯父が自分を))送た事を思ひ出て(詩を)作られたぞ。(毛詩抄巻 6　p136)

(7)は、伯父が自分を送り届けてくれたことと、それを思い出して詩を作ったことには、場面の転換が認められるため、時間的な隔たりがあるという解釈が自然である。

本節の冒頭で史記抄・毛詩抄には相対テンス表現は見られないと述べたが、１例のみ(8)のような例が見られる。これは、屏車というものの解説であるため、事態に時間的な進行は見られないが、実際には実現していないような仮の場面で、タ形が用いられているという点

で相対テンス表現と似ており、当該時期の新たな表現だと言える。

(8) 屏車は、とうど敵と対したときに、垣のやうにしてをく車ぞ。(毛詩抄巻 10　p364)

3.3　連体節にタ形が用いられる場合の時間的関係(キリシタン資料・虎明本狂言集)

最後にキリシタン資料・虎明本狂言集では、特に狂言で接触の割合が高く現れている。さらに抄物との違いとして時間的関係が接触の際、相対テンス表現が用いられることがある。

相対テンス表現が現れる文脈は大別すると条件を示す場面と勝負や争い事の場面の 2 種類がある。まずは条件を示す場面を 2 例挙げる。

(9) 一門運尽きて、都を既に落ちた上は、屍をば山野にも晒し、江海にも沈めうとこそ存じたれ(天草版平家物語　40-天平 1592_04013,11830)

(10)(お酒が)ようできた時、かさねて御さう申さう程に、かならずなまいつて下されそ(虎明本・河原太郎　40-虎明 1642_05022,15540)

(9)は、都が落ちた場合の行く末を表している。連体節のタ形は発話時以後を表しており、発話時基準とは解釈されないため、相対テンス表現の例であると言える。また(10)も、売り物の酒が出来た際に、御そう(お知らせ)をすると捉えられるため、連体節のタ形は発話時以後を表していると認められる。

次に勝負や争い事の場面で用いられる相対テンス表現の例を 2 例挙げる。

(11)なんぞせうぶをして、かちまけによつて、(琵琶を)勝つたかたへ貸さう。(虎明本・伯養　40-虎明 1642_06034,10960)

(12)いざ是から宿へかへる道すがら、しゆうくこせ事をいふて、言ひ勝つた者がかしらをもたう(虎明本・酢薑　40-虎明 1642_07017,12140)

(11)は、勝負をして勝った方へ琵琶を貸すという場面である。こちらも連体節のタ形は発話時以後を表しており、相対テンス表現である。(12)は、酢売りと山椒売りのどちらが偉いかを言い争っている所で、お互いに伝統があったため決めきれず、秀句を言った方が偉いということに決めようという場面である。こちらも連体節のタ形は発話時以後を表している。

このように、中世末期において相対テンス表現と認められるものは条件にかかわる場面で用いられ[3]、連体節が前提、参照節が結果を表している意味的な構造になっている。

4　相対テンス表現誕生についての考察

4.1　タリ形が表す意味と相対テンス表現に現れるタ形の連続性

本発表では中世後期に相対テンス表現が現れた理由として、テンス形式がキ・ケリ形からタリ形を由来とするタ形に移行したことが関係している可能性を考えると述べた。ここで、古代語のタリ形が表す意味について確認しておくと、例えば小田勝(2015)は「既然相(過去に起こった事態が今に継続存在していること)および状態(単にある状態で存在しているこ

[3] 勝負や争い事の場面に用いられている例も、全て「勝った方が○○できる」というような報酬について述べるものであるため、広い意味では条件を示していると捉えられる。

と)を表す」と述べている。鈴木泰(2009)や青木博史(2013)でも、変化や運動の結果として出現する物の存在や状態・効力が発話時まで続くことを示すというところで一致している。

そうであれば、タリ形には過去に起きた事態と発話時がつながっているという発想が根底にあるということが想定される。そのような発想を持つタリ形がタ形としてテンス形式に移行し、出来事や時間のつながりが意識されるような継起的用法の使用を中心とすることにつながっているのではないかと考えられる。実際に相対テンス表現は(9)〜(12)で確認した通り、前提と結果を表す文でよく用いられている。

4.2　各時代の特徴と問題の検討

3 節で確認した各時代の特徴は(13)のようにまとめられる。

(13)a 中古・中世前期：キと比較してタリは事態の時間的関係が重複することが多い
b 中世後期：テンス形式がタに移行し、接触(継起)的関係の割合が大きく増加する。
c 中世末期：相対テンス表現が条件にかかわる場面において用いられるようになる。

これを踏まえて本発表が提示している「中世後期に相対テンス表現が現れた理由として、テンス形式がキ・ケリ形からタリ形を由来とするタ形に移行したことが関係している」という問題について検討したい。(13)a・b より、タリ形からテンス形式であるタ形に移ると、継起的用法が増加している。これは状態や効力が残存していることを表すタリ形を元としたタ形にテンス形式が移行し、2 事態間のつながりの強さが表される継起的用法を中心的意味とするということを示していると考えられる。

4.3　条件表現とのつながりについて

さらに、(13)c について述べると、本現象は条件表現と並行的な現象であると捉えられる。例えば条件表現の歴史的な変化を追った矢島正弘(2013：3 章)は、中世前期では「前件で時制表示を行う必要がある場合は後件でも時制表示を行い、そうでない場合は後件でも時制表示を行わないという緩やかな呼応関係が認められる」のに対し、近世中期では「両者において、時制面における呼応関係は求められていない」ことから、条件節のテンス形式が発話時との関係を表すものから主節の起因となる素材を提示するものになっていると指摘している。これは中世前期から近世に至る過程の条件節において、従属節の従属度が高まっていくということであると考えられるが、本発表で見られた(9)〜(12)の相対テンス表現についても[4]、条件表現のように従属節を前提として主節(参照節)の事態が起こると述べるような、意味的にも従属節の従属度が高い構文において、まず起こったということが想定できる。

5　まとめ

本発表では、中世末期に相対テンス表現が現れた理由を、テンス形式がキ・ケリ形からタリ形を由来とするタ形に移行したことに求めた。調査の結果、テンス形式がタリ形からタ形に

---

[4] (8)についても連体節が参照節に起因となる素材を提示しているものの早い例と思われる。

移ると、継起的用法が増加していることが確認され、さらに相対テンス表現は従属節の従属度が高い構文において、まず起こったということを明らかにした。また、相対テンス表現と条件表現のつながりについても述べたが、相対テンス表現に発話時以後を表すタ形が用いられることについては、タ形が継起性を表しえたために、連体節において「主節(参照節)に起因する素材」を提示できたのだと考えられる。

矢島正浩(2013)は、中世前期から近世に至る過程の条件節(已然形＋バの変化)において「従属節が、主節との相対的な関係性を強め、自立性を弱める」と述べている。同様の文構造上の変化について、近年では条件表現の他にも意志表現・丁寧表現などの観点からこの事実が確認されている(それぞれ北崎勇帆(2021)・福嶋健伸(2021))。本発表の内容から相対テンス表現の誕生についても、これらの研究と並行的な事象として位置づけられると言える。

参考文献

青木博史(2013)「文法史」木田章義（編)『国語史を学ぶ人のために』世界思想社
井島正博(2011)『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房
小田勝(2015)『古典文法総覧』和泉書院
北崎勇帆(2021)「中世・近世における従属節末の意志形式の生起」『日本語の研究』17-2,日本語学会
工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房
黒木邦彦(2007)「中古日本語のトキ節に見られる文法的特徴」『語文』88,大阪大学国語国文学会
末吉勇貴(2024)「ノチ節複文に見られるテンス・アスペクト形式の歴史的変遷」『国文学』108,関西大学国文学会
末吉勇貴(2025)「古代語のトキ節複文に見られるテンス形式と事態の順序」『国文学』109,関西大学国文学会
鈴木泰(2009)『古典日本語の時間表現』笠間書院
福嶋健伸（2021)「現代日本語の「です・ます」と中世前期日本語の「候ふ」の異なり―「丁寧語不使用」の観点から―」野田尚史・小田勝（編)『日本語の歴史的対照文法』和泉書院
矢島正浩（2013)『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院

使用したデータベース・資料

史記抄[1477]「科研費によるデータ(住谷研究室)」https://www.gijodai.ac.jp/user/sumiya/kaken.htm
毛詩抄[1535]『毛詩抄詩経』岩波書店
国立国語研究所(2024)『日本語歴史コーパス』バージョン 2024.4 https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/
中古『平安時代編Ⅰ仮名文学』・中世前期『鎌倉時代編Ⅰ説話・随筆』『鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行』『鎌倉時代編Ⅲ軍記』・中世後期『室町時代編Ⅰ狂言』『室町時代編Ⅱキリシタン資料』
以上の資料を用いた。なお、読みやすさのため表記の変化など本文を一部改めたところがある。

古代語における「まし」「べし」「ましじ」の関係について

古川（ふるかわ）　大悟（だいご）（九州大学）

1　問題の所在

① 梅井道敏『てには網引綱』（明和 7（1770）年刊）巻下・9 丁表～裏
「まし」は「べし」と大体同じ。「べし」よりは軽く緩む也。又下知の心にもよめり。
新古　おもひかねうちぬる宵もありなまし吹きだにすさめ庭の松風
古今　秋の野に道もまどひぬ松虫の声するかたに宿やからまし
右等は「ありぬべし」「宿やかるべき」の心に通ぜり。

② 萬葉集の実例[1]
ａかくばかり恋ひむものそと知らませば［知者］遠くも見べくありけるものを［可見有物］
（萬 11・2372 人麻呂歌集）
ｂかくばかり恋ひむとかねて知らませば［之良末世婆］妹をば見ずそあるべくありける［安流倍久安里家留］
（萬 15・3739 中臣宅守）
＊「ませば（ましかば）～む」の形は時代がくだり、また珍しい。
・謂ハク若シ〔於〕燃燈ノ所ニ、法トシテ菩提ヲ得シコト有ラマセバ〔者〕是レ則チ有所得ニ為リナム
（金剛般若経讃述嘉祥 4（851）年点：春日政治（1956）に指摘あり）
・待ちかねて臥しなましかばあしひきの山ほととぎす夢にこそ見め（為忠家後度百首・深夜郭公 187）

③ 物集高見『初学日本文典』（明治 11（1878）年刊）巻下・38 丁表
「ましじ」は将然の「まし」の否不辞の「じ」に係れる者にて

④ 山田孝雄（1913：219）
「ましじ」が本来の形ならばそは「まし」と「じ」の合成にあらざるか。然れども「まし」は未然形所属なるにこれは原形所属なれば、これも亦速断しうべきものにあらず。

⑤ ②のような実例が存在する以上、「まし」と「べし」の意味的関係（共通基盤と差異）が問題となる。つとに小松光三（1980）が両者の意味について「何らかの形で対応していた」と述べ、拙稿（2023b）でも対応関係について見通しを示したが、用例に即した実証には至っていない。「まし」と「ましじ」とについては、語源的な連関を立証することは困難である（本発表も語源解釈を意図するものではない）けれども[2]、「べし」を媒介とすることで少なくとも意味上の関連をたどりうることが予想される。すなわち、本発表の目的は「まし」「べし」「ましじ」の三者の意味的関係を明らかにすることである。

2　「まし」と「べし」との関係　導入

⑥ ②には「まし」と「べし」が共起呼応する例をあげたが、その他に、「まし」が現れうるとも考えられる位置に「べし」が現れる例を上代語資料からできるだけ網羅的に示すと、次の通りである。
ａ息の緒に我は思へど人目多みこそ吹く風にあらばしばしば逢ふべきものを［応相物］（萬 11・2359 人麻呂歌集）
？ｂ我妹子に我が恋ふらくは水ならばしがらみ越して行くべくそ思ふ［応逝衣[3]思］（萬 11・2709 作者未詳）
ｃ紅の花にしあらば衣手に染め付け持ちて行くべく思ほゆ［可行所念］（萬 11・2827 作者未詳）
＊参考：ぬばたまの夜渡る月にあらませば家なる妹に逢ひて来ましを［許麻之乎］（萬 15・3671 遣新羅使人）

---

[1] 早い時期に「まし」と「べし」との共起関係を指摘した論として、杉崎一雄（1950）、春日和男（1958）がある。前者は「まし」と「む」の共起が稀であることも指摘し、また後者は「べし」が用いられる理由について、仮定条件から必当然的に帰結内容が導かれるという点に着目した記述がなされており、ともに示唆的である。

[2] 「ましじ」の語源については、助動詞「まし」と直接的には関係づけない解釈もあり、両者の接続の異なりを重く見れば、むしろこちらの方が注目される。大野透（1956）は価値肯定を意味するウマ・ウメ乙（後のウベ）を想定し、その形容詞としてマシ（助動詞「まし」とは別）とメ乙シが、さらにその否定としてマシジが成立し、マシは亡び、メ乙シはベシとなり、マシジは古形のまま残ったとする。接尾辞ジについては橋本四郎（1955）を参照。大野説の延長発展として吉田金彦（1973）、山崎馨（1992）がある。吉田金彦（1977）によれば、この立場でも助動詞「まし」との間接的なつながりを想定する余地はあるものと思われる。本発表の目的は語源解釈ではないので、これ以上深入りすることはできないが、上記のような説が本発表の趣旨と矛盾・背反するものではないことを断っておく。

[3] 塙書房版は「衣」を「所」の誤りと見て「行くべく思ほゆ」とする。

d 玉くしろまき寝る妹もあらばこそ夜の長けくもうれしかる**べき**［歓有倍吉］　（萬 12・2865 作者未詳）

＊参考：我が背子と二人見ませばいくばくかこの降る雪のうれしから**まし**［懽有麻思］

（萬 8・1658 藤原皇后）

e 我妹子に恋ひつつあらずは刈り薦の思ひ乱れて死ぬ**べき**［可死］ものを[4]　（萬 11・2765 作者未詳）

f 験なき物を思はずは一坏の濁れる酒を飲む**べく**［可飲］あるらし　（萬 3・338 大伴旅人）

＊参考：かくばかり恋ひつつあらずは高山の岩根しまきて死な**まし**［死奈麻死］ものを（萬 2・86 磐姫皇后）

3　「まし」の実例から

⑦　a 出でて行く道知らませば［知末世波］あらかじめ妹を留めむ関も置かましを［置末思乎］

（萬 3・468 大伴家持）

b 十月雨間も置かず降りにせばいづれの里の宿か借らまし［借益］　（萬 12・3214 作者未詳）

c 春来ればかりかへるなり白雲の道行きぶりにことやつてまし　（古今・春上 30 凡河内躬恒）

⑧　拙稿（2019）では、⑦a～c に共通して、複数の可能性のうちの一つとして事態を把握するという基礎構造が見られることを述べた。⑦a のような反実仮想は、既に実現してしまった可能性に対して実現しなかったほうの可能性を提示するものであり、⑦b・c は未だ実現していない複数の可能性のうちの一つを採ろうかとするものである。本発表では、この説をさらに厳密化し、「まし」の意味における「可能性」とは、理論上想定しうる可能的選択肢（alternative）という意であって、その選択肢が現実的に実現可能・選択可能（selectable）という意ではないことを附言したうえで、議論を進めたい[5]。

⑨　「まし」の意味と主語の人称

１人称：かからむとかねて知りせば大御舟泊てし泊まりに標結はましを［結麻思乎］

（萬 2・151 額田王）

２人称：「たしかに案内せさせてこそ、おりさせたまはましか」　（落窪物語・2）

３人称：国にあらば父取り見まし［刀利美麻之］家にあらば母取り見まし［刀利美麻志］

（萬 5・886 山上憶良）

→　二つの可能性の比較がなされることから結果的に、一方をよしとし他方を不可とする価値判断が生じうる（中西宇一 1996）。

⑩　理論上想定しうる可能的選択肢（alternative）を○で示すことにすると、「まし」の意味の基盤には、「○　○　○　○……」のように複数の可能性（反実仮想の場合は二つ）が想定される構造がある。

4　「べし」の実例から

⑪　山田孝雄（1908）をはじめ、「べし」はある事態が必（当）然であることを表すといわれる。可能的選択肢としての○に対して、現実的に実現可能・選択可能（selectable）な選択肢を●としよう。ある事態が必然的であると判断することは、その事態しか現実に実現しえない（＝その他の事態は決して現実化しえない）と判断することであるから、「べし」の意味は「●　○　○　○……」のように、複数考えられる可能的選択肢のうちの一つだけを選択可能とみなすものと考えられそうである。では、「べし」が必然性を表すことを実例に即して論証するにはどうすればよいか。

⑫　原因・理由の推量には「べし」が用いられない[6]（拙稿 2025）

a 東細布空ゆ引き越し遠みこそ［遠見社］目言離る**らめ**［踈良米］絶ゆと隔てや

（萬 11・2647 作者未詳　初句「東細布」は定訓なし）

---

[4] いわゆる「ずは」の語法が仮定条件句を構成することは、小柳智一（2004b）を参照。

[5] 「まし」が提示するのは「可能性としてのみ成立が考えられるような事態」（仁科明 2023）と言うこともできる（⑦a のような場合に、逆に現実化した側の可能性が「まし」によって示されることはないので、むしろ仁科論の言い方のほうが厳密ともいえる）。ただし、「べし」との関係を論じる場合や、後の⑲のように副詞論との接合を見通すにあたっては、可能的選択肢という見方で一貫させてみることがいくらか有益であり、一定の射程を持ちうるとも考えている。

[6] 中古には、「べし」が「連体なり」に後接して「～なるべし」となる場合に、原因・理由の推量を担うことがあるが、これは「連体なり」のスコープの問題であると考えられる（高山善行 2002）。

ｂ夢にだに見えむと我はほどけども相し思はねば［不相志思者］うべ見えざらむ［不所見有武］
（萬 4・772 大伴家持）

ｃ玉に貫く花橘をともしみし［等毛之美思］この我が里に来鳴かずあるらし［伎奈可受安流良之］
（萬 17・3984 大伴家持）

⑬　「べし」の意味と主語の人称[7]

1 人称：ますらをの聡き心も今はなし恋の奴に我は死ぬべし［可死］　（萬 12・2907 作者未詳）

2 人称：かくのみし相思はざらば天雲のよそにそ君はあるべくありける［可有々来］
（萬 13・3259 作者未詳）

3 人称：白露を取らば消ぬべし［可消］いざ子ども露に競ひて萩の遊びせむ　（萬 10・2173 作者未詳）

⑭　説明を要するかと思われる例について[8]

ａ三輪山を然も隠すか雲だにも心あらなも隠さふべしや［可苦佐布倍思哉］　（萬 1・18 額田王）

→　心がある者は三輪山を隠さないことを大前提として、雲に心があるという仮定に立つ場合に、雲は三輪山を隠さないことを演繹（必然的推論）する。推論によって導かれる事態と現実との乖離があることから、一方をよしとする適当・当為の含意も読みとられうる（中西宇一 1996）[9]。

ｂ通るべく［可融］雨はな降りそ我妹子が形見の衣我下に着り　（萬 7・1091 作者未詳）

ｃ朝霧のおほに相見し人故に命死ぬべく［可死］恋ひ渡るかも　（萬 4・599 笠女郎）

→　ｂを例にとると、「雨降る」ということを程度性の広がりのなかで捉え、「通る」（衣に染み通る）という一点に程度を規定する（「通るべく」は「雨降る」に対する逆述語）。「雨降る」ことの度合いを、その度合いから必然的に導かれる帰結を指標とすることで様相的に表現する。ｃも同様である。

５　「まし」と「べし」との関係　小括

⑮　「まし」と「べし」の意味における共通基盤と差異

「まし」：○　○　○　○……　　＊○は理論上で想定される可能的選択肢（alternative）

「べし」：●　○　○　○……　　＊●は現実的に実現可能・選択可能（selectable）な選択肢

→　両者は複数の可能的選択肢（○）の存在を前提とする点で、構造的な共通基盤を有しており、ゆえに一定の親和性がある。しかし「べし」は「まし」の意味構造を基盤としつつも（「まし」の意味構造を潜在的に含みつつも）、現実的に実現可能な一つの選択肢（●）の特定にまで進む点が異なる。

＊現実的な選択可能性を問題にするか否かという点で、両者は次元が異なるのであるが、複数性を許容するか否かという観点からすれば、理論上のレベルでそれを許容する「まし」と、現実的なレベルでそれを許容しない「べし」とで、両者は対照的であるという見方も可能である。

⑯　上記の差異を、ただちに未然形接続・終止形接続の差異として一般化することには慎重でありたいが、未然形接続の助動詞は未実現事態を表し、終止形接続の助動詞は実現を強く志向する事態を表す（小柳智一 2004a）といった先行説と整合する面がある。

⑰　未然形接続と終止形接続の助動詞の意味的差異については、従来、「まし」と「べし」との関係よりも「む」と「べし」との関係に注意が向けられてきた傾向がある[10]。そうした議論の意義を認めつつも、複数の可能的選択肢（○）を前提とするという構造においては、「む」ではなく「まし」と「べし」との方が、比較に堪えるだけの共通基盤を有するとも考えられよう。

⑱　可能性Ⅰ（実現せず）　p　　ゆえに　　q

可能性Ⅱ（実現済み）　not p　　ゆえに　　not q

---

[7] この観点は松尾捨治郎（1943）に始まる。２人称主語でも命令とは限らないことなど、有益な指摘が多い。

[8] 萬葉集の「べし」の全体を必然性という観点に基づいて説明する試みは、すでに拙稿（2023a）で行ったことがあり、一部重複があるけれども、川村大（1996）で必然性の意が読みとれないとされる例（⑭ｂはその一つ）に対しても、少なくとも上代語の例については発表者の理解を示しておく必要があるものと考え、ここで改めて言及することにした。

[9] すなわち発表者は、適当・当為といった意味も必然的推論から導かれうると考えている（拙稿 2023a）。ただし、「べし」の表す当為の意が「一般に～すべきものである」という普遍的な水準にまで広がっていること、また、「べし」が北原保雄（1981）の言う「客体的表現」に与ることをどう説明すべきかという問題については、発表者自身の考えをまとめるのになお時間を要する。とくに後者の問題に関連する論として、仁科明（2014）がある。

[10] たとえば尾上圭介（2001）では、「む」を「非現実事態仮構」、「べし」を「非現実事態承認」とする。

・「not p ゆえに not q」に対して「p ゆえに q」も一つの可能性である　→「p **ませ**ば q **まし**」[11]
・「not p」に対して「p」も一つの可能性であり、「p」が実現することで（「not q」が実現することはなくなり）必然的に「q」が導かれる　→「p **ませ**ば q **べし**」

⑲　補説：「まし」と「べし」とをこのように考えることの意義（射程）

a　［……］わくらばに［和久良婆尓］人とはあるを人並に我もなれるを［……］（萬 5・892 山上憶良）
b　人となることは難きをわくらばに［和久良婆尓］成れる我が身は［……］（萬 9・1785 笠金村歌集）
c　噫乎彼の父、邂逅〈太万左加尓〉兒有る家に次り、遂に是の子を得たり。　（霊異記上 9）

→　「わくらばに」「たまさかに」などの副詞は、後に述べられる事態が複数の可能的選択肢（alternative）のうちの一つであることを表すと見られ[12]、「○　○　○　○……」という基本構造において「まし」に通じるところがある。そのうえで「まし」が表せない領域（実現しなかったほうの可能性に対して、実現した側の可能性を述べる場合）を副詞が担っているとも言えて、助動詞と副詞とで様相的意味の表現を分担していることが見通される。「べし」と副詞との関係は漢文訓読の「再読よみ」に顕著であるが、今後「まし」をも巻き込んで、助動詞と副詞の様相論を考えていく可能性がひらかれる。

⑳　「べし」と「ましじ」とが対義的であることは通説といえるが、どのような意味で対義的なのか。「Aが必然である」ことの反対には、「Aが必然でない」ことと「Aでないことが必然である」こととの二種があるはずである。前者は、Aもそれ以外も可能的選択肢（alternative）として等しくあり得るということであるから、「まし」がこれに相当する。すると後者を「ましじ」が担うと考えられそうである[13]。

6　「ましじ」の実例から

㉑　「ましじ」の仮名表記例（全例）（宣命の小書部分も大書で示す）

○「かつ」＋「ましじ」

a 玉くしげ三諸の山のさなかづらさ寝ずはつひにありかつましじ［有勝麻之自[14]］　（萬 2・94 藤原鎌足）
b 麁玉の寸戸の林に汝を立てて行きかつましじ［由吉可都麻思自］寝を先立たね　（萬 14・3353 東歌）
c 明日香川水行き増さりいや日異に恋の増さらばありかつましじ［在勝申自[15]］　（萬 11・2702 作者未詳）
d 我が心ゆたにたゆたに浮き蓴辺にも沖にも寄りかつましじ［依勝益士］　（萬 7・1352 作者未詳）
e ［…］かくばかりもとなし恋ひば故郷にこの月ごろもありかつましじ［有勝益士］　（萬 4・723 大伴坂上郎女）
f 近くあれば見ねどもあるをいや遠に君がいまさばありかつましじ［有不勝自］　（萬 4・610 笠女郎）

○「敢ふ」「得」＋「ましじ」

g 多の遍重ねて勅りたまへども、「敢ふましじ［敢末之時］」と為て辞び申し、復、「受け賜はるべき［可受賜］物なりせば祖父仕へ奉りてまし、然有る物を、知れることも無く、怯く劣き押勝が え仕へ奉るべき［得仕奉倍岐］官には在らず、恐し」と申す　（26 詔 孝謙太上天皇 天平宝字四年）
h 王等は己が得ましじき［得麻之字岐］帝の尊き宝位を望み求め　（45 詔 称徳天皇 神護景雲三年）
i 朕は汝の志をば暫くの間も忘れ得ましじみ［忘得末之自美］なも悲しび賜ひ　（58 詔 光仁天皇 天応元年）

○「〜ゆ」＋「ましじ」

j 山越えて海渡るともおもしろき今城の中は忘らゆましじ［倭須羅庾麻旨珥］　（斉明紀 119）
k 堀江越え遠き里まで送り来る君が心は忘らゆましじ［和須良由麻之自[16]］　（萬 20・4482 藤原執弓）

---

[11] 前件の「ませ」は必須ではない（以下同様）。「p」に対して「not p」、「q」に対して「not q」と逐一標示していけば前後件ともに「まし」が現れるが、そもそも仮定条件ということ自体に、複数の可能性のうちの一つの場合を前提として導入するという意味が含まれているとも考えられ、前件は相対的に「まし」の存在意義が小さいといえるだろう。

[12] 「わくらばに」について、諸注は「偶然」の意で解することが多い（「希（マレナル）ことをは、わくらはといふ、たまさかとも」『能因歌枕』略本）が、井手至（1999）は阪倉篤義（1951）の「接尾語ラマ」の説を参照して動詞「わく」との関係を想定し、元来は「取りわけて」の意であったとする（『角川古語大辞典』はこれを反映する）。

[13] 小田勝（2015）が「まじ」の意味を「打消された事態に対する様相的・論理的推定」とし、現代語の「〜ないはずだ」に対応する（「〜はずがない」に対応するのではない）と述べていることは、この点にかかわる指摘として注意される。

[14] 西本願寺本をはじめとして多くの本に「麻之目」とあるが、元暦校本・類聚古集が「麻之自」と作ることによる（ただし元暦校本・類聚古集の訓は「ありかてましを」）。橘本進吉（1951）の考証を参照。

[15] 「申」は西本願寺本をはじめとする諸本に「甲」とあるが、嘉暦伝承本・類聚古集に「申」と作ることによる。「自」は諸本「目」であるが、橘本進吉（1951）によって「自」とする。

[16] 西本願寺本をはじめとして多くの本に「麻之目」とあるが、元暦校本が「麻之自」と作ることによる（ただし元暦校

〇その他

ｌ［……］寄るましじき［豫屢麻志士枳］川の隈々寄ろほひ行くかも末桑の木　　（仁徳紀 56）

㉒　ｇの「敢ふ」は堪える意の本動詞（「あへて［安倍而］漕ぎ出む」萬 3・388）、ｈの「得」は獲得する意の本動詞。ｉの下二段「忘る」は自然的な忘却であり（有坂秀世 1957）、「忘れ得」は「必ずしも積極的な意志を伴わない動作の実現」（渋谷勝己 1993）といえる[17]。ｊ・ｋの「忘らゆ」は、能動的な忘却である四段「忘る」に「ゆ」が付接することで下二段「忘る」とほぼ同義になり（有坂秀世 1957）、「忘却が自然に生起する」という自発の意であって、可能と捉える必然性はないことが指摘されている（吉井健 2024）。ａ～ｆの「かつ」は単独での使用例がないため、その意味は明証を欠くが、「敢ふ」と同様にもちこたえる意と見ることが通説である（橋本進吉 1951、吉井健 1999）。以上、さまざまな観点からして、可能の意を「ましじ」に前接する語に負わせることには無理が伴うものと思われる[18]。むしろ「ましじ」が、「～は実現不可能である」＝「～でないことが必然である」といった判断を表していると見るのが穏当であろう（ｌは、その判断が裏切られたということである）。

㉓　「べし」と「ましじ」とは、何らかの事態を必然だと捉える点では等しいと見られる。

「べし」　：●　○　○　○……　　＊○は理論上で想定される可能的選択肢（alternative）

「ましじ」：●　○　○　○……　　＊●は現実的に実現可能・選択可能（selectable）な選択肢

↓　可能的選択肢をＡとnotＡの二者に単純化して描き直すと……

「Ａ（す）べし」　：　Ａ（selectable）　　notＡ（unselectable）

「Ａ（す）ましじ」：　Ａ（unselectable）　　notＡ（selectable）

7　「まし」「べし」「ましじ」の関係　総括

㉔「まし」　：○　○　○　○……　――――　現実的に選択可能な選択肢を特定するか否かにより対立

「べし」　：●　○　○　○……　／

「ましじ」：●　○　○　○……　――――　●の内容の肯否により対立

↓　可能的選択肢をＡとnotＡの二者に単純化して描き直すと……

「Ａ（せ）まし」　：　Ａ　　notＡ　――――　理論的に見てともに成立余地あり

「Ａ（す）べし」　：　Ａ（selectable）　notＡ（unselectable）　＼

「Ａ（す）ましじ」：　Ａ（unselectable）　notＡ（selectable）　――――　現実的に見て一方しか成立余地なし

㉕　「べし」を中核とする形で三者が小さな体系をなすとも見られる。とくに「まし」と「ましじ」とに着目すると、「Ａ（せ）まし」は理論的に見てＡの成立余地があることを表すが、「Ａ（す）ましじ」は現実的に見てＡの成立余地はないことを表す。理論的・現実的という観点の差が未然形接続と終止形接続の差に対応するかと見られる一方で、Ａへの捉え方として両者は対蹠的であることが知られる。

㉖　一般に様相（modality）とは「事態の成立のあり方、あるいはそれに対する私たちの捉え方」（大西琢朗『論理学』昭和堂、2021 年）を意味し、可能性、必然性などの範疇がよく知られている。このような基本的・一般的な様相範疇を、「まし」「べし」「ましじ」をはじめとする古代日本語の助動詞が相当に厳密に表し分けていたことが示唆される[19]。

＊本発表で扱わなかった「む」「らし」などの助動詞も様相範疇の表し分けに関わっていると思われるけれども、「む」の意志の意味だけはこうした様相性の世界から突出した位置にあるものと考えている（意志が１人称主語しか許容しないということは、主語と認識主体とが未分化であることを意味し、⑨・⑬で見たような場合とは事情が大きく異なっている）。このあたりの全体像をいかにまとめるかは、発表者の今後の課題である。

本の訓は「わすらゆましも」）。橋本進吉（1951）の考証を参照。

[17] ｇの破線部の「え」（得）は意志的な動作の「達成・完遂」と解釈することができるものであり、上代には「彦星の川瀬を渡るさ小舟のえ［得］行きて泊てむ川津」（萬 10・2091）のように肯定形と呼応する例もある（渋谷勝己 2000）。

[18] 後藤和彦（1969）は、「ましじ」を「まし」の対義語としてとらえようとする興味深い論であるが、「ましじ」に前接する語には可能の意をもつものが多いという立場で議論が進められ、本発表とは異なる見解となっている。

[19] 様相性に着目する先行論として大鹿薫久（1999）があり、全体を通じて多くを参考にしているが、可能性ということの意味や、⑭で見た連用形「べく」についての理解が本発表とは異なっている。

㉗ 応用例：作品解釈との関わり（萬葉集巻２・４それぞれの巻頭）[20]

君が行き　日長くなりぬ　山尋ね　迎へか行かむ　待ちにか待たむ（萬２・85 磐姫皇后）

かくばかり　恋ひつつあらずは　高山の　岩根しまきて　死なましものを（萬２・86 磐姫皇后）

一日こそ　人も待ちよき　長き日を　如此所[21]待者　有不得勝（萬４・484 難波天皇妹）

使用テキスト……萬葉集は井手至・毛利正守『新校注萬葉集』（和泉書院）により、重要な異同および異説がある場合には注記した。日本書紀・日本霊異記は『日本古典文学大系』（岩波書店）による。続日本紀宣命は北川和秀『続日本紀宣命 校本・総索引』（吉川弘文館）による。古今和歌集・為忠家後度百首は『新編国歌大観』（角川書店）による。落窪物語は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。能因歌枕は『日本歌学大系』（風間書房）による。

参考文献

有坂秀世（1957）『国語音韻史の研究　増補新版』三省堂

井手至（1999）『遊文録　国語史篇二』和泉書院

大鹿薫久（1999）「「べし」の文法的意味について」『ことばとことのは　森重先生喜寿記念』和泉書院

大野透（1956）「ベシ・ベカラズ・マシジ・マジについて」『国語学』25

小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』和泉書院

尾上圭介（2001）『文法と意味Ⅰ』くろしお出版

春日和男（1958）「万葉集の文法」『日本文法講座４　解釈文法』明治書院

春日政治（1956）『古訓点の研究』風間書房

川村大（1996）「ベシの表す意味―肯定・否定・疑問の文環境の中で―」『山口明穂教授還暦記念国語学論集』明治書院

北原保雄（1981）『日本語助動詞の研究』大修館書店

後藤和彦（1969）「「ましじ」から「まじ」への推移」『萬葉』70

小松光三（1980）『国語助動詞意味論』笠間書院

小柳智一（2004a）「ベシ・ラシ・ラムの接続について」『國學院雑誌』105-2

小柳智一（2004b）「「ずは」の語法―仮定条件句―」『萬葉』189

阪倉篤義（1951）「接尾語ラマの考―書紀の古訓をめぐって―」『国文学』3

渋谷勝己（1993）「意味の縮小と文体差―可能の補助動詞エルをめぐって―」『近代語研究　第九集』武蔵野書院

渋谷勝己（2000）「副詞エの意味」『国語語彙史の研究　十九』和泉書院

杉崎一雄（1950）「助動詞「まし」の機能について」『日本文学論究』6

高山善行（2002）『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房

中西宇一（1996）『古代語文法論　助動詞篇』和泉書院

仁科明（2014）「「属性」と「統覚」とそのあいだ―中間的複語尾の位置づけ―」青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究２』ひつじ書房

仁科明（2023）「非現実領域の切り分け―「ず」「む」「まし」「じ」について―」『国文学研究』199

橋本四郎（1955）「上代の形容詞語尾ジについて」『萬葉』15

橋本進吉（1951）『上代語の研究』岩波書店

日比野希歩（2024）「『万葉集』巻四巻頭歌における「一日」と「長き日」」『第七十七回萬葉学会全国大会要項集』

古川大悟（2019）「助動詞マシの意味」『国語国文』88-1

古川大悟（2023a）「ベシの多義性の原理について―現代語ハズダとの対照から―」『花園大学日本文学論究』15

古川大悟（2023b）「「応久」の解釈―助動詞ベシの意味をめぐって―」『萬葉』235

古川大悟（2025）「古代日本語における推量の助動詞―原因理由句が推量の対象となる場合―」鉄野昌弘・奥村和美編『萬葉集研究　第四十四集』塙書房

松尾捨治郎（1943）『助動詞の研究』白帝社

山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館

山田孝雄（1913）『奈良朝文法史』宝文館

山崎馨（1992）『形容詞助動詞の研究』和泉書院

吉井健（1999）「上代における不可能を表す接尾動詞―アヘズ・カヌ・カツ＋否定辞―」『井手至先生古稀記念論文集　国語国文学藻』和泉書院

吉井健（2024）「可能・自発の広がり―『万葉集』を起点として―」『萬葉』237

吉田金彦（1973）『上代語助動詞の史的研究』明治書院

吉田金彦（1977）『国語意味史序説』明治書院

付記……本研究は JSPS 科研費 24K22502（研究活動スタート支援）の助成を受けた成果である。

[20] 巻２・４の巻頭が内容的に対応することは諸注に指摘がある。最近の研究としては日比野希歩（2024）に示唆を得た。

[21] 諸本の通り「所」だとすれば、この句は「かくし待たえば」「かく待たゆれば」などと訓まれるが、宣長『玉の小琴』が「所」を「耳」の誤りとする説を出しており、近年はそれに従い「かくのみ待たば」と訓まれることも多い。

ラレ構文「行はる」の変遷―主催・尊敬から非情主語受身へ―

志波彩子（名古屋大学）

1. はじめに

本研究は，受身・可能・自発・尊敬の動詞接尾辞として知られる-(r)are-（以下ラレ）について，近代における非情主語受身（非情の受身）の定着に，近世までのラレ構文の一種である主催構文（吉田 2019 の「主催用法」）が関わった可能性を考察する。

(1) 其後，大極殿ニシテ節会被行ケル日，（今昔物語集 22-1，吉田 2019: 178，下線志波）

(2) 此に依て、「朝庭の大なる賀也」とて、天下に大赦を行る。（今昔物語集 12-16）

主催構文は，桜井（1966）で「公尊敬」，尾上（2003）で「非人称催行」と呼ばれた用法にほぼ重なる。吉田（2019）は，この構文の主語は公の機関であることが多く，特定の個人が主語に立っても，その人が行為を直接に行う主体ではなく主催者であることを表すとし，「主催用法」と呼んだ。吉田（2019）では，この主催から通常の尊敬が拡張したと主張されており，中世にかけて，主催は尊敬用法に吸収されたとされる（同: 202）。

一方，明治初期の書き言葉には，次のようなラレ構文がかなりの割合で見られる(3)。

(3) 來客中に朝鮮人も見えたるが此には驚きたるなるべし右式畢て加藤總理祝辭を述られ次て學士一名總代として謝辭を爲し穗積陳重、フエノロサ、矢田部良吉三宅秀の諸氏代々演説あり終に福岡文部卿祝辭を朗讀せらる夫より別室に於て夜會を開き來客の方々を饗應せられたり・又同學に於て去廿一日地震學會を開かれユーキング團琢磨両氏の演説ありたるよし（〔雑報〕1882 年）

本研究は，これらの構文が中世の主催構文から拡張して発達し，近代において欧文の非情主語受身が直訳される際の土台（下地）になったのではないかという仮説を検証すべく，調査を行った。

2. 近世以前の非情主語受身

山田（1908）は，日本語の受身文には西洋語に訳せないものがあり，また西洋語には日本語に直訳できない受身文があることから，日本語の受身と西洋語の受身には，本質的な違いがあるという主旨のことを述べ，次のようなドイツ語は日本語に直訳できないとした。

Im Ofen wird Feuer gemacht.[1]　煖爐ノ中ニテ火ガオコサル。

Das Dach wird mit Ziegeln gedecht. [正しくは gedeckt：志波注] 屋根ハ煉化石ヲ以テ蓋ハル。[2]

Die Kreide wird aus der Erde gegraben. 白墨ハ地中ヨリ掘ラル。

（以上高橋氏文典ノ例）（山田 1908: 294）

その後，「非情主語受身（非情の受身）」をめぐるいくつかの議論（小杉 1979 等）を経て，川

[1] gemacht は machen（作る）の過去分詞。
[2] このドイツ語は，werden が受身の助動詞なので，これは「覆われている」という状態受身ではなく変化局面をとらえた受身であるため，このような訳になっている。

村（2013），岡部（2018）では，近世以前の（和文資料における）非情主語受身が，①叙景的場面を捉えるもの[3]と，②当該事態から影響を受ける人（潜在的受影者，益岡 1991）がいる受身，もしくは③擬人化に限られており，通常の中立受身（益岡 2000）はなかったとされている。

（4）御女の染殿后の御前に，さくらの花のかめにさゝれたるを御覧じて，（大鏡･上）＝①

（5）なほ，才をもととしてこそ，大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ。（源氏･少女）＝②

このように，一般的な了解として，通常の非情主語受身（中立受身）は近世以前には存在せず，近代以降の欧文直訳の影響で急速に日本語の中に定着したとされている（志波 2018 等）。しかしながら，上の状況は主に和文資料の実態であり，中立受身が使われる書き言葉文体でも，中立受身がなかったのかは明らかにされていない。また，近代以降に欧文直訳の影響で非情主語受身が広まり，定着したのだとしても，何の素地もないところに，どのようにラレ構文が欧文の受動文に対応するものになり得たのか，疑問が残る。

3. 近代初期の非情主語受身

『明六雑誌』（1874-75 年刊）のラレ動詞を CHJ で検索し[4]，語彙素で並べ替えると，上位 10 位は以下のようになっている。「行う」によるラレ動詞が「する」を抜いてもっとも多く使われていることが注目される（述べ 322，異なり 96）。

行う 97，為る 49，言う 13，思う 12，魅する 7，処する 6，知る 6，得る 5，居る 4，追う 4，奪う 4，許す 4（以上上位 10 動詞）

『東洋学芸』（1881 年刊），『国民之友』（1887 年刊）でも，「行う」は「為る」についで第 2 位の頻度である。そこで以下では，近代初期のラレ動詞として頻度の高い「行はる」を対象に中古からの構文タイプ（用法）の変遷を調査し，主催構文と近代の非情主語受身構文との関係を考察する。

4. 「行はる」の変遷

4.1 中古～院政期（34 例）

辛島（1991）によれば、ラレの尊敬は 9 世紀前半にはすでに古記録の中に用例が見られるという。ただし、朝廷が主催する公の行事を表すことが多いため、多くは一般尊敬ではなく主催を表していたと考えられる（吉田 2019）。

中古の用例は 6 例のみ。院政期の『今昔物語集』（以下今昔）に 27 例，『大鏡』に 1 例。これは，中古の作品がほとんど和文資料であるのに対し，今昔が和漢混交文であることによると考えられる。以下，「N-ϕ/主格/対格 行はる」の N を「対象」と呼んでいく。

対象が行事名詞であるものが 8 割近い。これを行事催行タイプと呼ぶ。

行事名詞：節会，仁王会，八講，普賢講，御読経，大饗，直物（なおしもの），徐目など

---

[3] 金水（1991）の叙景文。志波（2018）では状態受身と呼んだ。

[4] キーを「品詞：動詞」とし，後方共起 1 語を「語彙素読み：レル，ラレル」で検索した。

多くは，対象がゼロで現れるが，ヲ格標示のあるものも数例見つかる。主格標示はなし。

(6) 御慎みあるべきは、年のあたりたまふ殿ばらたちの御もとに、御物忌を書きて、一の所より配らしめたまふ。　おほよそ、かの寺よりはじまりて、年に二三度、会を行はる。正月八日より十四日まで、八省にて、奈良方の僧を講師とて、御斎会行はしむ。(大鏡)

(7) 今は昔、一条の摂政殿の住給ける桃薗は今の世尊寺也、其にて摂政、季の御読経行るる時に、山、三井寺、奈良の止事無き学生を撰て、請れたりければ、…(今昔 28-8)

4.2 中世（113 例）

引き続き行事催行タイプが多いが、行為名詞（大赦、勧賞、罪科、非常の赦など）が対象である例がかなり増加する。[人 罪に 行はる（処される）]という構文も現れ始める。これが「罪に／を 行はる」のみで表れる場合，有情主語受身なのか主催なのか判別がつかない。

(8) 八月七日、官の庁にて大仁王会おこなはる。これは将門追討の例とぞ聞えし。九月一日、純友追討の例とて、くろがねの鎧甲を伊勢大神宮へ参らせらる。(平家物語 1250 年)

(9) 中にも鶴が岡の若宮は、松柏みどりいよいよしげく、蘋蘩の供へ欠くることなし。陪従を定めて、四季の御神楽おこたらず、職掌に仰せて、八月の放生会を行はる。(東関紀行 1242 年)

(10) また、明日、院司・公卿・殿上人を催して、且は政を行はるべし。もし不参の輩においては、速やかに召し取りて、死罪に行はるべし。(保元物語 1223 年)

(11) 同廿三日、長田の父子、勧賞行はれ、忠致は壱岐守になる。景致は兵衛尉になる。(平治物語 1246 年)【有情受身か主催か曖昧】

中世までは，**[具体的時間 具体的場所ニテ 行事 行ハル]**のような，個別具体的な時間の中で起こる，アクチュアルな出来事を述べるものが多い(8)。対象の格表示は，ゼロ（φ）がもっとも多く 59 例，次いで対格（12 例），副助詞係助詞のついたものが 11 例，主格ははじめて次の１例が確認された。

(12) この邦綱卿は、大福長者にておはすれば、つくりいだされん事左右に及ばねども、いかんが国の費、民のわづらひなかるべき。まことにさしあたったる大事、大嘗会なんどのおこなはるべきをさしおいて、かかる世の乱に、遷都造内裏、すこしも相応せず。(平家物語 1250 年)

一方，中世後期の資料には，行事催行タイプとはやや趣の異なる例が見られる。

(13) 賞罰明らかなる時んば，将の威行わる．心．賞罰を憲法にする時は，大将の威勢が良う現わるる．(天草版金句集)

4.3 近世（CHJ に 26 例，国会図書館デジタルコレクションに 10 数例）

中世に見られた主催構文は少なくなり，具体的な時間に位置付けない，一般的事態を述べる例が増加する。特に，自然の摂理や世間の風習，風説が対象であるような例がかなり見られるようになる。動作主が不明瞭な主催構文の，時間や場所が具体的ではなくなり，時間を超えたポテンシャルな事態に用いられている。これらはもはや主催でも尊敬でもなく，行為者を背景化するためのラレ構文となっていると考えられる。対格標示の例はない。

(14) 陰陽の氣天にあつて、流行して滞らざれば、四時よく行はれ、百物よく生る。偏にし

て滞れば、流行の道ふさがり、冬あたたかに夏さむく、大風大雨の変ありて、凶害をなせり。人身にあつても亦しかり。(貝原益軒『養生訓』1712 年)

(15) 昔より邪僻妄誕にして、根もなき事のさかんに世に行れて、あなかしがましくきこゆるは、女郎花の一時とや申べき。(室鳩巣『駿台雑話』1732 年)

(16) 古學遂ニ廢レテ宋儒ノ説世ニ盛ニ行ハルヽコト今已ニ百年ナリ。是又一變ナリ。然ルニ薩摩ノ僧文之四書ヲ讀ミ羅山先生四書五經ヲ讀テヨリ後來コレニ倣フ者数十家。各其本アリテ世ニ行ハル。(太宰春台『和読要領』1728 年)

(17) 蘭学事始上之巻今時、世間に蘭学といふ事専ら行はれ、志を立つる人は篤く学び、無識なる者は漫りにこれを誇張す。(杉田玄白『蘭学事始』1815 年)

これらの例には，**受身構文の形式である［世に V ラレ］という形**が使われていることが注目される（(5)参照)。このタイプは，主催構文の特徴であった「行為者を背景化して事態の実現を前景化する」という機能を継承しつつ，特定の時間と場所が一般化され，［世に V-ラレ］という受身の形式と融合した構文と考えられる。受身の形式が取り入れられた要因として，有情主語受身との曖昧性が生じたことも影響したのだろう。

このほか，近世に刊行された歴史書の中に，行事催行タイプが見られるが，これは擬古文的な漢字仮名交じり文体（和漢混交文）と考えられる。対象の対格標示も見られる。

(18) 天長十一年に改元ありて承和元年とぞ申ける。其正月七日に豊楽殿にて初て白馬の節会を行はる。是より永世恒例となれり。(好華堂野亭・岡田群玉堂他『扶桑皇統記図会 後編 4』江戸後期)

CHJ の用例は，ジャンルは 1 例を除いて随筆と分類されたもので，人情本や洒落本には例がない。中世の漢字仮名交じり文体を継承した書き言葉文体の中で発達した構文と考えられる。

4.4 近代

近代初期の『明六雑誌』では，近世に見られたポテンシャルな風習，風説，自然の摂理を表す例がほとんどで，中でも対象が宗教や学問，制度などの例が増える。対象は，97 例の中でゼロが 54 例と最も多いが，主格が 15 例，対格が 3 例となり，主格と対格の割合が逆転する。

(19) 竊かに聞く往日朝鮮を撃つの議を主張せし人は多くは此諸君子なりと此議若し行はれなば今此公議輿論壅塞の弊は無る可しと云ふとも一概に之を信じ得可からざる也（森有礼『民撰議院設立建言書之評』)

『明六雑誌』には行事催行タイプは見られず，すべてこの［慣習・制度 行はる］というタイプである。このタイプはその後別の動詞に取って代わられ，「行う」の用法としては廃れてしまったようである。しかしながら，行為者を背景化して事態の実現を述べるこうした「行はる」の使用は，欧文の非情主語受身が直訳される際の土台になったものと考えられる。

一方，『読売新聞』には行事催行タイプが見られる。全 51 例の中で，1800 年代の例は 7 例のみであり，その中に次のような，対象が対格標示される例が 3 例ある。

(20) ○八王子驛の生糸繭織物共進會は昨日野村神奈川縣令其ほか属官數名が出張して褒賞授與式を行はれました（読売新聞 1881 年)

(21) ○造り藤に煙火來る九日は工藝共進會にて褒賞授與式を行はるるに付上野公園近傍

の飲食店及び有志者が申合せ其前日即ち八日より向一週間里俗袴越と稱する所に長サ十二間巾一間半高サ一丈五尺の柵を設け…（読売新聞 1887 年）

(22) ○舊教部省よりのお達しで諸國神佛の出開帳を禁ぜられて有たが今度夫を差許されて上野の下寺跡を開帳場と定められるとの風説（読売新聞 1881 年）

このような対象対格標示の行事催行タイプは，近世においてすでに擬古文的であったと考えられ，近代のこの例も格式を持たせようとした結果の擬古文的な使用ではないかと見られる。1900 年代に入ると，すべてゼロもしくは主格標示（係助詞も含む）となる。そして，現代語では，新聞ジャンルではこの行事催行タイプが圧倒的多数を占める受身文タイプとなっている（志波（2015））。欧文翻訳の影響で対象の主格標示が定着したものと考えられるが，その土台となったのは，中古からの和漢混交文の中で広く用いられていた主催構文であったと考えられる。

4.5 その他の動詞

4.5.1 許さる

「許さる」によるラレ構文の大半は有情受身で，［人 行為 許さる］という持ち主の受身構造を持つ構文であるが，対象の標示がゼロや係助詞・副助詞であると主格か対格かが曖昧になる。こうした持ち主の受身構造が多く使われたことも，近代以降にラレが非情主語受身の構文に用いられる土台となったと考えられる。

(23) 昔、我も人も若やかに罪ゆるされたりし世にだに、故宮などの心寄せ思したりしを、なほあるまじく恥づかしと思ひきこえてやみにしを、…（源氏・朝顔）

(24) 居而るに、此の守賤ぬ人の流にては有けれども、何なる事にてか有けむ、此の守の祖も此の守も、蔵人にも成ず、殿上も許れざりければ、内辺の事を伝ても聞ず、況むや見る事は無かりけり。（今昔 28-4）

4.5.2 用いらる

(25) 賀茂忠行道伝子保憲語第十五　今は昔、賀茂の忠行と云陰陽師有けり。道に付て古にも恥ぢず、当時も肩を並ぶ者無し。然れば、公私に此を止事無き者に用られける。（今昔 24-15）

「用いらる」は古代語では有情主語受身に使われたが，上のような主催の例も見られ，近代以降は頻度が増えて非情物対象にも拡張したものと考えられる。中古から「用いられる」は個別具体的な出来事よりも時間を超えた事態について使われることが多かった。時間を超えた事態では行為者も漠然としていて背景化されていた。こうした特徴は，行為者を背景化して事態が実現していることを述べる近代以降の非情主語受身に転換されやすかったと考えられる。

4.5.3　定めらる

「定めらる」も「行はる」に似て中古から主催構文の例が多く見られる動詞である。対格標示される例もあるが，それよりも［N-と 定めらる］というパターンが多い。対象が係助詞で標示されると，主催構文であるが，行為者が背景化されて事態実現に焦点を当てて述べている点で，非情主語受身へと読み替えられる性質を十分に備えている。

(26) 六月九日、新都の事はじめ、八月十日上棟、十一月十三日遷幸とさだめらる。（平家物語）

(27) さる程に、筑紫には内裏つくるべきよし沙汰ありしかども、いまだ都も定められず。主上は岩戸の少卿大蔵の種直が宿所にわたらせ給ふ。（平家物語）

5　ラレ構文の発達（ネットワーク）

話し言葉的　　る・らる　　被　　書き言葉的

	和文	和化漢文	漢文訓読
上代	自発，不可能，有情受身	有情受身	有情受身
中古	自発，有情受身，可能	有情受身，主催，尊敬	
		漢字仮名交じり文体（和漢混交）	
院政期	有情受身，可能，自発	有情受身，可能，主催，尊敬	
	※「被」が表していた主催と尊敬（と被害的受身）がラレの構文として融合していく。自発は肯定可能の勢力に圧されて縮小する。		
中世	有情受身，可能，自発，尊敬	有情受身，可能，主催，尊敬	
近世	有情受身，（可能接辞-e-），尊敬，自発	有情受身，可能，尊敬，「世に行はる」	
		欧文直訳体	
近代	有情受身，尊敬，（可能接辞-e-）	可能，　自発　非情主語受身	

6　まとめ

以上，本発表では，中古から中世にかけて用いられていた主催構文が近代以降の非情主語受身の土台になった可能性を考察した。「行はる」による主催構文の典型である行事催行タイプは，近世には擬古文的になっていたが，明治初期に再び書き言葉の中で復活し，その後の非情主語受身の土台となったと考えられる。また，近世に増加したポテンシャルな事態を述べる例では時間と場所が一般化されることで行為者も一般化され，［世に Ｖ ラレ］という受身の形式と融合して，非情主語受身へとつながったと考えられる。さらに持ち主の受身構造もまた，ラレが非情主語受身の構文として採用される土台になったと見られることを述べた。

【参照文献】穐田定樹（2008）『古記録資料の敬語の研究』清文堂出版／岡部嘉幸（2018））「「非情の受身」 のバリエーション：近代以前の和文資料における」岡崎ほか（編）／岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太（編）（2018）『バリエーションの中の日本語史』くろしお出版／尾上圭介（2003）「ラレル文の多義性と主語」『月間言語』32-4／辛島美絵（1991）「古文書における「る・らる（被）」の特色」『語文研究』71／川村大（2013）『ラル形述語文の研究』（くろしお出版）／桜井光昭（1966）『今昔物語集の語法の研究』明治書院／志波彩子（2015）『現代日本語の受身構文タイプとテクストジャンル』和泉書院／志波彩子（2018）「ラル構文によるヴォイス体系―非情の受身の類型が限られていた理由をめぐって―」岡崎ほか（編）／譚斯琪（2021）『近代日本語における非情主語受身の変遷に関する一考察』名古屋大学大学院人文学研究科修士論文./堀畑正臣（1991）「「以～被～」（モ〔ッ〕テ～ラル）の文型をめぐって」『国語学』167;1-14./益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版／吉田永弘（2019）『転換する日本語文法』和泉書院

『清議報』日本語翻訳記事から見た「国民」「人民」の中国への伝播

古谷　創（明治大学大学院）

１．はじめに

19 世紀末～20 世紀初頭は、日本語の語彙が翻訳を通じて中国語の語彙に大きな影響を与えた。その多くは西洋由来の近代概念を翻訳した漢字語であり、幕末から明治初期に翻訳された政治・法律・経済関連の語彙が含まれる（孫建軍、2015 など）。これらの語彙は両国の国民国家建設に重要な役割を果たしたが、その過程に不可欠な、ナショナリズム関連の語彙の研究は手薄である。また日本語借用語の中国への受容を扱った研究には、沈国威（2017）や陳力衛（2019）などがある。これらは、『清議報』（1898-1901）という、横浜で刊行された中国語雑誌が重要な経路となったことを明らかにしたが、ナショナリズム関連の語彙は主要な研究対象とならなかった。さらに、『清議報』は日本語からの翻訳記事を多数掲載しているが、その原典に当たらず、訳出された中国語の記事から日本語の受容が論じられてきたという、方法上の問題が存在している。そこで本稿では、ナショナリズムに関連する語彙の例として、「国民」「人民」を取り上げる。そして、同誌に掲載された翻訳記事（中国語）と原典の日本語雑誌記事を収録した対訳コーパスを構築し、翻訳前後におけるこの 2 語の対応状況を調査・分析するという方法をとる。これにより、その伝播[1]の実態を明らかにすることを目指す。

２．先行研究と課題

近代国家は、「領土」（を含む領域）・「国民」・「主権」の三要素を持つことが知られている（G.イェリネック）。これらの語の普及については、国家の構成員を指す「国民」を例に挙げると、「人民」「国民」「臣民」の普及の時期と過程を取り上げた京極（1993）がある。京極は、近代語の「国民」「人民」は、それぞれ「nation」「people」の訳語に充てられるが、明治前期には明確な使い分けがなく、基本的に共通の意味内容を持っていたと指摘する。使用状況については、明治 20 年頃を境に「国民」の使用数が増加し、それまで多用されていた「人民」を凌駕するようになった。さらに、「国民」使用数の増加の要因は、陸羯南・徳富蘇峰らの国家主義者が「国民」および「国民」を含む熟語を盛んに使用したからであるとする。ただし、ここでの 2 語の意味の違いについては議論を深めていない。関連して齊藤・坪井（2019）は、陸羯南の翻訳書を分析対象に、2 語の使い分けについて、「物理的な境界を持つ一体性と同時に、精神的な一体性を持つ結合体」を「国民」、それに到達していないのが「人民」と考えていたとした。

『清議報』は中国にナショナリズムを紹介した先駆的な雑誌であり、こうした国家主義者の言論とは親和性が高く、実際の交流や影響を論じた研究も多い（狭間編、1999 など）。しかし、日本語から中国語への翻訳を通じてナショナリズムに関連する語彙がどのように継承され、あるいは変容したのかは、十分に明らかになってはいない。

[1] 本稿の「伝播」（diffusion）は、平野健一郎（2000）の、外来文化要素が借用される過程の始めに起きる、「文化要素の文化間の移動」（37 頁）という定義に従う。語彙の伝播に即して言えば、日本語から中国語への最初期の翻訳が相当する。

そこで本稿では、「国民」と「人民」の意味の違いが中国ナショナリズムの生成にどう作用したのか、という目的のもとで、以下の 3 点について論じる。第一に、『清議報』の翻訳記事（中国語）の原典となった、日本語記事における 2 語の意味の違いについてである。第二に、翻訳の過程で、2 語にどのような意味の変化が生じたのか、という点である。第三に、その変化が中国人の国家意識の生成に与えた作用についてである。

３．研究方法

本稿では、日本語の語彙が中国に導入された最初期の重要な経路という理由から、調査対象に『清議報』を選択する。特に、同誌に掲載された翻訳記事と原典の日本語記事を並べ厳密に対照することで、伝播の実態がより深く把握できると考える。

まず、『清議報』に掲載された翻訳記事の原典となった、日本語雑誌記事を特定した。その上で、両者を収録した対訳コーパスを構築し、翻訳前後における「国民」「人民」の対応状況を調査・分析する方法をとった。対訳コーパスに格納した原典の日本語記事は 120 本・約 44 万字であり、中国語の翻訳記事は 157 本・23 万字である。

これらを全文検索すると、「国民」は日本語 264 件・中国語 169 件、「人民」は日本語 156 件・中国語 140 件という結果を得た。このうち「国民」には、「両国民」「各国民」のように、「〇国の民」か「〇の国民」か、判別困難な例が日本語に 24 件、中国語に 9 件含まれる。これらを除く日本語 240 件と中国語 160 件で対応付けを行った。

対応付けは二段階に分けて行った。第一に、日本語の原文と中国語の訳文とで、文節が一致するものと一致しないものを区別した。『清議報』の記事では文節ごとに「。」が付けられており、文節の位置が同じと判断する際の基準に採用した。その際、意味の違いは原則として考慮しなかった。ただし、文節全体の意味が変わり、翻訳なのか翻訳者の評語なのか判別できないものは、文節が一致しないものと判断した。この結果、①対応外（A）、②対応外（B）、③タイトルの重複、④特定の語の語釈、⑤翻訳者の評語の 5 種類を文節不一致と判定した（表 1）。なお④と⑤の一部の例については、翻訳者が考える「国民」「人民」の意味の違いを知る上で重要なため、**５．考察**で検討する。

表１　文節不一致の例（①～⑤）

類型	国民（日）	人民（日）	国民（中）	人民（中）	備考
対応付け可能な例	240	156	160	140	
①対応外（A）	55	35			訳出の省略
②対応外（B）	11	0	4	1	文節全体の意味が変わり、対応関係が判定困難
③タイトルの重複			1	0	日本語記事を二分割して翻訳した際のタイトル
④特定の語の語釈			3	0	
⑤翻訳者の評語			7	6	
文節が一致する例	174	121	145	133	

第二に、文節が一致する例の中で語の対応関係を分類した。分類の方法は、田中・山元（2014）を参照し、下記のように同語対応（A）・異語対応（B）・非対応（C）の三つに分類した。ここでも、意味の違いは原則として考慮しなかった。

A-日）中等以下の<u>人民</u>が、帝王、或は政府若しくは貴族の壓制する所となりて、

加藤弘之「十九世紀に於ける思想の変遷」『太陽』6-8（1900.6.15）

A-中）中等以下<u>人民</u>。皆困苦於君主貴族壓制之下。

日本加藤弘之「十九世紀思想変遷論」『清議報』52（1900.7.26）

B-日）故に露國は此等の**人種**を煽動して土耳格に對し獨立せしめ、

有賀長雄「第十九世紀外交通觀」『外交時報』3-24（1900.1.10）

B-中）故俄人煽動其**人民**。使之抗土獨立。

「第十九世紀外交一覽（接前冊第三國民主義之時代）」『清議報』41（1900.4.10）

C-日）古き事を言へは印度に於てもマニュー出でたる以來平和に時局を結ふと云ふ考出で　　寺尾亨「萬國平和同盟説ノ沿革」『國家学会雑誌』144（1899.2.20）

C-中）昔在印度。抹紐胤出後**人民**始知結和局。

「萬國平和同盟説源流考」『清議報』12（1899.4.20）

用例 A は文節が一致し、日本語の「人民」が中国語でも「人民」であるため、同語対応とした。用例 B は日本語の「人種」が「人民」に変わっているため、異語対応とした。用例 C は中国語の「人民」に対応する日本語の原語がない、もしくは特定できないため、非対応と判定した。

４．調査結果

4.1　全体の傾向

対応の分類結果は表 2・表 3 の通りである。表 2 は日本語の「国民」「人民」が、中国語ではどう訳出されたかを示す。「国民」は同語対応が 7 割を超えており、基本的にはそのまま訳出したことが分かる。一方の「人民」は異語対応が 2 割を超えており、日本語の「人民」を別の語に訳出した場合が少なくないことが分かる。表 2 の 2 語の異語対応を比較する限りでは、中国語では「人民」の使用をやや避けているように見える。

表2　「国民」「人民」の対応（日→中）

	原語(日) / 訳語(中)	国民	人民	計
対応	同語	128 (73.6%)	78 (64.5%)	206
	異語	24 (13.8%)	28 (23.1%)	52
	非	22 (12.6%)	15 (12.4%)	37
計		174 (100.0%)	121 (100.0%)	295

表3　「国民」「人民」の対応（中→日）

	訳語(中) / 原語(日)	国民	人民	計
対応	同語	128 (88.3%)	78 (58.6%)	206
	異語	12 (8.3%)	46 (34.6%)	58
	非	5 (3.4%)	9 (6.8%)	14
計		145 (100.0%)	133 (100.0%)	278

表 3 は中国語に訳出された「国民」「人民」が、日本語の原語では何であったかを示す。まず目立つのが、「人民」の異語対応の数の多さである。これは、日本語の他の語を中国語では「人民」に翻訳した例が 46 件あることを意味する。そのために、翻訳記事に登場する「国民」と「人民」は 145 対 133 と、数の上でほぼ同等になった。また表 2 でも、「国民」は同語対応の比率が高く異語対応の比率が低いのに対し、「人民」はその逆であることは観察できるが、その違いがさらに大きくなっている。表 3 で特に対照的なのが、2 語の異語対応に見える比率の差である。「国民」では 1 割を切っており、ごく限られた場合でしか他の語を「国民」に置き換えなかったことを意味する。一方の「人民」は 3 分の 1 を超えており、むしろ積極的に他の語を「人民」に置き換えたように見える。つまり、表 2 と表 3 とで一見矛盾する結果が出ている。

4.2 「人民」に対応する異語

この結果の意味をさらに検討するため、「人民」について「異語対応」とした場合の、他方の言語で対応する語（以下、「人民」の異語）を表 4 にまとめた。上段の〔〕は用例の合計数、下段の（）内の数字は個別の用例数、【】は原文の熟語を表す。

表4 「人民」の異語

日本語「人民」⇒中国語「X」〔28〕	日本語「X」⇒中国語「人民」〔46〕
人（7）、民（4）、普天衆民、万民、国民、者、民間（各2）、下民、民人、或（あるひと）、天下、衆民雑族【種々雑多なる人民】、居是邦者【其国の人民】、人智【人民の知識】（各1）	国民、民人（各8）、人（5）、住民（3）、臣民、民（各2）、万民、兆民、島民、人々、人等、人種、人口、人士、仏人、内地人、一個人、個人、人文、皆、国内、社会、民生、国家公共利益（各1）

左列から見ると、「人」「民」など類義の一字漢語が多いことが分かる。訳出後の表現を見ると、「羅馬之民」（原文：羅馬の人民）や「徳人（ドイツ）」（同：獨逸人民）などがある。これは一つには「〇〇之民」「〇人」という古典中国語の定型的な表現を採用したこと、一つには「人」と「民」が持つ「人々」という意味の重複を避けたことが考えられる。

右列では、「国民」「住民」「臣民」のような類義の二字漢語が目立つ。ここから「人民」の異語の数が増えた理由は、「住民」「万民」など、「ある範囲のあらゆる人々」を意味する類義語が、翻訳を経て「人民」に集約されたためだと言える。なお、「民人」は「国民」と並び最も多いが、1 本の記事の中で「古代中国の人民」を表す語として出現する[2]。

次に、原語の「人民」とは異なる語を取り入れたことで、中国語の「人民」の意味が、日本語からどう変わったかを整理する。原文を観察する限り、「人民」は「ある範囲のあらゆる人々」以外の特徴に乏しく、時間や地域に関わりなく用いられる。ただし、用例 A に見られるように、社会の上層部の人々を特に指す語ではない。

まず指摘できるのは、翻訳によって中国を含む現在（19 世紀末当時）の非欧米圏の人々（「国民」「人」「住民」など）が、「人民」に置き換えられたということである。一方、日本を含む欧米圏の人々を対象とする「人民」については、過去の「人民」は踏襲しつつ、現在については「人」「国民」などに置き換え、「人民」を使うことが少ない。つまり、過去・現在の非欧米圏の人々と、過去の欧米圏の人々に対して「人民」を使う傾向が顕著である。また、『清議報』ではその中間の位置付けである帝政ロシアの事例では、「籠絡其人民」（原文：民を愚にする主義）とあり、ロシア・ドイツの影響下にある中国北部の事例では「俄德率此有爲之人民」（同：獨露二國が此有爲の住民を率ゐて）とあるなど、「統治や支配の客体」のイメージが強い例も見られる。さらに、用例 B のような置き換えの結果、「人民」には「列強に翻弄される人々」という負の意味も加わっている。

4.3 「国民」に対応する異語

一方の「国民」は、日本語の原文では 19 世紀以降の欧米圏の人々を指すことが多いが、「支那国民」「印度国民」など非欧米圏の場合にも用いられる。「人民」と比較すれば、「ある範囲」に国家という限定が加わるが、「あらゆる人々」という意味は共通する。中

[2] 久保天随「支那上古の宗教的觀念」『東亞學會雜誌』第 1 編第 10 号、1897 年 11 月。翻訳後のタイトルは、「支那上古之宗教的觀念」『清議報』第 100 冊、1901 年 12 月 21 日。

国語の「国民」は、範囲がさらに限定され、19 世紀以降の欧米圏の人々を表す傾向が強く、それ以外の人々は「人民」など他の語に訳出している。表 5 は、「国民」について「異語対応」とした場合の、他方の言語で対応する語（以下、「国民」の異語）の一覧である。

表5　「国民」の異語

日本語「国民」⇒中国語「X」〔24〕	日本語「X」⇒中国語「国民」〔12〕
人民、民（各8）、国中（2）、民庶、衆民、漢人、国家、日本【我国民】、之（各1）	各国民、英仏人、清国民、英国民、其国人民、多数の人民、各事業家、公務に服して十分に其職分を尽し得る者、其国に存在せる各階級各種族各職業、多数の黎民、小人共、国家（各1）

これを見ると、左列では「国民」を「人民」「民」に改めた例が目立つ。用例を見ると、「四百兆人民」（原文：四億有餘の國民）のように中国の事例もあれば、「人民公共利益」（同：國民公共利益）のように列強に使われるもの、「世界各國之民」（同：世界何れの國民）のように世界中の人々を指すものもある。置き換えられた日本語に共通するのは、「国民」に「あらゆる人々」という側面があることである。この点から、翻訳者は翻訳によって、「国民」から「あらゆる人々」という意味を薄めようとした可能性がある。

右列では少ないながら、「清国民」「英国民」から国名を取った例や、「英仏人」のようなヨーロッパ人を指す例のほか、「各事業家」「公務に服して十分に其職分を尽し得る者」のような、社会の上層部の人々に限定される意訳も見られる。なお、その下の「其国に存在せる各階級各種族各職業」は参政権を持ち得る人々を、「小人共」はロシア皇帝の側近たちを指す。この点からも、「国民」は「あらゆる人々」ではなく、ある国家や社会の中で比較的優位に立つ人々を意味する傾向が強まっていると言える。

５．考察

前節では、日本語の原文では 2 語に大きな意味の違いはなく、「あらゆる人々」という共通の意味を持つこと、中国語の訳文では「国民」の範囲が日本を含む欧米圏の人々や、国家や社会の上層部の人々に限定される傾向が強まったことを指摘した。また「はじめに」で述べたように、「国民」を「人民」の上位に置く使い分けは、『清議報』の執筆陣とも関係が近い国家主義者によっても行われていた。暫定的に整理すると、明治期の日本語には 2 語をあまり区別しない一般的（に近い）な用法と、明確に使い分ける国家主義者の用法があり、『清議報』の翻訳では後者（に近い）の用法が採用されたことになる。

以下では翻訳で示された「国民」と「人民」の使い分けが、どのような認識や方針で行われたか、そしてそれが中国ナショナリズムにどのように作用したのか述べる。用例 1 の「各国民」は、対応付けの対象からは外したが、訳出後の「人類之稍靈者」（人類の中でもいくらか知能のすぐれた者）から見ても、各「国民」のことだと解釈できる。

1-日）是は人類生存競爭の結果、<u>各國民</u>皆な優勝劣敗の理を知るに由る、

木村浩吉「十九世紀に於ける海軍の進歩」『太陽』6-8（1900.6.15）

1-中）是由於生存競爭優勝劣敗之理。<u>人類之稍靈者</u>。皆已深入其腦中耳。

「十九世紀海軍之進歩」『清議報』50（1900.7.7）

使われている術語からも、現在の欧米（場合によって日本も）を上位に置く社会進化論の影響が明確であり、「国民」とは優勝劣敗の「理」（原理）を理解できる者である。

また用例 2 の評語のように、『清議報』の翻訳者は、中国には「人民」がいるだけで、国家思想のある「国民」は存在しないという現状認識を持っていた。

2-中）蓋中國三千年來。人民思想不得自由。言論不得自由。行爲不得自由。皆爲古説所困。困之既久。無進歩之思想。無圖外之思想。人民祇知自了其身。由是國家思想。政治思想。亦泯然滅絶矣。

【日本語訳】思うに中国は三千年来、人民に思想の自由がなく、言論の自由もなく、行動の自由もなかった。みな古い学説に苦しめられ、それが長く続いて、進歩の思想も進取の思想もなくなってしまい、人民は自分さえ良ければいいと考えるようになった。こうして国家思想も政治思想も、完全に滅び去ってしまったのだ。

「論保存中國之策」『清議報』26（1899.9.5）

2 語の使い分けと、中国には「国民」がいないという現状認識は、国民形成を中国の課題に位置付ける方向に作用したと評価できる。『清議報』の翻訳者は、中国にナショナリズムを定着させるには、一人一人に「国民」意識を持たせる必要があると理解した。それゆえ、「国民」とは何であるかを明確にするために、日本語の「国民」から「あらゆる人々」という意味を捨象し、さらには単なる統治の客体という受動的な「人民」を前面に出した。つまり「人民」は、「国民」の反面教師の役割を担わされたと言える。

６．おわりに

以上の議論から次の結論を示す。第一に、『清議報』翻訳記事の原典の日本語からは、「国民」と「人民」に明確な使い分けは観察されず、「あらゆる人々」という意味上の共通点があった。第二に、中国語の翻訳では、原文にある「国民」を別の語に置き換えたり、他の語を「国民」に置き換えたりすることで、「国民」から「あらゆる人々」の意味を弱め、国家や社会の上層部の人々に限定する傾向を強めた。反対に「人民」は、「あらゆる人々」の意味を残しつつ、中国を含む非欧米圏の人々を対象とすることが増えた結果、列強の支配の客体という受動的な側面を強めた。第三に、翻訳が示す 2 語の明確な使い分けは、当時の中国人に「国民」概念の重要性を認識させるためであり、「国民」「人民」の伝播は、国民形成を中国の喫緊の課題に位置付ける方向に作用したと考えられる。

ただし、本稿で言及できた調査結果は、異語対応の一部の事例にとどまる。どのような場合に同語となるか、異語となるか、あるいは訳出を避けるかという違いも重要だが、ここでは議論を深められなかった。これらについても引き続き調査・分析を進めたい。

参考文献

・京極興一（1993）「「人民」「国民」「臣民」の消長」松村明先生喜寿記念会編『国語研究』明治書院。
・齊藤美野・坪井睦子（2019）「陸羯南『主權原論』から探る「国民」概念の形成」『通訳翻訳研究』19 号。
・沈国威（2017）『近代日中語彙交流史』（改訂新版新装版）笠間書院。
・孫建軍（2015）『近代日本語の起源――幕末明治初期につくられた新漢語』早稲田大学出版部。
・田中牧郎・山元啓史（2014）「『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の同文説話における語の対応――語の文体的価値の記述――」『日本語の研究』第 10 巻 1 号。
・陳力衛（2019）『近代知の翻訳と伝播――漢語を媒介に』三省堂。
・狭間直樹編（1999）『共同研究　梁啓超　西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房。
・平野健一郎（2000）『国際文化論』東京大学出版会。

漢語「鉛直」の成立と展開

奥山（おくやま）　光（ひかる）（東京大学学生、日本学術振興会 DC）

1. はじめに

本発表では、漢語「鉛直」について、次の問題を明らかにする。

Ⅰ「鉛直」はいつどのように成立したのか
Ⅱ「鉛直」「垂直」はどのように使い分けられてきたのか

Ⅰについて、櫻井 2013 では、「鉛直」が『英和対訳袖珍辞書』（以下『袖珍』と略す）の初版（1862 年）に見られることが指摘されており、さらに遡る可能性が示唆されている（第 3 節）。本発表では、『海上砲術全書』の用例を指摘し、それを元に「鉛直」の成立事情について検討する（第 4 節）。Ⅱについて、現代の学校教育において「鉛直」は物理・地学で〈重力の方向〉を表す用語であり、数学で単に〈90 度で交わること〉を表す「垂直」よりも意味が狭い。また、生物の「垂直分布」や体育の「垂直跳び」では、〈重力の方向〉の意味でも「鉛直」を用いない。本発表では、このような非対称性が生じる要因について考察する（第 5・6 節）。

2. 「鉛直」の二つの意味

『日本国語大辞典』（第二版）における「鉛直」の語釈は、次のようになっている。

> ①鉛直線の示す方向と等しいこと。また、そのさま。
> ②ある直線が、ある直線・平面に対して垂直であること。また、そのさま。

①の語釈にある「鉛直線」を引くと、次のような語釈がある。

> 物理学で、重力の方向を示す直線。すなわち、物体をつりさげた糸の示す方向の直線。水平面と垂直をなす直線。

また、「垂直」の語釈は次の通りである。

> ①まっすぐに垂れていること。また、そのさま。
> ②水平面・地平面に対して直角の方向を示すこと。また、そのさま。物体を糸でつった時、糸が示す線の方向。重力の方向。鉛直。
> ③数学では、❶二つの直線が互いに九〇度で交わること、❷一つの直線が一つの平面と交わり、その平面に含まれその交点を通るすべての直線と九〇度で交わること、❸二つの平面が交わり、一方が他方と九〇度で交わる直線を含むこと、をいう。

このように、「鉛直」「垂直」は意味が重なり合っているようである。本発表では、「鉛直」の二つの意味を便宜上〈重力〉〈90 度〉と表記し、「垂直」等の類義語にもこれを流用する。

3. 『英和対訳袖珍辞書』の記述

櫻井 2013 では、『袖珍』初版（1862 年）に見られる訳語のうち、「『袖珍』初版の用例が『日本国語大辞典』第二版での初出用例より早い訳語の例」の中に「鉛直」が挙げられている。この一群について櫻井氏は次のように述べている。

> いずれも『和蘭字彙』には見られず、『袖珍』初版が独自に取り入れた訳語と見られるが、今後蘭学資料等における用例採取が進めば、大半の訳語は『袖珍』初版以前から使用されていたことが確認されるのではないかと想像される。（櫻井 2013：23）

表 1 は、杉本［編］1981 によって『袖珍』初版に見られる「鉛直」を洗い出し、それぞれの英語について、『袖珍』の主要な典拠である Picard の *A New Pocket Dictionary of the English and Dutch Languages*（第 2 版）におけるオランダ語を示したものである。

表 1　『袖珍』初版に見られる「鉛直」の英・日・蘭語対応

『袖珍』初版の英語	『袖珍』初版の日本語	Picard 辞書のオランダ語
Perpendicular, adj.	鉛直ナル	loodregt
Perpendicular, s.	鉛直線	loodlijn
Perpendicularity, s.	鉛直ナルコト	regtstandigheid
Perpendicularly, adv.	鉛直ニ	in het lood, regtstandig
Plumb, adj.	水平ノ。鉛直ニ	waterpas, loodregt
Sounding-line, s.	鉛直	loodlijn

『袖珍』初版において「鉛直」は原則 Perpendicular の訳語として現れており、Picard 辞書では loodregt が対応している。一見すると、lood は鉛（英：lead）、regt は直（英：right）と訳せるので、「鉛直」はこれらを組み合わせた「直訳語」であると考えられる。このことを踏まえて、次節では『袖珍』を遡る『海上砲術全書』の用例から、「鉛直」の成立期の状況について検討する。

4.　『海上砲術全書』に見られる「鉛直」について

『海上砲術全書』（以下『海上』と略す）の原書はカルテンの *Leiddraad bij het onderrigt in de zee-artillerie*（1832 年）で、宇田川榕菴・杉田成卿ら幕府天文方の訳員六名が分担して翻訳し、1843 年に成立した。しばらく写本として流通したが、1854 年には大野藩から板本が刊行された（櫻井 2005：316(21)-314(23)による。なお、写本と板本の関係等は松井 1980 に詳しい）。

大野版および現存する全 28 巻揃の諸写本では、杉田成卿が担当した巻 17 に一例のみ「鉛直」が見られる[1]。東京大学総合図書館所蔵の写本・板本の当該箇所と、原書の対応箇所を示す。

（1a）弾ノ敵ニ達スル光景、常煩ニテハ水平ニ近ク、天砲ニテハ鉛直ニ近カルヘシ（写本）
（1b）弾ノ敵ニ達スル光景、加農ニテハ水平ニ近ク、臼砲ニテハ鉛直ニ近カルベシ（板本）
（1c）De wijze waarop de projectiles zullen treffen, moet gevolglijk bij kanons meer horiezontaal, bij mortieren meer verticaal wezen.（原書）

松井 1980 は、板本には写本から改変された語が多くあり[2]、写本から改変されていないということを以て「それだけ当該分野での定着度が高いものと認めてよい」（松井 1980：57）、「少なくとも安政初年には蘭学や兵学に係わりをもっていた人々の間に定着しようとしていた」（同：58）と主張する。それに則るならば、「鉛直」の語もある程度浸透していたものと思われる。

発表者は、早稲田大学図書館所蔵の宇田川榕菴自筆再校本（以下「再校本」と略す）の初稿に「鉛直」が散見されることを発見した。この本は「発端」「第一編」「第二編」から成る一冊本で、全 28 巻のうち榕菴が担当した巻 5 までの内容に当たる[3]。冒頭には「癸卯三月初九開硯」とあり、これは天保 14（1843）年に当たる。第一編末尾には墨筆で「三月十八日」、朱筆で「四月十

[1] 大野藩板本にこの例の存することは櫻井豪人氏よりご教示をいただいた。その後、現存する諸写本に同様の記述が見られることを発表者が確認した。なお、本発表に際して調査した写本は、宮内庁書陵部蔵本（16 冊本・30 冊本）、東京大学総合図書館蔵本、福井市立図書館蔵本、京都府立京都学・歴彩館蔵本（以上完本）、名古屋市蓬左文庫蔵本、早稲田大学図書館蔵本（自筆再校本・杉田成卿校本）である。
[2] （1a）（1b）の波線部がその典型例である。
[3] 第一編は「火薬篇」（板本巻 1～2）、第二編は「煩礮篇」（板本巻 3～5）に対応する。

一日再校」とある。第二編末尾には墨筆で「終 三月廿八日第一稿成」、朱筆で「四月廿一日再校此日／大駕還 城」とある。

再校本には、墨筆の「鉛直」が多く見られるが、その多くが朱筆による再校で別の表現に置き換えられている。初稿の墨筆に「鉛直」が見られる箇所について、校正後および東大本（写本）の対応本文を、原書の対応語、意味とともにまとめると**表２**のようになる。

表２　再校本初稿の「鉛直」と校正の過程

No.	原書	再校本初稿	再校本校正後	東大本（写本）	意味
❶	3/ V	火門ヲ**鉛直**（**左**：**サゲズミ**）**ニ**転スル⺄ヲ得ベシ	熕礮ヲ**上下ニ**転せずは有へからずと工夫し	熕ヲ**上下**（**割**：**「フルチカーンフラック」**）ニ轉スル工夫起ル	重力
❷	3/ L	熕ノ両側**鉛直**ト為リ	熕ノ両側に為りて	熕ノ両側ニ横軸ヲ設ケ	90 度
❸	17/ V	二个ノ板ニ孔アル者ノ内へ**鉛直ニ**下ル	二个ノ板の孔へ**鉛直**ニ上下ス	二枚ノ板ノ孔ヲ通リテ自由ニ上下スベシ	重力
❹	18/ V	杵**鉛直ニ**上下シテ擣壷ヲ擣クナリ	杵**鉛直**ニ下テ擣壷ヲ擣クナリ	杵次第ニ落チ臼ヲ擣クナリ	重力
❺	18/ V	一箇ノ**鉛直ナル**重大ノ軸柱ヲタテ	一箇ノ**鉛直**ナル巨軸柱の周辺に建	**縦ニ**建タル大柱ノ周辺ニ固着シ	重力
❻	45/ V	熕礮を**鉛直に**運搬する	熕礮を**縦に**~~運搬~~する	熕ヲ**縦ニ**上下平仰スル	重力
❼	46/ V	熕足の軸は**鉛直に「フルチカーレフラック」**に在り	熕耳の心は**縦に「フルチカーレフラック」**に在り	其心ハ（以下削除）	重力
❽	53/ L	**鉛直に**下垂せる線	円錐処より**縦に**引たる線	円錐処ヨリ**縦ニ**引タル線	重力
❾	53/ V	腹心に**鉛直**開く	腹心に**鉛直ニ**開く	腹心ノ線ト**直角ヲナシ**開ク	90 度
❿	66/ L	熕を**鉛直に**縦に立て	熕を**縦に**立て	熕ヲ**縦ニ**立テ	重力

※「原書」列の「/」の左は原書の頁数、右は「鉛直」に対応する原語（V=Verticaal、L=Loodregt）を示す。

原書の Verticaal は主に〈重力〉を表し、Loodregt は〈重力〉〈90 度〉の両方を表しているようであるが、初稿に見られる「鉛直」は、〈重力〉〈90 度〉の両方の意味で用いられている。榕菴は、朱筆による校正で「鉛直ニ」のうち❶を「上下ニ」に、❻❼❽❿を「縦ニ」に改めている。

おそらくは初稿段階で Verticaal と Loodregt に当たる既存語が思い当たらず、Loodregt に対応する漢字を当てて「鉛直」を造語し、類義の Verticaal にも用いたと思われる[4]。その後校正を行う中で、「上下」「縦」といったより平易な表現が適切であると考え、修正したのだろう。

一方、再校段階では❸❹❺❾の「鉛直」が残っている。しかし、東大本を含む諸写本や板本において、榕菴の担当範囲に「鉛直」は残っていない。これらはどの段階で修正されたのだろうか。

早稲田大学図書館には再校本と別に、榕菴の原稿に対して杉田成卿が校正を施した自筆本（以下「成卿校本」と称す）がある。第二編巻一・二（板本の巻 3・4 に対応）のみが存し、**表２**の❻～❿が確認できる。再校本で残っていた「鉛直」のうち❾の箇所は、再校以降[5]の転写時の誤りか「腹心の線に沿直て開く」とあり、成卿が「に沿直て」を「と直角をなし」と改めている。

[4] 榕菴が Loodregt をすべて「鉛直」と訳したわけではない。榕菴が初稿で Loodregt を「正縦」と訳した箇所が一例あり、再校で「平直」、板本では「直立」となっている。

[5] 関場 1933 によれば、成卿校本の第二編巻三（関場氏架蔵本、現所蔵不明。早大蔵成卿校本の続きに当たるものと思われる）に、「（前略）四月二十一日再校終り六月初六、第二稿を草す、成る、誤訳果して多からん、校閲者の用心を請ふ（後略）」という榕菴の識語があるという。

❸❹❺についても、成卿が何らかの校正をした可能性があるが、再校本にさらに手を入れた第二稿（注 4 参照）で榕菴自身が修正した可能性もある。

なお、成卿の担当範囲に一例のみ見られた（1a）の「鉛直」は、原書の対応箇所が Verticaal であることから独自に訳したとは考えにくく、成卿が榕菴の原稿を校正する過程でこの語を認知した可能性がある。また、次節で見るように、明治初年の兵学書に「鉛直」が用いられていることを踏まえれば、松井 1980 の指摘するように、安政初年の段階で蘭学・兵学関係者の間で「鉛直」が浸透していた可能性は高いと考えられる。

5.「垂直」との混用

明治初年には、「鉛直」「鉛直線」「鉛線」が「垂直」「垂線」等と併用されており、〈重力〉と〈90 度〉を区別することはあっても、その基準は資料によって様々であった。次の例では、「鉛直」が〈90 度〉の意味で用いられ、「鉛線」「垂線」が〈重力〉を示す線として用いられている。

（2）第二図「ハニ」の直線、他の「イロ」線上に立、其両側に些も傾されは、「ハニ」線は「イロ」線上に鉛直なりと云ふ。鉛直線を鉛線即垂線と混する勿れ。此鉛線は水平面（割注：止水の表面を水平面といふ）上に鉛直にして重力の方向を示すの線なり。之を定むるには細索の端に錘を懸る者を以てす。（兵学校『軍事小典』下、1868 年／info:ndljp/pid/1885235）

「鉛線」は『気海観瀾広義』（1850 年成）に用例があり、〈重力〉〈90 度〉の意味で用いられた他、平面幾何における縦向きの線（以下〈縦線〉）を表す語としても定義されている[6]。

（3）直ニ垂ルヽ者ハ鉛線ナリ、コレヲ横ニスル者ハ地平線ナリ（川本幸民訳『気海観瀾広義』巻一）

幾何学分野では両語が〈90 度〉の意味で用いられ、用語集の類でも不統一な様相であった。

（4a）Pelpendicular, 直角、鉛直線（橋爪貫一『英算独学』1871 年／info:ndljp/pid/826594）
（5a）Vertical, 垂直ノ（山田昌邦『英和数学辞書』1878 年／info:ndljp/pid/826187）
（5b）Perpendicular, 垂線（山田昌邦『英和数学辞書』1878 年／info:ndljp/pid/826187）

明治初年のこのような状況に対し、訳語統一の機運が高まり、物理学や数学の分野で訳語会が発足した。1884 年 1 月の「工学上ニ関係アル数学訳語会」では Perpendicular Line の訳語として「垂線」、Perpendicular plane の訳語として「垂面」が議決され、 翌 2 月の同会では Vertical の訳語として「垂直」が議決された。これらは同 2 月の『東洋学藝雑誌』29 号に「東京数学会社及工学協会聯合訳語会議決（第三）」として掲載された。これによって、〈90 度〉を表す数学用語としては「垂」を用いるという方針が決定づけられた。上述の訳語会は工学協会からの要請を受けたものであり、1886 年の『工学字彙』にも上記の訳語が反映されている。

物理学においては、『物理階梯』など明治初年の資料では「鉛直線」が〈重力〉〈90 度〉を共に表していたが、訳語会の議決後は〈重力〉に「垂直」を用いる例が見られるなど混乱していた。

（6a）今此図ニ於テ、甲戊ヲ墜球ノ鉛直線トシ、甲己ヲ弾丸ノ曲路トシ、三六ヲ砲臺下ノ地平線トス（片山淳吉『物理階梯』上、1874 年版／info:ndljp/pid/830260）
（6b）光線ノ平面ニ中スル所ヲ投著点ト名ケ其点ヨリ直立スルモノヲ鉛直線又垂線ト名ク（片山淳吉『物理階梯』中、1874 年版／info:ndljp/pid/830261）
（7）平滑ナル一ツノ滑車ヲ其下ヲ通ス糸ニテ支フルアリ。其糸ノ張力ハ 10「ポウンド」ニシテ

[6] 〈縦線〉の意味では、「鉛線」のほか「直線」「垂線」「縄線」などが用いられている。

滑車ト切セザル糸ノ二ツノ部分ハ垂直ト三十度ノ角ヲナス□其滑車ノ重サヲ問フ（長沢亀之助『初等静力学』上、1889 年／info:ndljp/pid/830174）

大正期以降は、「鉛直」と「垂直」の区別の必要性を説く記述が断続的に見られ、1930 年代以降は、低学年で「垂直」に触れる算術において「鉛直」との違いを明確に教えるべきだとされた。

（8）一つの線が一つの平面に直角に交はつてゐたならば、垂直線である。鉛直といふのは水平面といふ特別の平面に垂直な線のことである（片寄卯三郎・木山淳一『理化実験は斯の如く取扱ふべし』1920 年／info:ndljp/pid/939162）

（9）水平トカ鉛直トカイフ言葉モ、タシカ理科ノ教科書ニハ載セテアルガ、算術ニハ絶対ニナカツタ。（中略）今日相当ノ教養アル成人デモ、鉛直ト垂直トヲ混同シタリ、斜面ノ垂線ト斜面ニ於ケル鉛直線ノ観念ノアヤフヤナ人ノ少ナカラザル原因ノ一ツハ、記憶力旺盛ナル少年時代ニコレガ学習ヲ缺キ、（後略）（國元東九郎「算術ニ於ケル圖形ノ取扱」『新輯教育数学講座２』1938 年／info:ndljp/pid/1062447）

このような混用の要因として、〈重力〉を表す「鉛直線」と、平面図形において「底辺」に垂直であるとして導入される「高さ」が、板書を写したノート上ではともに（3）の「鉛線」のような〈縦線〉で表されるということが考えられる[7]。これによって、相対的な関係を表す「垂直」と、絶対的な方向を表す「鉛直」の区別が曖昧になるのではないだろうか。

6. 現代の教科書における「鉛直」と「垂直」の非対称性

今日の学校教育における「垂直」の初出は小学校四年生の算数で、次のように定義されている。

（10）２本の直線が交わってできる角が直角のとき、この２本の直線は**垂直**（すいちょく）であるといいます。（『わくわく算数４上』啓林館、2024 年／算数 420）

この定義と共に、垂直な二本の線が様々な方向で図示されており、「垂直」は相対的な関係であるということが強調されている。

「鉛直」に触れる最初の機会は、高等学校の物理基礎または地学基礎であろう。教科書では、「鉛直方向」について「水平」の向きと合わせて次のように説明されている。

（11a）鉛直方向…糸につるしたおもりが静止するときの糸の方向
水平方向…鉛直方向に対して垂直な方向（『高等学校物理基礎』第一学習社、2022 年／物基 709）

（11b）重力の向きは鉛直方向で、これと垂直な面が水平面である（『高等学校地学基礎』啓林館、2022 年／地基 703）

これらの科目では、重力そのものが扱われるため、〈重力〉と〈90 度〉を明確に使い分ける必要がある。そのため、「鉛直」は〈重力〉を、「垂直」は波線部のように〈90 度〉を専ら表す。

一方で、両者を必ずしも区別する必要がない場合には〈重力〉の意味で「垂直」が用いられることがある。生物基礎の用語に「垂直分布」がある。

（12）標高の違いによって生じる垂直方向のバイオームの分布を**垂直分布**（すいちょくぶんぷ）という。（『高等学校生物基礎』啓林館、2022 年／生基 705）

生物基礎の範囲で「鉛直」の語は用いられておらず、また厳密に重力の方向であるかは不問で

[7] 明治以来、多くの教科書では、「高さ」に当たる線が導入時に〈縦線〉で図示される。

あるため、小学校で学習し日常語として広く用いられる「垂直」が選択されたのだろう[8]。

〈重力〉の意味で「垂直」を用いる類例としては、スポーツテストの「垂直跳び」や、災害時の「垂直避難」[9]がある。これらも、用いられる文脈上「鉛直」「垂直」を排他的に区別する必要がなく、日常語としてより馴染む「垂直」が採られたものと思われる。

しかし、学術的専門性の高い文脈では、これらに関連して「鉛直」が用いられることがある。

（13）キック動作中の床反力は、鉛直軸方向の力だけが検出できるフォースプレートを用いて測定し、同時に垂直跳びの全過程の体の動きをみるために、16 ミリカメラ撮影も合わせて行なった。（大島・小林 1978：293）

（14）避難の成否を議論する場合は、（中略）津波浸水域から脱出するか、適切な高さの鉛直避難施設に行き着くまでの時間が重要である。（後藤 2016：95）

これらの例を見ると、専門的な文脈では「垂直」と「鉛直」を排他的に使い分けなければならないという規範意識が働いているように思われる。

このように、「鉛直」と「垂直」は使い分ける必要性がある場合と必ずしもない場合があり、後者における使い分けの有無にはその使用場面の専門性が関わっているものと思われる。

7. おわりに

本発表では、「鉛直」の成立過程について『海上砲術全書』稿本の用例を通して考察し、その後の「垂直」との混用の諸相や、両語の区別に関する態度の相違についても指摘した。これらは「鉛直」の語誌記述において重要であるのみならず、『海上砲術全書』自体の研究や、中等教育における用語の問題にも接続する点で意義がある。一方、「垂直」が日常化し「鉛直」が日常語化しなかった過程については詳述できなかった。今後はこれを課題とし、「鉛直」の語誌の総合的な記述を目指す。また、『海上砲術全書』稿本を用いた更なる語彙研究の可能性を探っていく。

［参考文献］
大島義晴・小林一敏（1978）「垂直跳びに関する一考察」『日本体育学会大会号』29, p.293.
後藤洋三（2016）「東日本大震災津波避難における帰宅行動と立ち寄り行動の影響」『日本地震工学会論文集』16(10), pp.86-104.
櫻井豪人（2005）「『改正増補蛮語箋』「火器」部について―『海上砲術全書』との関係―」『国語語彙史の研究』24, pp.318(19)-293(44), 和泉書院.
櫻井豪人（2013）「『和蘭字彙』電子テキスト化による『英和対訳袖珍辞書』初版の訳語の研究」『日本語の研究』9(3), pp.17-32.
杉本つとむ［編］『江戸時代翻訳日本語辞典』早稲田大学出版部
関場不二彦（1933）『西医学東漸史話 下巻』関場不二彦
松井利彦（1980）「近代漢語の定着の一様相」『広島女子大学文学部紀要』15, pp.49-60.

［資料］ *New Pocket Dictionary of the English and Dutch Languages*（第 2 版）:1857 年:オランダ国立図書館蔵/『海上砲術全書』早稲田大学図書館蔵再校本:ケ 01 01071/同早稲田大学図書館成卿校本:文庫 08 C0049/同東京大学総合図書館蔵写本:W30 189/同板本:W30 223/同ほか各種写本（注 1 参照）/ *Leiddraad bij het onderrigt in de zee-artillerie*:1832 年:国立国会図書館蔵:蘭 453/（2）～（9）は、国立国会図書館デジタルコレクションによって参照し、用例末尾に永続的識別子を示した。（10）～（12）は用例末尾に教科書記号・番号を示した。

［付記］ 本発表は、JSPS 科研費 24KJ0570 の助成を受けたものです。

[8] 地学基礎の大気や海洋の単元では、同様に重力の方向であることが厳密に示されなくてよい場合でも「鉛直」が用いられる。科目内での用語統一のためと思われるが、地学基礎と生物基礎で「鉛直」「垂直」を排他的に使い分けるかという違いが生じており、両方を履修する学習者は混乱する可能性がある。

[9] この語は早くは 1982 年に用例があり、水害等の災害関連の文脈で用いられていたが、2011 年の東日本大震災を機に使用が拡大し、ハザードマップ等にも「水平避難」と合わせて記載されるようになった。

訓読に用いられた平安期和文口語・歌語　―「さもあらばあれ」を例として―

中山大輔(なかやまだいすけ)(放送大学大学院院生)

一、先行研究と本研究の目的

「さもあらばあれ」は、平安後期以来古典中国語「遮莫」「任他」等の訓読語として定着した成語であり、訓読によって慣用・成語化したとの認識もなされてきた（山田（1935)、鈴木(1979))。ただ、古田（2003）において、平安中期の和文に既に「さもあらばあれ」が成語として現れていることが指摘され、対する「遮莫」の訓としての「さもあらばあれ」は訓点資料が平安後期からしか残されていないことなどから、和語で既に成語として用いられていた「さもあらばあれ」を訓読に当てたと見る方が適当であろうとされている。

和語として既存であった成語「さもあらばあれ」を「遮莫」等の訓に当てた、とする過程については、上述の古田（2003）によってほぼ明らかにされたと発表者も考える。ただ、別の問題点として、「遮莫」等の訓として「さもあらばあれ」が適切であるかという点がある。例えば入矢（1958）では、本邦では「遮莫」が「さもあらばあれ」と訓まれるために、中国における本来の用法と乖離が生じていると指摘されている。その乖離とは端的に、「遮莫」がその後段を「どうでもよい」「気にするな」と放任する「後部放任」の意味用法を持つのに対し、「さもあらばあれ」は同様の放任の意味ではあるが前段の内容に係る「前部放任」、あるいは前後の内容に係らず「ままよ」等と間投詞的な用法を持つというものである。

この用法の乖離に関し、まず平安朝漢詩文における「遮莫」等の用法について、古田(2003)では「(引用者注・中国の用法に対して)正確に使っている」と評され、発表者も同じく平安期の「遮莫」に中国の用法との乖離が見られないことを確認している（中山（2024B))。

であれば、正確に用法を理解し漢詩文にも実用していた「遮莫」に、なぜ意味用法に乖離があるともされる和語「さもあらばあれ」を訓として当てたのかが残る課題となろう。なお、古田(2003)では「さもあらばあれ」と「遮莫」の関係について、「指す内容が「さもあらばあれ」の前にあり、しかも「あらば」という仮定の言葉であるにもかかわらず、もう既に起こってしまっている事である場合に使われている。構文の上では「遮莫」が句の最初にきて、句全体で多くは仮定の条件句を作るのとは異なっている。しかし意味の上では「～であろうとも（～であることは）もうどうでもいいわい。ままよ」という気持ちを主に表しており、全体で一つの感動詞的な使い方である。「遮莫」と表す気持ちにおいては通じていると考えられる。」と分析されている。本発表では、平安期における和語「さもあらばあれ」の用法を改めて精査し、なぜ古典中国語「遮莫」等の訓読語として選択されたのか、その背景を考察し、平安期における訓読語の様相の一端を明らかにしてみたい。

二、研究方法

和語「さもあらばあれ」とその縮約形および類語「さもあらばれ」「さまらばれ」「さはれ」「さはあれ」「さもあれ」「さまれ」の奈良平安期における用例を収集し、それぞれの意味用法を調査した。用例収集には『日本語歴史コーパス』、『日本文学Ｗｅｂ図書館』、『日

本語通時連語コーパス』を用いた。「さもあらばあれ」の類語を含め用例を調査することで、それぞれの用法を比較し各語の性質を確認することが期待できる。

三、古典中国語「遮莫」の用法

まず、「さもあらばあれ」と訓読される古典中国語「遮莫」の意味用法を確認したい。

○ 『遊仙窟』(本文、訓読とも八木沢(1975)『遊仙窟全講』による)

徑須剛捉著　遮莫造精神　　徑(ただち)に須らく剛く捉ふべし、遮莫(さもあらばあれ)精神を造(いた)すとも

「造精神」は「拒否の姿勢を示すこと」であり、「遮莫造精神」は「拒む様子があっても構うな」という意味になるとされている。つまり「遮莫」は、後置の文に係り「〜であっても気にするな」と言う放任の条件句を作る「後部放任」の用法があると言える。なお、この『遊仙窟』の例は「たとえ(仮に)拒まれても」と仮定の事柄を放任する内容であるが、既定の事実を放任する用例もある。

四、和文資料における「さもあらばあれ」とその縮約形および類語

「さもあらばあれ」等の和文における用法を見てみたい。今回調査対象とした語形は、「さもあらばあれ」「さもあらばれ」「さまらばれ」「さはれ」「さはあれ」「さもあれ」「さまれ」(調査翻字資料における濁点の有無は問わない、注1)の7語である。年代としては奈良・平安期を調査対象とした。調査結果は散文を【表 1】、和歌を【表 2】として分けてまとめた。なお表中及び以下、意味用法としての「前部放任」、「後部放任」、間投詞的用法をそれぞれ「前放任」「後放任」「間投」と表記した。各表から看取される事項は以下の通り。

〈〈散文　(表1参照)〉〉

○ 「さまらばれ」「さまれ」の例は見られなかった。

○ 「さもあらばあれ」「さもあらばれ」は 1000 年頃までの例が 9 割近くを占め、1000 年以降はほぼ見られない。

○ 「さもあらばあれ」「さもあらばれ」の会話文例の発話者は全て女性である。

○ 各語形とも地の文の用例は全て詞書・判詞のものである。うち 1 例目の『源順集』の例は「歌の序」ともされ、中国の詩序の影響も指摘されている(安部(2022))。

〈〈和歌　(表2参照)〉〉

○ 「さはれ」「さはあれ」「さもあれ」「さまれ」の例は見られなかった。

○ 計 49 例中、縮約形「さもあらばれ」「さまらばれ」は各 1 例ずつ見られるのみであり、ほぼ「さもあらばあれ」の形で用いられる。

○ 2, 4 句目には用いられない。

○ 1180 年頃を境に用例の数と質に大きな変化が見られる。まず、使用される句の位置として、3 句目は両時期を通して約半数を占めるが、1 句目と 5 句目の割合が 1180 年前後で逆転する(表 3 参照)。また、意味用法も、通じて「前放任」が主流ではあるものの、1180 年以前は「後放任」「間投」も合わせて 4 割以上を占めていたのに対し、1181 年

【表１】「さもあらばあれ」類語用例一覧（奈良平安和文　散文）

年代	資料名	語形	用例数	用例内訳					
				意味		文体		(会話)性別	
				前放任	間投	地	会話	男	女
950	源順集(972※)	さもあらばあれ	1		1	1 詞書			
	蜻蛉日記(974)※	さもあらばれ	2	2			2		2
	蜻蛉日記(974)※	*さはれ*	③	②	①		③		③
	うつほ物語(980) 蔵開、国譲	さもあらばあれ	2	2			2		2
	落窪物語(990)	*さはれ*	⑥	⑤	①		⑥	③	③
1000	馬内侍集(1000)	*さはれ※*	①		①	① 詞書			
	枕草子(1001)	*さはれ*	⑤	②	③		⑤		⑤
	和泉式部日記(1004)	*さはれ*	①	①			①		①
	和泉式部日記(1004)	さもあらばあれ	1	1			1		1
	源氏物語(1010)※	*さはれ※*	⑦	②	⑤		⑦	⑥	①
	和泉式部集(1030)	*さはれ*	①	①		① 詞書			
1050	堤中納言物語(1055) 花桜折る少将、虫めづる姫君	*さはれ※*	②		②		②		②
	更級日記(1059)	*さはれ*	①	①			①		①
	若狭守通宗朝臣女子達歌合(1086)	さはあれ	1	1		判詞1			
	高陽院七番歌合(1094)	*さはれ*	①		①	① 詞書			
1100	内大臣家歌合(1118)	さはあれ	1	1		判詞1			
	実国家歌合(1170)	さもあれ	1	1		判詞1			
1180	若宮社歌合(1191)	さもあらばあれ	1	1		1 判詞			
	若宮社歌合(1191)	さはあれ	1	1		判詞1			

	語形	用例数	意味		文体		(会話)性別	
			前放任	間投	地	会話	男	女
語形別　合計	さもあらばあれ	7	6	1	3	5		5
（出現年代順）	さもあらばれ	2	2			2		2
	さはれ※	㉗	⑭	⑬	②	㉕	⑨	⑯
	さはあれ	3	3		3			
	さもあれ	1	1		1			

備考　・「後放任」の意味を持つ用例は無かった。

・詞書、判詞の例には発話文とも見られる用例も確認されたが、ひとまず統一して地の文の例とした。

・「(会話)性別」欄には会話文体の例における、発話者の性別を示した。

注記　1，『源順集』の年代は、個別用例（歌合）の年代による。

2，『蜻蛉日記』は「さもあらばれ」が安和2年(969)、天禄元年(970)の記事に各一例、「さはれ」が安和2年(969)、天禄2年(971)、同3年(972)の記事に各一例確認できる。

3，語形「さはれ※」には、「さばれ」と翻字されるものも含む。

4，『源氏物語』中「さはれ」の出現巻は帚木、賢木、少女、柏木、竹河、宿木、東屋に各一例ずつ。

【表２】「さもあらばあれ」類語用例一覧（奈良平安　和歌）

年代	使用句	意味			条件		（作者）性別			資料名
		前放任	後放任	間投	仮定	既定	男	女		略称・成立年代
950	3	○				○	○		うつつまのはるのゆふぐれ**さまらばれ**ゆめにもみてむはなはあくまで	蔵人合957
	5			○			○		思ふには忍ぶることぞ負けにける逢ふにしかへ***ば*****さもあらばあれ**	伊勢語 960
	3	○				○			よしのがはよしのかはれ***よ*****さもあらばあれ**せになるふちはなくはこそあらめ	古六帖 982
	3	○				○	○		たらちめのむかしのおや***は*****さもあらばあれ**さてやはむまのかみのこはよき	仲文集 990
	1		○			○	○		**さもあらばあれ**人のきくらん事も***いさ***てのかぎりなるものをおもへば	高光集 990
	1			○			○		**さもあらばあれ**月いでてさも入りぬれ***ば***みるべき人のある宮こかは	増基集 990
	3	○				○			ひたぶるにしなばなにか***は*****さもあらばあれ**いきてかひなく物をおもふ身***は***	拾遺抄 997
1000	3	○				○	○		うちすててたびゆく人***は*****さもあらばあれ**またなきものと君しおもは***ば*****※**	和泉記 1004
	1		○		○		○		**さもあらばあれ**人はみずとも花の木***は***かぜがくれにぞううべかりける	源賢集 1020
	1		○			○		○	**さもあらはあれ**雲井なから***も***山のはにいてぬる夜はの月とたに見は**※**	和泉式 1030
1050	3	○				○	○		ひとしれぬなかにぬるる***は*****さもあらばあれ**さらでかはらぬそでやたれゆゑ	為仲集 1085
	3	○				○	○		しづむとも今は我が身***は*****さもあらばあれ**恋しき人をみぬぞ悲しき	為仲集 1085
	3	○				○			むばたまのよはのけしき***は*****さもあらばあれ**人の心の春日と***もがな***	後拾遺 1086
	1			○					**さもあらばあれ**やまと心しかしこく***は***ほそぢにつけてあらすばかりぞ	後拾遺 1086
	1		○			○			**さもあらばあれ**一声なれどほととぎすきかでぬるよはなきよし***もがな***	権大合 1096
	1		○			○	○		**さもあらばあれ**くれゆくはるも雲の上にちる事しらぬはなしにほは***ば***	経信集 1090
1100	3	○				○			わすれじのよそのなさけ***は*****さもあらばあれ**うきめなりともあひてこそみめ	関白保 1121
	1			○					**さもあらばあれ**なみだのかははいかがせむあひみぬなさへながさず***もがな***	関白保 1121
	3	○				○	○		かはくへきかたなきそて***は*****さもあらはあれ**みのぬれきぬをぬくよし***もかな***	行尊集 1135
	1			○			○		**さもあらばあれ**といふにもきかぬなみだかなさこそぬれぎぬきたるなり***とも***	行尊大 1135
1150	5	○				○			五月雨にはな橘のかをる夜***は***月すむ秋も**さもあらばあれ**	久安百 1150
	3	○				○			春は猶花の光***も*****さもあらばあれ**ただ身にしむは曙の空	久安百 1150
	3	○				○	○		みかりののしばしのこひ***は*****さもあらばあれ**そりはてぬるかやかたをのたか	詞花集 1151
	3	○				○	○		たまゆかのはなのむしろ***も*****さもあらばあれ**まこもがうちのつづれ恋しも	出観集 1169
	3	○				○	○		うへしたの雨と水と***は*****さもあらばあれ**蓮ひらけん身をぞうらやむ	出観集 1169
	1		○		○		○		**さもあらばあれ**あるじはいかに思ふ***とも***女郎花にはみをもかへてん	清輔集 1177
	1		○			○			**さもあらはれ**のちのつらさ***は***いかゝせんおもふ心をしらすはかりそ	治承百 1178
	5	○				○	○		おもふにはたけのあみしきふしなれぬたまのうてな***よ*****さもあらばあれ**	教長集 1178
1180	1		○		○		○		**さもあらばあれ**涙に袖はくちぬ***とも***衣のすそのあひだにもせ***ば***	経盛合 1180
	1		○			○	○		**さもあらばあれ**くちたる木とはいはる***とも***月のさかりはひるこそはねめ	重家集 1180
	1			○			○		**さもあらばあれ**あひみてのちにたえはて***ば***われひとりやはなたてなるべき	重家集 1180
	3	○				○	○		冬きてとたのめし人***も*****さもあらばあれ**なほたち帰り秋ときかばや	重家集 1180
	3	○				○	○		つけてけるはもりのしるし**さもあらばあれ**たちしはなればゆかざらめや***は***	重家集 1180
	3	○				○	○		われはただこむよのやみ***も*****さもあらばあれ**君だにおなじ道にまよは***ば***	長明集 1181
	3	○				○	○		したをれんまがきのたけ***は*****さもあらばあれ**しのにおしなみつもれしらゆき	有房集 1182
	5	○				○	○		よしの山みねのしら雪みるときははなのさかり***も*****さもあらばあれ**	経盛集 1185
	3	○				○	○		なれてのちわかれむこと***は*****さもあらばあれ**あふにいのちをいかでかへまし	実家集 1186
	3	○				○			思ふをもわするる人***は*****さもあらばあれ**うきをしのばぬ心と***もがな***	千載集 1188
	3	○				○			哀哀此世はよしや**さもあらばあれ**こむ世もかくやくるしかるべき	宮河合 1189
	3	○				○			わひぬれはみるめなきさ***も*****さもあらはあれ**こひわすれかいゝかてひろはん	宗家 1189
	3	○				○	○		あととむるこまのゆくへ***は*****さもあらばあれ**うれしく君にゆきにあひぬる	山家集 1190
	5	○				○			すみれさくあさぢが庭はふみ分けてとふ人なき***も*****さもあらばあれ**	俊五社 1190
	5	○				○	○		命かは何かは露のあだものはあふにしかへ***ば*****さもあらばあれ**	宝物集 1190
	1		○			○			**さもあらばあれ**たまのすがたもなにならずふた心なきいもがために***は***	唐物語 1190
	5	○				○		○	はぎが花おもげにみゆるつゆばかりちらさむ風***は*****さもあらばあれ**	小侍従 1191
	3	○				○	○		万代もちとせのあき***も*****さもあらばあれ**只一時のあふ事***もがな***	若宮合 1191
	5	○				○	○		月をみてこころの水のすみぬれ***ば***しばしくもる***も*****さもあらばあれ**	林下集 1191
	5	○				○	○		何ゆゑにかすむ梢をおもふらん花なきみね***は*****さもあらばあれ**	玄玉集 1191
	3	○				○	○		よととともにはれぬ心***は*****さもあらばあれ**□□□空に五月雨やせし	玄玉集 1191

以降は「後放任」用法が 1 例(1 割以下)のみ、「間投」用法は見られなくなる。

【表３】和歌における「さもあらばあれ」(縮約形含む)の年代別使用句位置

	1 句目	3 句目	5 句目	合計
957 －1180 年	14 例（42%）	16 例（49%）	3 例（9%）	33 例（100%）
1181－1191 年	1 例（6%）	9 例（56%）	6 例（38%）	16 例（100%）

【表４】和歌における「さもあらばあれ」(縮約形含む)の年代別意味用法

	前放任	後放任	間投	合計
957 －1180 年	18 例（55%）	9 例（27%）	6 例（18%）	33 例（100%）
1181－1191 年	15 例（94%）	1 例（6%）	0 例（0%）	16 例（100%）

［散文における「さもあらばあれ」用例］

○『源順集』「松声人夜琴の歌の序」(新編国歌大観)

かかるまとゐにさぶらふことさへまばゆけれど、**さもあらばあれ**と、人こそききて、そしりわらはめ、かけまくもかしこきおほんかみは、

○『蜻蛉日記』安和二年五月(『新編日本古典文学全集 13』)

命も知らず、人の心も知らねば、「いつしか見せむ」とありしも、**さもあらばれ**、やみなむかしと思ふもあはれなり。

五、和文散文・和歌における「さもあらばあれ」類語の変遷

今回調査対象とした「さもあらばあれ」「さもあらばれ」「さまらばれ」「さはれ」「さはあれ」「さもあれ」「さまれ」各語の棲み分けとして、「さもあらばあれ」「さもあらばれ」「さまらばれ」は散文・和歌を問わず用例が見られたものの、「さはれ」「さはあれ」「さもあれ」については散文にのみ見られ、和歌には用いられないことが分かった。この点で、「さもあらばあれ」はより歌語的であると言えるだろうか。また、意味用法として「後部放任」が見られたのは和歌の例のみであった。語の構成要素から、指示代名詞「さ」で前段を受ける「前部放任」が本来の用法であって、「後部放任」は倒置的用法であり、韻文である和歌において特に用いられたものと考えられる。

用例数の変遷も散文と和歌で対照的であり、「さもあらばあれ」は散文では 1000 年以降ほぼ見られなくなるのに対し、和歌ではそれ以降、特に 1180 年頃から用例数が増加する。ただし、意味用法は固定化し、主に「前部放任」として用いられるようになる。

六、まとめ―訓読語としての「さもあらばあれ」―

今回の調査から、和語「さもあらばあれ」には、平安中期から後期の和歌において、倒置的表現として「後部放任」を表す用法が存在していたことが分かった。この年代はまさに、古田(2003)でも指摘されるが、古典中国語「遮莫」「莫惜」に「さもあらばあれ」が和訓として確かに当てられていた資料の残る(注２)時期に重なる。即ち、訓を施した背景には、

古典中国語「遮莫」の持つ「後部放任」の用法を正確に理解した上で、歌語として用いられていた「さもあらばあれ」を当てた可能性があると考えられる(注３)。ただ、訓として当てられたと考えられる平安中後期において、「さもあらばあれ」は歌語として用法が変遷途中であり、また口語から歌語へ新しく流入したばかりの語彙であったと考えられる。そうした言わば流行的な歌語も訓読語の選択肢に含まれていた可能性が、この「遮莫」等の訓「さもあらばあれ」から推量されると言えるだろうか。

〈注〉 1，「さはれ」については、「さもあらばあれ」「さまらばれ」の縮約形とも見られる「さばれ」であるのか、「さはあれ」の縮約形とも見られる「さはれ」であるのか判別ができないため、ひとまず区別せず「さはれ」とした。
2，古田(2003)では最古の付訓例として図書寮本類聚名義抄の『遊仙窟』古訓を指摘する。
3，「遮莫」の「さもあらばあれ」以外の訓の候補として、北﨑（2019）に「平安初期訓点資料・中古和文においては既に「もあれ（まれ)」が固定的に用いられており」として、放任を表す訓（「遮莫」に対する訓点例ではない)・和語「もあれ（まれ)」が指摘されている。また、入矢（1958）では「たとひ」との訓も提示されている。これらの指摘から、「遮莫……」については、「たとひ……もあれ」と読むことも一案であろうか。

〈引用文献〉

山田孝雄(1935)『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』宝文館
入矢義高(1958)『中国詩人選集　寒山』岩波書店
八木沢元(1975)『遊仙窟全講』増訂版、明治書院
鈴木一男(1979)「「就中・加之・遮莫・挙世」の訓法小論」『樟蔭国文学』17
古田恵美子(2003)「中国語「遮莫」「任他」等の受容と「さもあらばあれ」」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ人文科学』5
安部清哉・中山大輔（2012)「唐詩詩語「欹枕」の漢文訓読語としての「枕をそばだてて(聞く)」(側臥)」『学習院大学文学部研究年報』59
北﨑勇帆（2019)「「さもあらばあれ」の条件形式化」『日本語学論集』15
安部清哉(2022)「源順における漢から和―探韻から押韻の和歌そして歌の序の対句から”対の和歌”へ―」『人文』20
中山大輔・安部清哉(2024A)「日本漢詩文における重複語形調査(1)『経国集』篇:『経国集』畳語一覧付載」『東洋文化研究』26
中山大輔（2024B)「平安朝漢詩文における俗語「遮莫」："和習"的用法は見られるか」『和漢比較文学』73

〈データベース類〉 2025．3．31 確認

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』 https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search
『日本文学 Web 図書館』古典ライブラリー
于拙・安部清哉（2022)『日本語通時連語コーパス』 https://dccj.yocjyet.dev/
『新編日本古典文学全集 13　土佐日記　蜻蛉日記』小学館、1995 年

「候体語」について

山本（やまもと）　久（ひさし）（東京大学学生）

はじめに

発表者はこれまでに、一二〜一四世紀頃の和化漢文文書において、形容詞「目出（メデタシ）」、助動詞「度（タシ）」など、敬語「候」を使用する文書に偏って現れる語があることを指摘してきた（拙稿（二〇二四a・二〇二五a・b）。ただし、これらは、発表者の関心があった「借字表記語」の使用状況を検討する中で得られた知見だったため、「候」使用文書に偏って現れる語―本発表では仮に「候体語」と呼ぶ―として指摘したものは「借字表記によって表記される語」という限定を付した語にとどまっており、候体語の全体像を示すには至っていない。

候体語についての先行研究には、山田孝雄（著）（二〇一七）による「「候」といふ語の外「令」といふ語、「相」といふ語、「申」といふ語、「仕」といふ語、其他「奉」「存」「被成」「被下」等を盛んに使用するものにしてこれらの語がその文の特色を形成する一要素たるなり。」という指摘（一七九〜一八〇頁）、宝月圭吾（一九九九）による「一般に、「候文」と呼ばれているものは、文章の末尾を「候」で結び、また「可被成」というように、多く和様の漢文句を有する文体である。」（一八頁）という指摘がある（いずれも傍線は発表者による）。これらは貴重な記述だが、具体的な調査結果に基づくものではないため、改めて実証的な検討を行い、両氏の検討を継承する余地があるだろう。本発表では、「候」使用文書／不使用文書いずれの文書も多く発給した人物である今川了俊（一三二六〜一四二〇?）による発給文書の調査を手掛かりとして、候体語の全体像に迫ることを目指す。

第一節　今川了俊の発給文書への着目

候体語を具体的に指摘するためには、「候」使用文書／不使用文書、両文体の語彙をそれぞれに整理したのち、両者を比較し、使用文書にのみ使われている語彙を抜き出すことが必要となる。一度に大量の文書を対象とすることには限界があるので、ある程度の範囲を絞った検討を最初に行い、これを叩き台とした検討を積み重ねていくことで精度を上げていくのが現実的と思われる。本発表では、このような検討の第一歩として、室町幕府の九州探題として活動し、歌人としても知られる今川了俊の発給文書に着目したい。

今川了俊は、九州探題の職務として、書下様式の遵行状（【例1】）や感状（【例2】）といった多くの不使用文書を発給している。同時に、九州各地の武士に自らへの協力を依頼するため、多くの使用文書（書状・【例3】）を発給していることも知られている。これらの使用文書／不使用文書は、必ずしも了俊自身が文章を作成したわけではないと思われるが、了俊に関係するものという点

で、時代・地域的な差異の少ない文書を比較の対象にできるという利点がある。一人の人物を素材とすることの問題点は種々予想されるが、これらを克服する検討が今後行われることに期待し、最初の一歩として了俊の発給文書を対象とした検討を行ってみたい。

【例1】宗像神社文書・永和四（一三七八）年二月二五日今川了俊書下（遵行状）（『南北朝遺文九州編』五巻五四四九号）（本発表で挙げる文書の発給者は全て了俊であるため、発給者名は以後省略）

宗像大宮氏俊代申壱岐嶋石田保内薬師丸地頭職事、度々被レ仰之処、志佐濱田修理亮入道尚以違乱云々、太不レ可レ然、好而招二其咎一歟、所レ詮、不日停二止彼妨一、沙二汰一付下地於氏俊代一、可三執二進請取之状一、若猶不二事行一者、可レ有二殊沙汰一之状如レ件、

永和四年二月廿五日　　沙弥（花押）

志佐男房殿

【例2】門司文書・応安四（一三七一）年一〇月二〇日感状（『南北朝遺文九州編』五巻四九〇六号）

為二御方一被三馳二加当手一之条、尤以神妙、弥可レ被レ抽二軍忠一状如レ件、

応安四年十月廿日　　沙弥（花押）

門司左近将監殿

【例3】岡本文書・応安三（一三七〇）年七月一日書状（『南北朝遺文九州編』四巻四八二四号）

就二九州事一、可二罷下一候、御合力候者尤可二目出一候、相構候（々）早々御同心候者、悦入候、一向憑申候也、委細尚自二中国一可レ申候也、恐々謹言、

七月一日　　了俊（花押）

阿蘇大宮司殿

第二節　対象文書と分析方法

本章で分析の対象としたのは、今川了俊の発給文書のうち、現存部分の自立語が全て漢字表記をとる文書三一七通である。文書の収集は、『南北朝遺文九州編』四～六巻、『南北朝遺文中国四国編』四～六巻を中心として行い、このほかに川添昭二（一九八二）を参照して多少の文書を追加した。文書三一七通の文体上の内訳は、「候」使用文書八六通、「候」不使用文書二三一通となる。文書数としては不使用文書の方が二・七倍程度多いが、一通あたりの文章量は使用文書の方が長い傾向にあり、後述する基準での述べ語数は使用文書が四六二一語、不使用文書が八三〇九語を数え、言語量としては不使用文書が一・八倍程度となる。

分析方法としては、まず、これらの漢字文書三一七通について、一通ごとに稿者の解釈によって日本語文の再現を試み、そのうえで、再現した日本語文に対して、CHJ 平安時代編・形態論

情報規定集の「長単位」に基本的に従った分析を行った。こうして、「候」使用文書と不使用文書の使用語彙を整理・比較し、使用文書にのみ使われていた語を抽出して、候体語の候補とする。

候補を抽出する際、まず、一定の用例数が認められるものを候補とするため、使用文書に三例以上の用例が見られる語を対象とした。さらに、本発表の関心としては、意識的な使い分けがなされていた語を選び出したいので、文書内容に依存する面が大きい語は除くことにする。よって、名詞は全て対象外とし、「恐惶謹言」のような定型表現も対象外とした。また、「候」使用／不使用の対立が丁寧体／非丁寧体の対立であることを考え、敬語（「御～」など）や、形式上の敬語ではないが発給者と受給者の待遇関係に関わる語（「承（ウケタマハル）」「言上（ゴンジャウス）」「謹（ツツシンデ）」など）も本発表では対象外とした。

その後、これら候体語の候補が、了俊の発給文書以外の文書に照らしても候体語と言えるかどうかを検証することで、候体語の補訂を行う。ここで、現存文書全体を対象として考えたときに、古文書の語彙の「候」使用文書率（＝当該語が現れる「候」使用文書の文書数÷当該語が現れる全体の文書数）がどのような分布を示すかということは、現段階では不明である。ただし、拙稿（二〇二五a）で、一一世紀以前に使用開始された借字表記語は、この比率が 70％以下にとどまる一方、一二世紀以降に使用開始された借字表記語は、この比率が 90％以上となるものが多いことを指摘した。本発表では、現存文書での「候」使用文書率が 90％以上となるものを、「候」使用文書への偏りが特に大きい語と暫定的にみなし、候体語として認定したいと思う。

なお、日本語文の再現にあたって、助詞「ニ」「ノ」「ヲ」など無表記での使用が想定される語の認定や、和語か漢語か、漢語名詞か漢語サ変動詞か、といった品詞の認定には、私意を多く含むことを避けがたい。私意による判断が候体語の抽出には影響しないように、無表記での使用が想定される語は候体語としては認定しないこと、品詞の認定は問題が残ることを認めつつ使用文書と不使用文書との間で一貫させること、に留意した。

第三節　候体語の整理

前節で示した手順に基づき、候体語の候補として抽出したものは、次の一九語となる。

○動詞―改（アラタム）・下向（ゲカウス）・遣（ツカハス）・道行（ミチイク）・悦入（ヨロコビイル）／○形容詞―目出（メデタシ）・無勿体（モツタイナシ）／○形容動詞―不便（フビン）／○副詞―相構（アイカマヘテ）・一向（イッカウ）・兼又（カネテマタ）・随分（ズイブン）・抑（ソモソモ）・猶々（ナホナホ）・将又（ハタマタ）・早々（ハヤバヤ／サウサウ）・毎事（マイジ）・能々（ヨクヨク）・連々（レンレン）

ただし、結論から言うと、これらの多くは候体語とは言いがたいようである。紙幅の都合で詳

細を略すが、改(アラタム)・下向(ゲカウス)・遣(ツカハス)・不便(フビン)・一向(イッカウ)・随分(ズイブン)・抑(ソモソモ)・将又(ハタマタ)・早々(ハヤバヤ／サウサウ)・毎事(マイジ)・連々(レンレン)は、南北朝期においても、了俊の発給文書以外に目を転ずれば不使用文書の用例が多く見出せる。道行(ミチイク)や兼又(カネテマタ)は、南北朝期に限れば使用文書に偏ると言えそうだが、平安・鎌倉期の文書に遡ればそれほど偏っているとは言えない。

このように、多くの語は了俊の発給文書以外に目を転じると候体語から除かれるが、残った悦入(ヨロコビイル)、目出(メデタシ)、無勿体(モッタイナシ)、相構(アイカマヘテ)、猶々(ナホナホ)は、鎌倉期の文書に遡っても、確かに候体語と言える分布を示す(後述)。目出(メデタシ)は拙稿(二〇二五b)で指摘したが、それ以外の四語は候体語として新たに付け加えることができるものである。

さて、了俊の発給文書のみでは多くの語を得られなかったが、先の五語を手がかりに、これらの関連語から候体語を探りたい。以下、各語の直後に示す( )内の数字は、『鎌倉遺文』所収文書における、当該語が現れる「候」使用文書数(上)と全体の文書数(下)である。参考として、『鎌倉遺文』所収の漢字文書全体について「候」使用文書数／全体の文書数を示すと、九三二六／二九七九三(要補訂)となる。本発表で候体語として示す諸語の「候」使用文書率が、漢字文書全体の比率よりも高いかどうかについて二項検定を行うと、全て1%水準で有意である($p<.001$)。

まず動詞では、悦入(ヨロコビイル)(一一三／一一四)のほかにも、「すっかり～する」を表す複合動詞「―入」、例えば恐入(オソレイル)(六二／六三)、畏入(カシコマリイル)(三八／三八)、歎入(ナゲキイル)(六五／六七)などは、全て候体語である。形容詞では、目出(メデタシ)(九四／九四)、無勿体(モッタイナシ)(一六／一八)のほかにも、感情を表す形容詞には候体語があり、無心本(ココロモトナシ)(三四／三四)が挙げられる。副詞では、相構(アヒカマヘテ)(一四一／一五二)、猶々(ナヲナホ)(一五一／一六三)のほかに、真実(シンジツ)(六二／六九、副詞用法のみ計上)が挙げられる。

なお探索の余地があるが、了俊の発給文書を手がかりとして得られる候体語は以上のようなものである。ここで、これらの候体語には、不使用文書に使用される類義語が存在する。発表者の経験的なものではあるが、拙稿(二〇二五a)で挙げた候体語と合わせて、類義語とのペアをその語義とともに示せば次の通りとなる(／の上側が候体語、下側が類義語)。

○歎入(ナゲキイル)／歎(ナゲク)…悲しんでいる、残念である。
○恐入(オソレイル)／恐(オソル)…恐れている。申し訳ない。
○畏入(カシコマリイル)・目出(メデタシ)・悦入(ヨロコビイル)／神妙(シンベウ)・珍重(チンチヨウ)…喜んでいる。素晴らしい。ありがたい。
○無勿体(モッタイナシ)／不可然(シカルベカラズ)…不当である。残念である。

○無心本(ココロモトナシ)／不審(フシン)…不審である。不安である。
○猶々(ナホナホ)／猶(ナホ)…なお。それにしても。
○真実(シンジツ)／甚(ハナハダ)…実に。
○相構(アヒカマヘテ)／必(カナラズ)…必ず(～せよ)。
○何条(ナンデフ)(四五／四六)／何様(イカヤウ)…どのような。
○加様(カヤウ)(二五／二七)／如此(カクノゴトシ)…このような。このように。
○度(タシ)(六／六)／欲(～ムトオモフ)…したいと思う。

これらは文体的価値の異なる類義語とのペアとして、築島裕(一九六三)で体系的に提示された和文語／漢文訓読語に類似するものと言えるだろう。ただし、和文語／漢文訓読語が、それぞれ和文に偏って使用される／漢文訓読文に偏って使用される、という排他的な関係だったのに対し、ここで挙げた神妙(シンベウ)、欲(～ムトオモフ)などの類義語は使用文書にも多く使用されており、不使用文書に偏って使用されるというわけではないことに留意したい。

第四節　文体的価値の差が意味するもの

それでは、これら候体語／類義語のペア間にある文体的価値の差とは、より具体的には、どのような差(微妙な語義の差、位相差…)として捉えるべきものだろうか。

これには三つの類型があると考える。一つは、候体語の語そのものに本来的な待遇的価値はないものの、古文書においては待遇的価値を付与されていた、という待遇差の可能性である。例えば、拙稿(二〇二五b)で指摘したように、目出(メデタシ)と神妙(シンベウ)は、どちらも戦闘での尽力を誉める語として使用されるが、前者は書状をはじめとする互通文書で多く使用されるのに対し、後者は書下をはじめとする下達文書で多く使用される(三〇～三三頁)。

二つ目の類型は、これは厳密には類義語のペアではないということになるが、私信には基本的に「候」使用文書が使用されるという点を反映し、候体語の方は私信にふさわしい、感情を表す表現であるのに対し、類義語の方は行政上の連絡にも使用され得るような、事物の状態を表す表現である、という語義の差の可能性である。無心本(ココロモトナシ)と不審(フシン)などはこのように捉えるべきかと思われる。また、拙稿(二〇二五a)で候体語として挙げた浦山敷(ウラヤマシ)などは、対応する類義語を挙げること自体が難しい。これらは使用文書／不使用文書が類型的に持つ表現方法の差に応じて文体差が生じ、候体語が生み出されたものと言える。

最後の類型は、待遇的価値や語義の差は薄く、より純粋な類義語間の文体的価値の差という可能性である。例えば、加様(カヤウ)と如此(カクノゴトシ)に、待遇的価値の差や細かな語義の差

があったとは考えにくいように思う。

いずれにせよ、以上に挙げたペア間の差の意味や、そもそもペアとみること自体が妥当か、ということは今後の課題とする部分が大きい（これは和文語／漢文訓読語のペアについても、いまだ解決されていない問題であると思う）。ただし、もしペア間に待遇的価値の差や細かな語義の差があったとして、細かな語義の異なる語が使い分けられたり、待遇的価値の差が付与されたりしたということと自体、使用文書／不使用文の文体差が認識されていたことを示唆するものである。

おわりに

本発表では詳述できなかったが、本発表ならびに拙稿（二〇二五a）で提示した候体語の多くは、（ア）漢文文書での初出より平仮名文書での仮名書き例の初出が早い、（イ）これらが漢文文書に定着した後も平仮名文書での用例が多い、ことに特色がある。和化漢文の一類型である候文の特徴には、一一世紀後半以降に、平仮名文書の文法・表記などの特徴が漢文文書に取り入れられて成立したものが多い（矢田（二〇一一）・拙稿（二〇二四b））。こうした候体語の存在とその特徴は、平仮名文書からの特徴の取り入れが語彙の面でも行われていたことを示している。

そして、いまだ見通しの域を出ないが、この「平仮名文書からの取り入れ」は、従来は「私」の領域にあった平仮名文書が一一世紀から「公」の領域にも進出し（高橋（二〇一九））、漢字＝公、仮名＝私という字種間対立が弱められたことで生じたと考えている。この見通しが成り立つならば、上述の現象は、メディアの用途の変化が、その周辺に位置するメディアの文体に変化を生じたものと言える。文体の歴史はメディアの歴史と不可分であり、両者をともに描く試みを続けたい。

文献

川添昭二（一九八二）「「今川了俊の発給文書」川添昭二（編）『九州中世史研究三』文献出版／高橋一樹（二〇一九）「中世前期における書状のコミュニケーション論的考察」矢田俊文（編）『戦国期文書論』高志書院／築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会／宝月圭吾（一九九九）『中世日本の売券と徳政』吉川弘文館／矢田勉（二〇一一）「表記体間の干渉と新表記体の創出―候文の成立に対する仮名文書の関与について―」『文学』一二・三／山田孝雄（著）・藤本灯・田中草大・北﨑勇帆（編）（二〇一七）『日本文体の変遷：本文と解説』勉誠出版／拙稿（二〇二四a）「和化漢文における借字表記語彙の展開―古文書の「度（タシ）」を例に―」『国語と国文学』一〇一・一〇／同（二〇二四b）「古文書における「候」字形の変化」『日本語学会2024 年度秋季大会』／同（二〇二五a）「和化漢文における借字表記語彙」『日本語学論集』一一／同（二〇二五b）「和化漢文における借字表記語彙について―中世文書の「目出（メデタシ）」を例に―」『漢字文化研究』一五

享保十三年写「ハニヤシ行ノホジ」に見える空点の用法をめぐって
―洋野町種市に伝存する修験道文献の表記 一斑―

米谷（よねや） 隆史（たかし）（熊本県立大学）

一 はじめに

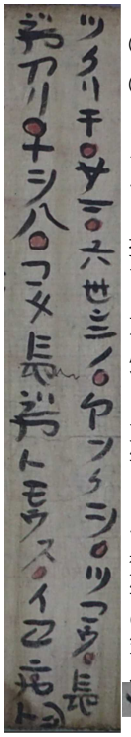
岩手県旧種市町（現、洋野町の一部）のいくつかの旧家には、近世初期以降の修験道関連の文献が伝承されてきた。現在、その大部分は洋野町立種市図書館に保管されており、一部はweb上の洋野ヒストリアデジタルアーカイブズでも閲覧することができる。

本発表は、これらの文献を調査対象として、次の五点を述べる。

① 近世前期から中期にかけての当地の方言の特徴を反映した表記で記された文献がある。

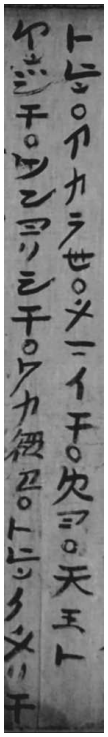
② ①において、撥音や促音に対応する「ン」が小書きされる文献がある。

③ ①において、撥音に対応する文字として梵字の空点（ン）を用いる文献がある。



牛頭天王の本地（近世中期写）
「…サマ・六セ（ン）ニノ・ケソクヲ・ツコウ・長／ジヤアリ・ナヲハ・コタ長ジヤトモウス…」（三万六千人の眷属を使う長者あり。名をば巨旦長者と申す）

④ 文献によっては、空点が濁音表示機能を担っている可能性がある。



ハニヤシ行ノホジ（享保十三年写）
「トヒ（ン）・アカラセ・タマイテ・火ヨ・天王ト／ケ（ン）ジテ・ソレヨリシテ・ワカ□ヱ・トヒ（ン）クタリテ」（飛び上がらせ給いて、火ヨ天王と現じて、それよりして我が□へ飛び下りて：「火ヨ」は不明。□は読めず。「経」カ）

⑤ ②~④のような表記形態を採る文献が成立した背景に、長音や促音、撥音が十分な長さを持たないという方言上の特徴と当地の修験を取り巻く社会状況の変化があったと考えられる。

二 種市の近世修験道文献

〈概要〉主に旧種市町内の四つの家（板橋家・一郷家・種市家・松原家）に伝来した免状・伝書（経文・祭文・暦・占書・御符他）等から成る。寛永五年（1628）の暦など、近世前期までに書写されたと見られる文献を含む。また、二〇二四年秋に松原家より新たに伝書類が発見された。

〈資料1〉仏セツ阿弥陀経（近世初期写：板橋家文書）

仏説阿弥陀経　如是我聞　一時　仏在　舎衛国　祇樹給孤独園　与大比丘衆　千二百五十人　倶皆是大阿羅漢衆所センジヒ・ク光・十人・クウカイ・シ大・アラカン・シウ相知識　長老舎利弗（摩訶目犍連摩訶）チシキ・チヤロ　シヤリイ仏　**バカ・ボ**クケ・天ハカ迦葉摩訶迦旃延摩訶拘絺羅離婆多周梨般陀カ小・ハカ・カセンネン・ハカ・クチラ・リハンタシリ・ハンダ

＊ルビ位置に仏説阿弥陀経本文を龍谷大学蔵元禄元年刊本（龍谷蔵 024.3-69-1）に拠って示した。
＊紙背を慶安五年以降の暦で裏打ち補強する。
●太字の濁点は三点。「ン」折々小書き。

〈資料2〉岡田芳朗（二〇〇四）『南部絵暦を読む』（大修館書店）I 7「種市経」51p

ところで、「種市経」の筆写達は漢字の経典類から直接「種市経」を産み出したのではなさそうだ。それは「如是我聞（にょぜがもん）」を「上シカモン」と書いたり、「千二百五十人倶」を「世ンジヒク光。十人。クウカイ」と全く意味の通じない区切り方をしていることからも分かる。

「種市経」の筆者であるこの地域の修験者達は、すでに文字から離れて、耳だけを

通じて聞いたままを書き止めたのであろう。つまり、最初は勿論正規の経典を読む者がいて、その声を書き止めた者が、多少の訛りを混じえて読み上げ、それを聞いてさらに書き止めたり書き写したりしているうちに、「種市経」が誕生したわけである。

〈資料3〉ハンニヤシン行ノヒケン

（近世初期写：松原家文書）冒頭部破損

右：『般若心経秘鍵』（国会図書館『十巻章』万治刊）info:ndljp/pid/2551270 ＊合符と加筆の音訓は省略

左：『ハンニヤシン行ノヒケン』

…此経（ノニ）数（タノ）翻訳（アリ）第一（ニ）羅上什（濁入）

コノ経エ・アマタノホンシャクアリ・大一ニワランシユン

三上蔵（ノ）訳入 今 所説（ノ）本平 是。（レナリ）次（ニ）

サンゾ・ウノシャクイマノ小セツノホンコレナリ・ツキノ

唐 遍平覚（濁入）三上蔵（ノ）翻去（ニハ）題（ニ）無（シ）ニ 仏説

ドノベンカクサンゾ・ウノホンニワ 大ニタワフンセツ

摩訶上 四平字（濁平）五蘊平 下（ニ）加（ヘノヲ）等平字

マカハンニヤノヨンジナシ五ウンノシタニトウノジヲ

遠平離上 下除（ノニク）ニ 一切（ノ）字（ヲ）

火イタリ・ヲンニリノシタニ・インサイノジヲ

陀羅尼（ノ）後（ニ）無（シ）ニ功上能上 次（ニ）大上周平（ノ）

ノソクタランニ・ノジニ・グウノナシツキニ・大シウ

義濁平浄濁平三上蔵本平（ノニハ）題（ニ）省（キ）ニ摩平訶上字（濁平）（ヲ）

ギ・小サンゾ・ウノホンニワ大ニタワマカノヨンジヲ・バン

真言（ノ）後（ニ）加（ヘタリ）ニ 功上能上（ヲ） 又法入月（濁入）

ブ・ギ・シンコンノ・ノチニグ・ウノウ火イタリ・ホウ火ノ

及（ヒ）般若平 両上三上蔵 翻去（ニハ）並（ニリ）有ニ序（濁平）分（濁平）

ヨヒハンニヤリウサンゾ・ウノホンニワナラヒニ・小フン

流平通上（ツノ） 又 陀羅尼 集経 第三 巻（キニ）

ルスウアリマンタ・タラニ・シユ行・大サンノマキニ

↓下欄○は、蔵野（一九七二）（一九七三ａｂ）や迫野（一九七二）他による『天正狂言本』、江口（二〇一六）他によるロシア資料、作田将三郎（二〇一二）（二〇一七）他による道中記等、東北方言の反映が見える近世文献の様相に沿うもの。◎は江口（二〇一六）が「ズナ」（綱）（発表者注：右上の圏点はキリル文字の表記に基づく無声化の表示）のように、後続音に鼻音がある場合に母音が無表記であったり、無声子音が有声化表記になったりすること」に言及し、ヤウニ∨ヤヌニ、ビイドロ∨ビンドロ、メイボニン∨メンボニン（名簿人）、ナイギ∨ナンギ（内儀）などの例をもとに、「鼻音によって先行音が濁音化されたり、先行母音が後続鼻音に吸収されたりすることがあったのかもしれない」とする。

◎語頭清音への濁点 ＊右掲出例を除く。漢語は摘記。和語は全例。（ ）内は『般若心経秘鍵』本文

漢 コノギ|ニ・ヨル人ンノ（依彼教人）五シウノ・グウ（五衆空）／ホン小ノジ|コウ（法性深号）／ジノシヤヘツニヨツテ（依智差別）／モシゾウノ・キヨモンテ（若以惣義）／ドクハ小セイニ・ナンツク（得名所証）／ビゾウ（秘蔵）ブンケン（普賢）

和 バチメノ○コントインハワ（初建者）／グウヨベ|テモ（歴劫）／ブテヲタツ（絶筆）／ヒキヲド|クモンテ（説秘義）

●助詞の重複↓大ニタ|ワ（題には×２）

【参考】「者（いっぱ）」は「インハワ」

●傍点の濁点三点。「ン」折々小書。「シユ」合字

【参考】沼本（一九九七）は三点濁点について「オリジナルな加点又は書写時代の明白なものは一五〇〇年代のものが殆どを占めている」とする。

○拗音等に対する類音の漢字使用

↓小セツ（所説）ギ小（義浄）小フン（序文）

↓ホウ火（法月） **↓火イ（加ヘ×２）**

↓大（第×２）大（題×２）大（大）

○アエ連母音のアイ表記↓火イ（加ヘ×２）

○オ段長音のウ段長音表記

↓グウノ（効能）グウノウ（効能）

○語中清音への濁点↓ノジ（後）

◎語頭清音への濁点

↓ド（唐）ベンカク（遍覚）グウノ（効能）

グウノウ（効能） **↓バンブギ（省き）**

○サ行-タ行の交替↓ルスウ（流通）

○長音韻尾部分の無表記

↓ド（唐）グウ|ノ（効能）

○促音の「ン」表記

↓フンセツ（仏説）インサイ（一切）

○「ン」の挿入

↓ラン|シユン（羅什）タランニ（陀羅尼）

↓バンブギ（省き） **マンタ（また）**

○ウの「ン」表記↓ランシユン|（羅什）

●-t韻尾によるｎ連声

↓ホウ火ノヨヒ（法月及び）

〈資料4〉ハンニヤシン行ノヒケン 紙背

○『ハンニヤシン行ノヒケン』紙背1

ヤブレ 事

定　保正坊

右依有器量令許之

状如件

慶長拾弐年丁未六月廿一日（1607）

於羽黒山寂光寺　在庁長花押（黒印）

○ハンニヤシン行ノヒケン 紙背2

坊号事

定　蓮華坊

右依有器量彼職令免許状於諸修験中此旨可被致披見者也仍而執達如件

于時正保仁乙酉年（1645）六月廿二日

於 羽黒山寂光寺 在丁

〈資料5〉僧都御免之事（松原家文書）

僧都御免之事

被聞召就不可有子細旨

三山奉行若王子御房所被

仰出也仍執達如件

法橋 美元花押

正徳六年（1716）六月五日

法橋 定応花押

南部八戸常泉院同行

多 明 坊

〈資料6〉森毅（一九八九）『修験道霞職の史的研究』（名著出版）第二章第二節 修験道派閥の角逐 141p

清鏡（発表者注：真田式部、糠部在庁や南部在庁と呼ばれた羽黒系の有力修験。元和六年（1620）自刃）が活躍した頃の、諸国修験界の動きは…中略…奥州糠部地方でも聖護院系本山派の動きは活潑で、…中略…有力修験が着々と教線を張り、真田式部の霞は徐々に空疎化される状況となっていた。

〈資料7〉『名川町史 第二巻 本編Ⅱ』（名川町誌編集委員会）第五編第三章第四節 本山派修験と八戸藩（滝尻善英 執筆）865p

…室町時代には聖護院門跡は若王子乗々院を熊野三山奉行として、奥州南部地方をはじめ、諸国の熊野先達を組織化し、ピラミッド型の支配体制（霞支配）を整えていくのである。…中略…八戸藩の場合、年行事の上位に「正年行事」の常泉院がおり、…中略…それぞれ郡ごとに年行事を配置し、末端の同行と呼ばれる一般修験を掌握した。八戸藩の修験直末は、常泉院栄尊が貞享四年（一六八七）に聖護院より総年行事職の奉書を受けていることから、…以下略

〈資料8〉祭文（延宝八年（1680）頃写：種市家文書）

神ナラビン（並びに） キク神 サス神 ワタル神

ドンネ（凶厄神） キヤウヤグ神（山の神） ヤマノ神（生霊） イキレヤウ

シユレヤウ（死霊） イガテカタヽリヲナシ

タモウベンキ（給うべき） ヲドコノアグ（男の悪） ヲンナノ

シユレヤウ（死霊） ホウシ（法師） ヤマブンシ（山伏） チコ（稚児） ワガ

ハンナリドモ（葉なりとも） イガテカタヽリヲナシ

タモウベンギヤ（給うべきや） 仏神三宝の恵み

ヲモツテ（以て） 七難即滅 七チナン ソクメダン カセカン

ワノホカエ（他へ） フキハライ（吹き払い） ビンジヂヨウキダ

ラス（讃語） サコサイヘイサイド（再拝再度） ウヤマンテ（敬って） 申す

エホウハンネカノトノトリノトシ（延宝八年辛酉の歳）

正月十一日吉 主ハ ウメモト

＊延宝八年は庚申。辛酉は延宝九（天和元）年

●「ン」折々小書。「シユ」合字。

○ウ段のオ段表記→メ五ミ（恵み）

○語中清音への濁点

↓キヤウヤグ神（凶厄神）イガテカ（いかでか×2）

ヲドコ（男）アグ（悪）ワガハン（若葉）

ナリドモ（なりとも）ベンギ（べき）

○サ行直音の拗音表記→シュ（死）×2

○促音の「ン」表記→ウヤマンテ（敬って）ハンネ（八年）

●「ン」の挿入

↓ナシン（成し）ベンキ（べき×2）ヤマブンシ（山伏）

ワガハン（若葉）

＊解釈には彦坂佳宣氏の教示を得たところがある。

三　空点を使用する文献二種

〈資料9〉牛頭天王の本地（近世中期写：松原家文書）＊〈資料10〉と表裏。末尾欠。

抑　々　仏　説　秘　密　牛頭天王経　武　塔
天神　毘沙門　天王　本地は　大日　左右の御手は
日光　月光　本地　法華経
ニコ・火コ・長長・ホシ・ホケ経〃十ニジワ
…中略…
抑　々　当たり　来たるる　歳の　ついでに
「ソモ々・アタリ・キタル々・トシノ・ツイ天ニ
良き月の　良き日を　選び　施行して
ヨキ月ノ・ヨキヒヲ・エラミ・セ行シテ
敬つて　申す　天に　白金　花　開　き　地に
ウヤマテ・モス・天ニ・シロ金・ハナヒラキ・ジニ
黄金　茎立ち　実成り　牛頭の　天王　玻璃
コカネ・クキタチ・ミナリ・五ソウノ・天王・ハリ
…中略…
聞こし召して　南　海へ　尋ねて　行き給う
キコシメ・シテ・ナ𞥐カイエ・タツネテ・ユキタモ
ほどに　道の　ほとりに　問申すに　日を　暮し
ホトニ・ミチノ・ホトリニ・トウ申ニ・ヒヲ・クラシ
泊まるべき　所は　無し　歩ける　所　に　三十
トマルベキ・トコロワ・ナシ・アリケル・トコロニ・サ〃十
二門を　建て　四十六の　棟を　並べ　家を
ニモヲ・タテ・シ〃十六ノ・ムネヲ・ナラベ・イエヲ
造りて　三万　六千　人の　眷属を　使う長
ツクリテ・サマ・六セ𞥐ニノ・ケソクヲ・ツコウ長

＊濁点に折々単点を使用するが、今回は区別していない。
●「ン」の代りに空点を使用。以下全例
ブ𞥐セツ（仏説）
ヒ𞥐ミツ（秘密）
ホシ𞥐（本地）　最初の…中略…の前
ナ𞥐カイ（南海）×2
六セ𞥐ニノ（六千人の）
サ十ニモ𞥐ヲ（三十二門を）
小ミ𞥐ソライト　（蘇民将来と）
前段と後段での𞥐用法は異なるが、ホシ𞥐（本地）以外は、「ン」の代替と解釈しうる。

〈資料10〉ハニヤシ行ノホジ（享保十三年[1728]写・松原家文書）
経文に　申すべし　尊くなくは　はやはや
■行モニ・モスベシ・タトク・ナクワ・ハヤ々
申せやと　ありければ、蛇の　父外道
ケコヲ・モセヤト・アリケレハ・ジヤノチチケト𞥐
蛇　の母外道　百八千人の　外道は
ジヤノハハケ土・ソウニワ・百ハセ人ノ・ケ土ワ
答えて　いわく　これほどに　尊き　経文を申す
コ大テ・ユワク・コレホトニ・タトキ・行モヲ申ス
そのうちに　百八の　角が　もげ落ちて　二つの
ソノウチニ・百ハチノ・ツノカ・モケヲジテ・フタツノ
御身と　定まり　牛六の　まなこも　二つに　定まりて
𞥐ミト・サタマリ・十六ノ・マナクモ・ニツニ・サタマリテ
五十八の　御　手足が　四足に定まり　四牛
五十八チノ・𞥐テアシカ・シソニ・サタマリ・シ十
余丈の御丈が　七尺二分に　定まりて
ヨ上ノ・𞥐タケカ・七シヤク・ニフニ・サタマリテ
菩薩の　位を　受けて　兜率天に
ホサツノ・クライヲ・ウケテ・ト小ツ天ニ
飛び　上がらせ　給いて　天王と
トヒ𞥐・アカラセ・タマイテ・火ヨ・天王ト
現じて　それよりして　我が　へ　飛び下りて
ケ𞥐ジテ・ソレヨリシテ・ワカ口エ・トヒ𞥐クタリテ
享保十三年戊申　／正月十七日大吉
（巻末）**上ホ十サネツチノエサル／正月十七日大吉**

●梵字　𞥐　𞥐　の使用。「ン」不使用
【参考】『八卦ノ占説』（寛政[1800]一二年以前写：種市家文書）
十一メン火ノノジユナリ／𞥐コロ・コロ・センダニ・マドギ・キヤ・キヤ・ソワカ

●空点が右寄に配される例

（守りの神）三例のうち二例。一例空点無

（不明）
二例とも

（闇浮檀金）
二例とも

（外道）三例のうち一例のみ。他は上掲二例。

●「ジヤ」合字
○ガ行拗音とザ（ダ）行拗音の交替
↓上ホ（享保）
【参考】蔵野（一九七三a）が『天正狂言本』の「ぎしやく」（磁石）に言及する他、『ハンニヤシン行ノヒケン』（右の引用部以外）にも「ノウ行（能除）」がある。

〈資料11〉ハニヤシ行ノホジの空点用法仮分類＊空点上の仮名の五十音順。空点は「ン」で代用

▼撥音が想定される（「ン」相当）

ロクマン火ン（六万巻）　コンコウ〇カイ（金剛界）　コンコウ〇ヤシヤ明王（金剛夜叉明王）

コウサンセン〇ヤシヤ明王（降三世夜叉明王）　ケンジテ（現じて）　ハセン人（八千人）

ロクマン火ン（六万巻）　ロクマン火ン（六万巻）　イチマン〇ハセ火（一万八千巻）

ハチマンハセ人（八万八千人）　クマンハセ（九万八千）

▼撥音が想定されない（濁点相当の可能性）　↓〈資料8〉の「ン」に類例あるか。

大マ王〇キン神（大魔王鬼神）×3　ケトン（外道）　ケン土（外道）

コウサンセン〇ヤシヤ明王（降三世夜叉明王）　大ンソウカイ（胎蔵界）

トヒン〇アカラセ（飛び上がらせ）　トヒンクタリ（飛び下り）　ヒンシヤモノ（毘沙門の）

マフンリノ（守りの）×2　エフンタコ（閻浮檀金）×2

▼語の同定ができず不明

ナイフンニテ×2　／　アサヒン〇天王　／　キン神〇シヤタン

【参考】「モウルイ〇キ神」の濁点？

〈資料12〉新井白石『同文通考』　宝暦十年（1760）刊本（柏原屋清右衛門他三書肆印本：発表者蔵）に拠る。

ン　梵字ノ点ニ取レルナリ。〈白蛾曰。世ノ人。無ノ字ノミヲ用フ。日本紀／ニハ。多ク務ノ字。又武ノ字ヲ用ヒラレシ。〉梵書ヲ按スルニ。●　コレヲ空点トモイヒ。円点トモイフ。コレヲ仰月トモ半月トモイフ。又荘厳ノ点トモイヘリ。其法イハユル空点ノ音ヲナス字ニ。此点ヲ加フルナリ。

空点ノ音トハ。俗ニハヌルトイフ音ノ事ナリ。〇タトヘハ。丸ノ字ハ阿トイフ字ナリ。ソレヲアント呼（ヨブ）時ニハ。荘厳ノ点ヲクハヘテ。奄（アン）ニ作ル類也。其余コレニ倣フヘシ。（巻三　22丁裏～23丁表）

↓古屋彰（一九七九）「解説」（『同文通考』勉誠社文庫70）は、宝永元年以降、段階な成立過程を経て成ったらしいこと、また、巻三までと巻四とは別に成立した可能性があることを述べている。なお、右の記載は写本の諸伝本にも見える。種市の修験達がこれに触れたとは考えにくいが、折々に小書していた「ン」と空点を同源と認識する余地は白石以上にあったと思われる。

〈資料13〉肥爪周二（二〇一九）「ng韻尾・清濁の表記の相関」

『日本語音節構造史の研究』（汲古書院）第三部第五章　340p

…図書寮本・観智院本ともに、和音などのng韻尾を標示するために、「レ」のような符号を仮名音注の「ウ（イ）」の右肩に付している。…中略…『類聚名義抄』のこの符号が、ng韻尾に標示のみならず、濁音の標示にも用いられていることも、よく知られていることである。…中略…この同じ符号を、一つの仮名音注に別々の意味（濁音標示・ng韻尾標示）で使った例も見られる。

［図書寮本］　繒　真云　ソウ（レ）（平上）〔二九四6〕　紅　真云　クウ（レ）（平上）〔三〇九6〕

［観智院本］　従　主ウ（レ）〔仏上二三ウ〕　上　シヤウ（レ）〔仏上四〇ウ〕　…以下挙例略

…中略…同じ補助符号「レ」が用いられている理由が、「鼻音性」という、濁音とng韻尾の共通の特徴の観察に基づくものであった（吉田金彦一九五九、築島一九六七）のか、表記通りには発音しないという意味の注意符号であった（渡辺修一一九七一、沼本一九九七）のかは、当時の濁音が、語頭においても前鼻音化していたかどうかが不明であり[4]、結論を出すのは難しい。…以下略…

↓肥爪（二〇一九）ではさらに、『類聚名義抄』以外で濁音表示とng韻尾表示に同一の補助符号を用いる文献として、興聖寺本『大唐西域記』巻第十二平安中期点、高山寺蔵『本命供略作法』嘉保三年（一〇九六）点が仮名の右肩に単点「丶」を、仁和寺蔵『諸経要集』巻第十八が『類聚名義抄』と同様に仮名の右肩に「レ」を用いる旨を記し、「濁音やng韻尾の発音に対して、「この仮名に何らかの要素を加えて発音する」あるいは「その仮名を変調させて発音する」という、直観的な把握が共通してあった

ことが想定されよう」としている。平安鎌倉期における濁音とng韻尾との関係を右の空点の二用法に結びつけるのには、鼻音性の捉え方などを含めた検討が必要ではあろうが、濁点相当の用法への転用を考える際の一視点になると考えられる。

四　まとめ

〈資料9〉〈資料10〉のような空点の使用がなされた要因として、「ン」が小書される一方、撥音と濁音を形成する要素とに何らかの共通性を認める意識が萌すことがあったためと推定した。はっきりしないことが多いが、いずれも当時の東北方言が、柴田（一九六二）のいうシラビーム方言的な性格を有していたことが基底にあると考えられる。また、一般の文字使用から見れば異形ともいえる空点の使用が選択され、「ジヤ」「シユ」のような合字風の仮名が頻用されるに際しては、当地の修験達が、藩政下で他の地域の修験との交渉を持たなくなっていったという時代背景も強く影響しているだろう。

なお、川本（一九七二）は、幕末南部地方の農民三浦命助の『獄中記』に見える濁点と圏点に注目し、語中尾で有声化したカ行音の「あがを（赤魚）」「かぎ（柿）」「あぐ（灰）」等には濁点が、語中尾に現れるガ行音の「あまかこい（雨囲い）」「うさぎ（兎）」「きゝくさき（聞き臭き）」等には圏点が用いられることを明らかにしたが、川本氏も記しているとおり、三浦命助は修験の心得もあった。命助をやや遡る東北での鼻濁音への圏点の使用例と見られるものに次がある。

一関市博物館蔵教学院文書書籍692『寒成由来』（東西庵南北門人天地軒中央稿、文化十五年写）

…弁舌をもてこび／へづろう者を親み、たといば／色を好むと言とも、深実をつぐす／女を遠ざけ、言を巧みにもふげ／ぞくにかゝるやづを愛すのたくい／あけてのゝぢるに足らず。

圏点はこの一例のみ。臨時的な使用（前行の「たくい」のように濁点を付さないつもりが、つい筆を置いてしまった等）と見られるが、語中有声化に対応する濁点とは別の符号を選択したことは動かない。地域・学統・時代の違いによって表出のあり方や水準は様々だが、種市の修験の空点や教学院の修験の圏点は、方言社会の中で宗教者が試みた表記上の模索の例として、共に見るべきものがあると考える。

〈参考文献〉（右で全体を提示したものを除く）

江口泰生（二〇一六）「18世紀下北方言の母音無声化―付：A．タタリノフ『レクシコン』注釈7（C～T）―」（『文化共生学研究』一五、岡山大学大学院社会文化科学研究科）。他同氏による『レクシコン』注釈全体を参考にした。

川本栄一郎（一九七二）「幕末の『獄中記』に見られるズーズー弁とガ行鼻濁音」（『国語学』九一）

蔵野嗣久（一九七二）「国語資料としての天正狂言本について―音韻表記の特徴を中心として―」（『国語国文論集』一、安田女子大学）

蔵野嗣久（一九七三a）「国語資料としての天正狂言本について 続・音韻表記の特徴を中心として」（『国語国文論集』四、安田女子大学）

蔵野嗣久（一九七三b）「天正狂言本の「つ」の仮名について」（『安田女子大学紀要』三）

右三点は蔵野嗣久（一九九三）『中世日本語論考』（渓水社）に改稿収録のものに拠った。

作田将三郎（二〇一二）「近世後期における八戸藩領紫波郡上土舘村の音声の方言的特徴について―『道中記覚』に見られる表記を手がかりとして―」（『旭川国文』二五）

作田将三郎（二〇一七）「道中記と庶民記録による近世中期以降の方言音韻史―岩手県二戸市におけるカ行・タ行子音の有声化現象を例に―」（『日本語学』三六-九）

迫野虔徳（一九七二）「『天正狂言本』追考」（『北九州大学開学25周年記念論文集』）

柴田武（一九六二）「音韻」（『方言学概説』、武蔵野書院）

沼本克明（一九九七）『日本漢字音の歴史的研究―体系と表記をめぐって―』（汲古書院）第六部第三章第四節「濁声 点から濁点へ」

▼本調査を進めるにあたっては、洋野町立種市図書館をはじめ、各地の典籍収蔵機関より懇切なご配慮を賜っています。また、洋野町町史編纂委員で松原家文書の所蔵者でもある酒井久男氏は、本発表に関わる貴重な情報を多数提供してくださいました。ここに記して御礼を申し上げます。

▼本調査は、科学研究費補助金（22K00590）助成を受けたものです。

作文からみる中学生のジェンダー意識の変遷

加藤 恵梨（愛知教育大学）、角谷 昌範（碧南市立大浜小学校）

1．はじめに

2015 年に国際連合による「持続可能な開発目標（SDGs）」の目標５ に「ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う」ことが設定され、学校教育においてもジェンダーに関する「隠れたカリキュラム」の見直しや、性別にとらわれない生き方をめざす「ジェンダー・フリー教育」の取り組みがみられるようになった（牛山 2014）。また、最近の中学校国語科教科書では従来の性別役割分業の構図から変化し、「家事も、仕事も」する母親像や、「悩める父親像」がみられる（中村 2020）。現場の教師の感覚としても、ジェンダーに関する生徒の意識はかわってきていると感じるが、具体的にどのようにかわってきているのかについて調査・分析している先行研究は管見の限りみられない。そこで本研究では、中学生が作文に描く女性（母親）（像）・男性（父親）（像）、職業観について、世情の変化に鑑みて考察することで、中学生のジェンダー意識の変遷を明らかにすることを目的とする。

2．調査資料

愛知教育大学附属岡崎中学校の年刊文集の1号（1953 年版）から 10 号（1962 年版）（8号は欠番）、36 号（1988 年版）から 45 号（1997 年版）、62 号（2014 年版）から 71 号（2023 年版）の計 29 冊を調査資料とする。

3．分析

3.1 1号（1953 年版）から 10 号（1962 年版）（8 号は欠番）

1955 年からの高度経済成長期を通じて核家族化が進行したことで、女性が家事・育児を担い、男性はサラリーマン化するという固定的な性別役割分担の形成が進んだ。このような世情が生徒の意識にも影響を与えているといえる。

・母親（像）

特に女子生徒の作文において、母親は家にいて、家事や育児をすべきだという考えがみられる。

(1) こういう事から考えてみても一家の中心である母は、家庭が円満に行くように子供達の面倒をよくみ、子供が学校から帰って来たら笑顔で迎えてやるとか、家庭を明かるくするふんいきを作ってほしい。そうしてお父さんを中心としたなごやかな家庭を築きあげ、家庭は家族の相談の場所であり、いこいの場所とするべきだ。（「戦争時代」、2 年生、2 号、女子）

母親は家にいて家事をしたり子どもの面倒をみたりするのが良いと考えており、父親を中心としたなごやかな家庭を築きあげるべきだと考えている。そのため、主婦が重労働であるということは理解していても、次の(2)のように、家事をするのはあくまで母親であるという意識が生徒にあることがうかがえる。

(2) （前略）主婦の重労働をなくすためには、やはり、もっと台所を中心とする家庭の設備を合理化することが必要だと思う。もちろんこれは、その家庭の経済によってもちがいがあるわけだ

が、その点はそれぞれの家計のゆるすはんいで、それに適応したように合理化してゆけばよいと思う。しかしそれよりももっとたいせつなことは、家族の人がお母さんの立場に立って、いろいろと考えてあげるということだと思う。そうすれば、主婦の人たちにも、精神的なゆとりが与えられると思う。また、みんなわかっていてくれるんだと思えば、自然と主婦の労働生活にも気持の上でのはりがでてきて、しごとそのものもらくになっていくとも考えられる。また、一軒の家の中だけでなく、婦人会などの集まりで話しあいをして、お互いになぐさめ、はげましあい、そうだんしあっていくのも、ひじょうにだいじなことだと思う。

（「農家の主婦」、3年生、6号、女子）

主婦の負担をなくすために、夫婦や家族で主婦の仕事を分担し、問題を解決しようというのではなく、「家庭の設備を合理化する」ことや、「家族の人がお母さんの立場に立って、いろいろと考えてあげる」こと、「婦人会などの集まりで話しあいをして、お互いになぐさめ、はげましあい、そうだんしあっていく」ことが解決策としてあげられている。

・女性（像）

上で見たような女性／母親像は、核家族化の進行による世情の変化だけでなく、両親からの教育によっても形づくられる。

(3) テレビを見ていると、母が、「洋子！あと片づけをしておいてちょうだい。」と言った。私は反射的に「いやだなあー、テレビは見たいし、勉強もしなきゃならんのに……。」半分おこりながら言い返した。（中略）そうしたら母は、「洋子は、ほんとうに横着だね。昔はそれだけの年になれば、女はみんなほうぼうへ奉公へ行ったもんだけどね。いくら男女同権という今だって、結局女は家事をしなければならないんだよ。女ならあんまり勉強する必要はないから、日曜日くらい家の手伝いをするもんだよ。」そういわれ、しかたなしに片づけを始めた。

（「「女」として、また「中学生」として」、3 年生、9 号、女子）

母親から女性は家事をするものであり、勉強はあまり必要ないと言われ、女子生徒はその考えを受け入れている。上記に準ずるような両親の言動によって、子どもたちの女性／母親（像）が形成されると考えられる。一方で、女性は家にいて家事や育児をするといった考えに反発しているものもみられる。

（4） サラリーマンならば、一日の仕事をして帰ってくれば、だいたいどこの家でも夕飯になる。食べ終り、仕事のまとめをし、自由の時間が暮れ一日が終る。実際、こんな事を毎日くりかえしているのだが、女の仕事といえば、朝食の用意をし、夫や子供を会社や学校に出し、掃除をし、一ヵ月間のいろいろの計画をたて、少しでも家の収入が多くなるように内職があれば内職をし、家の者の健康などを考える。まだあるだろうが主な事はこれだけだ。これではまるで、女は男や子供のために生まれてきたようなものになってしまう。昔ならば女は男のために生れてきてもいいかもしれない。だが、民主主義がさかんに唱えられ、教育も、選挙等も男女平等となっている現代において、女は男のためにあるなどという考えは無茶である。明らかにまちがっている。 （「女は腰が軽くなければだめだ？」、3 年生、7 号、女子）

女性の主な仕事が下線部のような夫や子供の世話であることに疑問を感じ、「女は男のためにあるなどという考えは無茶である」と述べている。

・父親（像）

父親はどのような存在であったのだろうか。

（5） いつもの父ちゃんは、母ちゃんにはぜっ対にまけない。このあいだも母ちゃんが、父ちゃんに向かって文句をいったので、父ちゃんの怒りは、ばくはつした。そしたら、母ちゃんはいっぺんにだまってしまった。 （「父と母」、1 年生、1号、男子）

「いつもの父ちゃんは、母ちゃんにぜっ対にまけない」とあるように、子どもの目から見ても、家庭において父親のほうが母親よりも強いという力関係があり、父親は母親に怒りをばくはつさせることがあることがわかる。

(6) 「でていってくれ。」また始まった。父は喧嘩をすると、決ってこの言葉を言う。母もこの言葉は、父のくせだと思って、出ては行かない。（中略）喧嘩をした後で、父は祖母に、言ったそうである。「仕方がないな、おれが好きでもらったやつだから。」と父もいい所がある。

（「父と酒」、1年生、5号、女子）

家は父親のものであり、母親は父親がもらってきたものであるという考えが父親にあること、また子どもたちはそのような父親の考えに疑問を抱かず、受け入れていることがみてとれる。

(7) 私のある友人の家では、お風呂へ入る順番が決っているとか、又、おとうさんには自由に口がきけないとか、少しでも学校から帰るのが遅いとひどく叱られるそうです。

（「家庭の民主化」、3 年生、3号、女子）

一番風呂は父親が入る、父親とは自由に口がきけないとあるように、家庭内において父親が特別な地位にあることがわかる。

・職業観

働く女性についてはどのように感じていたのであろうか。

(8) 仕事に熱心である一方、仕事から帰ってきてもぐちだとか悪口などを必ずいう人がいるそこが女の欠点なのだろう。（「家政婦」、2 年生、6 号、女子）

働く女性を批判的に捉えている。男性についてそのように記述されているものはない。

（9） 私は、男女同権の世の中に、男が働いているからよい。女が働いているから、恥ずかしい。などと言うことはないと思う。かえって私はみんなに、「お母さんは立派だろう。」と、言いたいくらいだ。もし、あの子の家はお母さんが働いている。と言って、仲間はずれにする子がいたとしたら、仲間はずれにされてもよい。 （「父と私」、2年生、6 号、女子）

母親が働いていることを好ましく思っていない人が多く、母親が働いていることでその子どもが仲間はずれにされることもあったことがわかる。その一方で、女性が仕事を辞めて家庭に入ることに疑問を感じている生徒もいる。

(10) 女子は家庭に入ってしまうと、職業生活から離れてしまって、おとなしい一家の主婦になってしまう。これではせっかくの才能も伸ばし得ないのではないか。結婚しなければいいのかも知れないが、昔から「結婚は女の命」などということばもあるようだ、やはり結婚すればなにか都合がよいのだろうか――。こんなことは今の私には、まったくわからないことだ。それにしても女が職場で働きながら、幸福をつかみとることは、ほんとに大変なことだろう。

（「母のことなど」、2 年生、1号、女子）

女性が家庭に入ってしまうことで、せっかくの才能を伸ばし得ないことを残念に思う気持ちをもつ一方で、女性が働きながら幸福をつかみとることは大変なことだと考えている。

当時の女子中学生がなりたい職業はどのようなものだったのだろうか。

(11) 女の生き方はいろいろある、けれど、日本の女性の職業でいちばん多いのは、紡績女工で

はないかしら―。（中略）みんな、はじめから女工を希望していたのだろうか、そんな人はおそらく少いことだろう。私たちと同じように事務員になりたいとか、店員になりたいとか、あるいはもっといろいろ希望をもっていただろうのに。（「母のことなど」、2 年生、1 号、女子）

（12）わたしが大きくなったら／幼稚園の先生か／保母さんか／コジ院の先生になるつもりだ（「大きくなったら」、2年生、6 号、女子）

（11）と(12)から、女子生徒は事務員や店員、幼稚園や保育園、児童養護施設の先生などになりたいと思っていたことがうかがえる。

・学校での男女

家庭でみられる男女の差は、学校内でもあった。

（13）私が「男に生れて来たかった」と思い始めたのは、たしか小学校、五、六年の時だったと思う。運動会で男子は騎馬戦、帽子取りなどいさましいことをやっているのに女子はつまらない踊りを踊る。それがとても、うらやましかった。（中略）女子が男子にあこがれる反面、男子は女子を馬鹿にする。（本当の気持からなのかはうたがわしいが冗談とは受けとれない）。「女子は頭が悪い。」「女子は背が低いなあ。」それもわざと女子に聞こえるように……。（「女であることは!」、3 年生、6 号、女子）

女子は男子にあこがれていたが、男子は女子に「女子は頭が悪い」「女子は背が低い」などと言って馬鹿にしていたようである。

（14）この様な行程のうち「なんだ、この女子の原紙のきり方は!」とか「こんな印刷の仕方は駄目だ。」等と、男子の英語委員にいわれたり、皆からけなされると、どうしても女子の英語委員は消極的にならざるを得ない。確かに原紙のきり方が悪かったという事で皆に迷惑をかけて済まなかったと思う。しかし、あまりそういう事をいわれると女子の委員はもう手も足も出なくなってしまった。そしてだんだんと圧迫を感じるようになってきた。それに相談の時に女子の発言は少なく消極的であった。（「英語学習委員として」、3 年生、4 号、男子3名）

女子が男子に文句を言われたり、けなされたりする様子や、女子の発言が少なく消極的であったことが述べられている。

3.2 36 号（1988 年版）から 45 号（1997 年版）

1985 年に女子差別撤廃条約、1986 年に男女雇用機会均等法が成立し、1993 年中学校・1994 年高校で「家庭科」が男女共通必修科目になるなど、ジェンダー平等の実現にむけて日本社会が動き始めた時期で、生徒のジェンダー意識も徐々に変化している。

・女性（母親）（像）

しかしながら、家事・育児をするのは母親であるという根強い意識が、女子生徒に多くみられる。

（15）男女平等のもとに、女性の社会進出もまためざましく、そのために家庭に入る女性年齢がたかくなってきている事も事実です。（中略）男女平等のもとで、女性が働く事は、家庭もニの次になり、そのために、「1.53 ショック」が、これからも続くとすれば、それは、とても悲しい気がしました。高度成長を続け、経済大国と言われる我国ですが、私はまず、家庭を主に置き、温かで、小さな「きらめき」を身近な所から少しずつ落としていけたらと考えます。（「21 世紀―私たちは何ができるだろうか」、2 年生、39 号、女子）

女性は仕事をもっていてもいつかは家庭に入り、家事・育児をするという考えを有していることが

うかがえる。このような意識が根強くある反面、固定観念を批判する記述もみられる。

（16）日本は昔から男、女の区別があり、男の人の方が強く、そして女の人は言うなりになっていたのでした。みんなから“生意気”だといわれたのでしょうか。当時の人達の考え方はおかしい、と私は何度も思いました。その頃の人の自由というものを全く無視した女性に対する考え方が、いかに偏っていたかがわかります。（「女性のこころ」、2年生、37 号、女子）

「当時の人達の考え方はおかしい」と従来の女性に対する考え方に疑問を呈している。

・男性（父親）（像）

男性も家事や育児をするという意識を女子生徒だけではなく、男子生徒ももっている。

（17）今、女性の社会進出が目立ってきて、男女平等という言葉をよく聞くようになりました。私達が大人になるころには、男性も家事や育児をあたりまえにするような時代になっているかもしれませんが、今の時期から、保育に対する基本的な考え方をもっていれば、時代に順応して優れた保育をすることができると思います。

（「人の成長を見つめよう」、3年生、41 号、女子）

（18）今は社会に女性が進出し、共かせぎの家が増えてきているから、男性も保育を学んで、幼児を育てることができるのが望ましいらしいので、男性がこういう単元で勉強することができるのはいいことだと思いました。（「好きといって」、3年生、43 号、男子）

・学校での男女

数は少ないものの、学校においても班長としてメンバーを引っ張っていこうとする女子生徒の姿がみられる。

（19）私達 C 組三班は、男子三人、女子二人の班である。私は班長になった。なんとクラスでたった一人の女班長。私は班員をひきいて、一番目の試練に立ち向かっていった。

（「平成二年度版 修学旅行報告書」、3 年生、38 号、女子）

このように生徒のジェンダー意識も変化しているが、その一方で、次の(20)や（21）の下線部のように、女性を批判するような表現が無意識に使われているものもある。

(20) ぼくが日常生活でよく思うことわざは、ねこに小判やぶたに真じゅだ。ぶすな女の人が、けしょうをぬり、チャラチャラとした飾りを付けても、よけいにぶすに見える。かちが全くない。

（「「日本語」って何だろう」、1 年生、37 号、男子）

(21) 三日もたったんだ。こっちから言わなくたって、前はとても仲のよい親友だ。また、仲よくなるさと思いつつ学校へ行った。ところがどっこい、全く話しかけてくれない。なんて、さっぱりしない女のくさったようなやつなんだ。いつもは、さっぱりしていて許してくれたのに。

（「心の五日間戦争」、1 年生、37号、男子）

3.3 62 号（2014 年版）から 71 号（2023 年版）

2015 年に男女平等の推進と働く女性の活躍を後押しする法律である女性活躍推進法が成立するなど、女性が働く環境の整備が進められ、活躍の場が広がった。

62号から71号において、男女差別や女性蔑視に関する事柄や、男性／父親（像）・女性／母親（像）、職業観をとりあげている作文はほとんどみられない。生徒にとって、それらは作文の題材としてとりあげるほどの問題ではなくなったからだと考えられる。しかし、数は少ないものの、ジェンダー平等や個性の大切さを訴えているものがある。

・男性／父親（像）、女性／母親（像）

(22) 男女差別は、昔、男は力仕事、女は家事と決めつけられていて、現代社会にも根付いている。価値観の差は、男女は関係なく、一人一人の感情の差によるものだ。

（「社会に潜む「差」」、2 年生、69 号、男子）

(23) 終戦後、「両性の本質的平等」が唱えられてから何十年も経ち、今は男も女も変らないように扱われている。私たちは、性別の垣根を越えて自分を表現できるようになった。例えば、男女の区別なく着られるユニセックスの服や、学校の制服の自由化などがあげられる。そもそも、スコットランドの民族衣装は、スカートが男性の正装だ。スカートは女性がはくもの、という思い込みは、今や時代遅れなのだ。

私たちは、「女らしさ」「男らしさ」にとらわれる必要はない。そのままの自分として、自由に生きることができる。（中略）私も、あなたも、あなたの隣にいる人も、男性としてではなく、女性としてではなく、たった一人の人間として、ここに在るのだ。

（「私はスカートをはかない」、3年生、68 号、女子）

昔から日本に男は（力）仕事、女は家庭という固定観念があることを批判し、「価値観の差は、男女関係なく、一人一人の感情の差によるもの」であるという記述や、男女の別なく「たった一人の人間として、ここに在る」と記述されているように、個性を認めることの重要性が述べられている。

・職業観

(24) 日本には昔から「男は仕事、女は家庭」という固定観念があります。なぜそのような固定観念があるのでしょうか?その理由は女性よりも男子の方が体力があるため、また、昔は男子の稼ぎが多かったと考えられるからです。現在となっては男性だけではなく、女性も多く稼いでいる人はたくさんいます。だから私は男女関係なく、働くことが好きな人が働けばよいと思いました。そして女性は産休、育児で仕事を退職してしまう方がいます。そんな女性たちをどうしたら少しでも減らしていくことができるのか考えていきたいと思いました。

（「日本のライフスタイルにあった働き方～これからの女性の働き方～」、2年生、69 号、女子）

職業観については、昔からある性別役割分業に疑問を呈し、「男女関係なく、働くことが好きな人が働けばよい」と主張している。

以上のように、中学生のジェンダー意識は変化している。日本社会が変化し、そのことが生徒のジェンダー意識に影響を与えているからであると考えられる。[1]

引用文献

牛山恵（2014）『ジェンダーと言葉の教育：男の子・女の子の枠組みを超えて』国土社.

中村亮太（2020）「国語科教科書における性別役割の描かれ方―「卒業ホームラン」における父親・母親像を中心に―」『奈良教育大学国文：研究と教育』43, 97-81.

村田ひろ子（2023）「ジェンダーをめぐる中高生と親の意識～「中学生・高校生の生活と意識調査2022」から②」『放送研究と調査』73 巻 6 号, 64-75.

[1] 村田（2023）は、中高生とその父母のジェンダーをめぐる意識について調査している。その結果、中高生の親にあたる年代の男性では，伝統的な男女のあり方に基づいた教育方針に賛成な人が多い（p.68）が、中高生の多くは、従来の性別役割分業にとらわれることなく、父母とは異なる子育てを志向している（p.74）ことを指摘している。

東京アクセントの尾高型の共時的・通時的分析

中澤（なかざわ）　光平（こうへい）（信州大学）
kohein@shinshu-u.ac.jp

1. はじめに

本発表では，東京（方言）のアクセント（以下，単に「東京アクセント」）の尾高型を共時的，通時的観点から分析する。

種々の先行研究や教科書，辞典などで記述されるように，東京アクセントは N 拍の語に N+1 の型があるとされる（cf. 平山編 1960: 11，上野 2003: 61，松森ほか 2012: 23–24）。具体的には，東京アクセントは下がり目（] で表す）の有無と位置によって区別される，(1) のような体系をなすと考えられている。

(1) 東京アクセントの体系

1	2	3	4	5	6 拍	型
蚊=	カゼ=	サカナ=	トモダチ=	トナリムラ=	ムラサキイロ=	@
手]	ヤマ]	オトコ]	オトート]	イチネンメ]	ジューイチガツ]	－①
	ソ]ラ	ソバ]ヤ	カラカ]サ	ニホンザ]ル	カンコーバ]ス	－②
		カ]ラス	ムラ]サキ	ナツマ]ツリ	ムカシバ]ナシ	－③
			カ]マキリ	フキ]ンシン	ナマハ]ルマキ	－④
				オ]フサイド	オマ]ワリサン	－⑤
					サ]プリメント	－⑥

（上野 2003: 62 より。一部表記を変更。「=」は下がり目なしを表す）

(1) の「@」は無核を，丸数字はモーラ単位での核の位置を表し，－（マイナス）は核の位置を後ろ（語末）から数えることを表す。

ところが，N+1 の型の語例として挙げられるのは (1) のように名詞であり，動詞や形容詞のような用言だけでなく，副詞も語例として挙げられない。これはなぜだろうか。

(1) で－①と書かれた，語末の拍に核が置かれる型を尾高型という（松森ほか 2012: 125）。平板型と尾高型の違いは，(2) のように後続する助詞や文節の高さの違いとして現れる。

(2) a.　カゼガ LHH，カゼカラ LHHH　／　ヤマガ LHL，ヤマカラ LHLL（cf. 上野 1977: 284）
　　b.　ハナ ミル（鼻見る）LHHL　／　ハナ ミル（花見る）LHML（cf. 上野 1977: 289）
（H：高音調，L：低音調，M：中音調）

すなわち，尾高型の後では助詞や文節が低くなる（ハナ=「鼻」，ハナ]「花」）。川上（1953）で議論されているように，プロミネンスによっては異なるパターンも見られるが，語末核ではピッチの下降が生じることに変わりはない。

ところが，この尾高型は東京アクセントの場合事実上名詞にのみ認められ，動詞や形容詞には (2) のような対立が見られない。一方で，動詞や形容詞には (3) のような交替が見られる。

(3) a. 「する」 スル= コト ／ スル]カラ
b. 「した」 シタ= コト ／ シタ]カラ
c. 「甘い」 アマイ= モノ ／ アマイ]カラ ～ アマ]イカラ

(3c) の形容詞のように，重音節の場合，下がり目が一つ前にずれることがある。
(3) 以外にも，副詞や副詞用法のある名詞では (4) のような交替が見られる。

(4) a. 「ほっと」 ホット= スル ／ ホット]ワ スル
b. 「明日」 アシタ= イク ／ アシタ]モ イク cf. アシタ]ニ ナル
c. 「みんな」 ミンナ= イル ／ ミンナ]ワ イナイ cf. ミンナ]デ ヤル
d. 「昨日」 キノー= キタ ／ キノ]ーワ キタ cf. キノ]ーデ オワッタ
e. 「一昨日」 オトトイ= キタ ／ オトト]イワ キタ cf. オトト]イデ オワッタ
cf. 「来年」 ライネン= クル ／ ライネンワ= クル cf. ライネンデ= オワル

(3c) に対応して，(4d, e) のように重音節終わりで次末拍に下がり目がある語にも同様の交替が見られる。

なお，「時や数量を表わす名詞の語末の核は，副詞用法では消える」（上野 2003: 73）などと説明されることがあるが，下がり目が消えるのは文節末の場合で，助詞が後続するときは下がり目が現れる。(4a) のような副詞は分析が難しいが，「昔」ムカシ=，「来年」ライネン= のような無核の名詞は（単独）副詞用法でも助詞が後続しても一貫して無核のため，(4b, c, d) は語末の核が（単独副詞用法で）消えると分析できる。また，「数量を表わす名詞」については 4 節で検討する。

このように，文節末に語末核は置かれず，平板型との交替を生じる。(2b) のように文節末の語末核が消えない名詞の尾高型の方がむしろ例外と言える。

そのため本発表では，東京アクセントにおいてなぜ名詞の語末核が消去されないのかを，共時的および通時的観点から分析することを試みる。

2. 東京アクセントにおける名詞以外の尾高型

(3, 4) のように，名詞の尾高型以外では一般に文節末に核が置かれないことを確認した。しかし，(5) のように，名詞以外でも尾高型が見られる例がある。

(5) a. スリャ]（イー）「すれば（いい）」
b. シチャ]（ダメダ）「しては（駄目だ）」
c. ヤリャ]（シナイ）「やりは（しない）」

（発表者の内省および聞き取り調査による）

(5a) はスレ]バ，(5b) はシテ]ワ，(5c) はヤリ]ワがそれぞれ転じたものである。すなわち，(5) の元の型は尾高型ではない（下がり目が文節末にない）。このことから，(5) は尾高型のように見えるが，基底形では尾高型ではないため核が消えないと考えられる。

(6) a. //スレ]バ// → スリャ]ー → スリャ]
b. //シテ]ワ// → シチャ]ー → シチャ]
c. //ヤリ]ワ// → ヤリャ]ー → ヤリャ]
x [1] y [2] z

(6) の [1] は基底形 x から y への形態音韻論的（随意）規則による融合で，[2] は y から z への表層形レベルでの短母音化である。y から z への短母音化は表層形レベルのもののため核が消えないのだと解釈する。

(4d) と (5, 6) との違いは，(4d) が /キノー]/ と音韻的には尾高型であるものが重音節のため音声レベルで下がり目が一つ前にずれるのに対し，スリャ]ー は //スレ]バ// に対応し音韻的にも /スリャ]ー/ であるためと解釈する。

(5) と同様の例は助詞との融合にも見られる。

(7) コレダケ]ワ ～ コレダキャ]ー ～ コレダキャ] cf. コレダケ=（ヤットク）
アソコニ]ワ ～ アソコニャ]ー ～ アソコニャ] cf. アソコニ=（アッタ）
アイツト]ワ ～ アイツタ]ー ～ アイツタ] cf. アイツト=（ナカガ イー）
（発表者の内省による）

なお，「では」に対応する ジャ には (8) のように 3 通りの音調がある。

(8) a. コレジャ= ナ]イ ／ b. コレジャ] ナ]イ ／ c. コレジャ]ナイ
（発表者の内省による）

(8a) は「これだ」の単純否定で，「は」によるとりたての意識はない。(8b) は「は」によるとりたて（対比）があり，コレジャ]ー ナ]イ のように長母音形と交替可能である（8a は長母音形にならない）。(8c) は否定の意味ではなく，コレジャ]ン のように文末詞「ジャン」と置き替え可能なため「ジャ」と「ナイ」で切れず「ジャナイ」で文末詞として 1 単位化している（発表者の内省では本来の形の デワナイ は不自然で，デワナイカ および ジャナイカ，ジャンカ は可）。(8a) の「ジャ」はこれで 1 単位であり，(8b) は一見尾高型に見えるが「デ]ワ ～ ジャ]ー」が表層で短母音化した形であり (5, 7) と同様であることがわかる。

名詞の尾高型も同様に考えると，ハナ]（ミ]ル）「花（見る）」は †ハナ]ー（ミ]ル）が短母音化した形と見なせそうである。

ところが，この分析はやや困難である。発表者の内省および東京（近郊）出身者数名に対する調査では，山梨県出身の話者を除いて †ハナ]ー のような長母音形が認められないためである。

3. ゼロ標識「=Ø」による名詞の尾高型の解釈

本発表では，ꜜハナ]ー（ミ]ル）「花（見る）」のような形を立てて ハナ]（ミ]ル）の尾高型を説明する代わりに，ハナ]=Ø（「=」は接語境界）のようにゼロ標識が後接しているという解釈を提案する。=Ø は格助詞 =オ「を」などの異形態であり，ハナ]=オ ～ ハナ]=Ø と交替する。(2b) はハナ=̩=Ø ミル（鼻見る）／ ハナ]=Ø ミル（花見る）と解釈される。すなわち，名詞の尾高型はゼロ標識が後接した形であって，核が文節末にないため下がり目が消えないと説明される。これに対し，(4b, c) の「アシタ=̩ イク」「ミンナ=̩ イル」のような副詞用法では=Ø が後続しないため文節末の核が削除されると分析される。

(9) a. ハナ]=Ø —（文節末核の削除【不適用】）→ ハナ]
b. ミンナ] —（文節末核の削除【適用】）→ ミンナ

この説明には，Ø（ゼロ）を形態素として認めてよいかという問題がある。名詞の尾高型を説明するためだけに Ø 形態素を設けるのであれば ad hoc であり，Ø 形態素と尾高型とが 1 対 1 に対応するため循環論になってしまう。

Ø 形態素を認めるのは格助詞のように有形の形態素が現れる環境に限るとすれば循環論になるという問題は多少解消されるが，いずれにしても Ø 形態素を助詞にのみ認めるのであれば ad hoc であることに変わりはない。

4. Ø 形態素の認定をめぐって：数詞との関係

名詞の尾高型の説明のためだけに Ø 形態素を認めるのであれば循環論になってしまうが，他にも Ø 形態素を認めることで説明がつく現象があるのであれば，名詞の尾高型に=Ø を認める解釈の妥当性が高まる。

本発表では，数詞のアクセントが Ø 形態素を認めるもう一つの根拠となることを主張する。

「二つ，三つ」や「二人，九日」のような尾高型の数詞は，単独副詞用法では平板型に交替する。

(10) a. 「二つ」 フタツ=̩ アル ／ フタツ]モ アル ／ フタツ]ニ スル
b. 「二人」 フタリ=̩ イル ／ フタリ]ワ イル ／ フタリ]デ ヤル
c. 「一度」 イチド=̩ ヤル ／ イチド]ワ ヤル ／ イチド]デ オワル
d. 「五人」 ゴニン=̩ イル ／ ゴニ]ンモ イル ／ ゴニ]ンデ ヤル
e. 「一人」 ヒト]リ イル ／ ヒト]リワ イル ／ ヒト]リデ ヤル
f. 「五年」 ゴネン=̩ ヤル ／ ゴネンワ=̩ ヤル ／ ゴネンデ=̩ オワル

（発表者の内省および聞き取り調査による）

尾高型以外では交替がない。また，(10d) のように重音節終わりで次末拍に下がり目がある語にも交替が見られる。この現象は (4) と同様である。

ところが，この交替は (11) のような例では生じない。

(11) a. 「六」ロク] カゾエル ／ ロク]マデ カゾエル ／ ロク]デ ワル
b. 「百」 ヒャク] カゾエル ／ ヒャク]マデ カゾエル ／ ヒャク]デ ワル
c. 「五万」 ゴマ]ン カゾエル ／ ゴマ]ンマデ カゾエル ／ ゴマ]ンデ ワル
（発表者の内省および聞き取り調査による）

上野（2003: 75）では「サンゼ]ンア]ル（3 千ある），ヨンマ]ンダ]ス（4 万出す)」という重音節終わりで次末拍に下がり目がある語の例が「末核と副詞用法」の例外として述べられている。

イチ]「一」，ハチ]「八」，ヒャク]「百」，ゴヒャク]「五百」などの語末核の語（あるいは ジュ]ー「十」，セ]ン「千」，ゴセ]ン「五千」などの型の語）は，単独副詞用法でも下がり目が消えない。(10c, d) の例から，これを漢語系の数詞の特徴と一般化することはできない。

(11) は，漢語系の数詞で助数詞を伴わない場合である。「ひと，ふた，…」などの和語系の数詞と異なり，漢語系の数詞は助数詞が必須ではない。そして，助数詞がない漢語系の数詞では平板型への交替が起きない。見方を変えて，漢語系の数詞を含め全ての数詞は助数詞が必須であり，漢語系の数詞には「-つ」が後接せず代わりに「-Ø」（「-」は形態素境界）を伴うとすれば，漢語系の数詞が例外にならず，(9) と同様の規則によって無核化しないことを説明することができる。

(12) a. 「二つ」フタ-ツ] —（文節末核の削除【適用】）→ フタツ（ある）
b. 「一度」イチ-ド] —（文節末核の削除【適用】）→ イチド（やる）
c. 「一つ」ヒト]-ツ —（文節末核の削除【不適用】）→ ヒト]ツ（ある）
d. 「六」ロク]-Ø —（文節末核の削除【不適用】）→ ロク]（ある）
e. 「億」オ]ク-Ø —（文節末核の削除【不適用】）→ オ]ク（ある）
f. 「二個」ニ]-コ —（文節末核の削除【不適用】）→ ニ]コ（ある）

和語系の数詞でも，ヨ]ン「四」，ナ]ナ「七」，ト]ー「十」は助数詞が必須ではないが，ヨ]ン「四」，ト]ー「十」は重音節終わりで次末拍に下がり目がある型だが副詞用法でも平板型にならない。/ヨ]ン/, /ト]ー/ と語末の核ではないためと解釈することもできるが，仮に /ヨン]/, /トー]/ であっても ヨン]-Ø，トー]-Ø と-Ø の助数詞を伴うと解釈すれば，語末（文節末）に核がないため無核化しないことが説明できる（cf. 「こう」コー= スル ／ コ]ーワ シナイ)。

Ø 形態素を認めることで，漢語系を含め数詞は助数詞を必ず伴うと一般化したうえでアクセントの振舞いが説明できる。

5. 東京アクセントの尾高型の通時的分析

多くの先行研究に示されるとおり，東京アクセントの尾高型は，特に拍数の短い場合，（後置詞などの保守的な）京阪式アクセントで（高起式の）次末拍に下がり目がある型に対応する。

(13) a. 石，犬，色，川，夏，蚤，村，山，… 京阪：HL ／ 東京：〇〇]

b. 男，表(おもて)，女，言葉，話，娘，… 京阪：HHL ／ 東京：〇〇〇]
c. 一月(いちがつ)，妹，弟，九日(ここのか)，正月，一日(ついたち)，… 京阪：HHHL ／ 東京：〇〇〇〇]

（〇は拍）

(13) の対応に基づくと，(14) も尾高型であることが予想される。

(14) a. 蚊も，子も，血も，身も，… ／ 着た，した，煮た，寝た，…京阪：HL
b. 風も，鳥も，庭も，… ／ 赤い，甘い，丸い，… ／ 赤く，甘く，丸く，… 京阪：HHL

ところが，(14) に対応する東京アクセントは (13) と異なり，後続する文節を下げる働きがない。これは，通時的に文節末の核が削除されたことを示している。

(15) カモ] ＞ カモ，キタ] ＞ キタ，カゼモ] ＞ カゼモ，アカク] ＞ アカク

そうであれば，(13) が文節として尾高型を保持しているのは不自然である。その原因としては，助詞が後続した型（〇〇]ト，〇〇]モ，〇〇]ヨリ，…）への類推によって 〇〇] が保持された可能性と，〇〇] 自体が 〇〇]ー ＜ 〇〇]オ，〇〇]ワ，…などに由来する可能性とが考えられる。(6, 7) や，江戸時代の江戸語では「馬鹿ア云う」のように長母音化した形が使われていた（坂梨 2021）ことは，後者の可能性を支持する。そうであれば，=Ø はあくまで共時的分析から導かれる形態素と言える。助数詞の-Ø も今のところ通時的な説明はできない。

6. まとめと課題

以上，Ø 形態素を認めることで，名詞や（漢語系の）数詞の尾高型を統一的，体系的に解釈できることを主張した。今回論じられなかったことは大きく 2 つある。1 つはヒル] イッタ「昼行った」，ヒルマ] イッタ「昼間行った」のような副詞用法の尾高型で，恐らく「に」と=Ø との交替で説明できると思われるが，「昼間」は無核化した形も可能など，統語的な妥当性を含め検討の必要がある。もう 1 つは文末詞との関係で，ネ「〜ね」や（一部の）ヨ「〜よ」は尾高型の名詞に低く（少なくとも下がり目を生じて）付き，命令形（例：シロ）や命令用法のテ形（例：シテ）にも低く付くことから，名詞と文末詞との接続の関係（=Ø のコピュラを認めるべきか）や命令形の尾高型の分析が必要になる。これらは今後の課題としたい。

謝辞：調査にご協力くださった皆様にお礼申し上げます。本発表は JSPS 科研費若手研究（研究課題番号 21K12993）の成果の一部です。

参考文献

平山輝男（編）(1960)『全国アクセント辞典』東京堂出版.
上野善道（2003）「アクセントの体系と仕組み」上野善道（編）『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』61–84. 朝倉書店.
上野善道（1977）「日本語のアクセント」『岩波講座日本語 5 音韻』281–321. 岩波書店.
松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古（編著）(2012)『日本語アクセント入門』三省堂.
坂梨隆三（2021）「浮世風呂の「世話アする・先イ行く・酒ヱ買う」などの言い方をめぐって」近代語学会（編）『近代語研究 第二十二集』181–197. 武蔵野書院.

岐阜県西美濃方言における動詞否定辞ン・ヘンの使い分け
―人称制限と意志性に注目して―

MOLARIU S Mi l la（モラリウス、ミッラ）　（大阪大学大学院生）

1. はじめに

岐阜県西濃地方で話される西美濃方言の動詞否定形には、ン、ヘン、セン、ナイなど、複数の否定辞が使用される。このうち、発表者が収集した自然談話データにおいて使用例の多かった否定辞はン・ヘンの二つであった。以下に、談話から得られた、話し手が自分について話す時の、いわば一人称の例を示す。

(1)[私は]もう二度と[コロナ検査]行かンと思ったもん。　(GOS16, 294, 30_0025[1])

(2)[孫と遊園地へ行く話]

もう涼しくなってから、夏は暑くてどこも行けヘン。　(GGS17, 492, 30_0025)

(3)[夏休みだから]7 日はもうない。[大学へは]行かヘン。　(TTY03, 148, 10_0001)

上記の用例から、同じ動詞・同じ人称において、ンもヘンも使用されることがわかる。本研究では、人称制限と意志性という二つの観点から、それらの使い分けの要因を探りたい。

2. 先行研究と問題のありか

先行研究において岐阜県方言のン・ヘンの使い分けについて様々な指摘がされている一方、詳細な議論はされていない。先行研究において、ン・ヘンの使い分けに主に 3 つの説が考えられている。これらは、否定辞の伴う文法的意味、人称制限、そして、（岐阜県方言においての言及はないが）意志性である。一方で、自然談話データに基づく山田（2004b）によると、固定化している形(すまン、取らンか、あらヘン)以外の場合、ン・ヘンは自由に置き換え可能であるとされ、使い分けがないとする立場もある。

ン・ヘンの意味の違いについては、主に面接調査を行った杉崎（2021: 57-58）に指摘があり、ヘンは間接的・婉曲的で、ンは直接的・ぞんざいであるという。また、「一緒に行こう」のような勧誘の場面では、返事として「行かン」は強すぎるとされる一方、「行かヘン」は許容される。このように意味的な「強さ」をンに求める（杉崎 2021: 57-58、久野 1995: 105）指摘がある一方で、山田（2005: 108）ではンではなくヘンの方が強い否定であると指摘されている。さらに、近年（の変化によって）ンとヘンの強さ・弱さによる違いがほとんど失われているという指摘もある（山田 2005: 107、久野 1995: 105）。

杉崎（2021: 57-58）では、人称による使い分けについても指摘されている。自己の行動に関することはン、第三者・聞き手の行動についてはヘンが使用されるとしており、具体例として「ヨーイカン((私は)行けない)・ヨーイカヘン((彼は)行けない)、シラン((私は)知らない）・シラヘン((彼は)知らない)」を挙げる。また、山田（2004a）によれば、一人称主語における「知る」の否定形について、自然談話ではほぼ「シラン」のみが使用されていたという。ただし大学生対象のアンケート調査では、一人称主語における「シラヘン」も容認されているとも述

[1] 談話例の末尾にデータの ID を付す。データ ID は以下の内容を表す：地域(話者の出身地・現在地)のイニシャル(垂井町=T、大垣市=O、神戸町=G、関ヶ原町=S、揖斐川町=I、愛知県名古屋市=N、県外出身=X)、年齢グループのイニシャル（高年層=S、中年層=M、若年層=Y)、話者の通し番号、発話別発話番号、録音 ID。

べている。

楳垣（1938: 247-248）は、和歌山方言の「へン」と「ヤン」を比較して、へンは無意志の否定に、ヤンはおおむね有意志の否定に限られると述べている。特に使役の否定はへンのみで、ヤンが使用されると許容の否定、つまり禁止になるという。具体例として「いかせへん(行かせない)使役の否定 無意志、いかせやん(行かせない)許容の否定 有意志」が挙げられている。

このように、否定の「強さ・弱さ」が異なるとする研究もあればそうでないとするものもあり、「強さ」に加えて婉曲的・ぞんざい、間接的・直接的といった意味的な使い分けが指摘されてきた。しかし、それはその否定辞に含まれる意味であるのか、発話において生まれる語用論的なものであるのか明らかではない。また、人称制限という説に関しては、使用実態を観察すると、一人称においてへンも現れ、三人称においてンも現れることから、両者の関係は解明されているとはいいがたい。岐阜県方言ではへンのもつ無意志性についての指摘はないが、談話データからは、このことについても検討する余地があるように思われる。これまでの多くの研究が採用してきた面接調査やアンケート調査では明らかになっていないこともあると考えられる。そこで本研究では、方言形否定辞の使用実態を自然談話データから帰納的に分析し、次の二つを明らかにすることを試みる。1)西美濃方言において、動詞否定辞ンとへンをどのように使い分けているか。2)使い分けの要因は何であるか。

3. 調査概要

本発表では、発表者が収集した自然談話データ（合計 5 時間 38 分）を扱う。調査協力者は西美濃方言を母語とする 15 名[2]で、一つの談話に 2 名から 6 名が参加している。談話収録時間はおよそ 30 分から 1 時間程度である。場面としては誕生日会、お茶会、自宅や手細工教室での雑談のような、家族内、姉妹や友人同士の会話である。調査協力依頼書を渡し、承諾書、個人情報フォームを録音の前か後に記入してもらった。本調査は大阪大学の研究倫理委員会による倫理審査を受け、承認された。

談話資料から得られた否定形全体は合計 473 例で、その内訳は次のようであった：ン 168 例、へン 119 例、「ない」183 例、ヤン 1 例、セン 1 例、ヒン 1 例。本発表では、子音語幹動詞（五段活用動詞）における標準的否定(standard negation, Miestamo 2003)のみを扱うことにする（ン 55 例、へン 51 例）。つまり、主節の文末における非過去時制の動詞否定形を扱う。タ形(過去、-たら)、アスペクト形式(-とる, -てる)、-とくが含まれる形式は扱わない。引用発話は分析対象から除いた。加えて、動詞否定辞が使用されていても、基本的な否定形の特徴とされる命題の真理値の変換（Miestamo 2003: 41）が成り立たない認識的モダリティおよび義務表現については扱わないことにする[3]。

---

[2] 年齢グループごとの内訳は次のとおりである。：S=高年層(60 代〜90 代)女性 7 名、男性 3 名、 M=中年層(40 代)女性 2 名、男性 1 名、Y=若年層(10 代・20 代)女性 2 名。

[3] 本データにおいて、「かもしれない」は「カモシレン」の形でのみ使用され、「カモシレへン」の使用はなかった。また、同様に「かもしれない」相当形式とみられる「カモワカラン」(3 例)と「カワカラン」(2 例)などにも、ンだけがみられた。ただし、「しなければならない」に相当する形式については、「セナアカン」のほかに「セナアカへン」も使われていた。

4.　分析と結果

本発表ではデータを年齢グループに分けずに扱う。中年層、若年層におけるデータが少ないことから、分けけて扱う意義がない上、標準否定において違いはなさそうであるためである[4]。

否定辞ン・ヘンの使用数には、人称において差が見られた。図 1 に示す。一人称主語におけるン・ヘンの用例数はそれぞれ 38 例・11 例で、全体の 8 割がンであった。二人称においてはン 4 例・ヘン 10 例である。三人称主語における否定辞の使用数はン 9 例・ヘン 31 例とヘンが 8 割を占め、一人称主語とは対照的である。人称が不明・一般的な知識をいうような用例が 3 例あったが、本発表において言及しない。この結果は杉崎（2021）によるン・ヘンの人称制限と類似しているが、一人称であれば必ずン、三人称であれば必ずヘンという厳密なものではない。

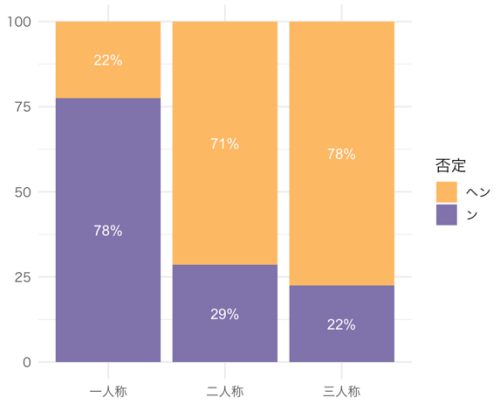


図 1　人称によるン・ヘン

4.1.　動詞の使用実態

以下の表 1 では、データで使用された動詞を、(a)ンの用例だけが得られたもの、(b)ン・ヘンにまたがって用例が得られたもの、(c)ヘンの用例だけが得られたもの、として使用が多い順に並べてグループ分けをした。また、ン・ヘンそれぞれの使用を人称ごとに分けて示し、三人称においては、有生物主語と無生物主語で分けている。動詞について、本発表では、「無意志動詞」と「意志動詞」を、次の基準で分類した。「意志動詞」は一般的に有生物主語（動作主）が自分の意志でその動詞が表す行動・行為を行うことができ、自分の意志を持って行うことを表す動詞である。典型的には「行く」「飲む」「洗う」「知る」のようなものである。一方、有生物主語が主に経験者のような振る舞いをする「要る」「叶う」「太る」「わかる」のような動詞は無意志動詞に分類する。このようなことは一般的に自分の意志では行えないと考えられるからである。加えて、無意志動詞には、無生物主語を取る動詞(無生物のものには「何かをする・行う」意志がない)や、可能動詞・可能形[5](以降まとめて可能動詞と呼ぶ)も含めている。表中、網掛けをしてあるのは無意志動詞と思われるものである。

まず、表 1 から読み取れることを確認する。最初のグループ(a)では、①ンの用例は一人称に目立って多いことがわかる。中段(b)の、ン・ヘンの両方の用例が得られたものについて、②一人称でもヘンが現れ、三人称でもンが現れる。一人称において目立つのは、「わかる」がンもヘンも多く使用される一方、二人称において、ヘンのみ現れることである。二人称では

[4] 今後の研究において扱う予定のアスペクト形式などに年齢グループの差は見られると思われる。

[5] 派生した可能動詞(行ける、使える)に加え、接辞-(e)re-（吉安 2023: 180-179 が大垣方言において示す）で作られる可能形(データにおいて 2 例の「書けれン」「行けれヘン」)は可能の意味をもっていることから無意志動詞であると考える。また、可能動詞は母音語幹動詞(一段活用動詞)と同じ活用をするため、本発表において扱うべきではないとも考えられるが、可能動詞と共起する否定辞がヘンに偏るという事実は、本発表における主張ともかかわることから、併せて結果を示している。また、今後は、母音語幹動詞ならびに不規則動詞の「来る」「する」も扱う予定である。

(b)において、ヘンのみ使用され、全体的にみても、二人称では「知る」のみがンの形を取ることがわかる。ここでは、ン・ヘンの使い分けに語用論的な使い分けが考えられる。(c)のヘンだけの用例が得られたグループをみると、人称問わず、ヘンが使われる傾向にあることがわかる。(c)には、網掛けで示している無意志動詞や可能動詞が多い。無生物主語を取る動詞を確認すると、ンが 4 例(a,b)、ヘンが 10 例という結果から、無生物主語を取る動詞においてもヘンが好まれると思われる。例えば、無生物主語しか取れない存在動詞「ある」は方言形否定形なら「あらヘン」としか現れない。もちろん、これは先行研究が示すような固定化とも一致し、「アラン」は存在しないと考えられているからである。以上をまとめると、③無意志動詞にヘンが多く使用されていることがわかる。

表 1　ン・ヘンの動詞ごとの使用実態

			ン（52例）				ヘン（51例）				
		合計	一人称	二人称	三人称（有）	三人称（無）	1人称	2人称	三人称（有）	三人称（無）	
1	知る	16	12	4							
2	買う	1	1								
3	叶う	1	1								
4	（役に）立つ	1	1								
5	要る	1	1								
6	（～て）もらう	1	1								
7	住める	1	1								(a)
8	書ける	1	1								
9	選べる	1	1								
10	しかる	1			1						
11	言う	2			2						
12	生える	1				1					
13	進む	1				1					
14	わかる	27	15				7	5			
15	行く	5	1		1		1	2			
16	使う	2	1						1		(b)
17	（～て）もらえる	2	1					1			
18	おる	5			1				4		
19	なる	3			1				2		
20	（物が）入る	4				2				2	
21	行ける・行ける	2					1		1		
22	会える	2					1		1		
23	おれる	1					1				
24	入れる	1						1			
25	洗う	1						1			
26	飲む	3							3		
27	貰える	2							2		(c)
28	使える	2							2		
29	履く	1							1		
30	どく	1							1		
31	太る	1							1		
32	乗れる	1							1		
33	ある	4								4	
34	（体が）もつ	1								1	
35	かかる	1								1	
36	戻る	1								1	
37	減る	1								1	
	合計	103	38	4	6	4	11	10	20	10	

凡例；（有）有生物主語、（無）無生物主語、動詞の網掛けは無意志動詞であることを表す。

4.2.　一人称

一人称において、ンが 38 例（うち 15 例が意志動詞、23 例が無意志動詞）、ヘンが 11 例（うち 1 例が意志動詞、10 例が無意志動詞）であった。つまり、ンが一人称に多く使用された。表1で見たように、ヘンは無意志動詞の場合に多く使用されるが、一人称において、11例のうち 1 例だけ、意志動詞の「行く」にヘンが使われる例がある(例(3))。この例では、話し手が大学へ行かないことを述べているが、文脈を見ると、その理由は「夏休みに入っており、

行く必要がない」ためである。このような、外的な要因によって決定されることがらを述べるという点は、可能動詞における外的条件(不)可能と似たところがあるのではないだろうか。つまり、無意志動詞との共通性があり、そのためにヘンが使われるということがあるのではないかと考える。

一人称主語を取る動詞は、ンを取ることを前提として考えてみたら、動詞の意味的にも三人称に使用が少ないであろうと考える意志動詞の「知る」にンしか現れないことは自然であると考えられる。「要る」(例(4))「叶う」「〜てもらう」など、ンが使われている無意志動詞も、一人称で使用されることが多い動詞であると考えられる。

(4) XTS02: これやるわ／　TTS01: うちあつい　要らんて　(TTS01, 12, 10_0001)

また、「わかる」という動詞は、上記で述べたように、一人称主語の場合にンが多いが、無意志動詞でもあることから、ヘンも使用されるということが考えられる。以下例を示す。

(5) [予防接種を打たなかったことについて]

わからんよー　いつなんどき()かかるかもわからんけどさー打っとけばよかったと思う時が()
出てくるかもしれんけどなー　まーいいわと思って　(GOS16, 415, 30_0025)

(6) [横浜の中華街に行った時の話]　中華料理屋さんいっぱいあるでさー()
どこの料理屋さんがいいんだが　わからへんしさー　(GGS17, 440, 30_0025)

可能動詞は無意志動詞であるので、ヘンが使われることが期待されるが、(7)のように一人称主語でンが使われる例がある。ここでは話し手は実際横浜に住めるかどうかを述べるのではなくて、仮説的に住めないこと、住みたくないことを述べている。一方、同じく、可能動詞の用例である(2)ではヘンが使われているが、こちらは実際に「できない」ということを述べている。ここでのン・ヘンの使い分けは、渋谷（1993）が示す可能表現における「潜在系」と「実現系」の違いに対応しているように思われる。

(7) [横浜のような忙しい街は住みにくい・住みたくないという話]

GOS16: そうなんやて　もう()それも／待って！() 並んで! () まっｔ() 待っとってもじゃないけど
／やっぱあかんわ()そんなまちには住めんわ　(GOS16, 462, 30_0025)

4.3.　二人称・三人称

二人称では、ンが 4 例、ヘンが 10 例で、それらは 11 例が質問(疑問文)、3 例が確認要求である。質問のみ見ていくと、(8)がンの用例、(9)がヘンの用例である。

(8) [海外が危ない話]　ホテルのペットボトルの知らン↑　(TTY04, 53, 10_0002)

(9) [聞き手が娘が首都圏に住んでいる] もう東京行かへンの↑　遊びに　(GOS16, 328, 30_0025)

ンは動詞「知る」の場合にのみ使用され、動詞の意味からも当然であろうが、聞き手の知識の状態を問うている。一方で、ヘンが使用されるのは、聞き手の行動・行為について問う場合である。三人称は、ンが 9 例、ヘンが 31 例であり、以下（10）はンの例、（11）はヘンの例である。

(10) [大学の同級生はイベントに参加しない]

けど多分 () 男の子は行かんやろうし () 結構関東の方とかにおるで　(TTY03, 173, 10_0002)

(11) [犬が] 元気やったけど水飲まへんて　(OOM10, 311, 20_0009)

5. まとめと考察

4 節では、図 1 が示すように、一人称においては、ンが多く使用されており、二人称・三人称においては、ヘンが多く使用されることがわかった。表 1 の観察から、ヘンが無意志動詞と多く使用されることがわかった(③)。また、一人称において例(3)には外的な要因による無意志性が考えられた。よって、(A)一人称において、ン・ヘンの使い分けの要因は、ヘンが無意志性を伴うか否かであると考えられる。(B)二人称主語において、ンは聞き手が持つ情報の状態を問うており、ヘンの使用では聞き手の行動・動作を問うているというふうに捉えられる。(C)三人称主語において、ヘンは意志動詞か無意志動詞かにかかわらず使用される。

では、ヘンの特徴である③と(C)は、どのように結びつけることができるだろうか。ヘンが無意志動詞に多く(③)、一人称において無意志性を伴う(A)ことを考えると、三人称主語において意志動詞にもヘンが使用されることの説明がつかないようにみえる。ここでは、ヘンが、話し手が「関わっていないこと」を示すものとして考えてみたい。話し手自身の意志的な行動は、当然ではあるが、話し手が関わっている・行動に関与しているものである。仮にこれがンによって標示されているとすると、第三者・三人称の意志はわからないことから、話し手との関わり・関与は薄いと考えられ、ンが使いにくくなる。それは、無意志動詞においても同様であり、外的要因によって「できない」「しない」、つまり話し手の関与がないことを示すために、ンではなくヘンが使われるのではないか。それに対して、(1)のような用例では、話し手自身の意志によって、「しない」ことを述べ、否定に関与していると考える(そのためにンが使われる)。逆に、(3)のように外的な要因の場合、関わり・関与がないので、ヘンが使われることになる。

本発表では、ン・ヘンの使い分けの実態を観察し、ヘンによって、事態の不成立や行為の非実行に話し手の関わり・関与がないことが示されている可能性を指摘した。これは、先行研究で一部指摘されていたことと重なってはいるが、この結果を通言語的にみると、「エゴフォリシティ」(Egophoricity 例えば San Roque et al. 2018)という文法カテゴリーとの関連が浮かび上がってくる。エゴフォリシティ（San Roque et al. 2018: 2, 9-10）は人称に対応し、情報主が持つイベントに対する知識・関わり・関与を示す文法カテゴリーである。西美濃方言のン・ヘンの使い分けを説明する装置として援用できるかどうか、今後考えていきたい。

引用文献

楳垣實(1938)「和歌山市方言語法(三)」『国語研究』5 巻 12 号(井上史雄ほか編(1996)『日本列島方言叢書 14 近畿方言考 2 三重県・和歌山県』再録 pp. 240-259.)/久野眞(1995)「岐阜県大垣市方言の否定の表現」『方言資料叢刊 5 巻』方言研究ゼミナール pp. 104-112./渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1./杉崎好洋(2021)『岐阜県大垣市赤坂方言の記述的研究』三恵社/山田敏弘(2004a)「岐阜県方言における否定表現」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学第』53 巻第 1 号/山田敏弘(2004b)『ぎふ・ことばの研究ノート 第 3 集 方言談話資料に見られる文法項目 1』科研費報告書 /山田敏弘(2005)『ぎふ・ことばの研究ノート 第 4 集 岐阜大学生のことばの統計的分析 1』 /吉安亮太(2023)「岐阜県大垣方言における可能表現」『三田國文』No. 68. pp. 162-182./ Miestamo, Matti (2003). *Standard Negation – The Negation of Declarative Verbal Main Clauses in a Typological Perspective*. Mouton de Gruyter. / San Roque, Lila, Simeon Floyd and Elisabeth Nordcliffe (2018). Egophoricity: An introduction. In Floyd, Simeon, Elisabeth Nordcliffe and Lila San Roque (eds.) *Egophoricity*. John Benjamins. pp. 1-77.

鳥取県倉吉方言における理由の接続助詞「ケー」の終助詞化

阪上健夫（東京大学大学院生）

1. はじめに

鳥取県倉吉方言の理由の接続助詞「ケー」は（1）のように文末で使用されることがあり、(2) のような首都圏方言の「から」に置き換えにくい文末用法も持つ。

（1）a. チョット　カイモノニ　　イッテクルケー。（ちょっと買い物に行ってくるから。）
　　b. キョーノ　コトワ　　ワスレンケー。（今日のことは忘れない｛から／よ｝。）
（2）（一人で機械を操作中にボタンを押しても反応がない時）オカシーケー。（おかしいな。）

倉吉方言の「ケー」には、文末で終助詞のように用いられる中で新たな機能を獲得する変化が生じていると考えられる。本発表では倉吉方言の中年層話者複数名に対する質問調査に基づき、理由の接続助詞「ケー」の詳細な意味用法を記述して通時的な変化の過程を考察する。

2. 先行研究

白川（1991）は（1a）のような用法は「留守番を頼む」等の行為要求に解釈でき、（1b）でも「それを認識して行動を考えろ」といった含意があるとする。一方白川（2009）は「から」の文末用法を聞き手の認識に配慮して命題内容を提示する形式で、（1b）のように終助詞と置き換え可能とする。Ohori(1995)、大堀（2002: 128）、本多（2001: 155-156）によると、「から」の文末用法では聞き手の語用論的推論が慣習化して「から」が終助詞としての機能を得る。具体的には、「から」の文末用法は発話内容に伝達の価値があると主張する（本多 2001: 167）、聞き手の関与を求め共感を促す（Ohori1995: 211, 大堀 2002: 129）等の対人関係に関わる機能を持つとされる。

ウィルソン・スペルベル（1999: 55-58）によると語用論的推論で聞き手は発話に関連性を期待する。関連性は世界の知識の向上に関わり、発話における新情報からさらなる新情報が推論できると関連性が高まる。推論過程においては(3)のような演繹規則が自然発生的に使われる（p.101）。

（3）入力：（i）P　（ii）もし P ならば Q　　出力：Q （ウィルソン・スペルベル 1999: 103）

阪上（2023）は熊本県方言の理由の接続助詞「ケン」に（1）のような「から」と共通した用法に加え、(4) のような確定的な事態を聞き手に知らせる文末用法もあるとする。終助詞との連接形の「ケンネ」は、(5) のように確定的な認識に言明し聞き手との共有を確認する機能を持つ。

（4）（雨が降っていることに気付き知らせる時）ア　　アメガ　　フットルケン。
（5）A：阿蘇山から見える景色は良かったよ。B：アレワ　ヨカケンネ。（阪上 2023）

（4）では「から」が使いにくく、終助詞「よ」のみが自然となる。(5) では連接形の「よね」が使える。このことから、熊本県方言の「ケン」は「から」よりも広い文末用法を持つと言える。

そして倉吉方言の接続助詞「ケー」の文末用法は確認の終助詞「ナー」と連接することもあり、

話者が際立たせたい情報の指標で聞き手の知らない情報を伝える（小矢野 2017, 湯浅 2003: 130, 湯浅 2004: 70）などとされる。（6）（7）のような例がある。

（6）（布団の上に乗る子供に腹が立って）ほぉんに　　腹がわりぃけぇ。（小矢野 2017）
（7）アレーワ　マエカラ　クロー　シトランケーナー（湯浅 2004: 70-71）

（6）や（7）の例は首都圏方言では終助詞が自然となるが、「ケー」の文末用法がどのような場合に使えるか、そしてその成立過程がどのようなものかは明確でない。

3. 調査の概要と結果

3.1. 調査対象と調査項目

「ケー」の用法を明らかにするため、2023〜2024 年に（8）に生年・性別を示す 5 名の倉吉市出身の話者に協力を得て面接質問調査を行った。話者 B・E は調査時に県外に居住している。

（8）A：1969 年　女　B：1966 年　女　C：1968 年　男　D：1967 年　男　E:1970 年　男

質問では首都圏方言の例文を倉吉方言に訳してもらい、「ケー」が回答されない場合は「ケー」の可否を尋ねる。調査項目は大きく I.（文中用法）、II.（「から」と共通した文末用法）、III.（「から」に置き換えにくい文末用法）に分かれる。I〜IIIにおける「から」の適格性は東京都 23 区内および神奈川県市部で言語形成期を過ごした 1952〜1999 年生まれの男女計 8 名の判定を得た。

3.2. 調査結果

まず、「から」が使える I（文中用法）・II（文末用法）の項目では「ケー」も使えることが分かった。IIの文末用法では具体的な行為要求にとりやすい用法（10a）でも、具体的な行為要求にとりにくい用法（10b）でも「ケー」が使える。IIの文末用法では（10a, b）のように終助詞「ナー」が必要という回答が多いものの、全体として「から」の用法は「ケー」にもあることが分かる。

（9）スグ オデンガ　デキルケー　マットッテ。（すぐおでんができるから待っていて。）【C】I
（10）a.（人と外出時）イマスグ　クツ　ハクケーナー。（今すぐ靴を履くからね。）【E】II
　　b.（会合等で退出する際）コノヘンデ　カエルケナー。（この辺で帰るからね。）【D】II

続いて、行動を考えさせる意味が読みとりにくく「から」が使いにくいと思われるIIIの項目を（11）に、結果を【表 1】に示す。「から」を容認する首都圏方言話者数を項目番号の横に記す。

（11）**III. 首都圏方言の「から」に置き換えにくい文末用法**
〔1〕（高校の同窓会の話になって）
　友達に文化祭の話をしたら「覚えてない」って言われた＿。【話し手の経験の伝達】
〔2〕A：就職おめでとう。B：ありがとう。いやー、良い所が見つかった＿。　【同上】
〔3〕（スポーツ番組を見て）やっぱりプロはアマチュアと雰囲気が違う＿。【独話的な言明】
〔4〕（海にゴミが沢山あるのを見て）こんな所にゴミを捨てて、本当に腹が立つ＿。【同上】

〔5〕（一人で機械を操作中ボタンを押しても動かない時）おかしい＿。動かない。【同上】
〔6〕（雨に気付いて知らせる場合）あ、雨が降っている＿。　【発話時の知覚の伝達】
〔7〕(同じ番組を見ている人に)昨日の番組すごかった＿。【聞き手との認識の共有の確認】
〔8〕（旅行をしたAへの同意で）A：大山の景色は良かったよ。B：あれは良い＿。【同上】
〔9〕(聞き手を砂丘で見た後、確認として)昨日鳥取砂丘にいた＿。【聞き手の情報の確認】
〔10〕（不確かな情報の確認として）今年の文化祭は中止だ＿？　【不確かな情報の確認】

表 1：III（首都圏方言の「から」に置き換えにくい文末用法）の調査結果

		A	B	C	D	E
話し手の経験の伝達	〔1〕 3	○ナー	×	×	○	○ナー
	〔2〕 2	○	×	○	○（ナー）	○ナー
独話的な言明	〔3〕 2	×	○（ナー）	○ナー	○ナー	○ナー
	〔4〕 0	×	○ナー	○	○（ナー）	○（ナー）
	〔5〕 0	×	×	×	○	○
発話時の知覚の伝達	〔6〕 0	×	×	×	○	○
聞き手との認識の共有の確認	〔7〕 2	×	○ナー	○ナー	○ナー	○ナー
	〔8〕 3	○ナー	○ナー	○ナー	○ナー	○ナー
聞き手の情報の確認	〔9〕 0	×	×	×	×	×
不確かな情報の確認	〔10〕0	×	×	×	×	×

○：「ケー」が使える。　○ナー：「ケー」の後に「ナー」が必須。
×：「ケー」を使えない。　○（ナー）：「ケー」に「ナー」が任意に付けられる。

IIIの回答から、個人差はあるが「ケー」が文末で広く使えることが分かる。話者D・Eは特に「ケー」の文末用法が広い[1]。話し手の経験を伝達する〔1〕〔2〕では（12a）のように「ケー」が使われる。首都圏方言ではここで「から」が使いにくく、文の内容を聞き手が知っているべき情報として示す終助詞「よ」(日本語記述文法研究会 2003: 242）が自然となる。そして、〔3〕～〔5〕の新たに生じた感情や評価といった話し手の認識に独話的に言明する発話でも（12b）のように「ケー」が使える話者がいた。これらでは、首都圏方言では終助詞「な」や発話を話し手の個人的な考えとして独話的に伝える終助詞「わ」(日本語記述文法研究会 2003: 252-253）が使える。話し手の認識に言明して聞き手との共有を確認する〔7〕〔8〕では（12c）のように「ケー」に終助詞「ナー」が連接する。一方、〔9〕の聞き手の方が詳しい情報や〔10〕の不確かな情報の確認では（12d）のように全ての話者に容認されない。この意味では「ケー」を使えないと言える。

（12）a. イヤー　イートコロガ　ミツカッタケー。
　　いやー　良い所が　見つかったよ。　【D】III〔2〕
　b. プロワ　アマチュアト　フンイキガ　チガウ｛ケー／ケナー｝。
　　プロは　アマチュアと　雰囲気が　違うな。　【B】III〔3〕

[1] IIIでは首都圏方言でも「から」を使える話者が少し見られ、話者間で想定した文脈に幅がある可能性がある。III〔3〕では「すごいな」のような含意があれば「雰囲気が違うから。」と言える話者がいた。

c. （「大山の景色は良かったよ。」と言われて）アレワ　　エーケナー。
あれは　　良いよね。　　【C】III〔8〕
d. キノー　トットリサキューニ　オッタ｛ダラ【E】／ナー【B】／*ケー｝？
昨日　　鳥取砂丘に　　いた｛だろう／ね｝。　　III〔9〕

また、〔3〕(=12b) のように自身の想定と知覚した事態が一致する際の方が、〔5〕〔6〕のように両者が異なる際より「ケー」を使いやすいようである。そして、〔3〕〔4〕のようにそう思うのが当然の内容に「ケー」が使いやすく、〔7〕〔8〕(=12c) のように聞き手との認識の共有を想定する際は「ナー」が必須になる傾向がある。このように、倉吉方言の「ケー」は確定的な事態を述べる意味で「から」より広く文末に使えることが分かる。熊本県方言の「ケン」は（12b）のような独話的な発話には使いにくく、「ケー」の文末用法は「ケン」よりも広いと言える。

4. 鳥取県倉吉方言の「ケー」の終助詞化の過程

「ケー」の終助詞化の過程は、語用論的解釈の観点によって説明できる。まずIの文中用法に演繹規則を当てはめると（13）のようになる。ここでは聞き手の心内に存在する文法の知識が参照されるものとした。「ケー」は理由節を導き、確定的な事態を知らせる意味も持つ。

（13）スグ　オデンガ デキルケー　マットッテ。／すぐおでんができるから待っていて。【C】I
入力：(i) 話し手が「すぐおでんができるから待っていて。」と述べる。　　【発話】
(ii) [P｛ケー／から｝Q]という文でPとQは理由と帰結の関係にある。
Pは確定的な事態である。　　【文法】
出力：「すぐおでんができる」ことは確定的な事態である。
「すぐおでんができる」という理由により、聞き手は話し手を待つべきである。

IIの文末用法においても聞き手は関連性を期待し、（14）のように発話の新情報と旧情報を結びつけ、言語化されていない帰結の推論を試みる。旧情報は談話状況や知識からも呼び出される。

（14）イマ　クツ　ハキヨルケー。／今すぐ靴を履くから。　　【A】II
入力：(i) 話し手が「今すぐ靴を履くから。」と述べる。　　【発話】
(ii) [P｛ケー／から｝Q]という文でPとQは理由と帰結の関係にある。
Pは確定的な事態である。　　【文法】
(iii) 話し手が今すぐ靴を履く。　　【発話内容】
(iv) 話し手と一緒に出かける聞き手が先に外にいる。　　【状況】
(v) もし人が今すぐ靴を履くなら、その人はすぐに出ようとしている。　　【知識】
(vi) 一緒に出かける人がすぐに出ようとしていたら、その人を待つべき。【知識】
出力：「話し手が今すぐ靴を履く」ことは確定的な事態である。
「話し手が今すぐ靴を履く」という理由により、聞き手は話し手を待つべきである。

入力には「その人を待つべき」「車を出すべき」「靴べらを取るべき」といった複数の可能性があるが、発話の場の状況により妥当なものが選ばれ、出力もそれによって変わる。「から」の本

来的な文中用法では（13）のように理由節から導かれる具体的な帰結が 1 つに定まるが、文末用法では導かれる具体的な帰結が談話状況によって変わることがある。両者はこの点で異なる。

次に、IIの具体的な行為要求にとりにくい文末用法（=10b）の場合は（15）のようになる。

（15）コノヘンデ　カエルケー。／この辺で帰るから。　【C】II
入力：(i) 話し手が「この辺で帰るから。」と述べる。　【発話】
(ii) [P｛ケー／から｝Q]という文で P と Q は理由と帰結の関係にある。
P は確定的な事態である。　【文法】
(iii) 話し手がまもなく帰る。　【発話内容】
(iv) 会合で話し手と聞き手が一緒にいる。　【状況】
(v) 会合で参加者の 1 人が帰ったら、その後の運営に影響する。　【知識】
(vi) 運営に影響する事態が生じるなら、それを認識して行動を考えるべき。【知識】
出力：話し手がまもなく帰ることは確定的な事態で、それを認識して行動を考えるべき。

I の文中用法やIIの文末用法では「ケー（から）」の確定的な事態を知らせる意味は前面に出ず、理由節から導かれる帰結に焦点が当てられる。しかし、(10b) のような具体的な行為要求にとりにくい例は帰結を導かなくても発話内容の字義的な意味だけで十分関連性があり、知識や談話状況における具体的な旧情報を呼び出さない解釈もあり得る。その場合、演繹過程は（15’）のようになる。ここでは「ケー（から）」の確定的な事態を知らせる意味が前面に出る変化が生じ、確定的な事態として述べられる内容は認識すべきであるという常識的な知識が呼び出される。

（15’）コノヘンデ　カエルケー。／この辺で帰るから。　【C】II
入力：(i) 話し手が「この辺で帰るから。」と述べる。　【発話】
(ii) [P｛ケー／から｝]という文で P は確定的な事態である。　【文法】
(iii) 確定的な事態は認識すべきである。　【知識】
出力：話し手がまもなく帰ることは確定的な事態で、それを認識すべきである。

ここでは聞き手に行動を考えさせる含意が出力されなくなっている。確定的な事態の認識を促す抽象的な含意はあまり文脈に依存せずに発話内容と関係なく導かれ、具体的な行為要求の含意より多様な発話に適用できる。現に具体的な行為要求にとりやすい（10a）でも（14）のように確定的な事態を知らせる含意は読みとれる。ここでは語用論的推論の慣習化が生じ、文末の「ケー（から）」が知らせの終助詞「よ」に近い意味を獲得していると言える。首都圏方言の「から」にも終助詞化は生じているが、倉吉方言の「ケー」の変化はさらに進んでいる。「から」が使いにくいIII〔2〕のような項目でも「ケー」は使われる。演繹過程は（16）のようになる。

（16）（「就職おめでとう」と言われ）イヤー　イートコロガ　ミツカッタケー。　【D】III〔2〕
入力：(i) 話し手が「イートコロガ　ミツカッタケー。」と述べる。　【発話】
(ii) [P ケー]という文で P は確定的な事態である。　【文法】
(iii) 確定的な事態は知る価値がある。　【知識】
出力：「良い所が見つかった」ことは確定的な事態で、それは知る価値がある。

III〔2〕では発話の新情報と結び付く具体的な旧情報が知識や談話状況になく、帰結を導かない解釈のみが可能となる。発話内容の認識を促す含意は希薄化し、発話内容を知る価値があるというものになっている。(16)の含意も文脈にあまり依存せず多様な発話に適用できることから、語用論的推論が慣習化していると言える。この変化は熊本県方言の「ケン」にも生じている。

加えて、倉吉方言の「ケー」はIII〔4〕「コンナ　トコニ　ゴミ　ステトッテ　ホンマニ　ハラタツケー。」のような話し手の認識を独話的に述べる発話でも使える。「ケー」は聞き手に発話内容の認識を促す意味が希薄化しているために独話的な発話でも使えるものと思われる。この場合は発話内容を知る価値があるという意味も希薄化し、確定的な事態を述べる意味が残る。

「ケー」には対話的な文脈で使われるという制約もなくなりつつあると言える。これは熊本県方言の「ケン」には生じていない変化である。確定的な事態を知らせたり独話的に述べたりする場合に使えることから、「ケー」はより終助詞に近い意味機能を持つと思われる。話し手にとって確定的な事態を述べる意味があるとすることで、3 節で述べた自身の想定と一致する事態に使いやすいという傾向も説明できる。

5. 結論と課題

本発表では倉吉方言の理由の接続助詞「ケー」が終助詞化する過程を、語用論的推論の観点から考察した。面接質問調査の結果から、倉吉方言の「ケー」は確定的な事態を述べる意味で広く文末に使えることが分かった。この意味は首都圏方言の「から」の終助詞的用法と共通した意味が希薄化したもので、「ケー」の終助詞化は「から」よりも進んでいると言える。この変化は熊本県方言の「ケン」にも生じているが、3 方言の理由の接続助詞の文末用法を対照することで、倉吉方言の「ケー」は「ケン」よりも終助詞化の程度が高いことが分かる。「ケー」の音調や「ケー」と「ナー」の連接等については今後明らかにしていく。

参考文献

ウィルソン, D.＆スペルベル, D. 内田聖二他訳（1999）『関連性理論』研究社　原著（1995）／大堀壽夫（2002）『認知言語学』東京大学出版会／小矢野哲夫（2017）「倉吉方言の言いさし文－行くけえ。知らんに。－」倉吉ことばの会　第 3 回講演会／阪上健夫（2023）「熊本方言における順接確定条件節の主節化」『日本方言研究会研究発表会発表原稿集』第 116 回 17-24.／白川博之（1991）「「カラ」で言いさす文」『広島大学教育学部紀要』第 2 巻 39 号 249-255.／白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版／日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 4　モダリティ』くろしお出版／本多啓（2001）「文構築の相互行為性と文法化－接続表現から終助詞への転化をめぐって－」山梨正明･辻幸夫･西村義樹･坪井栄治郎編『認知言語学論考 No.1』143-183. ひつじ書房／湯浅千映子（2003）「鳥取方言の談話展開の方法：情報単位という観点から見た情報の内容・機能とその配列について」『学習院大学人文科学論集』第 12 号 103-132.／湯浅千映子（2004）「鳥取方言の談話展開の方法－情報の配列と文末形式「ケー」の関連について」『學習院大學國語國文學會誌』第 47 号 74-61.／Ohori, Toshio (1995) “Remarks on Suspended Clauses: a Contribution to Japanese Phraseology,” Shibatani and Thompson (eds.), *Essays on Semantics and Pragmatics*, 201-218.

謝辞

本研究にご協力くださった桑本裕二先生および方言話者の方々、並びに方言話者を紹介してくださった野間純平先生に深く感謝を申し上げる。

ヴァーチャル方言の出現要因―テレビドラマ『エール』の実証的分析を通して―

東北大学大学院生・日本学術振興会特別研究員 DC　佐藤未依奈（さとうみいな）

１．はじめに

近年、方言は社会のさまざまな場面で、実践的に使用されることが多くなってきている。このように現実の土地を離れて使用される「ヴァーチャル方言」(田中 2011)のなかでも特にテレビドラマ(以下、ドラマ)に出現する方言は社会からの関心が高く、社会への影響力も大きいものであることが知られている(田中 2016)。このような社会の状況のもと、ドラマの方言については、田中(2011)を嚆矢に、田中(2016,2020,2021)、太田(2019)、熊谷(2017,2019)など多様な着眼点から研究が行われてきた。

しかし、このように研究が活性化するなかでも、従来の研究では、ある特定のキャラクターの方言など、研究者が主観的に選び出したドラマの一部分を観察するものが多かった。そのため、ドラマには、どのような方言的特徴がどのくらい出現するのか、ということが実証的に明らかになってこなかった。また、方言的特徴の出現にはどのような要因が関わるのか、ということも未解明である。これらが明らかになれば、今後、ヴァーチャル方言研究が進展していくうえの重要な基盤となることが期待される。

以上をふまえ、本発表はドラマ 1 作品中のヴァーチャル方言を客観的・網羅的に観察することで、以下のⅠ、Ⅱを達成することを目的とする。

Ⅰ．現代のドラマにおける方言的特徴の出現のあり方を実証的に明らかにする。

Ⅱ．Ⅰの結果をもとに、方言的特徴の出現に関わる要因を明らかにする。

２．研究の方法

2.1. 調査対象とその選定理由

調査対象は、NHK 連続テレビ小説『エール』(2020 年 3 月 30 日―11 月 27 日放送。以下、『エール』)に出現するヴァーチャル福島方言[1]とする。

ドラマのヴァーチャル方言を研究するにあたっては、研究目的に適した作品を選定する必要がある。そして選定の条件には、作品の放送年代や放送時間などの形式的な側面と、作品の舞台である場所・時代などの内容的な側面が関わり合う。本発表の目的は、現代ドラマの方言の実態を捉えることであるため、比較的最近放送された作品を対象とするのが適切と考えられる。また、放送時間が長い作品を対象とすると、大量の用例が得られるため、データを俯瞰的にみることが可能となり、結果に偏りが生じづらいという点で信頼に足るデータが得られそうである。加えて、本発表ではヴァーチャル方言と現実の方言(以下、リアル方言)を比較するため、作品の時代設定が伝統的なリアル方言の記述資料が残る時代と合致すると、調査のうえで都合がよい。

以上をふまえると、『エール』は形式的にも内容的にも本発表の目的に合致する。なぜなら、過去 5 年以内に放送された作品であり、放送時間も約 27 時間と長く、時代設定は明治から昭和と伝統的なリアル方言の記述資料が残る時代とおおよそ合致するためである。

なお、『エール』のなかでも福島方言を対象とするのは、『エール』の舞台である場所が福島県

[1] 本発表における福島方言とは、ヴァーチャル福島方言、リアル福島方言ともに菅野(1982)の 10 の方言区画のうちの信達方言(福島市とそれに隣接する伊達市、伊達郡をまとめた地域の方言)のこととする。

で、主人公をはじめとする多くのキャラクターの母方言として出現するため、分析に耐えうる量の用例が得られることによる。

2.2. 調査資料と分析手順

分析は、2つの調査資料を用意し、以下の3つの手順にしたがって行った。手順2により前掲の目的Iを、手順3により目的IIを明らかにする。

資料 a. リアル福島方言の記述資料：リアル福島方言の方言的特徴を記した資料(菅野 1982、国立国語研究所 1974、児玉 1935、佐藤 1992、白岩 2017、半沢 2018)。

資料 b.『エール』全編の文字起こしデータ：共通語、方言を問わず『エール』全編の 119 話を文字化した文字起こしデータ(約 27 時間、約 27 万字分)。発表者がドラマを視聴し、音声の聞こえに忠実に作成したものである。これによりヴァーチャル方言の客観的・網羅的な観察が可能であると考えられる。

手順1. 資料 a からリアル福島方言の方言的特徴(音韻項目、文法項目)をリストアップする[2]。

手順2. 手順1でリストアップされた方言的特徴が資料 b にどのくらい出現するか、方言的特徴ごとに件数をカウントする。

手順3. 手順2の結果をもとに、方言的特徴の出現に関わる要因を考察する。考察にあたっては、必要に応じて『方言文法全国地図』や『音韻総覧』などの資料を参照する。

なお、手順2における方言的特徴のカウントの仕方は、以下の通りである。

(1) ツ**レー**① **ゴ**②ト　アッタラ、　イ**ヅ**③デモ　**ケー**④ッテ　コイヨ。
　(辛い　こと[が]　あったら、　いつでも　帰って　こいよ。)

(1)の場合、①は連母音の融合(アイ、ライ→レー)、②は有声化(カ行、コ→ゴ)、③は有声化(タ行、ツ→ヅ)、④は連母音の融合(アエ、カエ→ケー)であり、方言的特徴は4件とカウントする。以降でも(1)と同様、用例の方言的特徴の部分を**ゴシック体**と下線(異なる方言的特徴が同じ用例中に出現する場合は、1種目を下線、2種目を二重下線)で示す。

3.『エール』における方言的特徴の出現実態

『エール』に出現していたヴァーチャル福島方言の方言的特徴とその件数を次ページの**表**に整理した。(2)から(10)は、『エール』における用例を方言的特徴ごとに示したものである。なお、そのものをさらに子細に分けられる方言的特徴は、そのなかから代表してひとつ(たとえば有声化であればカ行、助動詞「べ」であれば確認要求)のみを用例として示している。

(2) キャ**グ**ガ　イ**グ**ラ　カッタカオ　ゼンブ　キロ**グ**デギル。
　(客がいくら買ったかを全部記録できる。)〈有声化、カ行〉

(3) リンゴナンデ　モット　サームイトコ　ジャ**ネー**ト　ソダタナインデ**ネー**ノ。
　(りんごなんてもっと寒いところじゃないと育たないんじゃないの。)〈連母音の融合、アイ〉

(4) ニドド　カエッテク**ン**ナ。(二度と帰って来るな。)〈ル音の撥音化・促音化、撥音化〉

[2] 今回は、資料 a のうち、3つ以上の記述資料で指摘されている方言的特徴をリアル福島方言の代表的な方言的特徴と考え、リストアップの対象とした。なお、リアル福島方言では非鼻音と鼻音の「ガ・ガ」の区別があるが、これらは正確な聞き分けが難しいため、今回は件数のカウントを保留とした。

(5) フグ**スィ**マノ　リンゴデゴザイマス。
(福島のりんごでございます。)
〈中舌化、シ・ス・シュ〉
(6) ドー　ミタッテ　ヘンダ**ベー**。
(どう見たって変だろう。)
〈助動詞「ベ」、確認要求〉
(7) コレガラ　コーリヤマ**サ**
イッテクルワ。
(これから郡山に行ってくるわ。)
〈格助詞「サ」、移動の目標〉
(8) キョーモ　イヂダント
アヅグナリソーダ**ナイ**。
(今日も一段と暑くなりそうですね。)
〈終助詞「イ」、ナイ〉
(9) カニゼ　ヒガナイヨーニネ。(風邪[を]
ひかないようにね。)〈鼻音化、ザ行〉
(10) ズイブン　ワルグチ
イワ**ッチダッタ**ンダバイ。
(ずいぶん悪口[を]言われたのだろう。)
〈レ音の促音化と「た」の口蓋化、
遠い過去を表す形式「ダッタ」〉

表　方言的特徴の種類と件数

分類	方言的特徴(全件数)	方言的特徴の詳細と件数	
A	有声化(2115)	カ行	1222
		タ行	824
		不一致	69
	連母音の融合(531)	アイ	403
		アエ	128
	ル音の撥音化・促音化(243)	撥音化	124
		促音化	119
B	中舌化(54)	シ・ス・シュ	19
		チ・ツ・チュ	18
		ジ・ズ・ジュ	16
		不一致	1
	助動詞「ベ」(45)	確認要求	28
		推量	9
		勧誘	7
		不一致	1
	格助詞「サ」(20)	移動の目標	13
		存在の場所	4
		移動の帰着点	3
C	終助詞「イ」(5)	カイ	3
		ナイ	2
	鼻音化(1)	ザ行	1
	遠い過去を表す形式(1)	ダッタ	1
	レ音の促音化と「た」の口蓋化(1)	ッチ	1
	レ音の撥音化と「ない」の口蓋化(1)	不一致	1

なお、**表**中の有声化、中舌化、助動詞「ベ」、レ音の撥音化と「ない」の口蓋化にみられる「不一致」はリアル方言を模していると考えられるが、方言的特徴の一部が資料 a の記述と一致していなかったものである。具体例を(11)から(14)に示す。

(11) キノー　**ガ**ッタンダー。(昨日買ったんだー。)〈有声化・不一致、カ行〉
(12) ナ**ヌィ**。(何。)〈中舌化・不一致〉
(13) ウマレダ、　ウマレダ、　ウマレダ**ベー**。
(生まれた、　生まれた、　生まれたぞー。)〈助動詞「ベ」・不一致〉
(14) ココサ　イダラー、　イツマデモ　**ワスランニー**。
(ここにいたら、いつまでも忘れられない。)〈レ音の撥音化と「ない」の口蓋化・不一致〉

リアル福島方言の有声化は一部の例外を除き、語中語尾に起こる。一方、(11)では語頭で有声化が起こっているため「不一致」と判断できる。有声化の「不一致」はすべて、(11)と同様に、リアル福島方言では有声化が起こらない環境で有声化が起こっていた。(12)は、相手に耳を疑うようなことを言われたときに発された台詞である。資料 a において、「ニ」が中舌化して「ヌ(ィ)」となるという記述は確認できなかったため「不一致」とした。(13)は、息子が生まれた知らせを受けて、喜んだ父親によって発された台詞である。(13)を共通語訳しようとすると、助動詞「ベ」はリアル福島方言のどの用法にもあてはまらない(あえて訳すると、「生まれたぞー」とするのが自然である)。そのため「不一致」であると考えた。(14)は、リアル福島方言では「ワスレラン

ニ(ェ)ー[3]」となるところが、「ワスランニー」と「レ」が脱落していたため、「不一致」である。一見して誤用のように思えるこれらの例も、ヴァーチャル方言の実態を捉えるうえでは重要である。なぜなら、従来の研究でもヴァーチャル方言にはリアル方言との「不一致」が生じることは指摘されてきた(金水ほか編 2014)が、それが具体的にどのようなものなのか明らかになっていなかったためである。(11)から(14)のような『エール』の「不一致」は、ヴァーチャル方言の「不一致」の内容を具体的に明らかにするものであることに加え、ヴァーチャル方言として許容されうる範囲をも示すものである。このように、リアル方言と一致しない方言的特徴がみられることもヴァーチャル方言の実態の一側面であると指摘できる。

『エール』におけるヴァーチャル福島方言の方言的特徴としては、「不一致」を含め、以上のようなものが出現していた。ここであらためて**表**に注目すると、**表**中の方言的特徴は、出現件数の多寡によって、相対的に大きく 3 つに分類できそうであることに気づく。特に出現が多かった分類 A、ごくわずかのみ出現していた分類 C、分類 A と分類 C のなかほどの出現があった分類 B である。このように、方言的特徴の出現件数に多寡が生じるのは、どのような要因によるものだろうか。この点について、次節で考察する。

４．出現多寡に関わる「コスト」と「パフォーマンス」

ドラマの方言的特徴の出現多寡に関わる要因には、大きく分けて、制作者側の要因と視聴者側の要因があると推測できる。本発表の分析に用いた資料 b (文字起こしデータ)から読み取れるのは前者であると考えられるため、今回は制作者側の要因について考察することとする。なお、本発表における「制作者」とは、脚本家、監督、演出家、制作統括、役者、方言指導等、ドラマ制作に関わる人たちを総括する概念とする。本発表の目的Ⅰ、Ⅱを達成するためには、ドラマの方言をつぶさに観察する必要があるが、それ以外の点に注意をむけてしまうと、かえって煩雑になり、ドラマの方言の実態把握が難しくなるおそれがある。そのため、ドラマの方言には制作者のなかでも誰がどのように関与しているかという問いについては、今回はひとまず保留とする。

さて、ドラマのことばは制作者によりコントロールされるものであることをふまえると、方言の出現多寡は偶然によるものではなく、何らかの制作者側の要因が顕在化した結果だと考えることができる。出現多寡を生じさせる制作者側の要因とは、具体的にどのようなものだろうか。

このことについて発表者は、「コスト」という概念が関係するのではないかと考える。ドラマの方言に「コスト」が関わることは金水(2014)でも指摘されているが、金水(2014)では金銭的・時間的な側面にしか触れられていない[4]。発表者は、「コスト」にはさらにもうひとつ、労力的な側面もあると考える。ドラマに方言を出現させる際には、方言的特徴を取り入れられそうな箇所を脚本のなかから探したり、ある音を真似して発音したりするような労力が必要となる。本発表における「コスト」とは、このような「ある方言的特徴をドラマに出現させる際にかかる労力の

---

[3] リアル福島方言のレ音の促音化と「た」の口蓋化、レ音の撥音化と「ない」の口蓋化には、伝統的な形式(「ッチェ」「ンニェー」)とそこから生じた新しい形式(「ッチ」「ンニー」)がある(井上 1985)。『エール』ではどちらも新しい形式が出現していたことが興味深いが、今回はこの点を指摘するに留める。

[4] 金水(2014:8)では「方言をリアルにしようとすればするほど、コストがかかるのが一般的である。プロの方言指導者が脚本、演出の現場に参加する場合、その指導者への謝礼が必要となるし、また制作日数も伸びたりする」と述べられている。このなかの「指導者への謝礼」「制作日数」という記述から、金水(2014)における「コスト」は、金銭や時間に結びつく概念であると推測できる。

こと」と定義する。以降では、本発表におけるコストの概念を用いて、前述の各分類を検討する。

まず、『エール』で特に出現件数が多かった分類 A の方言的特徴に注目する。すると、有声化は語中語尾のカ・タ行音であれば、意味の制限を受けずに、さまざまな文脈で使えるものであり、有声音は共通語の音としても使用されるものであることに気づく。連母音の融合とル音の撥音化・促音化は、ややぞんざいな共通語としても存在する。このように分類 A の方言的特徴は、脚本に取り入れやすく、発音も真似しやすいため、コストが低いと判断できる。また、コストが低い方言的特徴は多用しやすいため、結果として、出現が多くなったのだと考えられる。

ここでもうひとつ、方言の出現多寡に関わる概念である「パフォーマンス」について説明する。本発表における「パフォーマンス」とは、「ある方言的特徴がドラマに出現する際に発揮する、方言らしさを表す効果のこと」と定義する。たとえば、(15)(16)を比べると、(16)の方が、より方言らしさが感じられるものになっていると思われる。

(15) アドノ　コトワ　オレニ　マカセトケ。(あとのことは俺に任せておけ。)
(16) アドノ　ゴドワ　オレニ　マガセドゲ。(あとのことは俺に任せておけ。)

(16)に方言らしさを感じられるのは、(15)よりも有声化が多く出現しているためだと考えられる。このことから、同種とみなせる方言的特徴であれば、出現件数が多ければ多いほど方言らしさを表す効果は高くなり、少なければ少ないほど方言らしさを表す効果は低くなるといえる。本発表では結果を大局的にみるため、同種・異種の明確な線引きを定めることは今後の課題とすることにし、『エール』のすべての方言的特徴を同種とみなすことにする。すると、分類 A は特に出現が多かったため、パフォーマンスが高い方言的特徴ということができる。

続いて、分類 A と対照的であった、分類 C について検討する。分類 C の方言的特徴はいずれも出現が僅少であったことから、コストが高いと推測できる。まず、ザ行・ダ行・バ行の前鼻音は、共通語では意図的に使用されることがない音であるため、真似することが困難である。次に、終助詞「イ」と遠い過去を表す形式「ダッタ」は意味の制限を受けるため、取り入れられる文脈が限られる。特に後者は共通語にはない「大過去」という概念を含むため、取り入れやすいとは言い難い。レ音の促音化と「た」の口蓋化、レ音の撥音化と「ない」の口蓋化は規則がやや複雑であるため、分類 A や後述の分類 B の方言的特徴に比して、積極的に出現させることは難しい。実際、後者は前掲の(14)のように「レ」が脱落していたことから、コストが高いと判断できる。まとめると、分類 C の方言的特徴はいずれもコストが高い。このコストの高さによって出現は少なくなり、パフォーマンスも低くなったのだと推測できる。

最後に、分類 B について検討する。中舌化、助動詞「べ」、格助詞「サ」は東北地方の広域に分布する、いわば東北方言を代表するような方言的特徴であるが、出現件数は 20 件から 54 件と相対的にあまり多いとはいえない。このように分類 B の出現が中程度に抑えられた理由も、コストの観点から説明できる。中舌化による中舌母音は、共通語では意図的には使用されない音であるため、真似することが難しい。また、助動詞「べ」と格助詞「サ」には意味の制限があり、取り入れられる文脈が限られてしまう。このコストの高さによって出現が抑えられ、結果としてパフォーマンスも中程度になったのだろう。なお、分類 B のこの結果は、地域の代表的な方言的特徴であるか否かということよりも、コストが高い(または低い)か否かということの方が出現多寡に積極的に関わる要因であることを示唆するものとなっている。

以上をまとめると、コストの高低が、『エール』の方言的特徴の出現に多寡が生じさせた要因であると結論づけられる。金水ほか編(2014：88)には、NHKドラマの制作統括を務めた経験のある人物の「あくまでも方言はドラマの演出の一部である」という発言があり、ドラマのなかで方言に割ける労力は限られていることがうかがえる。制作者は、このような状況のなかでも方言らしさを表現するため、コストの低い方言的特徴を多用するという工夫をしているのではないか。そしてその結果が、出現多寡というかたちであらわれているのではないかと考察する。

５．まとめと今後の課題

本発表では、『エール』のヴァーチャル福島方言を客観的・網羅的に観察することで、以下のⅠ’、Ⅱ’のことが明らかになった。

Ⅰ’.『エール』の方言的特徴は、A：多数の出現、B：中程度の出現、C：少数の出現という３段階の量的な差を伴って出現していた。また、そのなかにはリアル方言と一致しない方言的特徴もみられたが、これもヴァーチャル方言の一部として認められるものである。

Ⅱ’. Ⅰ’のような、方言的特徴の出現多寡が生じる要因には、「コスト」と「パフォーマンス」という概念が関わると考えられる。「コスト」は「ある方言的特徴をドラマに出現させる際にかかる労力のこと」であり、「パフォーマンス」は「ある方言的特徴がドラマに出現する際に発揮する、方言らしさを表す効果のこと」である。

Ⅰ’の結果は、従来の主観的・部分的な観察では十分明らかになってこなかったヴァーチャル方言の実態を実証的に明らかにしたものといえる。Ⅱ’の結果は、金水(2014)における「コスト」の概念を詳細化して定義づけたものとして位置づけられる。特に、Ⅰ’の結果から導き出されたⅡ’の「コスト」と「パフォーマンス」の概念は、ほかのドラマ作品にも応用できるものであると考えられ、ヴァーチャル方言研究を理論的に行うための枠組みともなりうるものである。

そのため、これらの概念を用いて『エール』以外のドラマを対象とした検討を行うことを今後の課題としたい。なお、「コスト」と「パフォーマンス」の概念は語彙項目や音調にもそのまま適応できるかどうかという点には疑問が残る。それ以前に、今回扱った方言的特徴のなかには、少数の出現でも方言らしさを発揮するものと、多数の出現でなければ方言らしさを発揮しないものが混在している可能性もある。さらに、今回は方言の出現に関わる視聴者側の要因について触れることができなかった。これらについては、またあらためて考えることとしたい。

映像資料・引用：NHK 連続テレビ小説『エール』.NHK, 2020 年 3 月 30 日-11 月 27 日放送.(テレビ番組).

参考文献：井上史雄(1985)『新しい日本語―《新方言》の分布と変化―』明治書院 / 太田一郎(2019)「自分の「声」としての方言－メディアの中の方言使用を例に－」『みんなの知らない方言の世界』愛知大学人文社会学研究所 / 菅野宏(1982)「12 福島県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 4―北海道・東北地方の方言―』国書刊行会 / 金水敏(2014)「フィクションの話し言葉について 役割語を中心に」石黒圭・橋本行洋編『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房 / 金水敏・田中ゆかり・岡室美奈子編(2014)『ドラマと方言の新しい関係―『カーネーション』から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へ―』笠間書院 / 熊谷滋子(2017)「方言イメージが作り上げるドラマ―NHK 地域ドラマが再生産する地域ステレオタイプ―」『ことば』38 / 熊谷滋子(2019)「フィクションが活用する方言イメージ―なぜ静岡方言は使用されにくいのか？―」『ことば』40 / 国立国語研究所(1974)『言語使用の変遷(1)―福島県北部地域の面接調査―』秀英出版 / 児玉卯一郎(1935)『福島県方言辞典』西澤書店 / 佐藤雄一(1992)「福島県の方言」『国文学 解釈と鑑賞』57(7) / 国立国語研究所編(1989-2006)『方言文法全国地図』全 6 巻、財務省印刷局 / 尚学図書編(1989)『日本方言大辞典』小学館 / 白岩広行(2017)「福島方言簡易文法書」『福島県伊達市方言談話資料別冊　福島方言の記述にむけて』上越教育大学白岩広行研究室 / 田中ゆかり(2011)『「方言コスプレ」の時代―ニセ関西弁から龍馬語まで―』岩波書店 / 田中ゆかり(2016)『方言萌え!?－ヴァーチャル方言を読み解く』岩波ジュニア新書 / 田中ゆかり(2020)「第 5 章 映像メディアにおける方言活用」半沢康・新井小枝子編『実践方言学講座　第 1 巻　社会の活性化と方言』くろしお出版 / 田中ゆかり(2021)『読み解き！方言キャラ』研究社 / 半沢康(2018)「福島県福島市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集(4) 活用体系(3)』方言文法研究会

生成 AI がエッセイでどのような語彙を使っているのか
―ChatGPT と I-JAS の母語話者産出データの比較を通して―

麻　子軒（京都外国語大学）

1. はじめに

生成 AI は近年、自然言語生成の分野で顕著な成果を挙げ、人間と遜色ないテキストを生成できるとされるが、その語彙や文法構造は必ずしも母語話者の自然な言語使用と一致するわけではない。特に学術・教育分野で、生成 AI によるテキストの評価や利用制限を適切に行うためには、その言語的特徴が人間のテキストとどのように異なるのかを明らかにする必要がある。本発表では、「生成 AI が特定の条件下で産出する日本語の語彙は、人間のものと比較してどのような違いがあるのか」というリサーチクエスチョンを設定し、日本語の生成 AI が産出するテキストの言語的特徴について検討する。

2. 先行研究

これまで、生成 AI テキストの特徴についていくつかの研究が行われてきた。例えば、三浦他（2024）では、生成 AI によるテキストの検出を目的として、自然言語処理の観点からの分析が行われている。その結果、「単語の連なりの滑らかさ」が生成 AI テキストの特徴の 1 つであることが分かった。また、Guo 他（2023）、Liu 他（2023）、藤原（2023）では、AI が生成した中国語や英語の特徴を言語学の視点から分析している。その結論として、文の長さや語彙の豊富さは人間が産出したものと比べて特徴的であることが挙げられた。特に藤原（2023）で言及された、生成 AI には 1 人称代名詞や思考を表す動詞、法助動詞といった主観的表現があまり見られないことが重要な知見である。

ただし、以上の研究はいずれも日本語以外の言語を対象としており、日本語の生成 AI テキストに関する言語学的分析はまだない。一般的な生成 AI モデルにおいて日本語の訓練データは少ないとされているが、言語構造の違いにより、生成されるテキストの言語的特徴も異なる可能性があると考えられる。そこで本発表では、同一タスクにおける生成 AI の出力データと日本語母語話者による産出データの語彙を統計的手法によって比較し、日本語の生成 AI テキストの言語的特徴を明らかにすることを目的とする。

3. 調査概要

本発表では、生成 AI と日本語母語話者における産出、特に語彙の使用に焦点を当て、それぞれの特徴を比較するため、同一条件による両者のデータが必要である。調査資料として、母語話者のデータには『多言語母語の日本語学習者横断コーパス（以下、I-JAS）』を用いた。I-JAS は本来、日本語学習者の習得状況を調査するコーパスであるが、対照データとして日本語母語話者（以下、JNS）のデータも一部収録されている。本発表では、JNS によるエッセイデータ（48 人分）を使用した。エッセイを選定した理由は、指示となるプ

ロンプトが比較的単純であり、会話データのように人間関係の要因も考慮する必要がなく、生成 AI との比較を容易にするためである。エッセイの内容は、ファースト・フードと家庭料理を比較し、それぞれの良い点や悪い点などを説明するものである。実際に用いたプロンプトは以下の通りである。

> 以下の設定に従って、エッセイを書いてください。
> 【状況】日本の新聞社が「私たちの食生活」というタイトルで、エッセイを募集しています。最優秀作品には、賞金３万円が与えられます。
> 【課題】私たちは日常生活で、ファースト・フードと家庭でゆっくり味わう手作りの料理を食べています。ファースト・フードと家庭料理を比較し、それぞれの良い点や悪い点などを説明して、「食生活」についての意見を６００字程度で書いてください。

比較対象となる AI データについては、上記 I-JAS のタスクで JNS に指示を与える際のプロンプトを ChatGPT-4 に入力し、50 ファイル分の出力データを生成した。ChatGPT-4 を選択した理由は、調査時点において最も代表的な生成 AI モデルであるためである。

調査方法は、全テキストに対して Comainu で長単位の形態素解析を実施し、生成 AI と JNS のデータを相互に参照コーパスとして各語の対数尤度比（以下、LLR）を計算し、頻度が 5 以上かつ 0.1%水準で有意である（LLR≧10.83）ものを特徴語として抽出した。

次節の特徴語の考察に入る前に、先行研究で言及された文の長さと語彙の豊富さについて観察する。表 1 は、生成 AI と JNS における語数（空白・記号・補助記号を除く）と文長（1 文あたりの文字数）の量的構造を示したものである。TTR を確認すると、AI よりも JNS のほうが語彙が豊かであることが分かる。また、文の長さに関しては、AI のほうが JNS よりもやや長いことが示されている。これらの結果は、英語のエッセイを対象に実施された藤原（2023）の調査とは逆の傾向を示しており、言語による違いが見られた。

［表 1］生成 AI と JNS における語数と文長の量的構造

	延べ語数	異なり語数	TTR	1 文あたりの文字数
生成 AI	15,522	972	0.06	45.23
JNS	13,355	2,187	0.16	41.61

4. 考察

本節は、3 節で設定した条件に基づいて得られたデータに対して分析を行う。便宜上、実質語と機能語に分けた上、品詞ごとに考察を進めることにする。

4.1 実質語

まず、実質語である名詞、動詞、形容詞類などにおける傾向を観察する（表 2）。表内の表記は語彙素のままとし、提示順は LLR 順とする（以下同）。

［表 2］実質語の特徴語一覧

	生成 AI	JNS
名詞	利点、最大、食生活、バランス、コミュニケーション、生活、健康、其々、リスク、ファーストフード、家族、日常、質、便利さ、価格、選択、魅力、現代人、日々、事、栄養バランス、準備、鍵、手頃さ、欠点、高カロリー、現代社会、早さ、添加物、生活習慣病、絆、一方、満足感、役割、平日、負担、要素、影響、多く、食形態、選択肢、新鮮さ、保存料、場、人々、必要	物、ファストフード、人、子供、今、仕事、家庭、味、母、ハンバーガー、野菜、家、ＦＦ、ファースト・フード店、気持ち、味付け、気、飲食店、頃、調味料、本当、スローフード、言葉、御店、御弁当、女性、人間、土地、味覚、余裕
動詞	送る、高める、取り入れる、深める、求める、多様化する、楽しむ、指摘する、済む、成り得る、生かす、節約する、育む、果たす、多用する、取れる	思う、食べる、作る、言う、居る、出る、分かる、違う、考える、作れる、並ぶ、行く、注文する、働く、来る
形容詞類	忙しい、重要、偏り勝ち、必要、豊か、非常、精神的、柔軟、可能、望ましい、健康的	美味しい、好き、確か、無い
代名詞	此れ等、私達	私、何時、此処
副詞	先ず	そう、矢張り、迚も、少し、余り、こう、現在

生成 AI では（1）～（3）のように、「魅力、食生活、バランス（名詞）」「高める、求める（動詞）」「必要、重要（形容詞類）」といった抽象的な概念が目立つ一方で、JNS では（4）～（6）のように、「ハンバーガー、野菜、お弁当（名詞）」「食べる、作る（動詞）」「おいしい、好き（形容詞類）」など、より具体的な例や場面を想起させる表現が比較的多用されている。このことから、生成 AI は抽象的で論理的な記述が多いのに対し、JNS は具体的な経験やエピソードを多く語る傾向があることが推測される。

（1） 時間がない中で食事を**済ま**せる**必要**がある時、迅速に提供されるファースト・フードは非常に助かります。また、**価格**の**手頃さ**も**魅力**の一つです。（生成 AI）

（2） ファーストフードと家庭料理は一長一短がありますが、**食生活**の**質**を**高める**には、その両者を上手に**バランス**させることが**求め**られます。（生成 AI）

（3） この二つの食事形態には**それぞれ**の**利点**と**欠点**がありますが、**バランス**のとれた**食生活**を考える上で、これらの特徴を理解することが**重要**です。（生成 AI）

（4） 代表的なメニューは**ハンバーガー**や丼ぶりものなどが主なため、**野菜**がなかなか取れず、また塩分・脂が多く高カロリーな内容になりがちです。（JNS）

（5） 昼、家族に**作っ**て貰った**お弁当**を**食べて**、午後も頑張ろうと思える。夜、香ばしい焼き魚と白米を**食べ**てほっと一息、今日は一日お疲れ様でしたと労う。（JNS）

(6)　しかし小学生時代のわたしにとって、**ハンバーガー**やドーナッツはすばらしく**美味しく**、また魅力的なものでした。（JNS）

また、先行研究で挙げられた、生成 AI テキストに「思う」「考える」といった思考動詞があまりないことも本調査で確認された。（7）（8）のような例は生成 AI には少ない。

(7)　こうして考えてみると、栄養面も重要ではあるが、食生活においてはやはり食べる行為そのものが重視されているのだと**思う**。（JNS）

(8)　したがって、長期的視点にたって考えた場合、FF を過度に摂取することは私たちの食生活を豊かにしないと私は**考える**。（JNS）

一人称代名詞の使用において、生成 AI は（9）のように「私達」を多用する一方で、JNS では（10）のように「私」が主に使用されていることが挙げられる。先行研究同様、日本語においても生成 AI が主観的表現をあまり用いないようである。

(9)　**私たち**の食生活はただ単に「食べる」という行為以上の意味を持ちます。それは健康、家族、コミュニティと密接に関連しており、**私たち**の生活の質を左右する要素です。（生成 AI）

(10)　世の男性、とりわけ男子大学生は家庭料理とファースト・フードの間で生きている人が多い。かくいう**私**もファースト・フードが好きである。（JNS）

なお、JNS は（11）（12）のような「少し」「あまり」などの程度副詞を特徴的に用いている。これらの表現は婉曲表現として機能することがあり、JNS では直接的な表現を避け、和らげるための表現が選択される可能性がある。

(11)　大人になった今は、カロリーの高さから敬遠しているが、ごくたまにシェイクやポテトが恋しくなって、**少し**罪悪感を覚えながらも列に並んでしまう。（JNS）

(12)　また塩分・脂が多く高カロリーな内容になりがちです。健康を考えると毎日食べる事は**あまり**お薦めできません。（JNS）

4.2　機能語

次に、機能語である助詞・助動詞などの特徴語を検討する（表 3）。

［表 3］機能語の特徴語一覧

	生成 AI	JNS
助詞	の（格）、を、つつ、だけでなく、にとって、において、を通じて	か（終）、て、の（準体）、から（接）、ば、という、より、が（接）、だけ、ほど、など、から（格）、で、な、も、と（接）、たり、まで
接続詞	又、但し、一方	そして
助動詞	ます、です、せる、ことができる	た、のだ、ない、たい、てしまう、てくる、のである、てみる、である、ていく
連体詞	大きな、其の	そんな

接続表現においては、生成 AI は接続助詞よりも接続詞を多用する傾向が観察された。生成 AI では（13）（14）のように、「また」「但し」「一方」といった接続詞が特徴的であり、JNS では（15）（16）のように、「から」「が」といった接続助詞が多く使用されている。これは、生成 AI が文構造を単純化し、単文を並べる傾向があるのに対し、JNS が複文を相対的に多用することを意味している。

（13） **一方**、家庭料理には、栄養面でのメリットが大きく、バランスの取れた食事をすることができます。（生成 AI）

（14） 家族が一緒に食事の時間を共有することで、コミュニケーションの場としても機能します。**ただし**、準備に時間がかかることや、料理のスキルが必要であることがハードルとなることもあります。（生成 AI）

（15） どちらにも言えることは、作ってくれる人がいる**から**食べることが出来るということである。美味しいものを食べられることに感謝しなければならない。（JNS）

（16） 手作りの家庭料理はどうだろうか。時間はかかってしまう**が**、栄養バランスも考え作られているし、なによりも時間をかけた分だけの気持ちが入っている。（JNS）

助動詞に関しては、JNS が（17）～（19）のように、「た」「たい」「てしまう」を頻繁に用いるのに対し、生成 AI ではテンスやモダリティに該当する要素が少ない。この点も、生成 AI が個人的な経験に依存しない抽象的な表現を中心にしていることの裏付けと言える。

（17） 子どもの頃、マクドナルドは特別な、ご褒美のような場所だっ**た**。あまり連れて行ってもらえなかっ**た**ぶん、自然と理想化するようになっ**た**のだろう。（JNS）

（18） それでも毎日作るのは栄養があり、体に良いからだ。そして、母の味を覚えてもらい**たい**、料理から愛情を感じてもらい**たい**からだ。（JNS）

（19） 簡単で手頃で時間短縮になることはわかるが、日本の受け継がれてきた食文化、食生活が薄れ**てしまう**ことは悲しいことである。（JNS）

なお、文体の面では、生成 AI は助動詞「です・ます」を用いた敬体がデフォルトとなっているようで、その使用頻度が高いことが確認された。

文章レベルに関して、生成 AI テキストには、下記囲み線内の引用文のように「まず→また（→しかし）→一方（→しかし）→このように」という一定の流れで記述が進む傾向が見られるほか、（20）（21）のように、代名詞「これら」や連体詞「その～」を多用してそれまでに述べた内容をまとめつつ文を展開させるという定型化された構造が観察された。

> **まず**、ファーストフードの最大の利点は、その速さと手軽さにあります。忙しい日々を送る現代人にとって、すばやく食事を済ませることができるファーストフードは、時間の節約に非常に役立ちます。**また**、価格が比較的安価であるため、経済的な負担も少なくなります。**しかし**、その一方で、ファーストフードは栄養バランスが偏りがちで、高カロリーかつ低栄養価であることが多いです。これが、肥満や生活習慣病のリスクを高める要因となっています。
>
> **一方**、家庭料理には、その新鮮さと栄養のバランスが取れている点が挙げられます。家庭料理は、使用する食材を自分で選べるため、健康的な食生活を送るための一助となります。**また**、家族や友人とのコミ

ュニケーションを図る場としても機能し、食事の時間が心の豊かさを育む重要な時間となり得ます。**しかしながら**、時間と労力を要する点がデメリットと言えるでしょう。特に忙しい日々を送る人々にとっては、家庭料理を日常的に準備することが難しい場合もあります。

このように、ファーストフードと家庭料理はそれぞれに良い点と悪い点がありますが、重要なのはバランスを取ることです。（生成 AI）

（20） 中でも、ファーストフードと家庭料理はその最たる例である。**これら**二つの食形態を比較し、それぞれの利点と欠点を探ることは、健康で文化的な食生活を送るための鍵となる。（生成 AI）

（21） 食生活は単に体を動かす燃料ではなく、私たちの生活を豊かにする文化である。**その**文化を大切にし、質の高い食生活を送ることが、豊かな人生への鍵であると考える。（生成 AI）

5. まとめと今後の課題

本発表では、生成 AI と JNS の産出データの違いを分析し、以下の結論を得た。

まず、名詞や動詞では、生成 AI は抽象的な概念が目立つ一方、JNS は具体的な場面を想起させる表現が多い。助動詞も、生成 AI より JNS の方がテンスやモダリティ相当表現を用いやすい。これらのことから、生成 AI は抽象的かつ論理的な記述が多く、JNS は具体的な経験を語る傾向があると推測される。また、一人称代名詞では、生成 AI は「私達」を多用し、JNS は「私」が主に使われる。副詞では、JNS のみ程度副詞が多く、婉曲な言い回しが好まれる傾向がある。次に、生成 AI は接続助詞より接続詞を多用し、JNS の方が複雑な文を作る傾向がある。さらに、生成 AI のテキストには定型化された構成が見られた。最後に、文体の面では、生成 AI は「です・ます」を用いた敬体がデフォルトである。

ただし､今回対象とした JNS の全員にエッセイを書く訓練を受けたわけではないようで、この点が結果にどの程度影響を与えているかについては、今後の課題とする。

参考文献

Guo B, Zhang X, Wang Z, Jiang M, Ni J, Ding Y, Yue J, Wu Y,“How Close is ChatGPT to Human Experts? Comparison Corpus，Evaluation，and Detection”, arXiv preprint arXiv 2301.07597，p.6（2023）.

Liu Y，Zhang Z，Zhang W，Yue S，Zhao X，Cheng X，Zhang Y，Hu H，“ArguGPT: evaluating, understanding and identifying argumentative essays generated by GPT models”, arXiv preprint arXiv 2304.07666（2023）.

藤原隆史（2023）「ChatGPT生成エッセイと英語母語話者によるエッセイの比較―コーパス言語学の視点から―」『地域総合研究』24

三浦東子・谷口雅弥・坂口慶祐・乾健太郎（2024）「検出器の判断に基づく大規模言語モデルの生成テキストの特徴分析」『言語処理学会 第30回年次大会 発表論文集』

外国語により記述された日本語研究の動向
―「日本語研究・日本語教育文献データベース」を基に―

今村志紀（いまむらしき）　髙田智和（たかだともかず）　石黒圭（いしぐろけい）（国立国語研究所）

1. 目的と背景

日本語の研究において、外国語により記述された文献の動向に関する調査は多くない。年度ごとの動向については、ニコルソン（2024）や王・宗（2024）のような『日本語の研究』における定期的な掲載はあるが、その性格上最新情報が主であり、文献全体について、あるいは年代別の推移や言語ごとの動向といった視点ではない。また、杉本（1999）をはじめ、著者の属性（日本人か否か）による分類法は存在するが、記述に用いられた「言語」による分類ではない。日本語学以外に目を向けると、大津（1984）、根岸（1996）や伊藤（2013）をはじめいくつかの研究があるが、いずれも「国別」であったり、「日本」の大学における言語別であったりと、「国」というファクターが存在する。

本調査では、「日本語研究・日本語教育文献データベース」に収録された文献情報を基に、著者の属性や発表された国を問わず、言語による分類を行う。中でも外国語により記述された文献を中心に据え、日本語により記述された文献とも比較しながら、その日本語研究の動向を概観することを目的とする。

2. 調査概要

調査対象は「日本語研究・日本語教育文献データベース（以下文献データベース）」とする。これは国立国語研究所の共同利用推進センターが提供するものであり、『国語年鑑』（1954-2009）、『日本語教育年鑑』（2000-2008）に掲載された文献情報を源流としながら、現在まで更新が続けられているものである。

対象とするデータは 2024 年 12 月更新版とする。文献数の総計は 292,514 件である。なお、記述に用いられた言語については、各々の文献タイトルから機械的に分類した。

3. 調査結果と考察

3.-1. 言語別

記述に用いられた言語を「日本語・それ以外」で分類すると、総計 292,514 件のうち 272,722 件が日本語、それ以外は 19,792 件である。率にすると、日本語が約 93.2%（小数点第二位で四捨五入、以下同じ）を占め、それ以外は 6.8%である。

次に、日本語以外の内訳について述べる。記述に用いられた言語をそれぞれ「英語」「韓国語」「中国語」「ロシア語」「ドイツ語」「フランス語」「スペイン語」「その他」に分類した。その構成比を次の図 1 に示す。

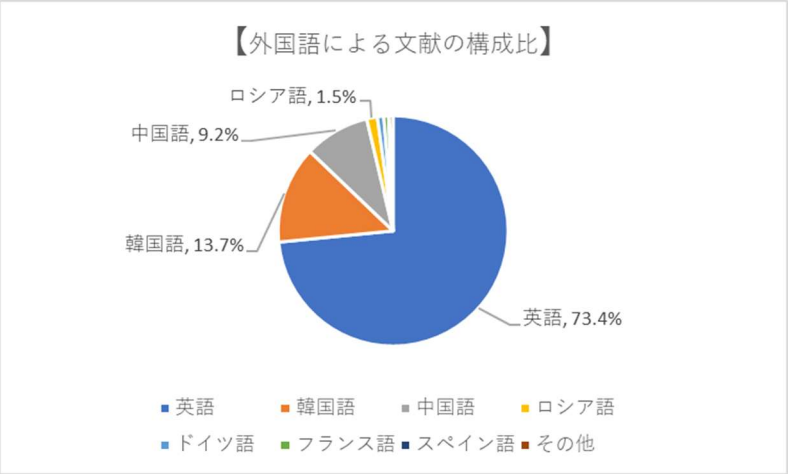


図 1　外国語による文献の構成比

全 19,792 件のうち、圧倒的に多いのは英語により記述された文献である。件数にして 14,536 件、率にして 73.4%である。次に多いのは韓国語の 2,708 件（13.7%）、続くのは中国語の 1,818 件（9.2%）であり、この三言語の合計で 96.3%を占める。それ以降はロシア語が 1.5%、続くのはドイツ語、フランス語、その他、スペイン語だが、いずれも 1%に満たない。

なお、その他の言語には、イタリア語、タイ語、チェコ語、ベトナム語、ポルトガル語などが含まれている。

3.-2.　年代別

3.-2.-1.　日本語により記述された文献とそれ以外の比較

次に、年代別の推移を見ていく。「文献データベース」には、古いもので 1920 年代からの文献が収録されているが、ここから 2024 年 12 月の更新時点まで、年代ごとの収録数について調査した結果が以下のとおりである。なお、2020 年代については、今回は対象外とした。2020 年から 2024 年分のみのデータを使用する方法もあるが、今回使用したデータ（2024 年 12 月更新版）では、まだこの部分についても情報が反映されきっていない（受入中、採録中、入力中など作業中のデータが多数存在する）ためである。

結果としては、日本語とそれ以外において、推移の傾向にはっきりとした差がみられた。端的に言えば、日本語により記述された研究文献は 2000 年代をピークに減少している一方で、外国語により記述された研究文献は、増加の一途をたどっている。

日本語により記述された文献について詳しく見ていく（図 2 参照）と、1950 年代から 1980 年代までは増加、1990 年代に若干減少するが、次の 2000 年代では盛り返し過去最高値を記録する。ところが、2010 年代では大きく減少している。

対して、外国語により記述された文献（図 3 参照）では、増加は日本語に少し遅れること 1970 年代からではあるが、全体として右肩上がり、特に 1990 年代から 2010 年代にかけて大きく伸びている。



図 2　日本語文献の年代別推移



図 3　外国語文献の年代別推移（全体）

ではここから、外国語により記述された文献がなぜ伸びているのかについて、その原因を言語別の内訳から探っていく。

3.-2.-2.　外国語により記述された文献の内訳（言語別推移）

外国語により記述された文献について、用いられた言語別に分類し、各々の年代別推移を分析した。その結果を次の図 4 に示す。

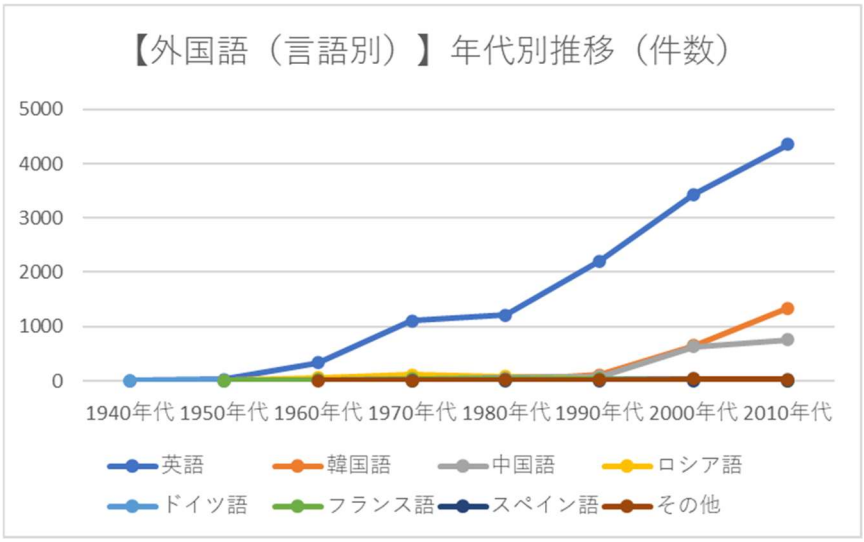


図 4　外国語文献の年代別推移（言語別）

前項で外国語全体の傾向として「1970 年代からの伸び」と「1990 年代から 2010 年代にかけての大きな伸び」を指摘したが、前者の主な原因は英語により記述された文献の増加であり、後者は英語のさらなる伸びと、韓国語・中国語の伸びに起因することが分かる。

次に、各言語の占有率（外国語による文献のうち、それぞれの言語がどの程度を占めているのか）を年代別に示す。

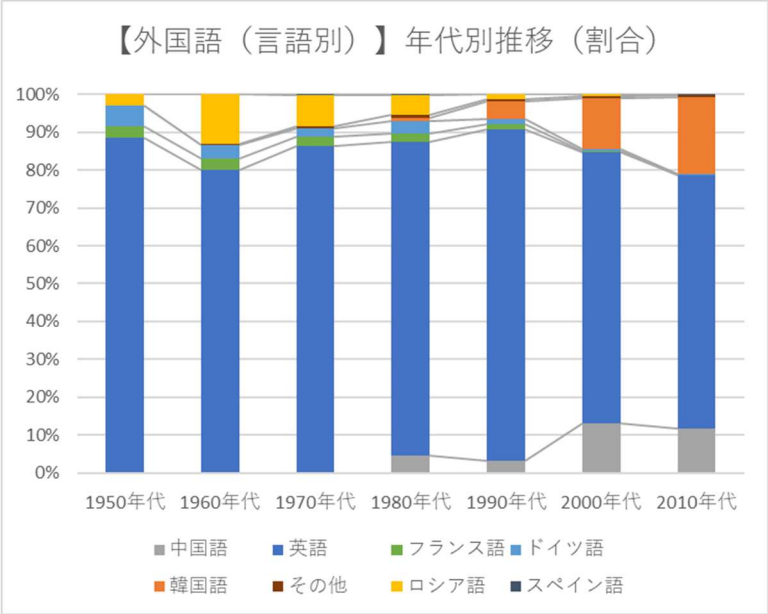


図 5　外国語文献における各言語の占有率

いずれの年代においても英語による文献が大部分を占めていることに変わりはないが、その割合は 1990 年代から伸び始める韓国語・中国語によって少しずつ低下していることが分かる。また、1990 年代まで見えるロシア語・ドイツ語・フランス語については、韓国語・中国語の台頭と入れ替わるように、その姿をほぼ消している。韓国語・中国語の文献が増えた背景には、韓国の学会や台湾の大学等と協力し文献収集をしていることがあるが、現在は科研費を得て中国本土の文献収集にも力を入れているため、今後その数は一層増えることが予想される。

3.-3.　分野別

ここからは分野について述べる。分野とは、「文献データベース」に登録された文献一つ一つに、その内容に基づいて付与されているものである。現在は 18 の分野があり、「日本語学一般、日本語史、音声・音韻、文字・表記、語彙・用語、文法、文章・文体、方言、日本語情報処理、コミュニケーション、マスコミュニケーション、国語問題・言語問題、国語教育、日本語教育、言語学、辞書、資料、書評」に分類されている。付与される分野の数は、一つの文献に対し、原則として最大三つ（関連度の高い順）である。なお、「文献データベース」においては、この分野ごとに対象の文献を検索することもできる。

まず、記述に用いられた言語に関わらず文献全体としての上位 5 分野は、1 位「国語教育」2 位「言語学」3 位「日本語史」4 位「文法」5 位「コミュニケーション」であった。

次に、用いられた言語を日本語と外国語で分けた場合の各上位 5 分野を示す。

日本語の上位 5 分野は、1 位「国語教育」2 位「日本語史」3 位「言語学」4 位「コミュニケーション」5 位「語彙・用語」であり、外国語の上位 5 分野は、1 位「言語学」2 位「文

法」3 位「日本語教育」4 位「コミュニケーション」5 位「音声・音韻」であった。

日本語と外国語の順位を比較すると、共通しているのは二つ、「言語学」と「コミュニケーション」のみであり、異なる部分のほうが多い。日本語文献のみにランクインしているのが「国語教育」「日本語史」「語彙・用語」、外国語文献のみにランクインしているのが「文法」「日本語教育」「音声・音韻」であり、用いられる言語によって、選ばれる分野に違いがあることがわかる。なお、日本語のみでランクインしている三つのうち「国語教育」「日本語史」が全体でも 1 位と 3 位に入っているのに対し、外国語のみでランクインした三つがいずれも全体の上位 5 分野に入っていないのは、やはり日本語文献の多さの影響であろう。

また、外国語により記述された文献については、言語ごとの上位 5 分野も算出した。外国語全体と各々の言語についての結果は、次の表のとおりである。

	外全体	英	韓	中	露	独	仏	西	他
1	言語学	言語学	日本語教育	文法	日本語学一般	言語学	文法	文法	日本語教育
2	文法	文法	言語学	言語学	日本語教育	日本語学一般	言語学	言語学	文法
3	日本語教育	コミュニケーション	語彙・用語	日本語教育	文法	文法	日本語学一般	コミュニケーション	言語学
4	コミュニケーション	音声・音韻	日本語史	語彙・用語	言語学	語彙・用語	語彙・用語	音声・音韻	語彙・用語
5	音声・音韻	日本語教育	コミュニケーション	日本語史	語彙・用語	コミュニケーション	日本語史	語彙・用語	コミュニケーション

表 1　言語別上位 5 分野（外国語）

図 1 において示したように、英語だけで外国語文献全体の 73.4%を占め、韓国語・中国語を加えた三言語で 96.3%を占めている。この三言語に共通してランクインしている分野「言語学」「日本語教育」はそのまま外国語全体でもランクインしている。

三言語中二言語でランクインしている分野は「文法」「コミュニケーション」「語彙・用語」「日本語史」の四つであるが、前の二つは全体でもランクインしているのに対し、後の二つは全体ではランク外である。この差は、「二言語」に英語が含まれるか否かである。「文法」は英語と中国語で、「コミュニケーション」は英語と韓国語でランクインしている一方、「語彙・用語」と「日本語史」がランクインしているのは韓国語と中国語であり、英語ではランク外である。加えて、三言語のうち英語のみでランクインしている「音声・音韻」は全体でも 5 位に入っており、やはり英語内でのランキングがそのまま外国語全体に影響を及ぼしている、ということができる。

なお、記述言語に関わらず、分野はすべて関連度順に付与しているということは、本項の冒頭で述べたとおりである。全ての文献について、関連度の高い分野から順に傾斜配点をするか否かで、上位 5 分野に変化があるのかどうか調査したところ、4 位以外は全て同じ順位（1 位「国語教育」2 位「言語学」3 位「日本語史」5 位「コミュニケーション」）であった。4 位については、傾斜をしない場合は前述のとおり「文法」であるが、傾斜をかけた場合は「日本語教育」となった。これは、二者を比べた場合に、日本語教育分野を含む文献はその日本語教育がメインの内容であるのに対し、文法分野を含む文献は他分野とも結びつきやすい傾向があるためかと推察される。

4. まとめ

ここまで「文献データベース」の文献情報を、記述に用いられた言語を基に分析してきた。その結果、外国語で記述された文献は全体の 6.8%とまだ多くはないものの、日本語で記述された文献が減少傾向にあるのに対し、外国語のそれは伸び続けていることから、今後の占有率上昇が予想されることが分かった。

外国語で記述された文献を言語別に見ていくと、英語だけで外国語全体の 73.4%を占め、韓国語・中国語を加えた三言語で 96.3%を占めており、この三言語の伸びが、外国語文献全体の伸びに大きく影響している。中でも韓国語・中国語の伸びは大きく、外国語全体に占める英語の割合は、一強ではありつつも少しずつ減少傾向にある。

分野については、言語別に上位 5 分野の比較を行った。共通点もある一方、日本語文献での「国語教育」と外国語文献での「日本語教育」の順位差や、主な外国語同士でも「音声・音韻」は英語のみで、「日本語史」「語彙・用語」は韓国語・中国語のみでランクインするなど、記述に用いられる言語によって、選ばれる分野に違いがあることが分かった。

5. 今後の展望

ここまでの調査については上記のとおりであるが、現在、「文献データベース」のさらなる充実を目指し、オンラインジャーナルの選定基準見直しや、3.-2.でも触れたとおり中国（本土）文献の追加などを行っている。収録文献数は、今後もさらに伸びていくと期待される。

参考文献

伊藤祥（2013）「日本の大学が生産した学術文献の言語別分析」『情報管理』56 (8)、pp.525-535、 国立研究開発法人 科学技術振興機構

王鼎・宗聡（2024）「海外における日本語研究――アジアを中心に――」『日本語の研究』第 20 巻 2 号、pp.109-113、日本語学会

大津潔（1984）「日本の自然科学と社会科学文献のビブリオメトリック的研究」『Library and Information Science』21、pp.19-27、三田図書館・情報学会

ショーン・ニコルソン（2024）「海外における日本語研究――欧米語圏を中心に――」『日本語の研究』第 20 巻 2 号、pp.101-108、日本語学会

杉本つとむ（1999）『西洋人の日本語研究』杉本つとむ著作全集 10、八坂書房

根岸正光（1996）『学術論文数の国際比較調査 : 理学・工学・医学分野の学術論文数の動向 1976-1993 = International comparison of the number of scientific papers : trends of scientific paper publication in science, engineering and medicine』学術情報センター

山東直砥『新撰山東玉篇　英語挿入』における漢音・呉音について

中澤信幸（山形大学）　石山裕慈（神戸大学）
岩城裕之（高知大学）　加藤大鶴（早稲田大学）

0　はじめに

『新撰山東玉篇　英語挿入』（1878 年刊、明治 11、以下『新撰山東玉篇』と略称）は、紀州出身の役人、実業家で教育者でもあった山東直砥（1840～1904）によって編纂された漢字字書である。『新撰山東玉篇』はジャイルズ（H. A. Giles）の辞書『A Chinese-English Dictionary』（1892 年刊）でもその書名が見られるが、それ以外にはほとんど知られておらず、言語学・日本語学の学界でもその存在が紹介されたことはない。発表者はこの『新撰山東玉篇』に光を当て、その字書の性格や典拠等について考察を行っている（中澤 2025）。

本書は近代漢字字書が世に出る前の時期のものであり、ここでの漢音・呉音が江戸時代の漢字音研究や「字音仮名遣い」をどのように受け継いでいるのか、興味が持たれるところである。近代の漢字字書類が江戸時代の漢字音研究をどのように受け継ぎ、そして現代の漢字字書へとつなげていったのかは、現時点では必ずしもあきらかにはなっていない。本発表は、『新撰山東玉篇』における漢音・呉音の枠組みの解明を通して、その歴史の空白を埋めようとするものである。

1　山東直砥『新撰山東玉篇　英語挿入』

1.1　山東直砥について

山東直砥は 1840 年（天保 11）紀州和歌山生まれ。12 歳の時に僧侶になるべく高野山へ行くも、翌年には脱走。20 歳の時に父の死に際して還俗、山東一郎と名乗る。以後も勤皇の志士として諸国を渡り歩き、坂本龍馬や同郷の陸奥宗光と出会う。29 歳の時、明治維新に際して箱館裁判所の外国事務権判事に任命されるも、翌年には辞任。学校経営に携わる。33 歳の時、直砥と改名。神奈川県令となった陸奥宗光に呼ばれて神奈川県に出仕。翌年には神奈川県参事となる。36 歳の時に県参事を辞職し、以後は実業家として活躍する。1904 年（明治 37）、65 歳で死去。

山東は出版事業にも力を入れており、薔薇楼という出版社の運営に携わった。『新撰山東玉篇』もこの薔薇楼から出版されている。山東 39 歳の時である[1]。

1.2　『新撰山東玉篇』の書誌

『新撰山東玉篇』は初め和本で分売発売され、後に 1 冊にまとめて洋本にしたと言う（中井 2018a p.313）。洋本は活版で縦 193mm×横 142mm。（四六判よりやや大きい。）ページ数は全部で 1,190 である[2]。

---

[1] 山東直砥の生い立ちについては、中井けやき（2018a）（2018b）に詳細な記述がある。

[2] 発表者所蔵本による。（2023 年 4 月に東京の bangobooks より購入。）この本の冒頭遊び紙には「舊和歌山徳川氏藏」の印がある。また「索引」の pp.3-6、「檢字」の pp.3-4 および pp.7-10 を欠く。
なお、ハーバード大学所蔵本の画像が Google ブックスのサイトで公開されている。

本扉には以下のような記載がある[3]。

山東直砥增補　　（検印）（検印紙）

新撰山東玉篇英語挿入

明治十一年九月印行

一方、奥書には

明治九年九月四日版權免許

という記載があり、『新撰山東玉篇』は明治 9 年（1876）には版権を得ていたものの、実際の刊行は明治 11 年（1878）になったことがわかる[4]。

2　『新撰山東玉篇』における漢字音注

2.1　凡例

『新撰山東玉篇』の冒頭では 8 項目の凡例を示す。そのうち 2 番目の項目で、本書が『康熙字典』（張玉書・陳廷敬ら、1716 年刊）を典拠としていることを述べる。

一　此書訂正一ニ康熙字典ニ據ル而シテ其文字ノ音義共ニ無キ者及ヒ音アリ義ナク義アリ音ナキ者一切闕如シ自餘四萬有奇ハ之ヲ完存ス但籀文古字ノ如キハ別ニ巻首ニ鈔錄ス亦簡約ニ從フナリ

また、6 番目の項目で、漢字音注について以下のように述べる。

一　字音ハ右ニアルヲ漢音左ニアルヲ呉音トス四聲ハ圈點ヲ四隅ニ施シ以テ之ヲ分チ相當韻字ヲ左傍ニ記ス其聲韻轉換スル者ハ各各訓義ノ上ニ於テ詳カニス皆ナ舊本ノ例ニ隨フ

2.2　漢字音注

凡例に示したように、例えば冒頭の「一」（p.1）については、右側に漢音として「イツ」、左側に呉音として「イチ」、右下に〇点（入声）、さらに左側に韻として「質」と記す。また、「命」（p.70）については、右側に漢音「ベイ」、左側に呉音「ミヤウ」、右上に〇点（去声）、左側に韻「敬」と記し、さらに下の訓注の後に「又音メイ」と記す。

3　江戸時代漢字音資料との対照

3.1　取り上げる資料と対照の結果

この『新撰山東玉篇』の漢音・呉音について、江戸時代漢字音資料との影響関係を見るために、文雄『磨光韻鏡』（1744 年刊、延享元）、太田全斎『漢呉音図』（1815 年成、文化 12）、白井寛蔭『音韻仮字用例』（1860 年刊、万延元）との対照を行う（→**表 1**）。

3.2　声母

No.1～2 は、清音と濁音について見たものである。『磨光韻鏡』『漢呉音図』『音韻仮字用例』とも漢音清音、呉音濁音となっており、『新撰山東玉篇』も同様としている。

No.3 は明母、No.4 は泥母について見たものである。これらは字音仮名遣いでは漢音バ行・ダ行、呉音マ行・ナ行とされるものである。ただし、実際の漢音では、「-ŋ」など鼻音韻尾を持つ字はマ行・ナ行で現れることが多い（有坂秀世 1940）。『新撰山東玉篇』では『磨光韻鏡』『漢呉音図』『音韻仮字用例』と同様に漢音は「ベイ」「デイ」とするもの

[3] 原文はすべて縦書きである。以下同じ。

[4] この間、山東は西南戦争に連動した政府転覆事件（立志社陰謀事件）に巻き込まれ、拘留を恐れて表立った活動を控えていたという。中井（2018a）pp.265-273 参照。

なお、『新撰山東玉篇』の書誌の詳細については、中澤（2025）参照。

表 1　江戸時代漢字音資料との対照[5]

No	掲出字	新撰山東玉篇	磨光韻鏡	漢呉音図	音韻仮字用例
1	上	シヤウ・ジヤウ（p.1）	シヤウ・ジヤウ（三十一転）	シヤウ／サウ・ジヤウ／ザウ（三十一転）	しやう・しよう シヤウ／サウ・シヨウ／ソウ（22 ウ）
2	時	シ・ジ（p.287）	シ・ジ（八転）	セイ／シ・ザイ／ジ（八転）	じ セイ／シ・ザイ／ジ（34 ウ）
3	命	ベイ・ミヤウ 又音メイ（p.70）	ベイ・ミヤウ（三十三転）	ビエイ／ベイ・ミヤウ／マウ（三十三転）	みやう ビエイ／ベイ・ミヤウ／マウ（32 オ）
4	寧	デイ・ニヤウ（p.148）	デイ・ニヤウ（三十五転）	デイ・ニヤウ／ナウネイ（三十五転）	なう デイ／ネイ・ニヤウ／ナウ（28 オ） にやう ヂエイ／デイ・ニヤウ／ナウ（29 オ）
5	帽	バウ・モウ（p.182）	バウ・マウ（二十五転）	ビヤウ／バウ・ミヨウ／モウ（二十五転）	はう ビヤウ／バウ・ミヨウ／モウ マウ（30 オ） もう ビヤウ／バウ・ミヨウ／モウ（32 オ）
6	暴	ハウ・ボウ（p.292）	ハウ・バウ（二十五転）	ヒヤウ／ハウ・ビヨウ／ボウ（二十五転）	はう・ほう ヒヤウ／ハウ・ヒヨウ／ホウ（29 ウ）
7	第	テイ・ダイ（p.554）	テイ・ダイ（十三転）	テイ／チ・ダイ／ヂ（十三転）	
8	閉	ヘイ・ヘイ（p.907）	ヘイ・ヘイ（十三転）	ヘイ／ヒ・ハイ／ヒ（十三転）	
9	中	チウ・チユ（p.2）	チウ・チユ（一転）	チユウ／ツウ・ツヲウ／トウ（一転）	ちゆう　ちう チヨウ／トウ・チユウ／ツウ（26 ウ）
10	風	フウ・フ（p.966）	フウ・フ（一転）	ヒユウ／フウ・フヲウ／ホウ（一転）	ほう ヒヨウ／ホウ・ヒユウ／フウ（30 ウ）
11	侵	シン・シン（p.13）	シン・シン（三十八転）	シム・ソム（三十八転）	
12	添	テン・テン（p.369）	デン・テン（三十九転）	テム・テム（三十九転）	
13	分	フン・フン（p.37）	フン・フン（二十転）	ヒユヌ／フヌ・フヲニ／ホニ（二十転）	
14	君	クン・クン（p.66）	クン・クン（二十転）	キユヌ／クヌ・クヲニ／コニ（二十転）	
15	一	イツ・イチ（p.1）	イツ・イチ（十七転）	イイツ／イツ・イチ（十七転）	以つ 以以ツ／以ツ・以以チ／以チ（6 ウ）
16	質	シツ・シチ（p.808）	シツ・シチ（十七転）	シイツ／シツ・シチ（十七転）	
17	立	リフ・リフ（p.550）	リフ・リフ（三十八転）	リフ・ロフ（三十八転）	りふ リフ・ロフ（33 ウ）
18	雑	サフ・ザフ（p.928）	サフ・ザフ（三十九転）	サフ・ゾフ（三十九転）	さふ・そふ サフ・ソフ（21 オ）
19	汎	フウ・フ（p.358）	ハン・ホン（四十一転）	フワム／ハム・ホム（四十一転）	

の、「命」については「又音」として「メイ」も併記している。（「名」「明」など他の明母字も同様。）

3.3　韻・韻尾

No.5～6 は、豪（皓・号）韻脣音について見たものである。豪韻は日本漢字音では通常 -au で現れるが、脣音字については「ホウ・ボウ・モウ」のように-ou で現れていた。そ

[5] 各資料の漢字音について「漢音・呉音」の順に示す。（**表 2** も同様。）また『漢呉音図』『音韻仮字用例』の「原音」「次音」については、「原音／次音」の順に示す。『音韻仮字用例』の「以」は「ヤ行のイ」である。

れが江戸時代の字音仮名遣いでは、脣音字も「ハウ・バウ・マウ」のように（他の声母に合わせて）-au に変えられる（有坂 1941）。『磨光韻鏡』では漢音・呉音ともに-au としているが、『漢呉音図』『音韻仮字用例』では漢音-au・呉音-ou と棲み分けをしている。『新撰山東玉篇』も同様に漢音「バウ」・呉音「モウ」としている。

No.7～8 は、斉（薺・霽）韻開口について見たものである。これは日本漢字音では漢音・呉音とも-ei、-ai 両形で現れていたのが、江戸時代の字音仮名遣いでは漢音-ei・呉音-ai と整理されるものである（中澤 2009）。『磨光韻鏡』では「閉」のみ漢音・呉音とも「ヘイ」とする一方、『漢呉音図』では漢音「ヘイ」・呉音「ハイ」としている。『新撰山東玉篇』は『磨光韻鏡』と同様としている。

No.9～10 は、東（送）韻二三四等について見たものである。これは日本漢字音ではさまざまな形で現れるが、江戸時代以降は整理が進んでいくものである。『磨光韻鏡』『漢呉音図』『音韻仮字用例』はそれぞれ三者三様であるが、『新撰山東玉篇』は『磨光韻鏡』と同様としている。

No.11～14 は、鼻音韻尾について見たものである。No.11～12 は中古中国語音では-m 韻尾、No.13～14 は中古中国語音では-n 韻尾となる。『磨光韻鏡』は-m 韻尾と-n 韻尾を区別せず一律に「-ン」とするのに対し、『漢呉音図』は両者を区別して「-ム／-ヌ（漢音）・-ニ（呉音）」としている。『新撰山東玉篇』はここでも『磨光韻鏡』と同様である。

No.15～16 は、舌内入声韻尾-t について見たものである。『磨光韻鏡』『漢呉音図』『音韻仮字用例』とも漢音「-ツ」・呉音「-チ」としており、『新撰山東玉篇』も同様である。

No.17～18 は、脣内入声韻尾-p について見たものである。これは日本漢字音では「-フ」と表記されるが、促音化して「-ツ」と表記されることもある。（「立」「雑（雜）」はこんにちでは「-ツ」と読まれるのが一般的である。）『磨光韻鏡』『漢呉音図』『音韻仮字用例』とも「-フ」としており、『新撰山東玉篇』もそれらと同様である。

No.19 は変則的な例である。『磨光韻鏡』『漢呉音図』ではともに四十一転の去声「梵韻」にあるが、『新撰山東玉篇』では「東」（すなわち「東韻」）と注記される。この字は『広韻』では平声東韻三等（「房戎切」）と去声梵韻（「孚梵切」）とに分かれるが、『磨光韻鏡』『漢呉音図』は後者に拠っているのに対して、『新撰山東玉篇』は前者に拠っていると考えられる。ちなみに、『新撰山東玉篇』が典拠としている『康熙字典』では、『唐韻』『集韻』からの引用として「孚梵切」を挙げる一方、『広韻』からの引用として「房戎切」を挙げている。

4　明治時代漢字音資料との対照

4.1　取り上げる資料と対照の結果

次に、この『新撰山東玉篇』の漢音・呉音と、明治時代漢字音資料との影響関係を見るために、橋爪寛一編『訓蒙康熙字典』（1880 年刊、明治 13）、大塚宇三郎編『袖珍軽便康熙字典』（1902 年識語、明治 35、1905 年刊、明治 38）、重野安繹・三島毅・服部宇之吉監修、亀井忠一編『漢和大字典』（1903 年刊、明治 36、三省堂）、台湾総督府編『日台大辞典』（1907 年刊、明治 40）「日台字音便覧」との対照を行う（→**表 2**）。

4.2　声母

No.1～2 はいずれも『新撰山東玉篇』と同様である。No.3 であるが、『新撰山東玉篇』では漢音を「ベイ」とする一方で「又音メイ」を併記していた。『訓蒙康熙字典』『袖珍軽

表 2　明治時代漢字音資料との対照

No	掲出字	新撰山東玉篇	訓蒙康熙字典	袖珍軽便康熙字典	漢和大字典	日台字音便覧
1	上	シヤウ・ジヤウ（p.1）	シヤウ・ジヤウ（一 1 オ）	シヤウ・ジヤウ（上 p.1）	シヤウ・ジヤウ（p.2）	シャウ・ジャウ（p.1）
2	時	シ・ジ（p.287）	シ・ジ（二 30 ウ）	シ・　（上 p.221）	シ・ジ（p.575）	シ・ジ（p.23）
3	命	ベイ・ミヤウ 又音メイ（p.70）	ベイ・ミヤウ（一 30 ウ）	ヘイ・ミヤウ（上 p.60）	メイ・ミヤウ（p.158）	メイ・ミャウ（p.8）
4	寧	デイ・ニヤウ（p.148）	デイ・ニヤウ（一 58 ウ）	テイ・ニヤウ（上 p.116）	デイ・ネイ（p.305）	デイ・ネイ（p.13）
5	帽	バウ・モウ（p.182）	バウ・モウ（一 70 ウ）	ボウ・　（上 p.140）	バウ・モウ（p.353）	バウ・モウ（p.15）
6	暴	ハウ・ボウ（p.292）	ハウ・ボウ（二 32 オ）	ハウ・ボウ（上 p.224）	バウ・モウ（p.583）	バウ・モウ（p.24）
7	第	テイ・ダイ（p.554）	テイ・ダイ（三 43 オ）	タイ・テイ（下 p.3）	テイ・ダイ（p.1022）	テイ・ダイ（p.40）
8	閉	ヘイ・ヘイ（p.907）	ヘイ・ヘイ（四 54 オ）	ヘイ・　（下 p.266）	ヘイ・バイ（p.1546）	ヘイ・ハイ（p.60）
9	中	チウ・チユ（p.2）	チユウ・チユ（一 1 ウ）	チユウ・チユ（上 p.2）	チウ・チユ（p.5）	チュウ・チョウ（p.1）
10	風	フウ・フ（p.966）	フウ・フ（四 76 オ）	フウ・フ（下 p.311）	フウ・フ（p.1628）	フウ・ホウ（p.62）
11	侵	シン・シン（p.13）	シン・シン（一 7 ウ）	シン・　（上 p.14）	シン（p.31）	シン（p.2）
12	添	テン・テン（p.369）	テン・テン（二 62 オ）	テン・　（上 p.284）	テン（p.751）	テン（p.30）
13	分	フン・フン（p.37）	フン・フン（一 17 オ）	フン・ブン（上 p.34）	フン・ブン（p.83）	フン・ホン（p.5） フン・ブン（p.5）
14	君	クン・クン（p.66）	クン・クン（一 29 ウ）	クン・　（上 p.58）	クン・コン（p.149）	クン・コン（p.7）
15	一	イツ・イチ（p.1）	イツ・イチ（一 1 オ）	イツ・イチ（上 p.1）	イツ・イチ（p.1）	イツ・イチ（p.1）
16	質	シツ・シチ（p.808）	シツ・　（四 18 ウ）	シツ・　（下 p.193）	シツ・シチ（p.1405）	シツ・シチ（p.54）
17	立	リフ・リフ（p.550）	リフ・リフ（巻三 41 オ）	リフ・　（上 p.418）	リフ（p.1011）	リフ・リツ（p.39）
18	雑	サフ・ザフ（p.928）	サフ・ザフ（巻四 62 オ）	サフ・ザフ（下 p.283）	サフ・ゾフ（p.1579）	ザフ・ザツ（p.61）
19	汎	フウ・フ（p.358）	フウ・フ（巻二 56 オ）	ハン・　（上 p.272）	ハン・ホン（p.715） ヒウ・フ（p.715） ハフ・ボフ（p.715）	ハン・ホン（p.28）

便康熙字典』は漢音「ベイ」「ヘイ」とする一方で、『漢和大字典』および「日台字音便覧」では漢音「メイ」とするなど、この「メイ」の扱いは資料によって分かれる。なお、『新撰山東玉篇』の「又音」注記は後の「慣用音」にもつながるものとして注目される[6]。No.4 は『訓蒙康熙字典』『袖珍軽便康熙字典』が『新撰山東玉篇』と同様とする一方、『漢和大字典』および「日台字音便覧」では呉音「ネイ」としている。No.3 の「メイ」

[6] 「慣用音」を明記した最初の漢字字書は、『新訳漢和大辞典』（三島毅・大槻文彦監修、濱野知三郎著、1912 年刊、明治 45、六合館）と考えられる。中澤（2019）参照。

は漢音とする一方で、「ネイ」は呉音としている点は興味深い。

4.3 韻・韻尾

No.5～6 はほとんど『新撰山東玉篇』と同様であるが、『袖珍軽便康熙字典』では「帽」については漢音「ボウ」（呉音なし）としており、必ずしも漢音-au・呉音-ou という図式ではないようである。No.7～8 は『訓蒙康熙字典』が『新撰山東玉篇』と同様とする一方、『袖珍軽便康熙字典』は「第」については漢音と呉音が入れ替わる。また『漢和大字典』および「日台字音便覧」は「閉」の呉音を「バイ」「ハイ」としており、こちらは『漢呉音図』と同様である。No.9～10 は『訓蒙康熙字典』『袖珍軽便康熙字典』『漢和大字典』とも『新撰山東玉篇』とほぼ同様であるが、「中」の漢音表記は「チウ」と「チユウ」で分かれる。一方「日台字音便覧」では呉音を「チョウ」「ホウ」としているのが興味深い。No.11～14 はいずれも『新撰山東玉篇』と同様で、-m 韻尾と-n 韻尾を区別せず一律に「-ン」としている。No.15～16 もほとんど『新撰山東玉篇』と同様であるが、『訓蒙康熙字典』『袖珍軽便康熙字典』では「質」については呉音は示さない。No.17～18 については、『訓蒙康熙字典』『袖珍軽便康熙字典』『漢和大字典』とも『新撰山東玉篇』とほぼ同様であるが、「日台字音便覧」のみ呉音を促音化した「-ツ」としているのが興味深い。No.19 は『訓蒙康熙字典』のみ『新撰山東玉篇』と同様としている。この両書は刊行時期も近く、ともに『康熙字典』の影響を受けている点で密接な関係が想起される。

5 おわりに

以上、『新撰山東玉篇』の漢音・呉音と、その前後期の資料に見られる漢字音との対照を行った。そこでは資料間のさまざまな影響関係が垣間見られた。

近代の漢字字書などに掲載された漢音・呉音などの情報が、それぞれどの資料を参照しているのかは本来基本的な問題であるが、それが意外にも解明されていないのが現状である。後の「慣用音」につながる概念の発生と変遷も含め、さらに資料間の影響関係を整理していくことが必要であろう。

引用文献

有坂秀世（1940）「メイ（明）ネイ（寧）の類は果して漢音ならざるか」『音声学協会会報』64、『国語音韻史の研究　増補新版』所収、pp.369-374、1957、東京：三省堂

有坂秀世（1941）「「帽子」等の仮名遣について」『文学』9-7、『国語音韻史の研究　増補新版』所収、pp.263-282、1957、東京：三省堂

中井けやき（2018a）『明治の一郎　山東直砥』、東京：百年書房

中井けやき（2018b）『明治を駆けぬけた紀州人　山東直砥』、東京：百年書房

中澤信幸（2009）「斉韻字に対する字音注の変遷について」『国文学攷』202、pp.1-14、東広島：広島大学国語国文学会

中澤信幸（2019）「「俗音」考」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』16、pp.59-70（右 pp.1-12）、山形：山形大学大学院社会文化システム研究科

中澤信幸（2025）「山東直砥『新撰山東玉篇　英語挿入』について」『山形大学人文社会科学部研究年報』22、pp.99-109、山形：山形大学人文社会科学部

付記　本発表は令和 6 年度～令和 8 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金、基盤研究(C)（一般）、研究課題名：明治期漢字字書における漢字音と東アジアへの展開、課題番号：24K03910、研究代表者：中澤信幸、研究分担者：石山裕慈、岩城裕之、加藤大鶴）による研究成果の一部である。

日本語日常会話コーパスに見られる談話標識「いや」の使用実態
―話者の社会的属性と出現位置に着目して―

彭　津（東京外国語大学学生）

1. はじめに

日常会話において談話標識[1]は使用頻度が高く、その種類や機能も豊富である。談話標識は、語用論的要素であり、談話の流れを構成するのに貢献し、話し手と聞き手の相互行為を促すために重要な言語表現である（小野寺 2024）。これまでの談話標識に関する研究は、主に出現位置ごとの機能（特に発話ターンの冒頭位置）を中心に、質的分析により行われてきた。本稿で分析対象とする「いや」についても、ターンの冒頭に置かれる場合の機能を分析した研究が多いものの、他の出現位置に着目した研究はまだ少ない。また、談話標識の使用傾向が話者の性別や年代別といった社会的属性によって異なるかという社会言語学的観点からの調査も、まだ十分に蓄積されているとは言えないだろう。

そこで、本稿では、『日本語日常会話コーパス』を利用し、談話標識「いや」を分析対象に、話者の社会的属性と統語的出現位置の 2 つの側面から分析を行うことで、その使用実態を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と本稿の位置づけ

これまでの談話標識「いや」に関する先行研究は、ターンの冒頭位置で果たす機能に焦点が当てられ、分析されてきた。例えば、串田（2005）は、会話分析の手法を用いて、日常会話の中で「いや」が用いられる主要な連鎖上の位置を、Yes/No 質問への応答の冒頭や、WH 質問への応答の冒頭、評言・意見表明に対する反論や釈明の冒頭、相手の聞き間違いや誤解を正す発話の冒頭などと指摘した上で、Yes/No 質問に対する「いや」の機能を詳しく分析している。李（2022）は、「いや」はターン冒頭に最も頻繁に出現すると指摘し、ターン冒頭に置かれる「いや」の談話機能を「外示的意味への否定」「内示的意味への否定」「感情・知識状態の変化」「ネガティブな事象への共感」という 4 つのカテゴリーに分類した上で、機能と韻律的特徴の関連について分析している。しかし、「いや」は実際にはターンの冒頭以外の位置にもよく出現しており、ターンの内部や末尾など、具体的にどの位置でどのように使用されているのかについては、まだ明らかになっていない。また、「いや」の使用傾向に関して、会話参加者の男女別や年代別といった社会的属性に基づいた調査もまだ少ないと言える。

これらの研究を踏まえ、本稿では、日本語母語話者による談話標識「いや」の使用実態を、話者の社会的属性（課題①）と統語的出現位置（課題②）という 2 つの側面から明らかにする。

[1] 本稿での談話標識は、廣瀬他（2022）、大野寺（2024）を参考に、「話し手が主に伝達しようとする発話メッセージ［命題内容］の周辺に位置し、発話の連鎖位置に依存しつつ会話参加者間の相互行為に関わる語用論的要素」であり、また、「談話標識は談話の流れを作ること・構成に貢献し、話し手がそれに後続部分でどのような行為をしようとしているかを聞き手に予示する性質を持つものである」と定義する。

3. 研究方法

本稿では、『日本語日常会話コーパス』（小磯他 2023、以下 CEJC）を分析資料とした。CEJC は、日常生活で実際に交わされる会話を対象とし、多様な場面における多様な話者の会話をバランスよく収録した、合計 200 時間分の日本語母語話者同士による会話コーパスである。CEJC を利用する際の談話標識「いや」の抽出方法は、コーパス検索アプリケーション「中納言」の短単位・語彙素読み欄に「イヤ」と入力してから、条件を追加して品詞の大分類を「感動詞」に設定し、該当する「いや」の会話例を抽出した。

分析手順として、話者の社会的属性（課題①）に関しては、CEJC の全データを利用し、談話標識「いや」の使用実態を話者の性別及び年代別に分析し、その使用傾向を調査した。なお、話者の年齢について、「NA」（該当なし）[2]の対象者は、人数が非常に少なく、使用実態を十分に反映していない可能性があることを考慮し分析対象から除外した。最終的に 736 名の対象者データを本調査の対象とした。なお、10 歳未満の対象者 16 名は「0-19 歳」の対象者に含め、90 歳以上の対象者 7 名は「70-99 歳」の近い年代層に統合し集計を行った。

統語的出現位置（課題②）に関しては、CEJC の 2 者雑談データを利用した[3]。出現位置は、李（2022）などの先行研究に倣い、ターン（turn）[4]を基本単位とし、ターン冒頭・ターン内部・ターン末尾・単独産出の 4 種類に分類し、出現位置ごとにおける具体的な使用特徴について分析を行った。

4. 分析結果

4.1 話者の社会的属性からみる談話標識「いや」の使用特徴

本節では、話者の社会的属性の側面からの分析結果について述べる。

CEJC の全データを検索した結果、談話標識「いや」の出現頻度は 8311 件であった。表 1 に、話者の社会的属性ごとの、談話標識「いや」の使用実態についての調査結果を示す。表 1 によると、「いや」を使用した人数は 712 名である。これは、調査対象者 736 名のうち 96.7%を占めており、「いや」は会話の中で非常に頻出する言語表現であると考えられる。

性別に見ると、「いや」の使用者は、男性が 356 名中 351 名（4802 件、1 人あたり平均 13.7 件）、女性が 380 名中 361 名（3509 件、1 人あたり平均 9.7 件）であり、「いや」を使用した人の使用頻度に関しては、男性の方がやや多かった。そこで、男女別で「いや」に使用上の偏りがあるかを調べるために、カイ二検定を行った結果、男女間に有意差が認められた（$x^2(1)= 18.914, p<.01, \varphi= 0.046$）。つまり、会話において男性は女性に比べ「いや」を多く使用する傾向にあると言えるだろう。

そして、年代別に見ると、上位 3 位は、20-29 歳（108 名、2049 件、1 人あたり平均 19.0 件）、

---

[2] 「NA」（該当なし）の話者は、ほとんどが店員やスタッフ、客などであった。

[3] 2 者会話に比べ多人数会話は、順番交替が複雑になり、発話の宛先が不明であったり、同時発話や発話の中断が多かったりする特徴が挙げられるため、本稿では、より統語的に完全な発話が出やすい 2 者会話に絞ることにした。

[4] ターンは、「発話できる機会を指す場合と、その機会に発せられる発話を指す場合の両方」（串田他 2019）と定義されている。ただし、コーパス・データの文字化作業を行った人によって、句点や読点、長音記号、改行の基準がそれぞれ異なっているため、範囲が明確でない場合があると考えられる。そのため、本稿では、コーパスの文字化表記に従い、「発話者番号：」の発話から、次の「発話者番号：」までの発話、つまり、話者がターンを取ってから次の話者に発話権が移るまでの発話をターンとして認定する。なお、話し手がターンを獲得し長い語り（例えば、物語）を産出している途中で、聞き手が「うん」「へー」などのあいづちを打つ場合は、ターンとして認定しない（例 4 参照）。

30-39 歳（114 名、1499 件、1 人あたり平均 13.1 件）、60-69 歳（98 名、1239 件、1 人あたり平均 12.6 件）となり、「いや」は若者世代で最も多く使用されていることが確認された。

表 1　性別・男女別にみる「いや」の使用実態

年代別（歳）	男性：名／件数	女性：名／件数	合計
	「いや」の一人当たり平均件数		
0-19	40／286	30／164	70／450
	7.2	5.5	6.4
20-29	58／1337	50／712	108／2049
	23.1	**14.2**	**19.0**
30-39	67／954	47／545	114／1499
	14.2	**11.6**	**13.1**
40-49	39／595	82／810	121／1405
	15.3	9.9	11.6
50-59	52／566	76／663	128／1229
	10.9	8.7	9.6
60-69	49／735	49／504	98／1239
	15.0	**10.3**	**12.6**
70-99	46／329	27／111	73／440
	7.2	4.1	6.0
合計	351／4802	361／3509	712／8311
	13.7	9.7	11.9

4.2 統語的出現位置からみる談話標識「いや」の使用特徴

本節では、統語的出現位置の側面からの分析結果について述べる。

4.1 節では、CEJC 全データから「いや」を検索した結果 8311 件が確認され、そのうちの 2 者雑談データに絞って検索すると、粗頻度は 2166 件であった。統語的出現位置を分析する際、「いやいや」のような繰り返し形式で出現する場合は 1 件として集計したため、最終的に 1823 件を分析対象とした。この 1823 件の「いや」が出現したターンにおける位置ごとの特徴は、次の表 2 の通りである。

表 2　談話標識「いや」の統語的出現位置

ターンの分類	ターンにおける位置ごとの特徴
1.ターン頭	1-a.ターン冒頭に置かれるもの
2.ターン内	2-a.複数の句や節が連なって連鎖したターンの内部において、句や節の冒頭に置かれるもの
	2-b.発話の進行を中断し、先行発話を言い直すもの
	2-c.発話の途中で産出されるが、発話の進行を妨げないもの
3.ターン末	3-a.ターン末尾に置かれるもの
4.単独産出	4-a.単独でターンをなすか、あるいは軽いあいづちとともにターンをなすもの

ターン頭・ターン末・単独産出に見られる「いや」は、文字通りターン冒頭・末尾・単独で産出されるものであるが、ターン内部に見られる「いや」の出現位置は比較的複雑になっており、大きく次の 3 パターンに分けられる。まず、1 人の話者による複数の句や節が連なって連鎖したターンの内部において、句や節の冒頭に「いや」が置かれるものである【2-a】。例えば、句には平叙文、疑問文、命令文など、節にはケド節、カラ節、タラ節などが頻繁に観察された。次に、発話の進行を中断し、先行発話を言い直すものである【2-b】。さらに、発話の途中で「いや」が産出されるが、発話の進行を妨げないものである【2-c】。例えば、1 つの発話文が統語

的に完結していないにもかかわらず「いや」が置かれ、それに後続する発話が先行発話と統語的に繋がって進行する場合である。

次の表 3 に、談話標識「いや」の統語的出現位置の集計結果を示す。表 3 から、「いや」はターン頭（1259 件）＞ターン内（427 件）＞単独産出（117 件）＞ターン末（20 件）の順で出現頻度が高いことがわかった。ターン冒頭における出現数が半数以上と多く、李（2022）の指摘を検証することができた。これまで談話標識「いや」に関する先行研究が「質問－応答連鎖」などの冒頭位置に焦点を当ててきたのは、「いや」がターン冒頭に最も頻出することに起因しているのではないかと考えられる。また、出現数が 2 位となった、ターン内部に置かれる「いや」は、【2-a】（365 件）＞【2-b】（34 件）＞【2-c】（28 件）という順に多かった。このことから、「いや」がターンの内部においても、句や節の冒頭に置かれることが多く、発話と発話のつながりを維持する上で重要な役割を果たしていると考えられる。

表 3　「いや」の統語的出現位置の集計結果

ターンの分類		いや（%）	
ターン頭	1-a	1259（69.1%）	
ターン内	2-a	427（23.4%）	365
	2-b		34
	2-c		28
ターン末	3-a	20　（1.1%）	
単独産出	4-a	117　（6.4%）	
合計		1823　（100%）	

以下では、ターンにおける位置ごとの「いや」の具体例を 1 つずつ示しつつ、分析を行う。

本データでは、ターン冒頭に「いや」が出現する際に、1 語形式で産出される場合と、「いや」の前後にフィラーなどが共起する場合が見られた。次の例 1 は、「いや」が複数のフィラーと共起する会話例である。沼による「あの男の人ってさ見たことある?」（485 行目）という質問に対し、吉田が 490-493 行目で応答している。吉田がまず「いや」と発し、先行する質問に対する抵抗を示してから、「どうかな」「うん」と発し、思考中の姿勢を示してから、493 行目で応答発話を産出している。このように、「いや」は複数のフィラーとともに、ターンの冒頭に配置されている。

例 1　【1-a】ターン冒頭の「いや」（CEJC_ T016_006a）

485	IC03_沼	あの男の人ってさ:(0.328)見たことある?。
中略		
489	IC03_沼	なんか一回ぐらい見たような顔:でもあるなって感じ。
490	IC01_吉田	いや。
491	IC01_吉田	どうかな:。
492	IC01_吉田	うん。
493	IC01_吉田	全然見たことないわけじゃないのかもしれないね。

次に、ターン内部に置かれる「いや」の会話例を示す。節の冒頭に「いや」が置かれるもの（【2-a】）の会話例は例 2 の通りである。玲子が「会社の同僚村瀬さん」について語っている途中で、「被ってて」「やってたって」「行ってさ」「開けたら」「だけど」（94、96-97 行目）といった複数の節が連なって語りを組み立てている。97 行目で「実際蓋開けたら」というタラ節の

直後、「いや」が「なんかこうゆうものが何も準備されてなかったってのはよくあることだけど」というケド節の冒頭に配置されている。

例 2　【2-a】ターン内部・節の冒頭の「いや」（CEJC_C001_013）

94	IC05_玲子	村瀬さん一人で**被ってて**:。
95	IC04_辰嶋	うん うん。
96	IC05_玲子	これだけのこと**やってたって**:。
97	IC05_玲子	で(0.37)もう**行ってさ**:(0.183)あーの 実際 蓋**開けたら**:(0.168)**いや** なんかこうゆうものが何も準備されてなかったってのはよくあること**だけど**:。

ターン内部において、発話の進行を中断し、先行発話を言い直すもの（【2-b】）の会話例を例 3 に示す。慎吾が 58 行目で「結構ソこの前取材で」と発話を継続しようと思われるところで「いや」を用いて止め、発話の進行を中断している。そして、「いや」の直後に「取材した」と産出し、「取材」を繰り返しつつ「で」を「した」に置き換えることで、先行発話の一部を言い直している（60-61 行目）。

例 3　【2-b】ターン内部・発話の中断の「いや」（CEJC_K010_006）

58	IC01_慎吾	結構ソ(1.283)この前 **取材:で**。
59	IC02_理奈子	うん。
60	IC01_慎吾	**いや**。
61	IC01_慎吾	**取材した**人とかは(0.125)め%ちゃタッチパネル使ってて。

ターン内部において、発話の途中で「いや」が産出されるが、発話の進行を妨げないもの（【2-c】）の会話例を例 4 に示す。久美が 1452 行目で、音楽事務所で働く友達が「いろんな新人を」と、目的語まで産出し、発話文が統語的に明らかに完結しないところで 0.31 秒の間を生じ、「あの」と言い淀んでいる。その後、聞き手の栗木が 1453 行目で軽く「はい」とあいづちを打ち、それに続いて久美は 1454-1455 行目で「いやーン彼女でエピックアップして」と、先行発話「新人を」と統語的に繋がりつつ発話を継続している。例 4 の「いや」は、例 3 とは異なり、発話の進行を中断するのではなく、語りの流れを維持するために用いられていると考えられる。

例 4　【2-c】ターン内部・発話の進行を妨げない「いや」（CEJC_K008_004b）

1452	IC01_久美	で スーそれでいろんな**新人を**(0.31)あの:。
1453	IC02_栗木	はい。
1454	IC01_久美	**いやー**。
1455	IC01_久美	ン**彼女で:エピックアップして** それでインタビューとか: あの(0.27)ネットにそのインタビューの内容を流したり:してる:のを(0.29)通訳してたんですよね。

さらに、ターン末尾に置かれる「いや」（【3-a】）を例 5 に示す。槇原が 211 行目で「生わさび一本付いて四百五十円なの」と新情報を報告している。それを聞いた妹が次のターンで「何」「五百円ぐらい」（212-213 行目）と驚きの反応を示してから、ターン末尾で「いやー」（214 行目）と、「いや」の音調を引き伸ばし、自身の感情を表出している。本データにおいては、ターン末尾に出現する「いや」は、話者自身の何かしらの感情を表出するために用いられることが多かった。

例 5　【3-a】ターン末尾の「いや」（CEJC_T020_010b）

211	IC01_槇原	生わさび一本付いて:(0.85)四百五十円なの。
212	IC02_妹	何。
213	IC02_妹	五百円ぐらい。
214	IC02_妹	**いやー**。
215	IC01_槇原	ンめちゃ安いの。

最後に、単独産出の「いや」の会話例（【4-a】）を例 6 に示す。昌美による「いいよ」「別に」（526-527 行目）という発話に対し、義則が「いーや」（528 行目）と、「いや」の音調を引き伸ばして感情を表出している。この種は【3-a】（例 5）と類似しているが、相手の発話内容に対し即座に感情を表出するか否かという点で異なると考えられる。

例 6　【4-a】単独産出の「いや」（CEJC_K005_002）

526	IC01_昌美	いいよ。
527	IC01_昌美	別に。
528	IC02_義則	**いーや**。
529	IC01_昌美	いいよ。

5. おわりに

本稿では、談話標識「いや」の使用実態を明らかにした。課題①については、性別に見ると、「いや」を使用した人の使用頻度については、男性の方が女性よりも有意に高かった。年代別に見ると、「いや」は若者世代においてより多く用いられた。課題②については、「いや」をターン冒頭・ターン内部・ターン末尾・単独産出に分類し、ターン内部はさらに、句や節の冒頭に置かれるもの・発話の進行を中断するもの・発話の進行を妨げないものという 3 つに分類できた。また、「いや」はターン冒頭で最も多く出現し、ターン内部では句や節の冒頭に多く出現する傾向が見られた。今後の課題としては、「いや」と比較しつつ、「いえ」「いいえ」の使用実態についても分析していきたい。

参考文献

小野寺典子（2024）『談話標識へのアプローチ―研究分野・方法論・分析例―』ひつじ書房

串田秀也（2005）「「いや」のコミュニケーション学」『月刊言語』34 巻 11 号 pp.44-51

串田秀也・平本毅・林誠（2019）『会話分析入門』勁草書房

小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香（2023）「『日本語日常会話コーパス』設計と特徴」『国立国語研究所論集』24 巻 pp.153-168

廣瀬浩三・松尾文子・西川眞由美（2022）『英語談話標識の姿』ひつじ書房

李嘉（2022）「日常会話のコーパスにもとづく「いや」と「不是」の談話機能と韻律的特徴に関する日中語対照研究」 名古屋大学大学院国際開発研究科　未公刊博士論文

使用コーパス

『日本語日常会話コーパス』https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc.html（2025 年 3 月 28 日確認）

機械学習を用いた異なるシソーラスに対する効果検証および評価

― 機能表現の使い分けタスクを中心にした分析 ―

陳 柏丞（総合研究大学院大学・大学院生）

1.1 研究の背景

シソーラスは、1960 年代以降、日本語研究における重要な基盤の一つとして注目されてきた。特に、1964 年に国立国語研究所より刊行された『分類語彙表』は、日本語の語彙を体系的・階層的に整理した先駆的な試みとして、日本語学のみならず、辞書学や情報処理分野においても広く活用されてきた。その後、1970 年代以降、日本語のシソーラスは多様化し、『分類語彙表』に加え、『角川類語新辞典』（大野・浜西 1981）をはじめとする様々なシソーラスが構築され、日本語学習や文献検索、自然言語処理等の分野で活用されている。

しかしながら、これまでのシソーラス研究の多くは、単一のシソーラスを特定のタスクに適用し、その有効性を検証するものにとどまっていた。特に、複数のシソーラスを同一タスクで比較し、その効果を定量的に検証した研究はほとんど見られない。とりわけ、日本語の機能表現における使い分け問題という具体的なタスクにおいて、異なるシソーラス間の効果差を明らかにした研究は存在しない。実際、日本語の機能表現の使い分けは、文法的制約だけではなく語彙的・意味的要素に依存する場合も多いため、シソーラスの構造や粒度が予測精度にどの程度影響するかを明らかにする意義は大きい。

1.2 先行研究と本研究の位置づけ

機能表現の使い分け問題に対するシソーラスの有効性については、先行研究で一定の示唆が得られている。陳（2023a）は、シソーラスが持つ階層[1]性が、機能表現「に」と「によって」の受身文における選択に関与する可能性を指摘し、階層情報による統計的分析を行った。また、陳（2023b）は、『分類語彙表』の分類番号をテキストに付与し、機械学習モデルを用いて「に」と「によって」の使い分けタスクにおける有効性を検証した。しかし、これらの研究はいずれも単一のシソーラスを対象としたものであり、異なるシソーラスを比較した効果検証は行われていない。

本研究は、こうした先行研究を踏まえ、異なるシソーラス（『分類語彙表』および『角川類語新辞典』）を対象とし、機能表現「に」と「によって」の使い分けタスクにおける効果を比較検証することを目的とする。また、各シソーラスの階層構造の違いが、機械学習モデルの学習および分類性能にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを試みる。

2. 研究目的と研究方法

2.1 研究目的

本研究は、機能表現「に」と「によって」の使い分けタスクにおいて、異なるシソーラスが機械学習モデルの分類性能に与える影響を検証することを目的とする。具体的には、以下の二点を主たる目的とする。

1. 『分類語彙表』および『角川類語新辞典』という二種類のシソーラスに基づき、それぞれのアノテーション情報を付与したテキストデータを用いて、機能表現の使い分けタスクにおける効果を定量的に比較検証すること。

2. 両シソーラスの階層構造や分類体系の違いが、機械学習モデルの分類精度や安定性にどのような影響を与えるかを分析し、階層構造の有効性および課題を明らかにすること。

2.2 研究対象

本研究では、受身文における機能表現「に」と「によって」の使い分けタスクを対象とする。これら二つの機能表現は、いずれも受け身文において動作主を示す役割を担うが、文脈や意味的特徴によって使い分けられることが知られている。しかし、すべての用例が明確に区別できるわけではなく、意味役割や文脈に依存する曖昧なケースも多い。

分析対象としたデータは、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) より、「に」300 例、「によって」300 例の計 600 例を抽出した。各用例は、受身文として成立する文を基本とし、主語 (S)、目的語 (O)、述語 (V) という主要文成分情報を抽出した。

2.3 使用するシソーラス

本研究では、以下の二種類のシソーラスを使用した。

(1)『分類語彙表』(国立国語研究所 2004)

日本語語彙を四階層（類、部門、中項目、分類項目）に分類した体系である。例えば、「人」は"1.2000"（1:体の類、12:人間、120:人間、12000:人間）と表される。詳細な分類が可能であり、文の意味的要素を細かく捉えることができる一方、特徴量が細分化されすぎる可能性がある。

(2)『角川類語新辞典』(大野・浜西 1981)

大分類・中分類・小分類の三階層からなるシソーラスである。例えば、「人」は"507"(5:人間、50:人間、507:人間）と表される。階層数が少ない分、分類体系が比較的単純であり、抽象度が保たれやすい。

2.4 アノテーションおよび特徴量設計

分析対象の各用例において、主語 (S)、目的語 (O)、述語 (V) の三要素を抽出し、それぞれに『分類語彙表』または『角川類語新辞典』の分類番号をアノテーションとして付与した。アノテーションは各階層の番号情報をベクトル化し、機械学習モデルの入力特徴量として使用した。

2.5 機械学習モデルおよび評価手法

本研究では、分類規則の可視化および特徴量重要度の分析を目的として、決定木 (Decision Tree) モデルを採用した。具体的なパラメータ設定は、以下のとおりである。

[max_depth = 15, min_samples_leaf = 1, min_samples_split = 10]

これらのパラメータは、過学習を防ぎつつ、分類規則の解釈可能性を確保するために設定したものである。

評価手法としては、以下の指標を用いた。

正解率(Accuracy)・混同行列(ConfusionMatrix)・適合率(Precision)
再現率(Recall)・F1 スコア(F1-score)・交差検証(Cross-validation)

さらに、モデルがどの特徴量を重視して分類を行っているかを把握するため、特徴量重要度(Feature Importance)の分析を実施した。

3. 実験結果と評価

3.1 シソーラス別の性能評価

本研究では、上述の方法により作成したデータセットを用いて、決定木モデルによる分類実験を行った。その結果、『分類語彙表』と『角川類語新辞典』において、以下のような性能差が観察された。

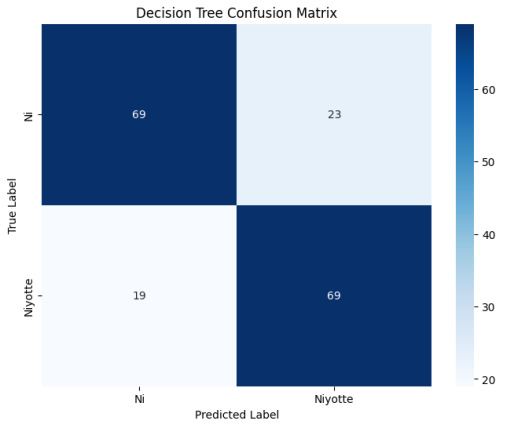


図１　混同行列（分類語彙表）

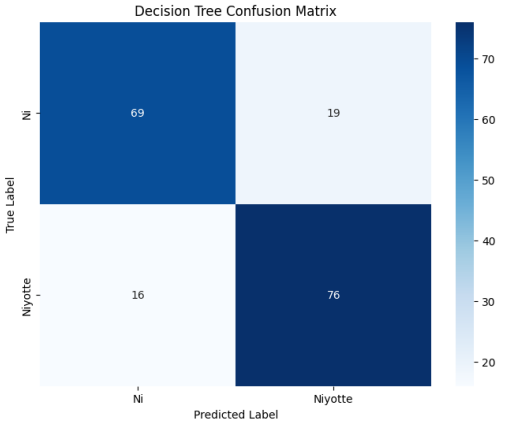


図２　混同行列（角川類語新辞典）

まず、『分類語彙表』を用いた場合、決定木モデルは訓練データに対して 93.33%、テストデータに対して 76.67%の精度を示した。交差検証の結果、スコアは[0.733, 0.792, 0.808, 0.850, 0.658]となり、平均値は 76.83%（±13.31%）であった。混同行列の分析では、「に」を「によって」と誤分類したケースが 23 件、「によって」を「に」と誤分類したケースが 19 件確認された。

次に、『角川類語新辞典』を用いた場合、訓練データでは 91.90%、テストデータでは 80.56%の精度を達成した。交差検証のスコアは[0.733, 0.825, 0.783, 0.850, 0.758]であり、平均値は 79.00%（±8.52%）となった。特に注目すべき点として、標準偏差が『分類語彙表』と比較して大幅に小さく、より安定した予測性能が得られたことが挙げられる。

表 1 に、『分類語彙表』を用いた実験における分類結果を示す。また、表 2 には『角川類語新辞典』を用いた場合の分類結果を示す。

表１　『分類語彙表』を用いた分類結果

分類	precision	recall	f1-score	support
Ni	0.78	0.75	0.77	92
Niyotte	0.75	0.78	0.77	88
accuracy			0.77	180
macro avg[2]	0.77	0.77	0.77	180
weighted avg	0.77	0.77	0.77	180

表２　『角川類語新辞典』を用いた分類結果

分類	precision	recall	f1-score	support
Ni	0.81	0.78	0.80	88
Niyotte	0.80	0.83	0.81	92
accuracy			0.81	180
macro avg	0.81	0.81	0.81	180
weighted avg	0.81	0.81	0.81	180

3.2 特徴量重要度の分析

決定木モデルにおける特徴量重要度を分析したところ、いずれのシソーラスにおいても、主語（S）の階層情報が最も重要な特徴量として認識された。これは、受身文における動作主の意味的特徴が、「に」と「によって」の選択に大きく寄与していることを示唆する。

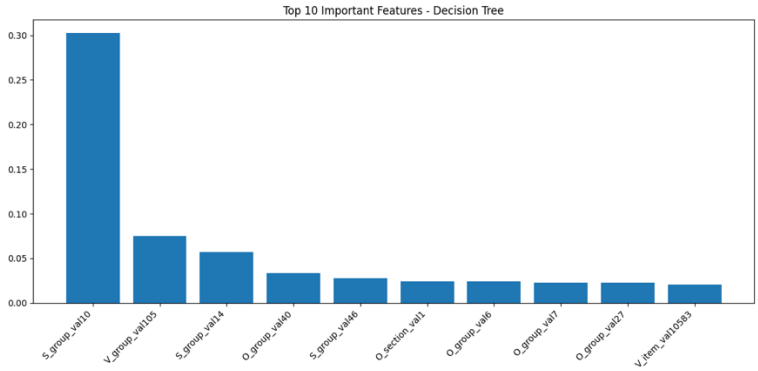


図３　特徴量重要度Top10（分類語彙表）

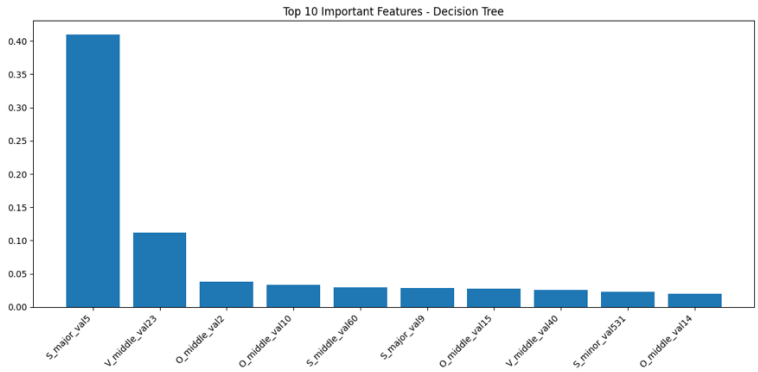


図４　特徴量重要度Top10（角川類語新辞典）

また、『分類語彙表』では主語の中項目レベル（第 3 階層）の特徴量が重視される傾向が見られた。一方、『角川類語新辞典』では主語の小分類（第 3 階層）に加え、動詞（V）の中分類（第 2 階層）の特徴量も一定の重要性を持つことが確認された。このことから、階層構造の単純さが特徴抽出の安定性に寄与していると考えられる。

4. 考察

本研究の実験結果から、機能表現「に」と「によって」の使い分けタスクにおいて、『角川類語新辞典』を使用した場合の方が、『分類語彙表』よりも分類精度および安定性において優れた結果を示したことが明らかとなった。

まず、モデルの精度および安定性について、すべての評価指標において『角川類語新辞典』が『分類語彙表』を上回る結果を示した。特に、交差検証スコアの標準偏差が、『分類語彙表』では±13.31%であったのに対し、『角川類語新辞典』では±8.52%と大幅に小さくなっている。この点は、シソーラスの階層構造および分類体系の違いが、学習の安定性に直接影響を与えていることを示唆するものである。

この差異は、両シソーラスの階層構造に起因すると考えられる。『分類語彙表』は四階層にわたる細かい分類体系を持ち、意味情報がより詳細に反映される一方、特徴量の多様化によって過学習のリスクが高まり、分類精度の変動が大きくなる傾向がある。対して、『角川類語新辞典』は三階層構造であり、適度な抽象度を保ちつつ主要な意味的特徴を効果的に捉えられる。この違いが、モデルの安定性および汎化性能に影響を及ぼしていると考えられる。

また、特徴量重要度の分析から、受身文における主語（S）の階層情報が機能表現の選択において最も重視されていることが確認された。これは、受身文における動作主の意味的属性が「に」と「によって」の選択に強く関与していることを示す。この点は、先行研究（陳 2023a, 2023b）において指摘された、機能表現の使い分けにおける動作主の影響と整合的である。

加えて、『角川類語新辞典』においては、動詞（V）の階層情報も一定の重要性を持っていることが確認された。この点は、機能表現の使い分けが文全体の意味構造、特に動詞と主語との関係性によって規定される傾向があることを示唆するものであり、シソーラスの階層情報がそれらの関係性を適切に反映している場合に分類性能が向上することを意味する。

以上の結果は、詳細な意味分類が必ずしも分類性能の向上に寄与するとは限らず、適度な抽象度と分類体系の整合性が重要であることを示唆する。本研究において、『角川類語新辞典』が優れた分類性能を示した背景には、この適度な階層構造と、主要な意味カテゴリーを過不足なく捉えた分類体系が寄与していると考えられる。

5. 結論と今後の課題

本研究では、日本語受身文における機能表現「に」と「によって」の使い分けタスクを対象とし、『分類語彙表』と『角川類語新辞典』という二種類のシソーラスの効果を、機械学習による分類実験を通じて比較検証した。その結果、以下の知見が得られた。

第一に、両シソーラスともに一定の有効性を示したものの、『角川類語新辞典』を用いた場合の方が、分類精度および安定性において優れた結果を示した。特に、交差検証における標準偏差が小さく、モデルの学習が安定して行われた点は注目に値する。

第二に、シソーラスの階層構造の違いが、機械学習モデルの性能に直接的な影響を与えることが確認された。『分類語彙表』の四階層構造は詳細な意味情報を提供する一方で、特徴量の細分化が学習の安定性を損なう可能性がある。それに対し、『角川類語新辞典』の三階層構造は適度な抽象度を保持し、学習効率と分類性能の両立に寄与していると考えられる。

第三に、特徴量重要度の分析において、主語（S）の階層情報が最も重要な特徴量として認識されたことは、機能表現の使い分けが文の意味構造、とりわけ動作主の意味的属性に強く依存していることを示唆するものである。

なお、本研究にはいくつかの課題も残されている。

第一に、分析対象とした用例数（600 例）は、機械学習実験としては限定的であり、より大規模なデータセットを用いた検証が必要である。

第二に、本研究では「に」と「によって」という特定の機能表現ペアのみを対象としたが、他の機能表現（例：「で」「から」など）に対しても同様の分析を行い、得られた知見の一般化可能性を検討する必要がある。

第三に、使用した機械学習モデルは決定木に限定されており、他のモデル（ランダムフォレスト、SVM、深層学習モデル等）を用いた場合の効果検証も今後の課題として挙げられる。特に、シソーラスの階層構造を直接的に学習に活用できるようなモデルアーキテクチャの検討は、今後の重要な研究課題となるだろう。

また、誤分類例の言語学的な分析をより深める必要がある。特に、シソーラスの分類番号と実際の言語使用の関係性について、より詳細な考察が求められる。本研究では誤分類例について個別の分析は行わなかったが、誤分類された事例の詳細な検討は、シソーラスの分類体系と実際の言語使用との間に存在する乖離や、機械学習モデルが誤判断した要因の解明につながると考えられる。今後、誤分類例を精査し、文脈的・意味的特徴と分類体系の関係を分析することで、タスク特化型のシソーラス設計や特徴量選択手法の改善に資する知見が得られることが期待される。これには、コーパス言語学的なアプローチと、計算言語学的なアプローチを組み合わせた、より総合的な研究が必要となるだろう。

最後に、本研究の知見は、シソーラスの設計や選択に対して重要な示唆を与えるものであるが、これを実際のシソーラス開発や改善にどのように活かしていくかという実践的な課題も残されている。特に、機能表現の使い分けに最適化された意味分類体系の設計可能性について、さらなる研究が必要である。

これらの課題に取り組むことで、シソーラスを活用した言語処理の可能性がさらに広がることが期待される。また、本研究で得られた知見は、言語研究におけるシソーラスの活用方法に新たな視座を提供するものと考えられる。

補註

[1] 本研究で「階層」とは、シソーラスの分類番号における上位・中位・下位分類の体系を指す。

[2] macro avg は各クラスの指標の単純平均、weighted avg は各クラスのサンプル数で重み付けした平均値である。詳細は Scikit-learn 公式ドキュメントを参照（Pedregosa et al., 2011）。

参考文献

大野 晋・浜西 正人（1981），『角川類語新辞典』角川.／国立国語研究所（編）（2004）『分類語彙表増補改訂版データベース』.／国立国語研究所コーパス開発センター（2015），『現代日本語書き言葉均衡コーパス』.／益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法・改訂版』くろしお.／陳 柏丞（2023a），機能語におけるシソーラスの可能性 ―「によって」と「に」の受身文を中心に，青山学院大学大学院日本語文論考『緑岡詞林』47，青山学院大学日文院生部会，pp. *1-20.*／陳 柏丞（2023b），機能語の使い分け問題において機械学習でのアプローチにシソーラスを用いる有効性 ―／Quinlan, J. R. (1986). "Induction of Decision Trees." Machine Learning, 1(1), 81-106.／Pedregosa, F., et al. (2011). "Scikit-learn: Machine Learning in Python." Journal of Machine Learning Research, 12, 2825-2830.

人物を表す「文の包摂」の形式的・意味的な特徴
―「かまってちゃん」「相方どうかしてるぜ芸人」「やだやだ星人」―

泉大輔（いずみだいすけ）（立教大学）

1. 研究の目的および背景

本発表では、人物を表す「文の包摂」の形式的・意味的な特徴の記述を目的とする。「文の包摂」とは、「早く帰れオーラ」「幻のポケモンをもらおうキャンペーン」など語の内部に文相当の要素が包み込まれる言語現象である（泉 2024）。一般に複合語や派生語のその内部に文相当の要素が生起することはないため、「文の包摂」は語形成規則を逸脱する言語現象であると考えられる。従来の「文の包摂」の研究（泉 2024）はウェブコーパスによる調査を行い、抽象的な概念を名づける表現（「困ったな状態」「そうなんだ程度」「もういいや感」など）を中心に扱っていたが、本稿ではウェブ上のテキスト、テレビ番組、会話データなどから人物を名づけた用例を広く収集する。これにより、「文の包摂」について量的な蓄積を増やしつつ、音韻的・文体的な側面を交えて分析することで質的にも豊かに記述することを目指す。

2. 調査データ

考察対象とするデータは、SNS やブログ上のウェブテキスト、テレビ番組・YouTube および『日本語日常会話コーパス』における会話データなどから収集した用例 120 件である。人物を表す「文の包摂」の後項には、(a) 人を表す名詞・接尾辞（表 1)、(b) 敬称を表す接尾辞（表 2)、(c) 職業・役職を表す名詞（表 3)、(d) 人外[1]を表す名詞（表 4）が見られた。

表 1 (a)「人」を表す後項の用例

後項	用例	度数	後項	用例	度数
マン	お金貸してマン、わかるマン、おしっこ漏らしたマン、絶対結婚するマン、どこでも開けちゃうマン、やさしいマン	6	義母	カネだけ出して口だすな義母	1
おじさん	早く帰れおじさん、結果出せおじさん、なんちゃっておじさん、話聞くよおじさん	4	子	見える子ちゃん	1
女	保育園作ります女、土地買ってくれませんか女	2	じいさん	マスクしろ爺さん	1
偉人	ほどほど多いな偉人	1	姉妹	10 億あるかもしれない姉妹	1

[1] 本発表における「人外」とは、人知の及ばない事物・現象のことで、幽霊や怪物、宇宙人の類とする。

ウーマン	絶対結婚しないウーマン	1	兄ちゃん	10 億あるかもしれない兄ちゃん	1
男	任務中なので男	1	ばあさん	もったいないばあさん	1
おばさん	引っ越せおばさん	1	民	火曜日、このために仕事がんばった…よ民	1
関西人	なんやて関西人	1	er	漢文ガチる er	1

後項が「人」を表す例としては、「結果出せおじさん」「早く帰れおじさん」がある。それぞれ、「仕事で結果を出すようにプレッシャーをかけてくる上司（おじさん)」「残業をせずにできるだけ定時に退社するようにプレッシャーをかけてくる上司（おじさん)」を表している。これは、IT サービスを展開するサイボウズ社の広告におけるキャッチコピーである。成果を出すためなら残業を厭わない上司と、成果よりも就業時間の遵守を重視する上司との板挟みになっている社員の葛藤を表現し、IT による業務効率化の重要性を訴求している。他にも、「文の包摂」が人物名を表し、それをタイトルに冠する漫画や児童書（『絶対結婚するマン vs 絶対結婚しないウーマン』『見える子ちゃん』『もったいないばあさん』）も観察された。

表 2 （b)「敬称」を表す後項の用例

後項	用例	度数
さん	こまったさん、わかったさん、有りがたうさん、他 1 件	4
様	「小説家になろう」様、「新時代ではこうしよう」様	2
ちゃん	かまってちゃん、困ったちゃん	2
くん	「オレがルールだ」君	1

後項が敬称を表す例としては、「わかったさん」「こまったさん」「有りがたうさん」などがある。「わかったさん」「こまったさん」は、児童向けの絵本に登場する主人公の愛称で、作中ではそれぞれ「わかった」「こまった」が口癖であるため、周囲からこのように呼ばれている。また、「有りがたうさん」は、川端康成の短編小説「有難う」を原作とする映画のタイトルであり、主人公が作中で周囲から呼ばれている名前でもある[2]。

表 3 （c)「職業・役職」を表す後項の用例

後項	用例	度数
芸人	M-1 決勝逃した芸人、おじさんなのに甘い物大好き芸人、「アメトーーク！」にハマってない芸人、ひとり暮らし長〜い芸人、花粉症ツライよ芸人、相方どうかしてるぜ芸人、「嫌なら見るな」芸人、他 56 件	63
係	「元気出していこうぜ」係、「探したんだけど見つからないよ」係	2
大使	浜松市やらまいか大使、ふくしま知らなかった大使	2

[2] 『デジタル大辞泉』（2024 年 3 月 6 日閲覧）

大臣	産めよ増やせよ大臣、「注射怖いんだもん」大臣	2
アイドル	もっと小顔にしなきゃいけないわよアイドル	1
教祖	晴れろ～教祖	1
警察	マスクつけろ警察	1
忍者	カメラに映っちゃダメ忍者	1

職業・役職を表す例として最も多く収集できた後項は「芸人」である。その用例のほとんどが『アメトーーク!』（テレビ朝日）という番組内の企画から採取されたものである。同番組では、ある共通の趣味や特徴を持つ芸人が集められ、その共通点に応じて「おじさんなのに甘い物大好き芸人」「相方どうかしてるぜ芸人」といったカテゴリー名で括られる。また、その趣味や特徴を持った人だからこそ思いつく面白い話や、いわゆる「あるある」に関するトークが繰り広げられる。前項には、芸人自身の発話または心内発話が取り入れられているタイプ（例:花粉症ツライよ芸人）、芸人の特徴を説明する文相当の要素が含まれているタイプ（例:ひとり暮らし長～い芸人）がある。

表 4 （d）「人外」を表す後項の用例

後項	用例	度数
おばけ	もったいないおばけ、つられたらたべちゃうぞおばけ、くれくれおばけ、やだやだおばけ、どっか連れてけオバケ	5
星人	やだやだ星人、何だっけ星人、構ってよ星人、待ってればいいよ星人、まじか星人	5
モンスター	くれくれモンスター、やだやだモンスター、他人が稼いだカネをタダで受け取ることに疑問も引け目も感じないモンスター	3

人知の及ばない事物・現象である「人外」を表す後項は、ここでは比喩的に人間を表現している。例として、「やだやだ星人」[3]がある。これは、「親の言うことに対して何でも『やだ！』と返す反抗期の子ども」を表している。前項は、反抗期の子どもが典型的に発する言葉（口癖）である。何でも「やだ！」と反抗する生物が棲む想像上の惑星を「やだやだ星」と仮定したうえで、言うことを聞かない子どもを、その「やだやだ星」に棲む異星人に見立てており、ユニークな表現になっている。

3. 前項と後項の意味的な関係

人物を表す「文の包摂」の前項・後項の関係をその文脈から見ると、ほとんどが①「その人物を特徴づける発話＋発話主体となる人物」（例:なんちゃっておじさん）というタイプであり、僅少ではあるが②「その人物に対する周囲の人物の発話＋表現対象となる人物」（例:困ったちゃん）、③「その人物を説明する内容＋表現対象となる人物」（例:「ア

[3] 「星人」はある惑星に棲む生物を指す語で、火星に生息するという想像上の宇宙人である「火星人」、特撮作品『ウルトラマン』の敵である「バルタン星人」（バルタン星からの異星人）などの例がある。

メトーーク！」にハマってない芸人）といったタイプも見られる。

3.1. タイプ①「その人物を特徴づける発話＋発話主体となる人物」

このタイプは、前項の言葉が発せられた（あるいはその言葉から連想される）状況や有様が想起され、その言葉を発した（あるいはそのように思っていそうな）人物の性格や様相が特徴づけられる。その人物を特徴づける口癖が前項に来る用例も目立つ。例えば、前節で挙げた「結果出せおじさん」「早く帰れおじさん」は、「結果出せ」「早く帰れ」という言葉が上司の人物像を特徴づける機能を果たしている。同様に、「わかったさん」「こまったさん」「有りがたうさん」はいずれも、作中の人物の口癖が前項になっている。「マスクつけろ警察」という例は、「まるで警察官の取り締まりのように、（コロナ禍において）公共の場でマスクを着用していない人を厳しく注意する人物」を表し、注意する際の発話であると思われる「マスクつけろ」という言葉によってその人物が描写される。同様に「もったいないおばけ」は「もったいない」が口癖の倹約家を表している。

3.2. タイプ②「その人物に対する周囲の人物の発話＋表現対象となる人物」

タイプ①は表現対象となる人物自身の言葉（仮想の発話も含む）が前項に取り入れられていたのに対して、このタイプ②は表現対象となる人物の周囲にいる人物の言葉（仮想の発話も含む）が前項となる点で異なる。

例えば、「困ったちゃん」は、自分本位な言動で周囲の人を困惑させているが、それについて無自覚である人を意味する。前項の「困った」は周囲を困らせている本人ではなく、困らされている周囲の人物の心の声として仮定されるものであろう。「カネだけ出して口だすな義母」の前項も義母に対する嫁の心内発話が取り入れられており、「もっと小顔にしなきゃいけないわよアイドル」はそのアイドルが共演者に言われた発話が前項となっている。

また、タイプ①は「『結果出せ』と言っているおじさん』のように「と言っている」を補って名詞修飾構造で換言できるのに対して、タイプ②は「『カネだけ出して口だすな』と思われている義母」のように「と思われている（と言われている）」を補って言い換えられる[4]。しかし、広告表現や作品名として用いるうえでは逸脱的な表現のほうがキャッチーさ[5]を聞き手に伝達できることが「文の包摂」の使用の動機づけにあるのではないかと考えられる。

タイプ①および②は、前項の言葉によって表現対象となる人物の性格や様相が特徴づけられる点で共通している。藤田（2022:11-12）は、引用された言葉をそれが発せられる

---

[4] ただし、接尾辞は節を受けることができないため、後項が接尾辞の場合、このように言い換えると不自然になる（??「お金貸して」と言っているマン、??「困った」と思われているちゃん）。

[5] 鈴木（2020）は「めっちゃコンサート行きましたアピール」などの例を挙げ、複合語や派生語の前後関係の逸脱性が表現の新奇さを生み出していると論じている。

状況や発する人の一部分と捉えており、本発表でいうところの「文の包摂」の例について「前項となる引用されたコトバが、そんなコトバの発せられ得る（あるいは、そんなコトバを発する）状況やあり様を換喩的に表すことで、後項を規定して複合語を形成」していると述べている。すなわち、「文の包摂」で表現される人物がその人物に関する何らかの言葉によって特徴づけられるのは、このような引用された言葉の換喩的な拡張を基盤としているのではないかと考えられる。

3.3. タイプ③「その人物を説明する内容＋表現対象となる人物」

このタイプは前項が表現対象となる人物自身あるいはその周囲の人物の発話とは捉えにくく、単にその表現対象の人物の属性や性質を説明する要素が前項に来ている。例えば、「M-1 決勝逃した芸人」は、テレビ朝日の漫才コンクール番組『M-1 グランプリ』の準決勝戦で敗退した芸人たちを表している。その芸人たち自身の発話と捉えられないこともないが、前項に終助詞や動詞の命令形などが含まれやすいタイプ①および②と比べると、発話らしい前項とは言いがたい。

タイプ③は後項が名詞の場合、表記上は通常の名詞修飾構造との区別がつかないが、音声を含むデータを見ると、音調が異なっていた。通常の名詞修飾構造であれば「エムワンケッショウノガシタゲイニン」と発音されるが、『アメトーーク!』の番組内では「エムワンケッショウノガシタゲイニン」と発音されている。後項とその直前の要素（下線部）がひとまとまりのアクセントで発話されるのは一般的な複合語および「文の包摂」に共通する音韻的な特徴である（新屋 2014:355、泉 2024:274-277）。この音調になっているのは、「○○芸人」という表現が『アメトーーク!』の番組内の企画名かつ各週のサブタイトルであり、出演する芸人たちを括るカテゴリー名でもあるためだと考えられる。森（2018:10）は、本発表でいうところの「文の包摂」は事態や人物を命名する機能を持つが、通常の名詞修飾構造は名詞の内容を限定・叙述する機能を持ち、命名が関わるかどうかが両者の本質的な違いであると論じている。単にどのような芸人なのか説明するだけなら通常の名詞修飾構造でもよいが、それが名称であることを伝えるためには複合語の音調で発話し、「文の包摂」の形式をとる必要があるのではないだろうか。

4. 学術的貢献と今後の課題

本発表の分析を通して、次の 3 つの意義・示唆があったと考えられる。第一に、音韻的な側面を交えた分析の蓄積である。「M-1 決勝逃した芸人」のように前項の述語動詞が終止形（連体形）の場合、表記上は通常の名詞修飾構造か「文の包摂」かの区別がつかず、両者の違いが不明確であるという問題点がある（泉 2024:328-329、泉 2025:75）。本発表では、音韻的な特徴に着目し、「文の包摂」が名づけとして用いられている点が通常の名詞修飾構造との違いではないかという仮説を提示した。

第二に、文体的な側面を交えた分析の蓄積である。「文の包摂」は、ウェブ上のテキストを中心に、会話、広告、ネットニュースの見出し、雑誌の本文、テレビ番組のタイトルなど用例が広く観察される（泉 2024:7）。その出現環境には偏りがあり、文体的な分析の必要性が指摘されているものの（野田 2024:73、泉 2025:64-65）、文体的な特徴については明らかにされていない。本発表で取り上げた人物を表す「文の包摂」の用例は、広告やメディアに関わる場面においてキャッチーなネーミングとして用いられている例が目立つのに対して、抽象的な概念を名づける用例（泉 2024）は、日常的なやり取りの場面において既存の語では適切に表現対象を言い表せない場合に用いられているという違いが見られた。

最後に、対照研究の可能性について述べる。他言語に目を向けると、英語にも「文の包摂」に類する実例が見られるが、日本語と同様に人を表す後項を有する例もあれば（"I don't know how she does it" woman）、日本語とは異なり固有名詞が後項になる例もある（the I-go-my-own-way Natsuki）（『enTenTen15』より採取）。他言語との対照を通して、日本語と英語の「文の包摂」の共通点・相違点が明確になっていくだろう。今後も音韻・文体・他言語対照の観点から考察をすることで、現代日本語における「文の包摂」の諸特徴を明らかにしていく。

付記 本研究は国立国語研究所の機関拠点型基幹研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」（プロジェクトリーダー:小磯花絵）、および科研費（若手研究）「会話における逸脱的な造語法「文の包摂」の研究」（研究代表者:泉大輔）の研究成果です。

参考文献

泉大輔（2024）『現代日本語の逸脱的な造語法「文の包摂」の研究』ひつじ書房.

泉大輔（2025）「「文の包摂」研究の課題と展望―野田春美（2024）「書評:泉大輔著『現代日本語の逸脱的な造語法「文の包摂」の研究』」をめぐって―」、『日本語・日本語教育』8、63-78.

小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香（2023）「『日本語日常会話コーパス』設計と特徴」、『国立国語研究所論集』24、153-168.

新屋映子（2014）『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房.

鈴木亮子（2020）「新表現の創発―新しくない中にめっちゃ新しさ見えてるアピール―」、中山俊秀・大谷直輝編『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点－用法基盤モデルに基づく新展開－』、ひつじ書房、183-207.

野田春美（2024）「書評:泉大輔著『現代日本語の逸脱的な造語法「文の包摂」の研究』」、『日本語の研究』20（3）、73-81.

藤田保幸（2022）「引用されたコトバの表意性の換喩的拡張」、中部日本・日本語学研究会（編）『中部日本・日本語学研究論集』和泉書院、3-13.

森英樹（2018）「修飾節に生じる発話の認知言語学的分析」、『福井県立大学論集』50、1-14.

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の拡張とその設計

山崎 誠（国立国語研究所）
髙橋 雄太（国立国語研究所）
小木曽 智信（国立国語研究所）

1．はじめに

国立国語研究所では、2024 年度から 5 か年計画で「信頼できる言語資源としての現代日本語の保存・活用のためのデジタル基盤整備事業」を実施することになった。この事業は文化庁からの委託事業である。事業の具体的な内容は、国立国語研究所が 2011 年から公開している「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）を拡張し、規模をほぼ 2 倍の約 2 億語にすることである。本事業が実現する経緯として、文化審議会国語分科会における議論を追うことが重要であるが、詳しくは山崎・小木曽・高田（2024）に譲る。

本発表では、上記事業で行うコーパスの拡張計画の設計を中心に、既公開の BCCWJ との比較を通して、コーパスとしての継続性の観点から検討を行う。なお、以後、今回拡張する部分を「BCCWJ2」と呼び、既に公開している BCCWJ は「BCCWJ1」と呼んで区別することにする。

2．サンプリングにおける相違点

BCCWJ では基本的に BCCWJ1 との継続性を重視し、基本的な設計は踏襲するが、円滑に構築を進めるため、簡略化した部分がある。以下、それらの相違点について述べる。なお、以下では BCCWJ2 の大部分を占める書籍（BCCWJ1 における「出版書籍サブコーパス」に相当）のサンプリングについて述べる。

2．1．サンプリング単位の違い

BCCWJ1 でのサンプリング方法は以下のとおりである（丸山他 2015: 32）。

（1）対象となる期間に出版された書籍のリストを取得
（2）（1）からコーパスに適さない書籍を除外
（3）（2）の総ページ数と総文字数を算出
（4）（2）を刊行年と NDC（日本十進分類法）とにより 55 層に層別
（5）各層において、全ページに対してランダムに優先順位を割り振る
（6）選定されたページからランダムにサンプル抽出基準点（＝1 文字）を決定
（7）サンプル抽出基準点からサンプルを抽出（入力）

ここでは、書籍の冊、ページ、文字という 3 つの単位が使われている。母集団は文字数によって定義されているが、文字を直接をランダム化できないため、ページをランダム化するという複雑な操作を行っている（丸山他 2011: 13-15）。BCCWJ2 では、母集団を書籍によって定義し、層別化後、サンプリングの単位も書籍によって行う。このことにより、手順が簡素化される。問題点としては、ページ数の多い書籍も少ない書籍も同じ確率で選ばれるという点がある。しかし、BCWJ1 の出版書籍（PB）で、サンプルの割合を冊を基準とした場

合と文字を基準とした場合とで比較したところ、両者の間には大きな差異が生じていないことが確認された（図 1）[1]。

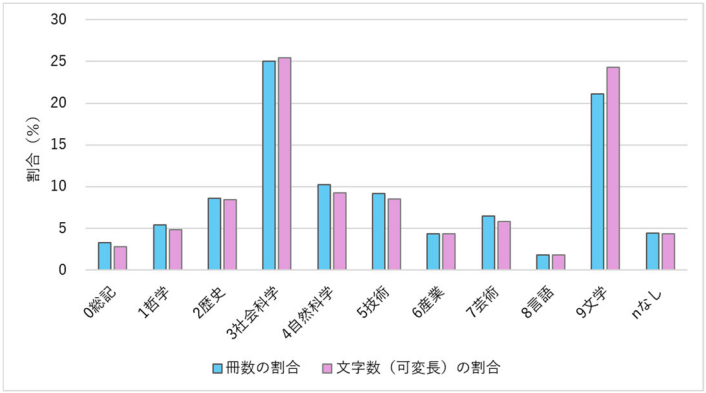


図 1　冊を基準にした場合と文字を基準にした場合のサンプル数の割合の比較（BCCWJ1）

2. 2. 層別サンプリングの方法

BCCWJ1 では対象期間（2001～2005 年）全体の書誌情報を元に層別サンプリングを行っていた。一方、BCCWJ2 では対象期間（2006～2025 年）のすべての書誌情報が事業開始時点ではそろわないため、各年ごとに母集団を設定し層別サンプリングを実施する方法を取った。具体的には毎年 500 万語という一定量のデータを取得することとし、それを元に各 NDC の冊数の割当を決める。例えば、1 冊あたり（すなわち 1 サンプルあたり）の語数を 5000 語とすれば、1000 冊（1000 サンプル）で 500 万語が取得できることになる。この 1000 冊を NDC の割合にしたがって比例配分することになる。

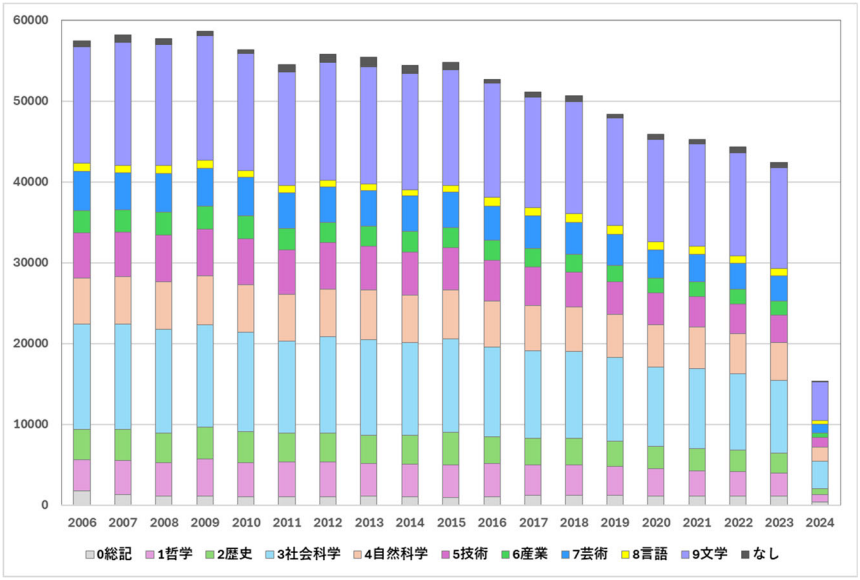


図 2　年ごとの出版冊数

[1] 細かく見ると「文学」において、冊数の割合と文字数の割合との間に若干の開きがある。冊数の割合は少ないが文字数の割合が相対的に多くなっている。

ここでも問題点がある。年間の出版冊数は対象期間内でほぼ単調に減少しており、2023年の出版冊数は2006年の約74%にまで減少していることである（図2）[2]。したがって、期間が進むにつれて抽出率が高くなる点に注意が必要である。

2．3．図書分類（NDC）に基づく比較

BCCWJ 1の出版書籍（PB）とBCCWJ2とを図書分類（NDC）別に比較すると、全体として顕著な変化は見られないが、個別分類では違いが見られる（表1）。具体的には、「哲学」「文学」「芸術」の割合が増加し、「分類なし」「総記」「歴史」の割合が減少している。これらの変化は母集団の構成変化を反映していると考えられる[3]。

表1　NDC別の冊数の割合の比較（BCCWJ1とBCCWJ2）

NDC	BCCWJ1(=A)	BCCWJ2(=B)	B/A
0 総記	3.26	2.17	0.66
1 哲学	5.46	7.35	1.35
2 歴史	8.61	6.43	0.75
3 社会科学	25.05	21.52	0.86
4 自然科学	10.22	10.74	1.05
5 技術	9.17	9.37	1.02
6 産業	4.36	4.51	1.03
7 芸術	6.50	7.96	1.22
8 言語	1.83	1.83	1.00
9 文学	21.10	26.75	1.27
n なし	4.44	1.38	0.31

2．4．除外基準の違い

コーパスから除外する書籍としては、BCCWJ1と同様にマンガ、写真集、地図など文字を主体としないものとした。また、対象書籍内に含まれる外国語、古典語、数式、図表なども入力対象から除外した。ただし、BCCWJ2では著作権処理を行わない方針であるため、俳句、短歌、詩などの短い作品はコーパスに収録しないこととした。この点はBCCWJ1との相違となっている。

以上のような違いはあるものの、BCCWJ2は全体としてコーパスとしての継続性が保たれていると言えるだろう。

---

[2] 国立国会図書館から提供されたデータを元に作成。NDCと書名とを元に対象外の書籍を除外したあとの冊数を示す。使用している書誌データが2023年12月中旬の時点であるため、2024年分は少なくなっている。

[3] BCCWJ1ではNDCが付いていなかった分類に「n」を与えていたが、今回使用した書誌データには「n」はほとんどなかった。国立国会図書館でNDCを網羅的に付与したものと考えられる。

３．タグにおける相違点

BCCWJ1 ではアノテーションに使用するタグが非常に細かく設計されていた。タグセットとして、サンプルに関するもの、文書構造に関するもの、文字・表記に関するものが合計 47 種類使われていた。しかし、実際にはあまり活用されないタグも存在していたため、これまでのコーパス利用の実態を踏まえ、BCCWJ2 では「中納言」で表示されるメタ情報の付与を優先し、構築の効率化を図った。

４．形態素解析結果にもとづく分析

原稿執筆時において分析に十分堪えるようなデータが整備されていないため、ここで示す値はあくまでも参考値である。

4．1．全体の語数の分布

相互に比較可能な 2006 年～2008 年の統計値を示す。表 2 から 2006 年と 2007 年は 1 サンプル当たりの語数が 5000 語くらいであることが分かる[4]。BCCWJ1 の出版書籍（PB）では平均値が 2692、中央値が 2333 であったので、その倍近い語数が取得できていることになる。このことは設計時において意図していたことで、少ないサンプル数で多くの語数を取得するというねらいが実現できている。

図 3～図 8 には、サンプルの語数の分布および NDC 別のサンプルの語数の箱ひげ図を示した。語数の分布のヒストグラムはいずれも右に裾を引く分布であり、ほぼ同じ傾向である。NDC 別の分布は多少の増減は認められるものの、年を通した特徴は見受けられない。

表 2　各年におけるサンプルの語数の平均値と中央値

年	平均値	中央値
2006 年	4947.3	4470.5
2007 年	5279.9	4579
2008 年	3942.1	3812

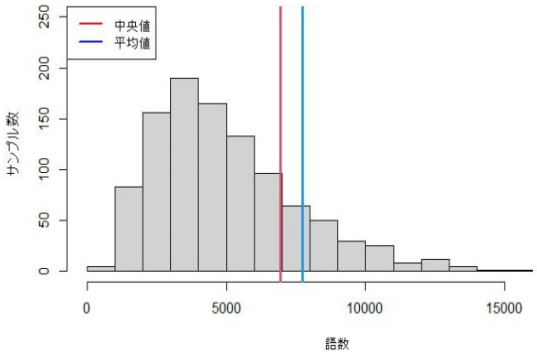


図 3　語数の分布（2006 年）

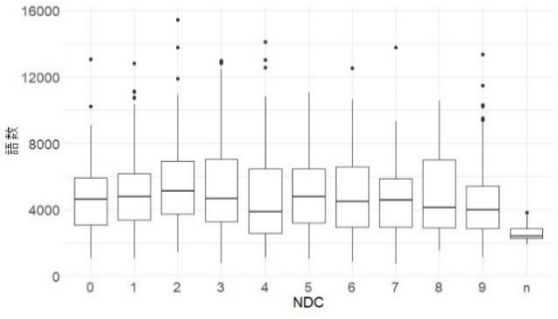


図 4　ＮＤＣ別の語数の分布（2006 年）

[4] この語数には空白や句読点を含む。

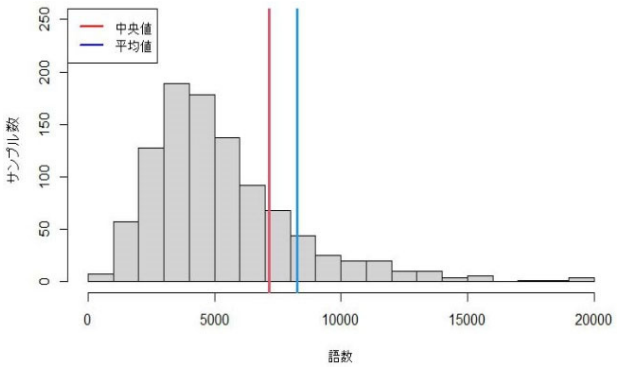


図 5　語数の分布（2007 年）

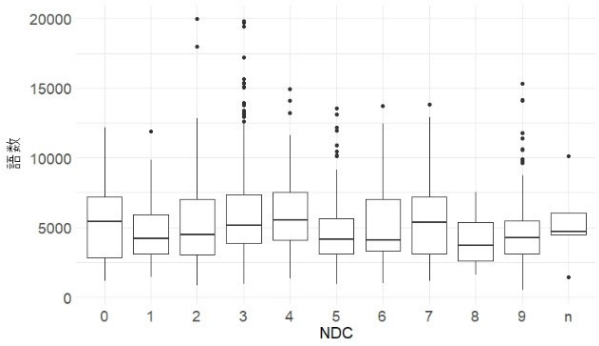


図 6　ＮＤＣ別の語数の分布(2007 年)

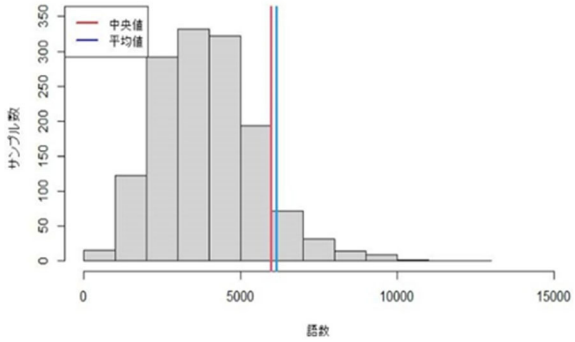


図 7　語数の分布（2008 年）

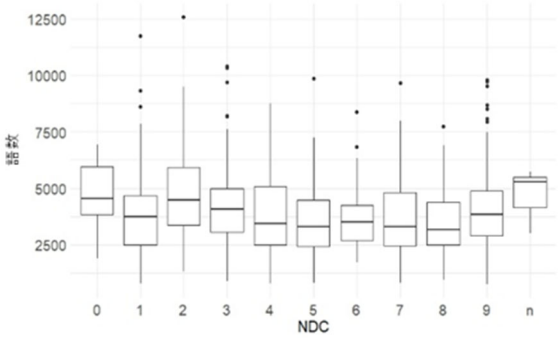


図 8　ＮＤＣ別の語数の分布(2008 年)

4．2．品詞と語種の分布

図 9 に各年の品詞の語数、図 10 に語種の語数を示す。どちらも BCCWJ1 の出版書籍(PB)の値も示した。全体的には品詞、語種ともにどの年も同じような割合を示しており、日本語の書き言葉の安定性を示している。

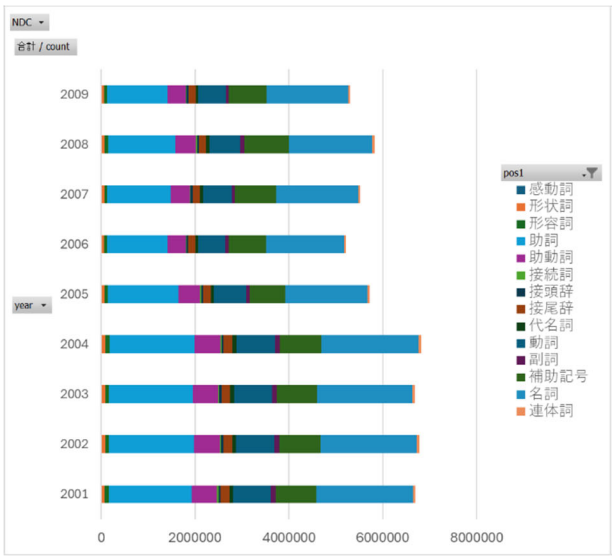


図 9　年ごとの品詞の語数

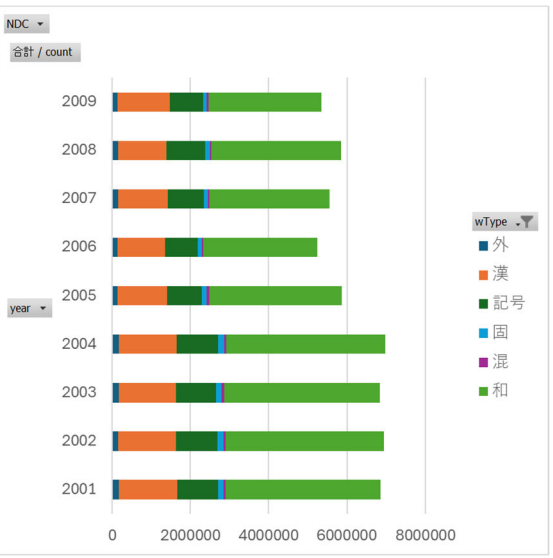


図 10　年ごとの語種の語数

図 11、図 12 は NDC9（文学）に限って集計したものである。こちらは年別に多少の増減があるようである。なお、2009 年が少ないのは納品の事情による。

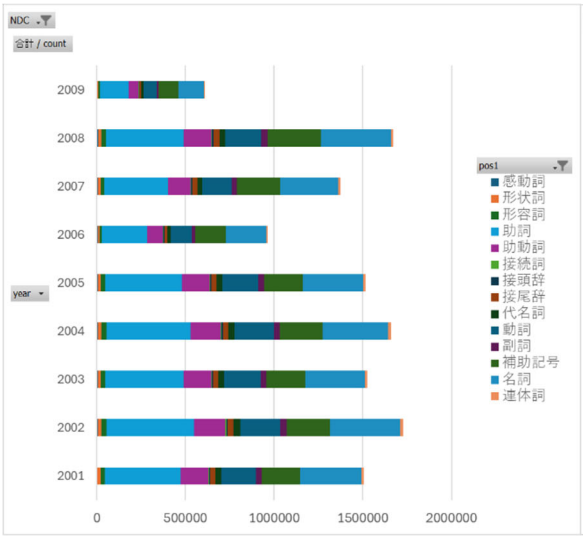


図 11　年ごとの品詞の語数（NDC9）

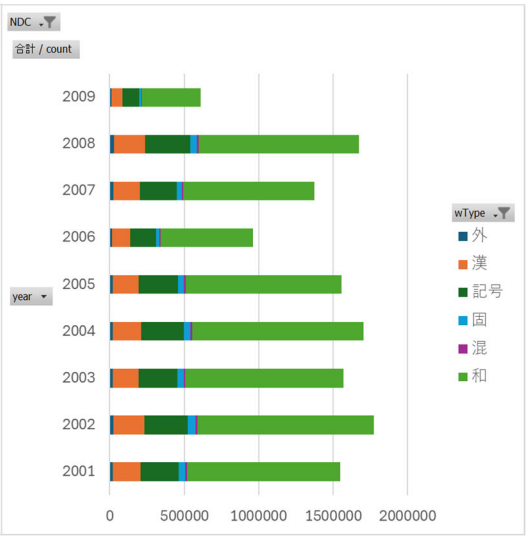


図 12　年ごとの語種の語数（NDC9）

5. おわりに

今後のロードマップとしては、2025 年度末までにはその時点で形態素解析まで終了したデータを Web 検索ツール「少納言」、「中納言」で検索できるようにしたいと考えている。

今回の構築の要である著作権処理について補足する。著作権処理については小木曽・山崎（2024）でも報告しているように 2018 年の著作権法の改正により、権利制限が緩和され、コーパスの構築・公開に関するハードルが大幅に下がった。ただし、「中納言」などのウェブさービスで表示される文脈の長さがどのくらいが妥当かは前述の小木曽・山崎（2024）でも検討し、さらに複数の弁護士事務所に相談しているが、確実な文脈長は得られていない。著作権法としては短い方がよく、研究者の立場からは長いほうがよいので、両者の折り合う着地点を見つけるのが目下の課題となる。

参考文献・参考 URL

小木曽智信・山崎誠（2024）「現代語書き言葉コーパスと著作権処理―BCCWJ2 の構築に向けて―」、日本語学会 2024 年度秋季大会ポスター発表、2024 年 10 月 27 日、オンライン、同予稿集 pp.85-88.

丸山岳彦、柏野和佳子、田中牧郎（2015）「サンプリング」「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引第 1.1 版」pp.28-44.　https://repository.ninjal.ac.jp/records/3244（2025 年 3 月 29 日最終閲覧）

丸山岳彦、山崎誠、柏野和佳子、佐野大樹、秋元祐哉、稲益佐知子、田中弥生、大矢内夢子（2011）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』におけるサンプリングの原理と運用」https://repository.ninjal.ac.jp/records/2867（2025 年 3 月 29 日最終閲覧）

山崎誠・小木曽智信・高田智和（2024）『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の拡張計画について―BCCWJ2 の構築に向けて―、日本語学会 2024 年度春季大会ポスター発表、2024 年 6 月 2 日、東京外国語大学、同予稿集 pp.161-166.

新型コロナウイルス感染症の関連用語に対する社会的許容度の短期継続調査

朝日 祥之(国立国語研究所)　相澤 正夫(国立国語研究所)
石橋 挙(専修大学)　久屋 愛実(立命館大学)　久野 雅樹(電気通信大学)
田中 牧郎(明治大学)　田中 祐輔(筑波大学)　前田 忠彦(統計数理研究所)
鑓水 兼貴(国立国語研究所)　横山 詔一(国立国語研究所)

1. はじめに

本研究では、新型コロナウイルス感染症（以下、適宜「新型コロナ」）に関連する用語の使用や言い換えの必要性に関して、2023 年 6 月より 4 回にわたって実施した短期継続調査の結果を比較・分析する。

1.1. 背景

2020 年初頭より世界規模に拡大した新型コロナは、国内在住のすべての人に関係し、かつ緊急性の高い問題であった。そのため行政やメディアからは「ソーシャルディスタンス」「３密」「濃厚接触」などの目新しい用語が短期間に集中的に発信された。これらの新型コロナ関連用語には、外来語、専門用語、新語・流行語といった様々な要素が認められ、すべての人々に分かりやすいとは言い難く、言い換えや説明を求められることが多い。

2021 年 3 月、文化庁国語課(2021)の「国語に関する世論調査」において、新型コロナ関連用語８語の説明、言い換えの必要性についての調査が実施された。公表された調査結果を独自に分析した横山ほか(2024)は、「この言葉をそのまま使うのがいい」という回答を「社会的許容度」と定義し、属性差（年齢、性）や語種、造語の観点から統計的な分析を行った。また、こうした政府機関によってオープンデータとして公開されている資料の積極的活用についても強調した。これについては 2025 年 3 月に公開された国立国語研究所の「言語学レクチャーシリーズ」動画でも解説されている。

1.2. 社会的許容度

文化庁国語課(2021)での質問文と選択肢は、以下のとおりである。

ここで挙げた(1)～(8)の言葉の使われ方について、どのように思いますか. あなたのお考えに最も近いものをそれぞれ一つずつ選んでください.

(1)コロナ禍（か）　(2)ソーシャルディスタンス　(3)３密　(4)濃厚接触
(5)クラスター　(6)不要不急　(7)ステイホーム　(8)ウィズコロナ

この言葉をそのまま使うのがいい
この言葉を使うなら、説明を付けたほうがいい
この言葉は使わないで、ほかの言い方をしたほうがいい

横山ほか(2024)では、２、３番目の選択肢について、「いずれもその言葉をそのまま使うことを許容せず、何らかの手当てが必要だとしている点で、無条件に使用を許容している１番目の選択肢とは質的に異なる」とし、１番目の選択肢「この言葉をそのまま使うのがいい」と回答した割合を「社会的許容度」と定義した。

こうした新しい用語に対する言い換えや説明の必要性について、国立国語研究所では、さまざまな調査研究を行ってきた。「「外来語」言い換え提案」(2002～2006 年）や、「「病院の言葉」を分かりやすくする提案」(2007～2009 年)、「行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査（自治体調査)」(2003 年)など、公共的な伝達場面において難解な用語を使用する場合の工夫について、一般住民や行政職員などへの調査を通じて研究や提言を行っている。

2022 年 4 月より始まった、国立国語研究所共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」では、こうした過去の研究から得られた知見に基づく継続調査の実施を含め、新たな言語問題に関する研究を行っている。こうした中で、文化庁国語課(2021)の新型コロナ関連用語の調査についても、横山ほか(2024)での分析から継続調査の必要性が検討され、2023 年度より実施されることになった。

1.3. 短期継続調査

2023 年 5 月 8 日より新型コロナウイルス感染症の位置づけが、それまでの「新型インフルエンザ等感染症（いわゆる２類相当)」から「５類感染症」に変更となった。行政から強く要請されてきた外出自粛やワクチン接種が個人の判断に委ねられたことにより、人々の新型コロナ関連用語への関心も薄れることが予想された。

新型コロナ関連用語は、ほぼ同時期に集中的に使用されたという事実により、用語ごとの時間的変化の比較がしやすい。そのため短期間に継続的な調査を実施することで、詳細な言語変化の研究が可能となる。特に、これまであまり研究対象とされてこなかった、語の衰退過程の初期状態の解明にも貢献できると期待された。

2. 調査概要

本研究の調査は、日本リサーチセンターのオムニバス調査（NOS）を利用した。全国 15～79 歳の 1200 人(200 地点×6 人)を対象に、個別訪問による留置調査によって実施された。調査は 2023 年 6 月、2023 年 10 月、2024 年 1 月、2024 年 7 月の４回実施した。

調査項目は、文化庁国語課(2021)の８語以外に、以下の４語を追加した。

(9)都市封鎖　(10)エアロゾル感染　(11)ブレークスルー感染　(12)５類感染症

「都市封鎖」は「濃厚接触」と同様に誤解を招きやすい漢語であり、「エアロゾル感染」は「空気感染」「飛沫感染」との違いで問題となった用語である。「ブレークスルー感染」や「５類感染症」は新型コロナ感染拡大初期ではなく、中期、後期に出てきた用語である。

3. 分析

3.1. 分析方法

社会的許容度が調査回や回答者の属性との関係でどう変化するかを確認するため、クロス集計によるグラフを作成して分析した。また、調査回や回答者の属性等の要因が統計的に有意であるかを確かめるために重回帰分析を行った。本稿では重回帰分析については結果のみを示し、数値については省略する。重回帰分析について、従属変数は各回答者の社会的許容度の統合、すなわち「この言葉をそのまま使うのがいい」と答えた語の個数とした。全体 12 語、文化庁 8 語、新規 4 語、外来語を含む 7 語（コロナ禍、ソーシャルディスタンス、クラスター、ステイホーム、ウィズコロナ、エアロゾル感染、ブレークスルー感染)、漢語 5 語（３密、濃厚接触、不要不急、都市封鎖、５類感染症)、の５種類に分類した。説明変数は、調査回、属性変数(性別、年齢層、学歴、職業、世帯収入、世帯構成)、地理変数(調査地域、都市区分)（注）とした。分析では、5 つのモデルから属性要因の効果の検討を行った。

3.2. 第１～４回調査の推移

全体的な傾向をみるために、図１に 12 語それぞれの社会的許容度について、４回の調査の推移を示したグラフを示す。左側は新型コロナの感染拡大初期から世の中に発信されていた文化庁国語課(2021)の８語で、右側は主に 2022 年以降に発信されるようになった追加の４語である。追加した４語は、いずれも従来の８語より社会的許容度が低く、世の中への浸透が進んでいないことがわかる。

４回の調査での変化は、わずかに減少がみられるものの、全体としてはあまり変わっていない。「５類感染症」移行後も依然として新型コロナの感染者の数は多かったため、すぐには変化しないのだと思われる。また社会的許容度は、説明や言い換えが不要であるという回答の割合であるから、意味の分かる語は社会的に使用されなくなっても忘れにくく、そのため変化していないとも考えられる。

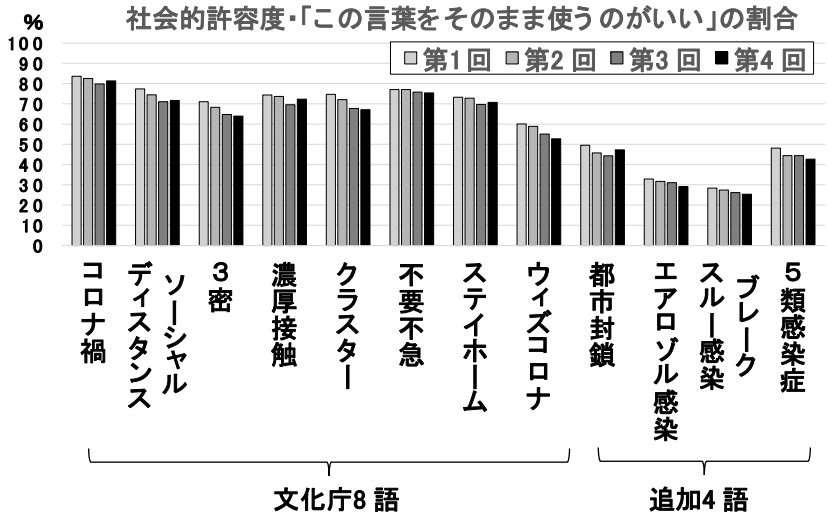


図１　１２語の社会的許容度の推移（第１～４回）

一方で、そのわずかな減少についてみてみると、第４回調査で第３回調査より増加している語があるものの、多くの語で第１回調査から徐々に減少している様子がうかがえる。重回帰分析においても、調査回の効果は、属性変数と地理変数を考慮しても残っている。今後の減少の兆しがみえているとも考えられ、衰退過程の初期状態が観察されている可能性がある。

3.3. 年代差

つづいて 12 語の社会的許容度の平均値について年代差を示したグラフを図２に示す。前述のとおり、各調査回の変化はわずかであるため、４回のグラフは重なっている部分が多い。新型コロナ関連用語は年代を問わず関心が高いと思われるが、どの調査回でも傾向としては、若年層で社会的許容度が高く、高年層で低い。重回帰分析でも、すべての従属変数の分類において、若年層にくらべて高齢層のほうが許容する語が少ない結果となった。

またグラフでは、第１回調査の 10 代が突出して高いようにみえる。重回帰分析では年齢層を 3 区分としたが、説明変数に調査回、属性変数、地理変数に、調査回×年齢の交互作用項も加えたモデルで予測値を計算したところ、第 1 回調査では 10 代・20 代とそれ以上の年齢層の間に統計的に有意な差が認められた。

第１回調査の直前（2023 年 5 月）に「５類感染症」に移行したことを考慮すると、その頃までは若年層が新しい用語に敏感に反応していたと推測される。文化庁８語と追加４語を比較すると追加４語でも 10・20 代では社会的許容度が高い。若年層は第１回調査時点で他の世代より機敏な反応を示していたが、第２回以降は他の年代並みになったと思われる。

2022 年の調査結果がないため検証することが難しいが、文化庁国語課(2021)による 2021 年 3 月の調査でも 10 代が他の世代をより高いという現象がみられた。そのため新型コロナの話題が多かった期間に敏感に反応していた可能性がある。新型コロナ関連用語が社会でどの程度使用されているか、といった点からも考察する必要があると思われる。

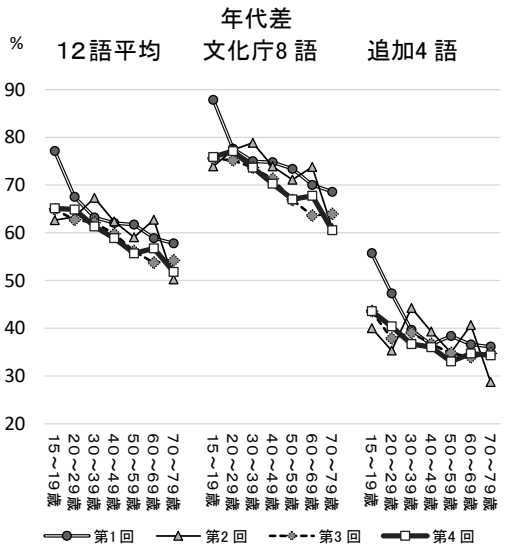


図２　１２語平均の年代差

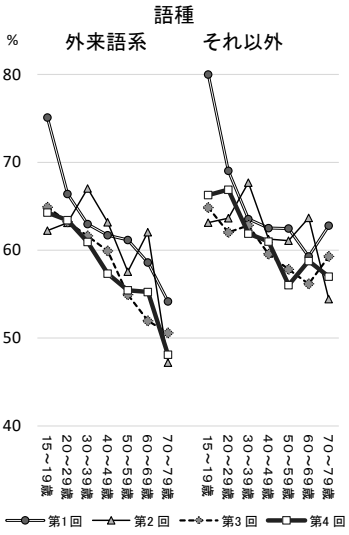


図３　語種による年代差

3.4. 語種

横山ほか(2024)でも語種による違いが指摘されているが、本研究でも外来語を含む７語とそれ以外の５語（漢語とみなせる）とに分類して集計したグラフを図３に示す。特殊なふるまいを見せる第１回調査の 10 代を除いてグラフをみると、若年層・中年層では語種による違いはあまりないものの、高齢層になると外来語を含む語において社会的許容度が低くなっていることがわかる。重回帰分析においても、外来語を含む語では、若年層と比較して中年層より高年層のほうに社会的許容度が低い傾向が出ている。

高年層では全体的に新しい語に対する社会的許容度が低いが、外来語を含む語において特に低くなる。それ以外（漢語）であれば社会的許容度はやや高くなるが、「濃厚接触」「不要不急」「都市封鎖」などの用語が、新型コロナ対策に特化された意味ではなく、一般的な意味で解釈されることで、誤解されている可能性もある。言い換えや説明が不要と考えることの問題点についても考えなければならない。

3.5. 他の属性との問題

調査回、年齢層、語種による社会的許容度の違いについては、予想した結果を検証したものであった。これ以外にも、重回帰分析の結果において統計的に有意となったものがある。解釈には注意が必要だが、さらにさまざまな属性を追加した分析結果に基づき総合的に考察する必要があると思われる。

4. おわりに

4.1. 短期継続調査の意義

国立国語研究所では 2025 年度にも継続調査を予定している。「５類感染症」移行から２年が経過したことで、新型コロナ関連用語の社会的許容度はさらに低下していると予想される。一方で、社会的許容度は言い換えや説明が無用であるとの判断を表す指標であり、いったんはある程度まで定着したものと見なせば、今後も変化の速度は遅い可能性がある。

しかし高田・鑓水(2023)では、「俗字・略字」使用の実時間調査において、俗字や略字が社会的に使用されなくなったことで、かつて俗字や略字を多く使用していた世代でも、認知や理解が大幅に低下したという結果が報告されている。新型コロナ関連用語についても、社会的使用の減少によって、いずれかの時点で急激な社会的許容度の低下が訪れる可能性がある。第４回調査からは社会的許容度だけでなく、使用度（選択肢は「使う」「かつて使ったが、今は使わない」「使ったことはない」）についても調査しており、変化の要因についてさらに詳細に分析することが可能になると思われる。

全国規模の短期継続調査はコストが高く困難が伴うが、言語の実時間変化の研究に大きく貢献すると思われる。今後も一定間隔での調査継続が必要であろう。

4.2 データの公開と利用の促進

本研究では重回帰分析による検定を行った。紙面の都合で数値を示していない（ポスターでは示す）が、ローデータが公開されていれば、誰でも本研究の検証や、新たな観点からの分析を行うことが可能となる。

現時点(2025 年 5 月)では、2023 年度の調査（第 1〜3 回）の集計結果のみを公開しているが、ローデータについても、プロジェクトの研究期間中には公開予定である。当該研究領域における多様な分析が促進されるよう、今後も調査、分析とともにデータの公開を進めていきたいと考えている。

（注）重回帰分析における説明変数

・調査回(第 1〜4 回)
・属性変数： 性別(女性 1、男性 0)、年齢層(若年層(10〜20 代)、中年層(30〜50 代)、高齢層(60〜70 代))、学歴（大卒以上 1、それ以外 0)、職業（フルタイム（管理職、事務・技術職、労務・技能職)、自営（農林漁業・自営商工業・自由業)、パート・アルバイト、無職・主婦・学生)、世帯年収（350 万円以下、550 万円以下、800 万円以下、800 万円超、四分位で分割)、世帯構成（単身世帯、夫婦だけの世帯、夫婦と親の世帯、夫婦と子供の世帯、親と夫婦と子供の世帯、その他）
・地理変数： 調査地域（北海道・東北、関東、中部・北陸、近畿、中国・四国・九州)、都市区分(21 大都市、15 万以上の市、15 万未満の市、郡部)とした。

付記

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト（基幹型)「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」（研究代表者：朝日祥之）の成果の一部である。

参考文献

国立国語研究所「講義「社会的言語問題のデータ分析入門」（横山詔一）／言語学レクチャーシリーズ Vol.34」 https://www.youtube.com/watch?v=nvgB_CX_hc8 （2025 年 3 月 25 日確認）

国立国語研究所「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究（言語問題プロジェクト)」 https://www2.ninjal.ac.jp/lpdb/ （2025 年 3 月 25 日確認）

高田智和・鑓水兼貴(2023)「「略字・俗字」の使用意識に関する経年調査」日本語学会 2023 年度春季大会.

文化庁国語課(2021)『令和２年度 国語に関する世論調査［令和 3 年 3 月調査]』 https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/93710501_01.pdf （2025 年 3 月 25 日確認）

横山詔一・相澤正夫・田中牧郎・久野雅樹・田中祐輔(2024)「新型コロナウイルス感染症の関連用語に対する社会的許容度」計量国語学 34-4, pp.330-339.

介護用語の見直しを目指して
ー介護のことばの難解さと未整理の現状からー

遠藤織枝（元文教大学）、黄海洪（大阪大学）、吉永尚（園田学園大学）

趣旨説明

超高齢化の真っただ中にあって、介護のニーズは高まる一方である。その反面で、その人手不足が深刻さを増し、外国人の手を借りなければ営業できない介護事業所も出てきている。2008 年に EPA(経済連携協定)の一環として外国人看護師・介護福祉士の養成事業が始まった時から、日本語の壁の高さが問題になっていたが、その壁が多様であり、同時に深刻なものであることがその後明らかになってきている。すなわち、国家試験の日本語の問題として立ちはだかる壁であり、現場での対利用者、対専門家と使い分けを要求されるコミュニケーション能力獲得の壁であり、難解で複雑な介護用語習得の壁である。

介護の場に入職する外国人の日本語のレベルや介護知識はさまざまであるが、最近は日本語のレベルが日本語能力試験の N4 程度で入職する特定技能労働者が増えてきて、その従事者たちは入職と同時に介護現場で働くことになる。現場での OJT による介護技術や介護知識を習得する際、最低限度のコミュニケーション能力と介護用語習得は必要不可欠のものである。

その際、特に非漢字圏から来日している介護従事者にとって、漢字語の多い介護用語の習得は非常に大きな負担になっている。本発表ではそうした外国人介護従事者への日本語支援の立場から、①介護の現場で使用されている用語の実態をその歴史にさかのぼって考究しながら、介護専門用語の難しさの由来を明らかにし、②親密度調査の結果を踏まえて、介護現場での語彙教育を考え、③介護従事者へのアンケート調査で明らかになった用語の不統一未整理の現状を報告する。さらに、必要に応じて現在の介護教育や介護福祉士国家試験での実際の使用状況にも触れながら、現在の問題点を指摘し改善の方法を探りたいと考えている。

発表 I　　介護用語の難しさの実態

遠藤織枝（元文教大学）

1．はじめに

2010 年代の初め、EPA でインドネシアから来日した介護福祉士候補者（以下「候補者」）への日本語支援に携わり、初めて、介護現場で使われている用語に接した。候補者が録音してきた、朝礼での申し送りの用語に接したときの驚きと戸惑いは忘れられない。そこに

は、長年日本語で生活し、日本語教育に携わってきた者にとって、全くわからない用語が飛び交っていた。付け焼刃で、介護施設から介護記録や申し送りの資料の提供を受けながら現場の用語を整理分析して、遠藤(2012)で、介護用語の分かりにくさを報告した。さらに遠藤(2016)では、介護の日本語の特殊性と複雑さの実際を報告した。現場では、スタッフ間の専門用語と、対利用者の日常用語の二つのチャンネルのコミュニケーションが行われていること、専門用語には常用漢字表表外字も頻出する難解な漢字語が多いこと、勤務交代時の申し送りの際には、独特の省略語が多く使われること、などであった。

本発表では、こうした多くの問題点の中で、特に現在の外国人従事者の習得に負担の大きい漢字語の専門用語について、それらの語の歴史的背景と、それらの語が現在もなお使用されていることによる問題点について報告する。

2．明治期の漢字の環境

以下は遠藤(2024)で論じてきたことの一部の要約であるが、介護分野は、20 世紀末に独自の領域として誕生した新しい専門領域で、その知識や技術、方法などは多く看護学に由来している。そのため、現在介護現場で使われている「褥瘡」「仰臥位」「手掌」などの介護の専門語について、明治期の看護学教科書・看護法指導書・医学書・医学辞典などによって調べてみた。その結果、まずわかったことは、明治期の教科書や啓蒙書には総ルビの書籍が多く、しかも、同一語の左右に音読みと訓読みのルビが振られて、難解な漢字習得のための教育的配慮がなされている事実であった。

また、明治期には、現在の常用漢字表のような漢字使用の枠は設けられておらず、使用される漢字の種類は現在よりはるかに多かった。現在の常用漢字表表外字である「褥」は、当時は多くの語の中で使われていて、看護学教科書のひとつ『日本赤十字社看護法教程』では、「褥」のつく語として「褥布・褥藁・褥中・褥上・衾褥・就褥・換褥・新褥・旧褥・温褥・衣褥・臥辱」が使われていた。その他「褥月・褥母・褥婦」などの語もあり、「褥」の字はさほど難しいものではなかったと思われる。また、「臥」の漢字も動詞「臥す」として日常使われ、「安臥・臥具・臥床・臥褥・平臥・横臥・仰臥・俯臥・座臥・温臥・」などの多くの熟語が看護学教科書には掲載されている。ちなみに、現在の代表的な小型国語辞典の一つ『三省堂国語辞典』で「褥」を伴う熟語は「褥瘡」以外は「産褥」しか採録されていない。

「仰臥位」については、明治期には「仰臥す」「仰臥せしめ」のような動詞の用自字法は目につくが、名詞形の「仰臥位」はなく、「仰臥位」の語が使われ始めるのは大正期に入ってからであった。「仰臥する」と動作動詞で使われるのであれば、具体的な動作であるから理解しやすいが、「仰臥位」では抽象化された名詞形であるため理解が難しくなる。

漢字語の学習、習得に教育的な配慮がなされていたこと、また看護学の学習の環境では専門語に使われる漢字が、類似する他の用語の中にも多く使われ、それらが学習する者にとって特別のものではなく、特に負担が重いものでもなかったと考えられることなど、漢字使用の環境が現在とは大きく異なっていたことがわかった。

3．明治期と現在の身体部位の名称

表１　明治期と現在の身体部位名称の比較

	1 解剖及生理	2 養成講座		3 介護用語集		4 三現国
	頭部*		頭部*		頭部	
	頸部*		頸部*		頸部	うなじ**
	胸部*		胸部		胸部	
	腋窩		腋窩部		脇	わきの下
	腹部		腹部		腹部	
	心窩		心窩部			みぞおち
	鼠蹊部		鼠蹊部		鼠蹊部	
	臀部		殿部		臀部・殿部	
下肢	大腿	下肢	大腿部	下肢	大腿(ふともも)	
	下腿		下腿部		下腿	
	踵(しょ)		踵部		踵部(かかと)	かかと
	足背		足背		足背(あしのこう)	足のこう
	足蹠		足底部		足底(あしのうら)	土ふまず**
上肢	上膊	上肢	上腕	上肢	上腕	二のうで
	前膊		前腕		前腕	
	手掌		手掌		手掌(てのひら)	たなごころ
	手背		手背部		手背(てのこう)	手のこう

（1『看病法修業用　人体の解剖及生理』1899、2『新・養成講座 14 こころとからだのしくみ』2009、3 『5 カ国語でわかる介護用語集』2019、 4『三省堂現代新国語辞典』2019）

「頭部・腋窩・上腕」など身体部位の用語 19 語について、明治期の看護学教科書と、現在の介護士養成講座テキスト・介護用語集・国語辞書の 4 種語を比較してみたところ、19 語のうち 16 語が明治期の語がそのまま踏襲されていた。

明治期の語彙と現在の者と異なる 3 語は、昭和初期に医学者たちが医学用語の改訂を行った際に改められたもので、明治期の「上膊・前膊・足蹠」から現在の「上腕・前腕・足底」に改訂された用語であった。漢字が難解であるとの理由の改定であった。現在の介護用語の「腋窩・心窩部・手掌・大腿部」などの難解な語は、140 年を経て漢字環境が大きく変化したにもかかわらず、そのまま使われているということで、習得の負担が大きいことは容易に想像される。

4.「腋窩」と「腋下」

明治の看護学教科書では、

「腋下或は股間の如き凹処に於てすべし。」(『普通看病学』p.150)、

「体温を測るには通例腋窩ニ於テスル者ニシテ（『日赤看護法』p.45）

など、同じ部位のことが「腋下」「腋窩」と 2 種類の漢語を用いて表現され、どちらの語にも音読みの「えきか（くわ）」と、訓読みの「わきのした」のルビが振られていた。明治期の医学辞書では、

Achselgyube　腋窩（『独逸医学辞典』）

Achsel　　腋、腋下（『袖珍医語字林：独羅和訳』）

と記載され、同じ語が「腋窩」と「腋下」と訳され、漢字は違うが同じ部位をさしていることがわかる。

現在の介護士養成教科書では、

「体温計による腋窩・外耳道での体温測定。」(『介護の基本Ⅰ』p193)、

また介護福祉士国家試験でも

「利用者の両腋窩に手を入れて支える」（第 33 回 国家試験問題 49、設問４）

のように「腋窩」の語が使われている。明治期に使われていた「腋窩」と「腋下」の 2 語のうち、難解な語の方が踏襲されている。現在の語としてはより平易な「腋下」の方を踏襲されていれば、学ぶ者の負担も少しは軽くなったはずである。

5．まとめ

以上のほかにも、「臥床・汚染」など明治期の用法とは異なる意味用法で現在使われている語や、明治期にはルビがついて漢語と和語を同時に学べた語が、現在では常用漢字表内字であるためにルビが付けられなくて習得に困難をきたしている語などがある。

現在の介護の場で使われている漢字語中心の専門用語が難解とされ、習得に大きな困難が伴うことになる理由は、明治期と漢語の環境が大きく変わっているのに、明治期と同じ専門語がそのまま踏襲されているためであることが明らかになった。明治初期の医学・看護学の黎明期に外国語の訳として当てられた多くの漢語が、その後日本語の状況が大きく変化してきていることとは無関係に、専門用語の伝統として固守されてきた結果であろう。そのまま受容され継承され続けることは、外国人介護従事者だけでなく、日本人の新人教育にとっても負担は大きく、本来求められる介護技術や知識の習得の妨げにもなる。介護現場の用語の根本的な見直しが必要である。

参考文献

足立寛（1887）『日赤看護法』(『日本赤十字社篤志看護婦人会　看護法教程』の略）日本

赤十字社
足立寛(1896)『日本赤十字社看護学教程』日本赤十字社
医事新誌局（1903)『袖珍医語字林：独羅和訳』医事新誌局
遠藤織枝(2012)「介護現場のことばのわかりにくさ―外国人介護従事者にとってのことばの問題―」『介護福祉学』日本介護福祉学会　19(1)　94-100
遠藤織枝(2016)「介護のことば―そのわかりにくさの実際―」『わかりやすい日本語』野村雅昭・木村義之(編)くろしお出版　201-224
遠藤織枝(2024)『やさしい日本語の時代に、やさしい介護のことばを』ひつじ書房
佐伯理一郎訳補（1895)『普通菅病学』吐鳳堂書店
下平文柳(1899)『看病法修業用　人体の解剖及生理』吐鳳社
新宮涼園等編(1886)『独逸医学辞典』英蘭社

介護福祉士養成テキスト・国語辞典等
『介護の基本Ⅰ』『介護福祉士養成テキスト５』(建帛社 2009)
『こころとからだのしくみ』『新・介護福祉士養成講座 14（中央法規 2009)
『三省堂現代新国語辞典第６版』三省堂 2019
『5 カ国語でわかる介護用語集』ミネルヴァ書房 2019
第 33 回介護福祉士国家試験問題（2021 年 1 月）

発表２　　単語親密度調査から考える介護用語のわかりにくさ

黄海洪（大阪大学）

1．はじめに

私たちが日常生活で触れる語彙の中には、よく親しまれる単語もあれば、あまり聞き慣れない単語も含まれている。単語をどれほど容易に認知できるかを示す指標として、「単語親密度」という概念がある。例えば、「夢中」と「耽溺」はほぼ同じ意味を持つが、一般的に「夢中」のほうが「耽溺」よりも理解しやすいと感じるのは、単語親密度の違いによるものである。単語親密度は、語の理解や習得に大きく影響を及ぼす重要な概念である。

2．出現頻度の重要性と問題点

出現頻度効果は単語認知に見られる経験的事実の中で最も確実なものとされている（阿部他，1994)。辞書に収録する単語の選定には、コーパス頻度が重要な参考基準となる（Williams，2003)。このように、頻度は語彙選定において最も重要視される基準の一つである（Divjak，2019)。しかし、一方で、出現頻度の高い語には、機能語や一般的な意味の語が多く、学習者に役立つ具象名詞が少ないとされている（Richards,1970)。また、書き

言葉コーパスから得られる語の出現頻度は、実生活での使用頻度や見聞きする機会を必ずしも正確に反映しているわけではないとされている（Ballot 他,2022）。

3.「単語親密度」の定義と重要性

単語親密度とは、「一般に人がある単語に対してどの程度よく見聞きすると感じているかその程度、すなわち単語のなじみ度を指す概念」であり、「その語がどの程度出現すると思っているかという内的あるいは心的出現頻度を示すもので、単語の主観的特性の一つになる」とされている （横川,2006:3）。また、単語親密度は、ある単語に対するなじみの度合いを表し、主観的な頻度を表すものであり、聴覚、視覚、そして印刷文字に対する感覚を総合的に反映した指標でもある（Gernsbacher,1984）。単語親密度は、頻度以上に単語認識の容易さに関与している（Parks & Yonelinas,2015）。また、語彙へのアクセスの難易度や単語認知過程を左右する要因の中、単語親密度は最も影響が大きいとされている（門田,2002）。さらに、単語親密度は、文章のリーダビリティ推定および語彙の平易化において、有効な指標である（江原,2017）。日本語教育の分野においても、語彙選定に単語親密度を活用する取り組みが見られ、単語親密度を教材開発に取り入れることで、学習者は日本人にとってなじみ深い語を優先的に覚え、より実践的で役に立つ内容を習得できると考えられる（徳弘,2005）。語彙研究において、客観的指標の頻度のみならず主観的指標の親密度を検討することも重要である。これまで日本語の単語親密度調査がいくつか行われてきたが、分野に特化した日本語の単語親密度調査が存在せず、特定の分野に役立つ親密度調査が望まれる。

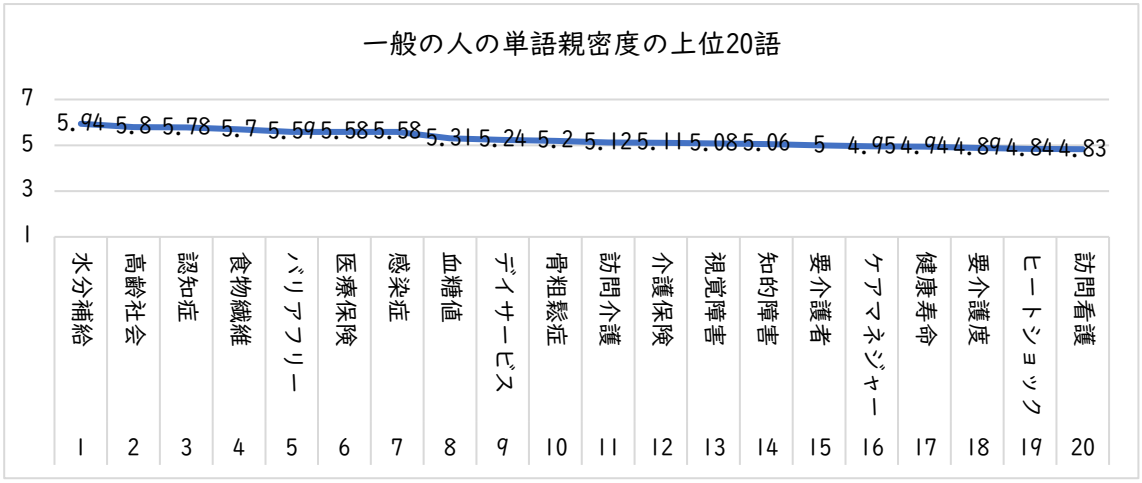
4. 単語親密度調査

介護分野の単語親密度調査の実施を試みたが、コロナ禍の影響により、介護施設でのアンケート調査が難しいため、外部機関に委託することにした。調査方法は、クラウドソーシングを用いた方式を採用した。調査票の作成、調査画面の確認などは筆者で行い、実査に関しては調査会社に委託した。調査では、「なじみがない」から「なじみがある」までの 7 段階で評定を行った。調査対象語彙は、過去 10 回分（第 24～33 回）の介護福祉士国家試験の語彙リストと現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）の長単位語彙表（Version1.1）を比較し、対数尤度比検定により抽出された特徴語を対象とした。オンラインによるアンケート調査を実施するにあたり、回答者の集中力の維持と疲労の影響を考慮し、調査語彙の総数を漢語 250 語とカタカナ語 50 語の 300 語程度に設定した。専門用語の多くは漢語とカタカナ語で構成されていることから、調査対象を漢語とカタカナ語に限定した。本研究は浅原（2019）を参考に、ベイズ法による単語親密度の推定を行った。

5. 調査結果

5.1 調査結果

表 1-1　一般の人と専門家の単語親密度推定値の上位 20 語



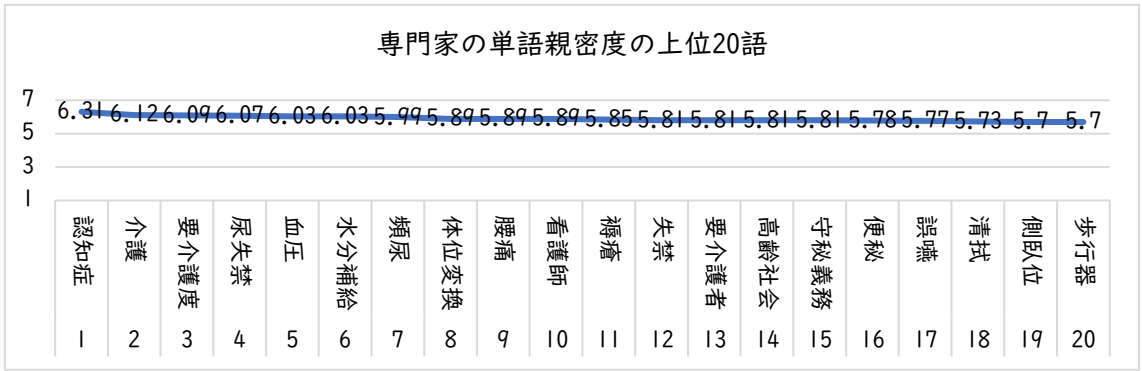
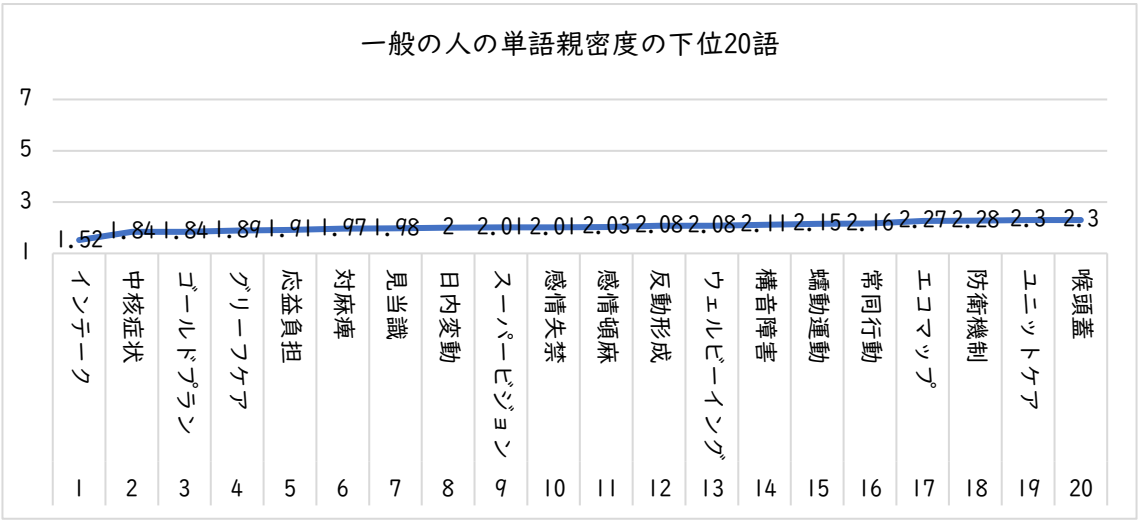
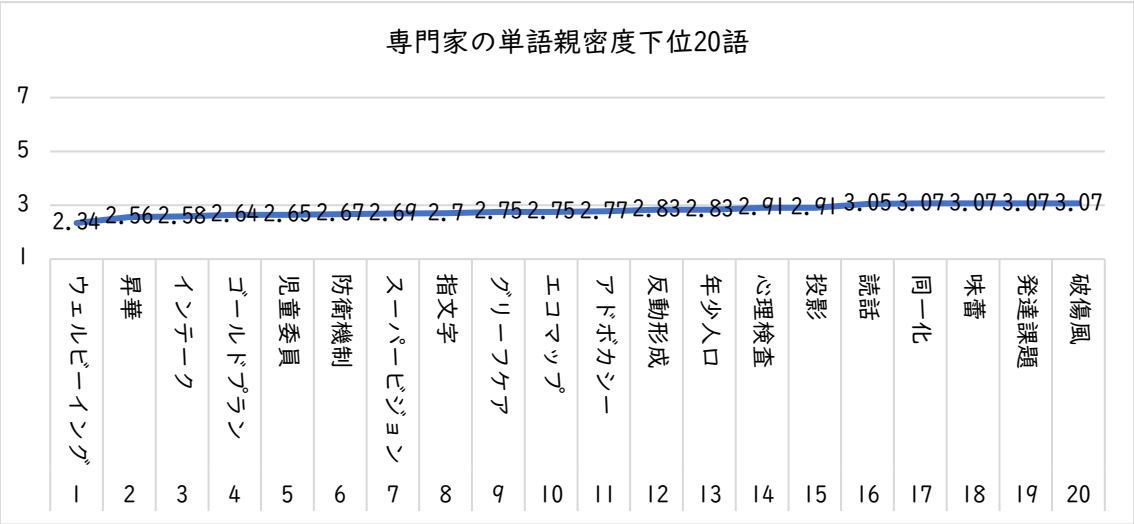


表 1-2　一般の人と専門家の単語親密度推定値の下位 20 語





5.2 調査結果の考察

調査結果から、専門家の単語親密度測定値の単語間平均は、おおむね 4.0 から 4.5 の範囲に分布しており、一般の人の単語親密度測定値の単語間平均は 3.3 から 3.7 の範囲に収まっていることが明らかとなった。つまり、一般の人に比べて、専門家のほうが単語親密度の推定値の平均が高いと言える。表 1-1 からわかるように、一般の人の単語親密度が高い語には、「水分補給」「食物繊維」「健康寿命」など、健康管理において日常的によく使用される語が多く出現している。それに対し、専門家の単語親密度が高い語として、「認知症」「体位変換」「誤嚥」「清拭」など、介護現場で使用される語が多く挙げられる。これらの言葉は、専門家にとっては職場で日常的に接する機会が多いため、親しみのある語である。しかし、一般の人にとっては、これらの語に接する機会が少なく、なじみが薄いため、理解が難しい場合がある。なお、これらの語の多くは、BCCWJ における出現頻度が 50 以下である。つまり、書き言葉コーパスにおける低頻度語であっても、その親密度が必ずしも低いとは限らないことが示唆された。

一方で、表 1-2 からわかるように、一般の人の単語親密度が低い語には、「中核症状」「感情失禁」「構音障害」など、特定の症状に関する語が多く含まれている。それに対して、国家試験の文脈から健康や幸福の状況を指す「ウェルビーイング」、介護支援専門員などが利用者との最初の面接のことを指す「インテーク」、フロイトの精神分析理論で使われる「昇華」や「防衛機制」などの語は、専門家であっても使うことが少なく、一般の人にもなじみが薄い語である。これらの語は、介護現場でも普段見聞きする機会が少ないことから、試験問題に出題する際には注釈をつけるなどの配慮が求められる。さらに、専門家と一般人の間で単語親密度に大きな差がある語彙として「側臥位」「関節拘縮」「仰臥位」「見当識」などが挙げられる。これらの語も、専門用語としては重要である一方で、一般的な理解が難しいため、教育現場では特に丁寧な説明や言い換えが必要になる。この

ように、特定の社会集団や状況によって、ある単語に対する接触頻度が他の単語に比べて高くなる場合があるが、そのような傾向はコーパスにおける出現頻度には反映されにくいことがある（Ballot 他, 2022）。このため、実際の接触頻度を反映できる単語親密度調査は、語彙の現実的な使用頻度を把握するために重要な役割を果たすと考えられる。

6. おわりに

介護用語については、専門家と一般の人の間で単語親密度に一定の差が存在する。こうした親密度に関する差異が生じる主な理由は、専門家は職業環境において専門用語に頻繁に接することで、単語親密度が強化されるのに対し、一般の人は日常生活における専門用語への接触頻度が限られていることにある。つまり、語彙への接触頻度の違いが、単語親密度の差につながっていると考えられる。このような単語親密度の違いは、学習者が介護の現場で専門用語に接した際に、すぐに理解できなかったり、誤解したりする原因にもなり得る。そのため、円滑なコミュニケーションを図るだけでなく、語彙の習得や指導の観点からも、学習者の理解度を考慮し、より単語親密度の高い類義表現への言い換えなどの手当てが求められる。例えば、「清拭」という語を、「体をきれいに拭く」などと言い換えることで、一般の人にも伝わりやすくなる。このように、単語親密度を考慮した適切な語彙指導を行うことにより、介護現場における円滑なコミュニケーションの実現や信頼関係の構築が期待される。

参考文献

Ballot, C., Mathey, S., & Robert, C. (2022) Age-related evaluations of imageability and subjective frequency for 1286 neutral and emotional French words: ratings by young, middle-aged, and older adults. Behavior Research Methods, 54(1),196-215.

Divjak, D. (2019) Frequency in Language Memory, Attention and Learning. Cambridge: Cambridge University Press.

Gernsbacher, M. A. (1984) Resolving 20 years of inconsistent interactions between lexical familiarity and orthography, concreteness, and polysemy. Journal of Experimental Psychology: General, 113(2), 256-281.

Parks, C. M., & Yonelinas, A. P. (2015) The importance of unitization for familiarity-based learning. Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition, 41(3), 881-903.

Richards, J. C. (1970) A psycholinguistic measure of vocabulary selection. International Review of Applied Linguistics in Language Teaching, 8(2), 87-102.

Williams, G. (2003) From meaning to words and back: Corpus linguistics and

specialised lexicography. ASp. la revue du GERAS, (39-40), 91-106.

浅原正幸（2019）「クラウドソーシングによる単語親密度の推定」『言語処理学会第 25 回年次大会発表論文集』, 45-48.

阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李光五（1994）『人間の言語情報処理―言語理解の認知科学―』サイエンス社

江原遥（2017）「生コーパスからの単語難易度関連指標の予測」『言語処理学会第 23 回年次大会発表論文集』, 843-846.

門田修平（2002）『英語の書きことばと話しことばはいかに関係しているか―第二言語理解の認知メカニズム―』くらしお出版

徳弘康代（2005）「中上教学習者のための漢字語彙の選択とその綴字法の研究―学習指標値の設定と概念地図作成の試み―」『日本語教育』127, 41-50.

横川博一（編）（2006）『日本人英語学習者の英単語親密度文字編―教育・研究のための第二言語データベース―』くらしお出版

発表３　介護用語の複雑さと不統一の実態

吉永尚（よしながなお）　（園田学園大学）

1. はじめに

外国人介護従事者の日本語支援を目指す「介護の日本語勉強会」注 1 では、介護現場の日本語の指導、あるいは学習に関して様々な問題点が挙げられている。

外国人スタッフが現場で必要な語彙を学ぶ上で、「介護用語の複雑さに困難を感じる」「施設によって用語が全然違う」「省略語やオノマトペが頻繁に使用される」などが挙げられ、介護用語の使用実態を明らかにするため調査を実施した。本発表では、介護用語の使用実態調査によって明らかになった介護用語の複雑さと不統一の実態について報告し、その善後策について考える。

2. 介護用語の調査

「介護の日本語勉強会」では 2024 年 3 月～9 月、所属の異なる介護関係者 124 名を対象に調査を実施した。（有効回答数 124 名、介護関係者 107 名（特養・訪看・病院など）、日本語教育関係者 6 名、その他 11 名。）質問項目は、①例示したようなイラストを示してその呼称を選ぶもの、②使用する相手によって用語が違うかどうかを聞くもの、③よく使う省略語や居住地などに関するもの、④用語が複数あることについてどう思うかである。調査の結果、用語のバリエーションが不統一で利用者と専門職間の表現の相違が顕著であることがわかった。調査結果を以下に示す。

（イラスト例）

（入浴の前の）介助として



回答

□　衣類介助
□　着替え介助
□　脱衣介助
□　更衣介助
□　その他（　　）

3. 調査結果

3.1 介護用語のバリエーション

表１：介護行為の名称（有効回答数 124 名（介護関係者 107 名、日本語教育関係者 6 名、その他 11 名）。数字は多い順の順位、（　）内は回答人数。）

	1	2	3	4	5
イラスト１	整容介助(72)	身だしなみ介助(35)	身体整容(13)	髪をとかす(3)	
イラスト２	口腔ケア(113)	歯みがき(6)	おロの手入れ(5)		
イラスト３	更衣介助(57)	着替え介助(41)	脱衣介助(12)	衣類介助(7)	モーニングケア(1)
イラスト４	脱衣介助(80)	更衣介助(19)	着替え介助(17)	衣類介助(6)	着脱介助(1)
イラスト５	移乗介助(118)	トランスファー(5)	車椅子に乗る(1)		
イラスト６	移動介助(117)	車椅子(駆動)介助(6)	トランスファー(1)		
イラスト７	排泄介助(91)	トイレ介助（誘導）(33)			

調査の結果、表１に示すように同一の介助を表現するのに、いくつものバリエーションがあることがわかった。(以下、（　)内の数字は表１による。）最もバリエーションが多いものは起床時に着替える介助で、「更衣介助(57)」「着替え介助(41)」「脱衣介助(12)」「衣類介助(7)」「モーニングケア(1)」と５通りの表現が用いられ、また、入浴時に服を脱ぐ介助でも「脱衣介助(80)」「更衣介助(19）」「着替え介助(17）」「衣類介助(6)」「 着脱介

助(1)」と５通りの表現が用いられている。

次いで、起床後の整髪介助では、「整容介助(72)」「身だしなみ介助(35)」「身体整容(13)」「髪をとかす(3)」と４通りの表現が用いられている。

さらに、起床時に着替える介助と入浴時に服を脱ぐ介助の両方で「更衣介助」「着替え介助」など同じ呼称が用いられ、一つの行為を表現するのに複数の表現が使用されていることが観察される。

これらの表現には地域や職場の形態などによる相違も見られ、関東地方より関西地方の方がより日常語に近い表現が多く、医療系の現場では専門用語の使用率が高い傾向が見られ、用語の使用に関して不統一であることが観察される。

3.2 使用対象による用語の使い分け

表２：使用対象別の呼称（有効回答数 124 名、（利）は利用者、（介）は介護職、以下同上）

	1	2	3	4
（利）に対して	とこずれ(121)	褥瘡(3)		
（介）	褥瘡(120)	とこずれ(3)		
（利）	あおむけ(77)	上を向いて(45)		
（介）	仰臥位(81)	あおむけ(37)	上向き(6)	
（利）	うつぶせ(116)	腹臥位(4)	腹ばい(1)	
（介）	腹臥位(62)	うつぶせ（60）		
（利）	右/左向き(77)	横向き(46)	側臥位(3)	こっちを向いて(1)
（介）	側臥位(70)	右/左向き(33)	横向き(15)	
（利）	むくみ(120)	浮腫(3)		
（介）	浮腫(81)	むくみ(39)		
（利）	入れ歯(117)	義歯(6)		
（介）	義歯(88)	入れ歯（35）		

介護スタッフが使用する用語が対利用者、対専門職で大きく異なることが観察される。（以下、(　)内の数字は表２による。）使用が大きく相違しているものには、利用者に対する「とこずれ(121)」、専門職に対する「褥瘡(120)」、利用者に対する「むくみ(120)」、専門職に対する「浮腫(81)」、利用者に対する「入れ歯(117)」、専門職に対する「義歯(88)」、利用者に対する「うつぶせ(116)」、専門職に対する「 腹臥位(62)」が挙げられる。利用者に対してはわかりやすく日常語に近い表現を用いているが、専門職同士では専門用語を使用し、対象者による使い分けが顕著に観察される。

このことは、外国人介護労働者にとっては、対利用者と、対スタッフとで用語を使い分けなければならないという、用語使用上に大きな課題があることを示している。

3.3 省略語・オノマトペの使用

よく使用する省略語の自由記述による回答では、回答者ほぼ全員が多くの省略語を挙げ

ている。（以下、多く挙げられていた省略語の例）
「水分補給⇒水補、補水、水分」　「ポータブルトイレ⇒Pトイレ、ポートイレ」
「ナースコール⇒NC、コール」　「入浴介助⇒風呂介、入介」
「体位交換⇒体交」　「入浴禁止⇒入禁　」「救急搬送⇒救搬」　「食事介助⇒食介」
「リハビリパンツ⇒リハパン」　「ストレッチャー浴⇒スト浴」
「リクライニング浴⇒リク浴」　「定時での排泄介助⇒定排」
「排便で7日出ていない⇒K-7」　「特別に変わったことなし⇒特変なし」
「水分補給」の省略語として「水補」「補水」「水分」、「入浴介助」を「風呂介」「入介」と複数の省略語が使用されているものも多く、「排便で7日出ていない」を「K-7」と省略するなど、文レベルの語句をアルファベットや数字で表現する省略語も多い。

短時間で申し送りや記録作成をするため、語彙の簡略化の多用が起こると推察されるが、職場によって違う省略語を用いており、省略語に関してもかなり不統一であることが観察される。

また、介護の言葉の問題点（自由記述回答）では、「傾眠」を「ウトウトする」、「飲み込んでください」を「ゴックンして」、「噛んでください」を「モグモグして」など、施設によっては利用者への声かけにオノマトペを使用していて戸惑ったという記述が見られた。外国人スタッフの理解が困難なオノマトペとして、「ムカムカ」「ゴロゴロ」「ゴワゴワ」「ネバネバ」などが挙げられており、介護現場のオノマトペ習得の難しさが推測される。

3.4 現状に対する意識

表３：現状に対する意識（有効回答数 124 名、以下同上）

	1	2	3	4
用語の不統一に否定的(計 78)	少ない方がいい(39)	種類が多いのは大変（31）	一つの言葉でいい(4)	わかりやすい言葉がいい(4)
用語の不統一に肯定的(計 40)	いろいろあってもよい(29)	問題は感じない（11）		

用語使用の現状についての意識調査では、「使う言葉のバリエーションは、できるだけ少ない方がいい(39)」「いろいろなことばを覚えなければならないのは、大変なときがある(31)」「一つのことをいうのには、一つの言葉でいい(4)」という現状に否定的な回答が、「いろいろあってもよい(29)」「特に問題を感じない(11)」という現状に肯定的な回答の約２倍に上った（表３参照）。自由記述では、利用者や利用者の家族にはわかりやすい言葉を使うべきだという回答が見られ、用語の難解さや不統一に問題を感じている人がかなり多くいることが明らかとなった。

4. おわりに－問題点の改善へ向けて－

調査の結果、介護の現場では用語のバリエーションの使用が不統一で、 対利用者と対専門職で使用する表現が顕著に相違すること、省略語やオノマトペなどの使用が多いことが分かった。用語バリエーションが少なく施設間で共通しているものは必修語彙とし、用語バリエーションが多いものについては現場ごとで個別に対応するなど、改善への工夫が考えられる。

多忙な現場で難解な用語の意味や使い分けを覚え、略語やオノマトペも習得するのは負担がかなり大きい。また、現場で外国人スタッフを指導する介護職の方でも、多数のバリエーションや使い分けなど用語の不統一の実態を問題視している人が多く、現状の改善は喫緊の問題であると考える。

介護業務の省力化をすすめるためにも、介護用語の統一化・平易化を視野に入れた用語の分類・整理をさらに進め、問題点の速やかな改善が期待される。

注１）「看護と介護の日本語教育研究会」の「言葉の分科会」メンバーが主催する勉強会であり、研究会員で外国人介護スタッフ養成に関わるメンバーから成る。月１回開催。（2023年2月発足）

エゴフォリシティーと体験の日本語文法

定延　利之（京都大学）
鈴木　泰（東京大学）
井上　優（日本大学）

【ワークショップの趣旨】

自己と他者の認識的差異（自己の内的情報は自明だが他者の内的情報は原理的に知り得ない）を何らかの形で反映した現象は諸言語に珍しくなく、文法への反映も一部の言語に見られる。たとえば日本語の事態描写文では、自己の心情は形容詞だけで表現できるが ((1a))、他者の心情は同様の形では不自然になりがちである ((1b))。ネワール語の事態描写文では、意図が意識されるか ((2a))、否かで ((2b, c))、過去の表現が異なる（長い ɑ̄ と短い ɑ）。

(1) a.　皆さんに親切にして頂いて、私もうれしいです。
　　b.??皆さんに親切にして頂いて、弟もうれしいです。

(2) a.　ji wan-ɑ̄　　b.　wa wan-ɑ　　c.　ji kutuwal-ɑ
　　I go-INT　　s/he go-EXT　　I get.lost-EXT
　　'I went.'　　'S/he went.'　　'I got lost.'　　[Newar, Bendix 1992: 233-236]

これらの現象を包括的に扱う概念「エゴフォリシティー」(egophoricity) が提唱されているが、盤石の定義が確立されているわけではない (Bergqvist and Kittilä 2020: Note 1) 。本ワークショップでは、古代日本語と現代日本語の現象観察を通して、エゴフォリシティーがこれまでに提案されてきた類似概念（定延の「体験」）と同じものなのか、エゴフォリシティーをどのようなものと考えることが実りある成果につながり得るのかを追究する。エゴフォリシティーの定義のうち比較的よく知られていると思われるものを (3)(4) に挙げておく。

(3)　At its very broadest, egophoricity is a general phenomenon of linguistically flagging the personal knowledge, experience, or involvement of a conscious self; it can furthermore be understood as differential linguistic marking of 'privileged access' to a real or mentally projected activity or state (Hargreaves 2005). More narrowly, egophoricity is the grammaticalised encoding of the personal or privileged knowledge or involvement of a potential speaker (the primary knower) in a represented event or situation. A narrowly egophoric system comprises a person sensitive, (quasi-)paradigmatic deployment of egophoric and non-egophoric forms that is pervasive across statements and questions.　[San Roque et al. 2018: 2]

(4)　Egophoric marking involves a binary contrast (egophoric vs. allophoric/alterophoric; Post 2013) that has been described in terms of the presence/absence of privileged access to knowledge (Hargreaves 1991) or the involvement/non-involvement of a speech act participant in an event (Creissels 2008).
[Bergqvist and Knuchel 2017: 360]

文献

Bendix, Edward H. 1992. "The grammaticalization of responsibility and evidence: Interactional manipulation of evidential categories in Newari." In Jane H. Hill, and Judith T. Irvine (eds.), *Responsibility and Evidence in Oral Discourse*, pp. 226-247, Cambridge: Cambridge University Press.

Bergqvist, Henrik, and Seppo Kittilä. 2020. "Epistemic perspectives: Evidentiality, egophoricity, and engagement." In Henrik Bergqvist and Seppo Kittilä (eds.), *Evidentiality, Egophoricity, and Engagement*, pp. 1-21, Berlin: Language Science Press.

Bergqvist, Henrik, and Dominique Knuchel. 2017. "Complexity in egophoric marking: From agents to attitude holders," *Open Linguistics* 3, pp. 359-377.

San Roque, Lila, Simeon Floyd, and Elisabeth Norcliffe. 2018. "Egophoricity: An introduction." In Simeon Floyd, Elisabeth Norcliffe and Lila San Roque (eds.), *Egophoricity*, Amsterdam: Philadelphia: John Benjamins, pp. 1-77.

【発表１】ツとヌの事態把握の違いについて

鈴木泰

１．古代語におけるツ・ヌとエゴフォリシティー

ツ　　意志的人為的動作を表す動詞
ヌ　　無意志的自然的な動作を表す動詞

○このような「使い分けがあたかもヌとツの意味・機能であるかのように取り違えられ」てきた。（井島正博 2011：177）

○エゴフォリシティーとは、体験者だけが自分の意図にアクセスできるという認識的な優位性をもつ発話者が、自らの意図を証拠としてその行為の確実性を主張するシステムであり、ツによって表され、ヌにはそれがない。（San Roque et al. 2018：20）
主観的な感情の直接な表現もその認識的な優越性からエゴフォリックである可能性がある。

○人称性の区別との関係
〈事態把握〉　池上嘉彦は、主体としての〈話者〉は自らが把握の対象とする客体である〈事態〉との関わり合いにおいて、2つの類型的図式で対立するその2つについて次のように述べる。

〈主観的把握〉：話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする――実際には問題の事態の中に自らの身を置いていない場合であっても、当事者として体験的に事態把握をする。

〈客観的把握〉：話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に（自己の分身を含む）事態把握をする――実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は（自分の身をその事態の中に残したまま）自らはその事態から抜け出し、事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に（自己の分身を含む）事態を把握する。（池上嘉彦 2011：52）

○山田孝雄　「つ」は其事実状態を直写的に説明するものにして、其事実状態が文主によりてあらはさるゝことの確めを主者自らの側より直写的にあらはすなり。…之に反して「ぬ」は傍観的に其の状態動作を説明して其の動作状態の確めをあらはす。（山田孝雄 1908：393-394）

○定延利之の知識と体験　言語表現は、個人的・体験的か、公的・知識的かによって区別される。
言語情報は共有可能性の程度に応じて、知識と体験に連続的ながら二分できる。典型的な知識とは、誰にでも共有され得る、公共の言語情報である。逆に、典型的な体験は、自己（ふつうは話し手自身）が専有するだけで他者が共有できない、共有可能性の極めて低い個人的な言語情報と言える。（定延利之 2016：152-153）

○〈主観的把握〉　一人称主語の場合
〈客観的把握〉　二・三人称主語の場合

○　ツ　　動作的故意的にして急、対話態の文に多く
ヌ　　状態的自然的にして緩、叙述体の文に多し　（三矢重松 1908：12）

○資料　移動動詞と通達動詞をとあげるが、存在動詞について上代にさかのぼって別に論じる。⇒5 章

○古典語資料の調査範囲
平安時代の物語り文学作品　源氏物語（角川文庫）、宇津保物語（室木秀之『うつほ物語 全』1995、おうふう）、落窪物語（小学館旧編日本古典文学全集）、枕草子（角川文庫）、蜻蛉日記（角川文庫）、狭衣物語（岩波古典大系）、浜松中納言物語（岩波古典大系）

○データは会話文（和歌を含む）中の主文の、直説法のいいおわりの形式のみである。現代語訳は新編日本古典文学全集を多く参考にした。

○ツは三人称より一人称の方が出現頻度が高く、ヌは逆である。
ツは〈主観的把握〉が優勢
ヌは〈客観的把握〉が優勢　　である。

○ツとヌがどのような人称に現れるかを（表）として示す。コーパスには疑問文は入れなかったので、表には二人称の欄がない。ただし、ここには掲出しなかったが、平叙文では二人称の例は1例しかない。

○表の意味分類は鈴木泰（2012：56）に示した動詞意味分類に従い、動詞の各意味グループのツとヌの人称ごとの出現数を示す。

（表）	ツ		ヌ	
	一人称	三人称	一人称	三人称
働きかけ	19	13	3	0
移動	44	3	23	31
通達	34	47	11	1
授受	11	6	8	1
知覚	30	2	6	1
立居振舞	12	1	0	0
動作態	2	0	0	4

一般動作	11	2	0	4
変化	4	9	52	0
うごき	1	5	1	3
状態	2	28	4	0
態度	85	7	19	4
特性関係	1	10	0	4
(計)	269	131	131	141

2．移動動詞のエゴフォリシティー

§1. 誇示　1　いみじき御けはひの近きを、「かしこう帳の中を出でつ」と思しければ、(狭衣二 171)

○これは、話し手が行った動作について、上出来であるという話手の評価が重ねられ、自己満足ともいえるような強い主観性が表現される。

§2. 動機付け　2『そのかしこまり聞こえさせむ』とて、なむ参り来つる。(宇津保・嵯峨の院 159)

3 (舞や音楽を) …仲忠一人見給へつる効 (かひ) なさになむ、御迎へに参り来つるや」(宇津保・内侍のかみ 417)

○ヌ形が用いられている行為は、客観的な何らかの必要や、誰かの指示に基づいて行われるものである。そのような行為を「公共性がある」とする考えが、定延利之 2008『煩悩の文法 (増補版) 』にある。

定延は、体験の領域にあるものには固有性があり、知識の領域にあるものには共有性があるとする。ツ形による表現が一人称に偏ることからも全体として個人的な体験とかかわる面が大きいことは確かである。これに対して、定延の言う公共的な義務で行われる活動は非意志的な行為だということができる。

§3. 権威付け　4「いざ給へ。宮の御使ひにて参り来つるぞ」(源氏・若紫一 189)

○これは、「宮の御使ひにて」という役割の表明によって来訪に公的な性格があることを明らかにしているものである。朝廷から命令されたり、権力者から指示されたりした出来事は個人の裁量をこえたものである。したがって、そうした場合には意志性が弱められ、ヌ形が用いられることが期待される。ところが、この例は、ツ形が用いられている。

これは、源氏が父の宮様のふりをして姫をさらおうとしているわけだから、それを隠すためにも公的な性格があることをむしろ誇示しなければならないので、ツが用いられたと考えられる。

§4. 公共的義務　5　しめやかなる所求めて、年ごろ籠り侍るを、殿の御事にてまかり出で侍りぬ。(宇津保・国譲上 677)

○これは、父の重病のため、その世話をしなければならないというよんどころない事情があって、山を出て来たというのだから、話し手の意図性は弱く、ヌが用いられているものと思われる。

6 「…かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ急ぎ上りぬる」とて立ち去り給ひぬ。(源氏・明石三 69)

○上京は霊の意志で行われるのではなく、迫られて仕方なく行うことであるので、ヌが用いられている。それは、「急ぎ上りぬる」が、これから必然的に実現すべきこと、テンス的には未来の行為を表すことになるところにも現れている。

§5. 儀礼的約束　7　今はただ迎ふる蓮を待ち侍る程、その夕方まで、水草清き山の末にて勤め侍らむとてなむ罷り入りぬる。(源氏・若菜上六 85)

○これは出家するという個人の意志を体現する行為を表していると考えれば、ヌは意志的行為に用いられないというこれまでの解釈に反するものということになる。しかし、出家するという行為は、様々の宗教的な意味を持った行為である。つよい意志が要求される個人的行為とも見られるが、出家入道には受戒が必要であったり、ここでも「勤め侍らむ」とあるように修行も必要である。その点で、儀礼的な約束であり、個人の意志によるだけではない行為なので、ヌが用いられると考えられる。

このように、一人称のヌ形が未来や必然の意味になっている例は集めた例の半数近くにも及ぶことも、その場限りの出来事を表し、その行為が話し手の意図のなかで完全に管理されてはいないことを示している (これは、後でふれる佐藤暢治 2023 の保安語における非確定形の意味の考察と一致する)。

○ツ形は、その行為が主語である話し手の意図の管理下にある場合であり、主観的事態把握がなされている。ヌ形は、その行為を何か別の力が管理し、個人の裁量に基づいて行なえない場合である。

3．通達動詞のエゴフォリシティー

○言語学研究会編 1983『日本語文法・連語論』では、「通達のむすびつきを表す連語は、相手をあらわすに格、あるいはから格の名詞、仲間をあらわすと格の名詞によってひろげられている。したがって、この種の連語は、義務的ではないとしても、三単語のくみあわせをなしている」(p. 111) ことを忘れてはならないとされる。三人称の構文では話し手は登場しないので、必ずしもツが用いられる理由はないはずであるが、通達動詞の場合三人称でもツ形が用いられる。それは通達動詞のつくる構文が三単語のくみあわせをなしているからであると考えられる。言語活動はその相手への通達を目的とするものであって、相手なしには成り立たない性質の行為である。そして常に話手は通達の相手になりうるということなら、話手は行為の関与者ということになるので、ツが用いられると考えられる。

§6. 誇示　8「いとうれしくも聞きつるかな」と思ほして、（源氏・浮舟十25）
　　9「げにあしう聞こえつかし」などほほゑみ給へるけしきにて、（源氏・夕霧七99）
○これは、落葉宮に対して自分との悪い噂がたっていると言ったことを、夕霧が言わなければよかったと悔やんでいるところである。これも「あしう」によって評価的に修飾されているが、これまでの例とちがって、その行為はマイナスに評価されており、恥ずかしい行為を自らの責任で行ったことを表している。
§7. 意志表明　10　それをこそ承らむとこそ聞こえつれ。（源氏・横笛七63）
○これは目的だが、命令・禁止の態度を表すものもある。このような個人的な心情に基づいて行われる行為には基本的にツが用いられ、ヌは用いられない。
11　闇梨ものせよと言ひやりつる（源氏・夕顔一131）
○移動動詞においては、事態把握の変化は事態そのものの社会的性質の変化によるところが大きいが、通達動詞においては、言語の機能の変化が事態把握の変化に大きな役割をもつように思われる。
○林四郎（1970：29-30）は、文の構造を、いくつかの機能上の段階からなるものと考え、「描叙」「判断」「表出」「伝達」という四つの段階を認めている。これに従うなら、この四段階の判断のところまでは、「感情の動きもなく、伝達の目的もなく、ただ淡々と事実を叙したり、自分の考えをたどったり」したところである。この段階を本発表では、「中立叙述」ということにする。
§8. 判断確定　12　車の入りはべらざりつること言ひはべりつる（枕・六上22）
○一人称のある特定の判断を表すものには、ツが用いられる。その内容が表される引用句が具体的な断定の表現であるものには上のような例があり、ツが用いられる。
§9. 中立叙述　13「…とかくの事、いと尊き老僧のあひ知りて侍るに、言ひ語らひつけ侍りぬる」と聞ゆ。（源氏・夕顔一135）
○「いいつける」は惟光の発言であり、直接に源氏の発言ではないが、源氏の意図を体現しているのであろうから、惟光の裁量の及ばない行為である。同時にこれは夕顔葬送の手はずについてのべた中立的な叙述活動である。したがって、ヌが用いられている。なお、「叙述」の機能には文章上にある特徴が見出せる。13の「とかくの事」もそうであるが、14の「よく」、次の15の「くはしく」のような全体を俯瞰し漏れ落ちることのないよう配慮するさまを表す修飾語が目立つ。
14　犬防のかたより、法師寄り来て、「いとよく申し侍りぬ。…」（枕・一一八上159）
○つぎの２つは、実は源氏の夢浮橋のあいつぐ場面である。15は薫が僧都をたずねて、行方不明の浮舟が僧都の世話している女性ではないかと疑い、僧都がそれに答える場面である。16は、そのあと、僧都が浮舟に薫の訪問のくだりを消息でしらせるところである。打ち明ける内容は似たようなものと考えられるが、前者では「とり申しつ」、後者では「きこえ侍りぬ」というようにツとヌが交替している。それはなぜだろうか。
15　「なにがし、このしるべにて必ず罪え侍りなむ、事のありさまは、くはしくとり申しつ。今は御みづから立ち寄らせ給ひてあるべからむことは、物せさせ給はむに、なにの咎か侍らむ」と申し給へば、（源氏・夢浮橋十208）
16　僧都の御文見れば、「けさ、ここに大将殿ものし給ひて、御有様尋ね問ひ給ふに、初めよりありしやう、くはしく聞こえ侍りぬ。…ことごとには、みづから候ひて申し侍らむ。かつがつこの小君聞こえたまひてむ。」と書いたり。（源氏・夢浮橋十212）
○前者にはツ形を使い、後者にはヌ形を使っている。15の場合は、浮舟の運命に直接にかかわる薫を目の前にして話しているのであるから、それだけでも相当の緊張が要求される。しかも、今後の浮舟との関わりを取り持つことで、浮舟の現世からの離脱を妨げることになるかもしれないと危惧する僧都の主観的立場からすれば、冷静な客観的な言語活動には徹しきれない。ヌは用いにくいところであろう。
　一方、16ではまず第一に相手に直接に向き合わずにすむ消息という形式であり、しかも宛先である浮舟にとっては書いてあることは既知であり、書く方の僧都の側にたいした心理的負担もないだろう。これが冷静に客観的に書くことを可能にし、16でヌが用いられることになる理由ではないかと思われる。
§10. 仲介放棄　17　いとつらき人の御契りなれば、いらへだにし給はず。…「ただいまはなき人と異ならぬ御有様にてなむ。渡らせ給へるよしは聞えさせ侍りぬ」と聞ゆ。（源氏・夕霧七120）
○取り次ぎがうまくいかなかったという説明をしたたけで意図的な言語活動という側面は弱く、ヌが用いられたといえる。
§11. 受発信　18　「あはれに承る御有様を、かの過ぎ給ひにけむ御かはりに、思しないてむや。たぐひになさせ給へ、と、いと聞えまほしきを、かかる折り侍り難くてなむ、思されむ所も憚らず、うち出で侍りぬる」（源氏・若紫一164）
○姫君と仲良くなりたいという一心で、なくなってしまった母君の代わりと思ってもらえないかと、早すぎる結婚の申し出を源氏が口にしたところである。結婚の申し込みは公共的であり、当事者の意図だけで実現することはない重大事であるのに、軽い気持ちでつい求婚まがいのことを口に出してしまったことは自己の本意ではなかったことを表すためにヌが用いられたものであろう。
19　大宮、御返り、「かしこまりて承りぬる。…」（宇津保・国譲下810）
○消息の受け取りの儀礼的な挨拶で、消息文頭に頻出する。これは定型化しており、手紙を受け取ったことについての形式的な挨拶である。

○ツとヌの事態把握の違いのまとめ

	移動動詞	通達動詞
ツ	①誇示　②動機付け　③権威付け	⑥誇示　⑦意志表明　⑧判断確定
ヌ	④公共的義務　⑤儀礼的約束	⑨中立叙述　⑩仲介放棄　⑪受発信

○移動動詞においては、意志性と公共性を両端として、意志性が強く、公共性が弱い場合はツ形が選ばれ、逆に意志性が弱く、公共性が強い場合はヌが選ばれる。一方、通達動詞においては、言語活動の機能が個人的主張であるときはツが、叙述的であるときはヌが用いられる。

４．移動動詞・通達動詞の三人称について

三人称の表現における両動詞の違いの最大の点は、移動動詞では三人称の動作はヌによって表されるが、通達動詞ではツによって表されるということである。本稿のデータでは、移動動詞では、ツは一人称で44例に対して三人称では3例にとどまる。また、通達動詞では、ツは一人称で34例に対して三人称で47例でてくる。移動動詞の場合はいずれも同行者ということで説明できるので、三人称の移動動詞の3例のうち1例については省略し、2例について議論する。

⑴　宮の慕ひ給ひつれば、え聞こえいなびで、ここにおはしつる。（源氏・総角八201）

例⑴は、自分に付いてやってきた匂宮について、「匂宮が後を追ってきて、断りきれないままここまでついて来られた」と薫が大君に言い訳をするところで、「ここ」は、薫の今いる宇治の邸を表しており、話し手である薫は「おはす」という匂宮の移動の同行者である。つまり、この例は、三人称であるが、話し手が証人として同行している稀な例なので、ツ述語が使われているものと考えられる。

⑵　美しき者ども、さまざまにしやうぞき集まりて、二車ぞある。…誦経うちし、あはれげなる法師ばらに、帷子や布など、さまざまに配り散らして、物がたりのついでに、「多くは殿の御催しにてなむ、まうで来つる…」（蜻蛉中152）

主人公が鳴滝に籠っていると、夫の兼家のところから差し向けられた派手に着飾った一行が迎えにやって来たところである。その中の一人に尋ねると、自分も含めて多くの者たちは兼家の命をうけて来たのだという。「おほく」は主語と考えれば三人称の主語で、話し手もその一員であるとすれば、話し手も含んでいるので、話し手は、⑴の同行者と同じあつかいをうけているのではないかと思われる。ここは三人称であるから、ヌが用いられてしかるべきところであるのに、ここでツが用いられているのは、第一義的には話し手が同行者であるとみなされているからだと思われる。

移動動作が行為者だけによって成り立つのに対して、通達活動は伝達相手である受容者も不可欠である。風景は意図して見なければ視覚にとらえられないが、音は鳥の声でも人の声でも、楽器の音でも耳をふさがない限り聞こえてくるのである。その現場にいれば好むと好まざるとにかかわらず受容せざるをえないのである。三人称に用いられるときは動作主体の関与は小さいはずだが、そういう構造上の制約から通達動詞の場合は話し手の関与が常時存在するのである。そのため、以下のような通達動詞の三人称に用いられるツについては移動動詞と違い、常に立会人としての話し手の関与が認められるのである。

⑶　声の聞こえむ所を尋ねて、奏せよ」となむ仰せられつる。（宇津保・楼上下931）

これは、宮中で内侍のかみが弾く琴の音を聞き、帝が「琴の音の聞こえてくる所を探して報告せよ」と命じたと蔵人が述べたところである。「仰せらる」は三人称の帝の通達活動を表している。普通この形は、「仰す」に「らる」のついた敬語動詞であるとされるが、受動的な意味を残していると考えるなら、蔵人が帝から命ぜられたという意味にもとることができ、そうとれば能動の用法では顕在化していない伝達者としての蔵人の存在がうかびあがってくる。つまり、受影性の引き受け手は話し手の蔵人であるという理解が可能になり、話し手がこの行為に関与していると見ることができるので、ツが用いられているのだと考えることができる。ただ、ここまで考えなくとも、これが通達活動を表している以上、発信者だけでは成立せず、発信が向けられている受信者の関与が不可欠であると考えれば、話し手の関与は明らかであるので、ツが用いられていると考えてよいのではないか。

５．存在動詞のエゴフォリシティー

上代語において立会人としての役割をツがもつことを明らかにした論考がある。それは、李長波 2025「上代語の「つ・ぬ」の意味機能について」である。李は、上代歌謡、前期万葉の「つ」「ぬ」の表す事態を、与格の受益者をともなうことなどから、概して、（第一期の）例㉓「我が欲りし野島は見せつ（＝見せていただきました）底深き阿胡根の浦の玉そ拾はぬ（〇〇一二）」と同様に、二・三人称主語＋意志動詞文の例はいずれも構文的、ないしは文脈的に事態の実現が話者との利害関係を生じさせることが表されていたとしている。しかし、その流れは、万葉前期第二期に出現する、人麻呂歌集の、㉗「ひさかたの天の川原にぬえ鳥のうら嘆けましつすべなきまでに（一九九七）」、及び㉘「楽浪の志賀の唐崎幸くあれど大宮人の舟待かねつ（〇〇三〇）」の登場を機に、新たに「見ゆ」から生ずる存在証明としての機能が獲得されたとのべる（李2025：13を適宜要約）。そして、⑰「汝が恋ふる妹の命は飽き足らに袖振る見えつ［袖振所見都］雲隠るまで（二〇〇九）」（年代未詳・人麻呂歌集【第二期】）については、便宜物主語の類とするが、「見ゆ」を述語とする動詞文の場合、「見る人」・「見る対象」・「見ゆ」の三者関係で見ると、

「見る対象」よりも、「見る人」をその意味的な主語と考えれば、この文の構文的な主語は「我が恋ふる君」であるが、動詞文の人称を意味的に取れば、「見る人＝我」を主語とし、「我が恋ふる君」を「対象語」と見るほうが妥当なように思われる。(李 2025：9)

こうした、李の論は、「存在を視覚によって把握する古代的思考」の表れだという佐竹昭広 1964, 1975 に基づいており、「見ゆ」からその他の場合にも広げられ、以後の存在動詞などの一般的な特徴となっているとされる。もととなった佐竹昭広 1975 の議論は、以下のようである。

> おもうに、『万葉集』における「われ」の頻用は、かれらの自己中心性係数の高さを暗示するものであった。ということは、かれらがすべての対象を自己との関係において主体的に把握するところの持ち主だったことを意味する。「見ゆ」とか「思ほゆ」とか、「われ」の対象把握に関する語の使用が、『万葉集』にきわだって多いという事実も、かれらの自己中心性の徴証として理解できることだ。「見ゆ」や「思ほゆ」の用法が『古今集』以後、衰亡の一路を辿ってゆく現象と自己中心性係数の低下現象とは、たぶん密接なかかわりがあるとおもわれる。(中略) かれらは、外部世界に存在するものをすべて「われ」に「見える」ものとして受け止めた。(下略)

「見ゆ」の用法が奈良時代以降は減少し、かわって次のようなうたが現れることに李は注目し、以下のようにのべる。

> 例㉗「ひさかたの天の川原にぬえ鳥のうら嘆けましつすべなきまでに（一九九七)」は、天の河の向う岸まで行って帰って来た第三者の、牽牛に報告する内容」(稲岡一九九一：二三七頁) の解釈に従って、作者が「うら嘆く」織女の姿をこの目で見てきたとすれば、先に見てきた二・三人称主語文「⑰汝が恋ふる妹の命は飽き足らに袖振る見えつ［袖振所見都］雲隠るまで（二〇〇九)」に付く「つ」と共通する。ここに見る「つ」の共通項は、事態実現の仕方に即して言えば、話者の現前での事態の実現であり、事態の認識の仕方に即していえば、その事態が話者にとって親しく経験することであり、話者は、事態の実現を自らの経験として認識するということになる。(李 2025：16)

さらに、李は議論を進めて次のように述べる。

> 事態の実現を話者がどのようにとらえるかという、事態に対する話者の態度から見た場合、例㉗が作者の「身に即した主観的な句」(斎藤茂吉：『柿本人麿評釈』) であることが手がかりになりそうである。つまり話者の対象への強い感情移入が、本来ならば話者と無関係に行われる行為まで、話者にとって共感する事態として把握されたのではないかと考えられる。(中略) とすれば、…話者の主観が強く働いた結果、本来ならば話者に関係のない、他者の行為、状態をも、話者にとって関わりの強い事態、つまり「一人称的事態」として把握したのではないか、と考えられる。(李 2025：23)

特にそれは状態動詞において顕著であったのであり、すでに述べられているように、一連の形容詞のカリ活用「すべなかりつ」、状態動詞「ありつ」においてはツが規則的に現れるという文法的形態として残ったのではないかと考えられている。自動詞とみなされる存在を表わす動詞にツがつくという事実も以上のように自己中心性の残存として説明できるなら、その矛盾は解消することになる。

中古でも実際、「見えつ」や「おぼえつ」のように、視覚活動や認知活動の対象を主語としてその存在を表わす状態動詞について見ると、三人称でツ形が用いられる理由はわかる。「おぼゆ」「見ゆ」などの動詞の、次の①や②のような状態動詞への転化をたどるのは難しくない。

> ①「常陸殿といふ人や、ここに通はしたまふ。心ある朝ぼらけに急ぎ出でつる車副などこそ、ことさらめきて見えつれ」など、なほ思し疑ひてのたまふ。(源氏・東屋九 52)

①の例は車の供揃いの様子が際立っていた（「意味ありげ」）ということで、本来与格にすわる立会人の視覚活動の対象であった車の供揃いの様子が主語の位置にすわっているものである。

> ②御ありさまにいとようおぼえ、琴の音など、ただそれとこそおぼえつれとて泣きたまふも、古めいたまふしるしの涙もろさにや。 (源氏・竹河八 72)

これは状態というより特徴を表すものであるが、これらにツが用いられるのは、アスペクトとしての状態性がツ形を要求するのではなく、状態や特徴の証明には参与者として発話者の立会が必要であるからだと考えられる。

「侍り」「あり」（もとは「生まれる」の意）などにおいては、ニ格の名詞が目撃者になる道筋はたどりにくいが、やはり存在動詞への転化が考えられる。まず「侍り」という動詞から見てみよう。本来「侍り」は「候ふ」などと同様、③のように「御前に伺候」するという意味の立居振舞を表す動詞として一人称で伺候者を主語としてその行為を表すのが本来の用法である。それが結果としての伺候者の存在の意味になっている。「侍り」についても、同様の過程をへて存在の意味になるものと思われる。そして、存在動詞になっても、存在の認定を示すためにツが必要になるのだと思われる。

> ③大将、「正頼も、今日この御社に、『神馬引き奉らせむ』とてなむ侍りつる。…」(宇津保・春日詣 275)〕
>
> ④「ただ今、北の陣より、かねてより隠れ立ちてはべりつる車どもまかり出づる。…けしうはあらぬけはひどもしるくて、車三つばかりはべりつ」と聞こゆるにも、(源氏・花宴二 82)

④の「侍り」においては、主語は伺候者ではなくその乗り物である車になっており、それが存在することを表す意味になっている。そのとき、話し手からその存在が目撃されているということがツによって同時に表されているのではないかと思われる。つまり、話し手は車の存在という状態の成立に立会人として

関与することになる。「あり」による存在表現がツ形をとるのも同様の機構によるものと思われる。やはり存在を表わす意味で用いられる場合は立会人の認定を示すツが要求されるのではないかと考えられる。

６．情意形容詞制約とエゴフォリシティー

以上のような内容になると、日本語関係者の中からは、感情表現の人称制約の問題がかならずといっていいくらい、もちだされる。これに関して、San Roque et al.（2018）も、意図の有無が関与しない言語としてGalo語、Cha`palaa語、Gumbiano語をあげ（pp. 15, 20）をあげ、現代日本語の、一人称の「私は寒い」に対する、三人称の「母は寒そうだ」といった例をエゴフォリシティーの表現としてあげている。このような対立がエゴフォリシティーの対立を持つ他の言語にも存在しているかどうかは、興味あるところであるが、風間 2013 では、アルタイ型言語では、韓国語、モンゴル語には存在するが他の言語には存在しないという。エゴフォリシティーの対立をもつ言語ではどうなのかは詳しくはわからない。

エゴフォリシティーが意図的な行為を絶対的な優越性をもって指示する話者の存在を示すものと定義されるようになった現段階では、感情表現の主体とは重なり合わなくなっているとしても、直写的と傍観的の区別と言われたような段階では両方ともあてはまるように感じられる。しかも、両者とも人称的制約をもつという点でもつながりそうである。そういうところからは、感情表現の問題をエゴフォリシティーの問題から完全に切り離すことは不可能である。

しかしLoughnane(2018)で「オクサピン語でも、「のどが渇いている」という述語が視覚的な証拠性でマークされ、エゴフォリックではない」（p. 357）とされ、また「オクサピン語では主な述語の事象は、それを実行することによって知覚されたのか（participatory）、それとも視覚的なものなのか（visual）、によって使い分けられる」（同 p 392）とされ、エゴフォリックなものと区別されるようである。また、「Cha`palaa 語では、エゴフォリックマーカーは主語の動作が意図的であるかないかに関わらず、すなわち意図性にかかかわらず用いられる」（San Roque et al. 2018：20）というような指摘からも、感情表現の機構とエゴフォリシティーの機構とは別物であることが想像される。また、Bergqvist (2018)は「「疲れている」「濡れている」「眠たい」「腹がすいている」「怒っている」または「困っている」のような肉体的・感情的状態には、エゴフォリックな標識は使えない。それらの大部分は、「感じる/知覚する」のような動詞を用いた、補助動詞構文によって経験者与格の構文にして表される」（pp. 356-357）と述べている。

以上のいくつかの言及から、エゴフォリックな証拠になるのは、関与者の立場からの経験を通じた情報であり、非エゴフォリックな証拠になるのは visual/sensorial な情報であるように思われる。そのような観察的情報がいかに成立するかに関して、「思ひたり」は興味深い用法をもっている。

①例のうるさき御心とは思へどもえさは申さで、「この五六日ここにはべれど、病者のことを思うたまへあつかひはべるほどに、隣のことはえ聞きはべらず」など、はしたなやかに聞こゆれば、「憎しとこそ思ひたれな。…」とのたまへば、（源氏・夕顔一 108）

これは、惟光が源氏の女性にだらしないのに辟易している様子に不満を述べたところで、この「思ひたれな」の主語は「おまえ」であり、二人称である。しかし、「にくしと思ふ」という行為は不随的な内面的な態度であり、そのままでは二・三人称には用いられない。それがここでは用いられているのは、述語がタリ形になることによって、本来は内面的行為であるものが話し方やその素振りなどに外面化されており、それを証拠にして源氏は惟光の心中を推し量っているのである。つまり、二・三人称といってもevidential な用法である。

これは、地の文においても、同様な現象が見られる。特に、条件節において顕著である。

②「いと今めかしき御文の気色にもはべめるかな」と(中納言の君が言うので)、ゆかしげに思ひたれば、「草の文字はえ見知らねばにやあらむ、本末なくも見ゆるかな」とて（女御が）賜へり。

（源氏・常夏五 55）

これは、心情表現の主語が二・三人称のときの文で、女御が中納言の君の言動を観察して、それを証拠に、姫からの手紙を見たいと思っているという中納言の君の気持ちを女御が推察したというところである。その時中納言の君が主語の文から女御が主語の文に転換するのである。つまり、swich-reference が起こっているのである。つまり、「～思ひタリ」は中納言の君を主語とする述語であるが、それは観察者たる女御によって観察された状態を表すのであるから、これ以降におかれる視点は観察者たる女御のがわに移るのである。

swich-reference が起こっている以外にも、②が①と異なる所はもう 1 つある。「思ふ」に支配される心情を表す表現は「ゆかしく」という形容詞が適切であるにもかかわらず、「ゆかしげに」という形容動詞に交替しているところである。これはどういうことかというと、形容詞であれば、中納言の君の直接的な主観的心情の引用表現であったものがそうではなくなって、実質的に「ゆかしげなり」というコピュラ文と同じになっているということである。つまり、ここでは「思ひたり」はマトリックス動詞ではなくなり、形容動詞と融合して「～している」という evidential な動詞となっていると見られるのである。以上から、タリについて、事実に対する観察的な立場からのアクセスの機構がどのように実現しているかを少々ながら明らかにすることができたと思う。

7　エゴフォリシティーに関わる言語学上の言説

○中国語　　家で出火という事態が起こった場合は「火事」、タンカーで出火した場合は「火災」と使い分けたい。…体感的なあるいは主観的な、あるいは私的な身辺領域を「世間」と呼ぶことにする。それに対して、百科事典的な知識に基づく、客観的な、あるいは公的な領域を「世界」と呼ぶことにする。（中川正之・定延利之 2006；2）

○モンゴル系言語の保安（バアオン）語

「確定形」　文の内容を話者の経験ないしは主観的断として表現する

「非確定形」文内容を話者の裁量外の事実として表現する。（言語学大辞典・三省堂）

「確定形（自己性標識）」は「ハキが来た」という例文で「話し手がハキが来ることを知っていて、実際にハキが来た場面を見た、あるいは話し手がハキと一緒に来た同行者であるときなどに用いられる」（佐藤暢治 2023：36）移動動詞ツ形が用いられる例外的な場合の例として検討した 3 つの例がともに話し手が同行者である場合であったという点で一致している。

「社会的 and/or 認識的意味における関与（involvement）」（角道正佳 2021：60）

○Mangghuer 語（民和方言）

Subjectiv 自己性・Objective 非自己性　　エゴフォリシティーの区別はチベット語から移入されたものであるとした（Slater 2003）。

○チベット語のラサ方言　　観察知と定着知（自称モード・他称モード）の違いであると考える。「自称モード」とは自分の経験上よく把握していること、自分の個人的な見解であること、自分の管理下に置いていること、自分の意志で決定したことなどを表に出して述べる語り方を指す。「他称モード」とは、話し手が他者について、単なる事実確認である、あるいは、一般的な判断であるという態度で語るモードである。（星泉 2003：6）

【参考文献】

Bergqvist H., 2018. The role of sentenc type in Ika (Arwako) egophoric marking. In Floyd, S. et al (eds.) 2018, 347-375.

Floyd, Simeon, Elisabeth Norcliffe and Lila San Roque (eds.), 2018. *Egophoricity*, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

Floyd S., 2018, Egophoricityand argument structure in Cha`palaa. In Floyd, S. et al (eds.) 2018, 269 304.

Loughnane R., 2018, The evidential nature of conjunct-disjunct terms: Evidence from Oksapmin and and Newar. In Floyd, S. et al (eds.) 2018, 377-404.

San Roque, Lila, Simeon Floyd, and Elisabeth Norcliffe. 2018. “Egophoricity: An introduction.” In Floyd, S. et al (eds.) 2018, 1-77.

Slater Keith W., 2003. *A Grammar of Mangghuer: A Mongolic language of China's Qinghai-Gansu Sprachbund*. London:Routledge Curzon.

Тодаева Б. Х. 1973. *Монгорский Яазык*. НАУКА, М.

池上嘉彦 2011「日本語と主観性・主体性」、澤田治美編『ひつじ意味論講座５　主観性と主体性』ひつじ書房

井島正博 2011『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房

角道正佳 2021「土族互助方言の自己性ー動詞接尾辞-wa は自己性標識である」『言語の類型的特徴対照研究会論集』第 3 号

風間伸次郎 2013「アルタイ型言語における感情述語」『北方人文研究』6 号

佐竹昭広 1975『万葉・古今・新古今』（日本古典文学全集５『萬葉集四』補論）小学館

定延利之 2016『煩悩の文法』［増補版］凡人社

佐藤暢治 2023「保安語積山方言における事態の捉え方」広島大学モンゴル研究センターMongolian Studies 4

鈴木泰 2009『古代日本語の時間表現の形態論的研究』ひつじ書房

鈴木泰 2012『語形対照　古典日本語の時間表現』笠間書院

鈴木泰 2024.「ツとヌの主観的事態把握と客観的事態把握」語彙・辞書研究会口頭発表（2024.6.24）

鈴木泰 2025（近刊）「上代語の「つ・ぬ」の意味機能について」『類型学研究』7

中川正之・定延利之 2006『言語に現れる「世間」と「世界」』くろしお出版

林四郎 1970『基本文型の研究』明治図書（ひつじ書房 2013 再刊）

星泉 2003『現代チベット語動詞辞典（ラサ方言）』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

三矢重松 1908『高等日本文法』明治書院

山田孝雄 1908『日本文法論』宝文館

李長波 2015「上代語の「見ゆ・～見え」とその活用の展開—活用形と助詞との接続を中心に」『同志社大学日本語日本文化研究』13

李長波 2025（近刊）「上代語の「つ・ぬ」の意味機能について」『類型学研究』7

【発表２】「現代日本語の体験表現とエゴフォリシティー」

定延利之（京都大学）

要旨：本発表では，現代日本語を中心に発表者が提案している「体験」概念を紹介し，「エゴフォリシティー」（の一ヴァージョン）との違いを，具体的な言語表現に即して明らかにする。「エゴフォリシティー」は，心的レベルの概念（情報への特権的アクセス）に基づき，アロフォリシティ（他者性）と対置される。他方，「体験」は表現レベル（表現の共有不可能性）の基準に基づき，「知識」表現と対置され，射程としては「エゴフォリシティー」よりも広い。また，通言語的に展開されている「エゴフォリシティー」研究と，目下のところ日本語中心の「体験」表現研究との相互参照が有益な効果をもたらす可能性についても述べる。

1. はじめに

「エゴフォリシティー」の定義は（そして用語も）研究者ごとに異なり，漠然とした部分を含んでいるが，比較的よく知られている定義では（前掲），命題情報への特権的なアクセスや特権的な知識 (“privileged access” “privileged knowledge”) と，事態への参与 (involvement) の 2 要素が重視されている。ここでは「エゴフォリシティー」を便宜的に，前者つまり命題情報への特権的アクセスを中心とする概念ととらえておく。

以下，発表者が現代日本語（共通語）を中心に提案している「体験」概念（例：Sadanobu 1998, 2010, 定延 2002a, 2002b, 2004, 2008）を紹介した上で（第 2 節），「エゴフォリシティー」と「体験」の違いを具体的な言語表現に即して明らかにする（第 3 節）。さらに，通言語的な「エゴフォリシティー」研究の知見を「体験」表現研究に持ち込む利点（第 4 節），「体験」表現研究で得られた概念を「エゴフォリシティー」研究に活かす可能性（第 5 節）について論じる。

2. 発表者の「体験」とは？

人間や動物が日々積み重ねている「経験」と異なり，発表者が言う「体験」とは言語表現上あるいは言語行動上の概念である。「体験」は情報の共有可能性という基準により，「知識」と連続的ながら区別される。言語表現上の概念「体験」について定延 (2004) の導入を (1) に掲げる。

(1)　本稿で言う知識と体験は，いずれも，言語によって表現される情報（以下「言語情報」）の下位類である。言語情報は共有可能性の程度に応じて，知識と体験に連続的ながら二分できる。典型的な知識とは，誰にでも共有され得る，公共の言語情報である。逆に，典型的な体験とは，自己（ふつうは話し手自身）が専有するだけで他者が共有できない，共有可能性の極端に低い個人的な言語情報である (図 1)。

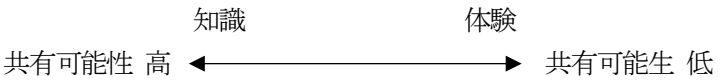


図 1：知識と体験

説明のために，たとえば次の文(2)をとりあげてみよう。

(2)　地球は赤かった。

「現在は青いが，太古の昔は地球は赤かった」と言う場合，「地球は赤かった」は誰にでも共有され得る情報を表現している。つまり，誰でも（それなりのデータを集めれば）「たしかに昔，地球は赤かった」などと賛同したり，「いや，地球は昔から青かった」などと反駁したりでき，「地球が赤かったかどうか」を問題にしやすい。したがって情報の共有可能性は高い。本稿では，このような言語情報を純粋の知識と呼ぶ。

他方，宇宙飛行士が地球に帰還し，記者会見で「帰還する時，宇宙から見たら，なぜか地球は赤かった」と発言する場合は，「地球は赤かった」は純粋な知識ではなく，この宇宙飛行士のかなり個人的な体験をもとにした知識を表現している 。この場合，情報の共有可能性は限定されている。たしかに，宇宙飛行士本人は「いや，あれは自分の記憶違いで，やっぱり地球は青かった」と自分の発言を撤回できる。また，同行した別の宇宙飛行士（つまり共同体験者）も「そうだ。あの時たしかに，地球はなぜか赤かった」「何を寝ぼけているのだ。あの時，地球は青かったではないか」など，「地球は赤かった」発言を肯定したり批判したりできる。だが，その時点に宇宙から地球を見ていない者は（「地球が赤かったはずかどうか」は問題にしやすいが）「地球が赤かったかどうか」は問題にしにくい。

いまの宇宙飛行士の例には，体験者（宇宙飛行士）と情報を共有可能な他者（同行の宇宙飛行士）が，まだ十分考えられる。だが，他者がもっと情報を共有しにくい例もある。たとえば，宇宙ステーションで催眠術師に「いまから私が３つ数えると，皆さんは色彩感覚が一時的におかしくなります。窓の外の地球や月は，ふだんとはまったく違う色に見えるでしょう。どういう色になるかは人それぞれです。はい，1，2，3」と術をかけられた者の 1 人が，後になってその時の体験を振り返り，「気が付くと窓の外の月は緑だった。地球は赤かった」のように述懐するという場合である。この例では，「地球や月がどういう色に見えるかは，人それぞれである」という前提の上で，外界の事物のあり方（地球や月の本来の色）にしばられない，個人的な形で体験（地球や月の見え方）に由来した知識が述懐されている。これは知識とはいえ，かなり体験の性質を色濃く残している。そのため，「地球が赤かったかどうか」を問題にすることは，本人にはたやすいが（「あれは自分の記憶違いで，地球も緑だったのではないか」など），他者にはなかなか難しい。もちろんこの場合でも「いや，そんなはずはない。私には確信がある。あなたの場合は，地球は黄色かった」と決めつける場合のように，共有可能な他者は絶対に想定不可能というわけではないので，この場合の情報が典型的な体験というわけではない。但し，上の 2 つの例よりは，知識の色彩が薄まり，体験の色彩が濃くなっている。

以上で取り上げた 3 つの事例（太古の地球・宇宙飛行士・催眠術）からわかるように，情報の共有可能性は程度問題であって，有る／無いという 2 項的把握よりも，高い～低いという連続的把握になじむ。この第 2.1 節の冒頭で，「共有可能性の程度に応じて，知識と体験に連続的ながら二分」と述べたのは，このような理由に基づく。だが，以下では記述のかんたんさを優先して，「知識」「体験」のように二項的な述べ方をする箇所もある。

［定延 2004: 5-7］

以下では煩雑さを避け，「エゴフォリシティー」「体験」のカギ括弧を外して表示する。

3. エゴフォリシティーと体験の違い

エゴフォリシティーと体験の主な違い 2 点を，1 点ずつ取り上げる。

3.1. 特権的なのは心のレベルか表現のレベルか？

エゴフォリシティーという概念は，命題情報へのアクセスという心的レベルでの特権性に基づいている。言語表現は，命題の主題が私的（例：話し手の体調）であるほどエゴフォリックであり，公的（例：公共の環境やその一部）であるほどエゴフォリックでない。これに対して，体験とは上掲 (1) のとおり，特権性を表現に求めるので，主題の公私は少なくとも直接的には関わらない。主題が私的でも（例(2)），公的でも（例(3)～(6)），体験表現と知識表現がある。（括弧内に体験表現・知識表現の別とキーワードを付す。）

(2) a.　まだ膝が痛む。　　（体験　「人称制限」）

b. 私はまだ膝が痛んでいる。　（知識）
(3) a. 停電だ。　（体験 「ゼロ項述語」 寺村 1982: 178）
b. このあたりが停電だ。　（知識）
(4) a. ランナー走る！　（体験 「眼前描写」）
b. ランナーは走っている。　（知識）
(5) a. 果物が苦手な人もたまにいます。（体験 「探索」）
b. 果物が苦手な人も一部います。（知識）
(6) a. このボタンを押したら，きもちいいよ。　（体験 「体感」）
b. このボタンを押したら，きもちがよくなるよ。　（知識）

主題の公私に直接関わらないという点で，体験はエゴフォリシティーよりも射程が広い。

なお，たとえ他者の未来の不確実な事態でも，体験表現は自然であり得る（(7)）。

(7) a. 私はこれから伝説の神剣を求めてあの無人の孤島を探検するが，もし仮にあの島で本当に神剣があったとしても，それは国の所有になるということは承知している。
b. 田中さんはこれから伝説の神剣を求めてあの無人の孤島を探検するが，もし仮にあの島で本当に神剣があったとしても，それは国の所有になるということは承知しているそうだ。

例 (7a,b) の下線部分では，モノ（神剣）の存在場所の表現「あの島」の直後に，格助詞「に」ではなく「で」が現れている。これは該当部分が体験表現であることを示している。デキゴトの存在表現用の「で」が現れているのは，(7) において，［神剣が（目の前に）ある］という状態が単なる状態ではなく［神剣が（目の前に）ある状態を経験する］というデキゴトとして表現されており，つまり (7) の下線部が体験表現であるからである。日本語母語話者 100 名を対象とした，web ページを介した自然さ調査では，(7a) と同様，(7b) も概して自然と判断された。（以下の自然さ判断も基本的に同様の調査による。）

3.2. 対立概念は何か

エゴフォリシティーと体験は対立概念に関しても異なっている。エゴフォリシティーと対立するのはアロフォリシティ（allophoricity, 他者性）であり，体験と対立するのは知識である。２つの対立軸，［エゴフォリック⟷アロフォリック］と［体験⟷知識］は一致しない。アロフォリック（他者的）であることと，知識として表現されることは，ずれる。アロフォリックという概念は話し手（自己）を含まないが，知識表現（全ての話し手が共有可能な表現）は話し手を特別扱いしないからである。両者の違いは日本語の行動表現の自然さの違いとして顕在化する（(8)〜(13)）。

(8) 私／その人　はじっとうなだれている。
(9) 私／その人　は，今もさめざめ泣いている。
(10) 私／その人　は，王座につかつかと歩み寄った。
(11) 私／その人　はそう言うと，流行歌を歌い出した。
(12) 私／その人　は急に立ち上がった。
(13) 私／その人　は知らせを聞いて激怒している。

これらは全て，「私」の場合は，「その人」の場合よりも有意に自然さが低い。これらの述部は他者の挙動を眺めて言うアロフォリックな表現だが，純粋な知識表現ではない。

4. エゴフォリシティー研究の知見と体験表現

以上のようにエゴフォリシティーと体験は別々の概念だが，現象記述において重なることもある。たとえば過去時制が好まれるというエゴフォリシティーの傾向 (San Roque et al. 2018: 16) は，体験表現（例(14)）についての記述（例：定延 2008）と合致する。

(14) a.？彼の下宿に行ったら天井が低い。　b. 彼の下宿に行ったら天井が低かった。

ここでは「二次的なエゴフォック・マーキング」（特に Bergqvist and Knuchel 2017, San Roque et al. 2018）を取り上げる。二次的なエゴフォリック・マーキングとは，（行為者とは別に）被動者がエゴフォリックな存在ととらえられ，その表現がマーキングの対象となることを指す。これを体験表

現と読み替えれば，現代日本語の「来る」と「くれる」，そして受動の「（ら）れる」の共通性が，着点視座の体験表現として，一部の他言語とも並行的にとらえられる。

まず，「来る」について。「来る」や「（〜が〜に）訪れる」がモノの到着を着点視座で表現することは既に知られている（(15)(16)）。だが，表現の自然さを理解するには，（起点視座や中立点視座と同レベルの）単なる着点視座を越え，（「視」つまり視覚的な）体験性を持ち出す必要がある（(17)(18)）。発話現場への移動でも，「眺め」が違えば「来る」は不自然である（(17b)）。また，発話現場への移動でなくても，「眺め」が類似していれば「来る」は自然になり得る（(18b)）。

(15) a. その村に幸運の天使が訪れた。　　b.？無人島に私が訪れた。　［定延 2006］

(16) a.？私は自分が全く知らないところへ来る。　b. 私は自分が全く知らないところへ来た。

(17)［ある倉庫に容疑者が侵入した。侵入する後ろ姿をたまたま目撃した近隣住民が，その倉庫の中で，捜査官に語る］　a. あの人は，たしかに，ここに入って行きました。
b.？あの人は，たしかに，ここに入って来ました。

(18)［温泉に浸っているうち，昔を思い出して］
a. そういえば，あの国に住んでいた頃にも，私はこんな温泉に行ったことがある。
b. そういえば，あの国に住んでいた頃にも，私はこんな温泉に来たことがある。

次に，「くれる」について。「くれる」は，他者から自己や自己の近親者への何らかの授与を，自己側の受取体験として表す。そして，エゴフォリシティー研究には「くれる」や「来る」との類似を思わせる記述が見られる。Bunan 語には，着点が自己（平叙文で 1 人称，疑問文で 2 人称）であれば授与表現であれ移動表現であれエゴフォリック・マーカー *-ku* が現れる。チベット語にも，移動の着点が自己ならエゴフォリック・マーカー *-byung* が現れ，その語源は「来る」とされる。自己から近親者にも拡張されることは，Duna 語や Dzala 語，Galo 語，Cha'palaa 語にも見られる（例：San Roque et al. 2018: 23, 29, 32-33, 43）。

さらに，「（ら）れる」について。「（ら）れる」の受動文は，相当数の母語話者にとっては，力の受取という体験表現であり，能動文とは真偽値を異にすることさえある（定延 2022）((19))。

(19)［普段は温厚な態度を崩さないあの師匠も，一郎の奔放な作風は我慢できず，師匠だけの会合ではこれまでに２度も一郎をこき下ろしていた。今日，ついに師匠は一郎を呼びつけ，じきじきに面罵した。］　a. あの師匠は今日初めて一郎をけなした。
b. 一郎は今日初めてあの師匠にけなされた。

例(19)の状況では，能動文 (a) より受動文 (b) の「正しさ」が高い。「師匠は一郎をけなすのは 3 回目。一郎は師匠にけなされるのは初めて」と感じる話者が相当数存在する。このことが示しているのは，能動文(a) よりも受動文 (b) が一郎の体験表現ととらえられやすいということである。

もっとも，日本語の実態がエゴフォリシティー研究の枠組に完全に収まるわけでもない。そこには日本語の事情がある。たとえば，エゴフォリシティーによる動詞交替 (egophoric predicate alternation) の研究文脈では，「〜と思う」は感覚・感情・思考のエゴフォリックな表現と位置付けられ，アロフォリックな「〜と思っている」と対置されるだろうが，看過できないのは，「〜と思う」は自己の感覚・感情・思考を常に表せるわけではないという事実である。問題の「思う」は「改めて自己の内部を探ると（〜と）感じる」という活動 (activity) の意味を持ち，「改めて自己の内部を探る」とイメージしにくい場合には「〜と思う」は不自然である（(20a)(21a)）。

(20) 自己の内部状態が既に明確に意識されており改めての探索が不自然な場合
a.［水が入ったコップに手を伸ばした人に］？水を飲もうと思いますか？
b.［(a)の人に水分過剰摂取の害を説いた後］　水を飲もうと思いますか？
c.［水が入ったコップに手を伸ばして他者に改めて説明］　水を飲もうと思います。

(21) 当然すぎて，改めて自己の内部状態を探索するまでもない場合
a.［白昼に屋外で質問］？いまは昼間だと思いますか？
b.［白昼に屋外で質問］　いまはマダガスカルは昼間だと思いますか？

5. 体験表現研究の知見とエゴフォリシティー

体験表現研究の知見を，（体験表現ではあるが）エゴフォリックな表現研究に活かせることもある。例として「探索課題」を挙げておく。「探索」「探索意識」と併せて以下に紹介する。

体験表現の自然さ～不自然さについて，発表者が明らかにしてきたのは，「他者に語るに足る(reportable, Labov 2001) ものであるほど，その体験表現は自然になる」ということである。ここで言う「他者に語るに足る」(reportability)とは，認知者と環境のインタラクションが強烈であることを指しており，この強烈なインタラクションには「探索」(exploration) と「体感」(somatics) という 2 つの類型がある（(5)(6)）。前者の紹介を定延 (2004) から挙げる。

(22) 本稿で言う「探索」とは，「未知の環境（たとえば見知らぬ街）がどんな様子なのか認知者が調べる。すると，環境からそれなりの情報が認知者に返ってくる」という，認知者と環境とのインタラクションである。探索が及ぶ領域（見知らぬ街）を探索領域と呼ぶ。探索には「探索領域はどんな様子なのか？」という問題意識が必要である。この問題意識を探索意識と呼ぶ。環境にのぞむ認知者の意気込みと言ってもよい。見知らぬ街を見ていても，ただぼんやりと眺めており，探索意識がないのであれば，探索をおこなっているとは言えない。

探索というインタラクションは，認知者から環境への働きかけの部分「未知の環境（見知らぬ街）がどんな様子なのか認知者が調べる」と，環境から認知者への働きかけの部分「環境からそれなりの情報が認知者に返ってくる」とから成り立っている。探索意識が必須であることからわかるように，探索は，認知者から環境への働きかけの部分に焦点があるインタラクションである。

或る部屋を探索領域とする探索の場合，ただ「その部屋はどんな様子なのか？」という探索意識だけで探索する場合もあるが，たとえば「なくした手帳はどこか？」のような，別の課題を解決するために探索する場合もある。このような，探索によって解決しようとする課題を探索課題と呼ぶ。探索課題と探索意識は似ているが別物である。探索課題は探索に必須ではないが，探索意識は探索に必須で，探索意識がなければ探索にはならないからである。両者は，探索課題が課せられるほど探索意識が活性化するという関係にある。

［定延 2004: 10-11］

環境が広大であるなどで，謎に満ちているほど，認知者の探索意識は活性化し，探索というインタラクションは認知者の中で強烈なものになる。結果として認知者はその「経験」を知識としてではなく「体験」として表現しやすい（(23)）。

(23) a. ［自分のクラスは，生徒 10 人のうち 2 人は留学生だという意味で，担任が］
？私のクラスには，留学生もたまにいます。

b. ［多くのアメリカ人は愛称で呼ばれるのを好むが，愛称で呼ばれたがらない人間も少数（2 割）いる，という意味で，アメリカで生活する話し手が］
アメリカ社会には，愛称で呼ばれたがらない人間もたまにいます。

1 クラスという，矮小で熟知している環境におけるモノ（留学生）の分布は，わざわざ改めて，このクラスを探索領域とする探索（を中核とする自身の体験）という形で表現しにくい。そのため状態［留学生が（目の前に）いる］は状態でしかなく，頻度（デキゴトの時間的分布）を表す「たまに」と合いにくく，文(a)の自然さは低い。これに対して，アメリカ社会という広大で謎に満ちた環境について述べる(b)は，愛称で呼ばれるのを嫌う人間がそこに少数存在するという分布状況を「たまには」「（目の前に）いる」，つまり出くわすと述べる体験表現として自然である。

ちなみに探索課題は活動動詞 (activity verb) を変化動詞 (achievement verb) らしくする効果も持っている（定延 2003，羅・定延 2021）。探索課題が設定され，話し手の注意が当該のモノの状態にことさらに向けられる文脈では，当該事態がデフォルト状態からではなく前状態からの逸脱と捉えられて変化動詞らしくなり，事態の継続中でも「～た」と言いやすくなる（(24)）。

(24) a.［飲み屋に入ると，知人のA氏がビールのジョッキを傾け，喉を鳴らしている］
？あ，飲んだ。

b.［A氏は禁酒の誓いを立て，「私の飲酒の現場を見かけた者には誰でも 1 万円払う」と宣言している。ところが，ある日，飲み屋に入ると～（以下(a)と同じ）］
あ，飲んだ。

ここでの探索課題は［A氏は飲んではいまいか］というもので，この探索課題のもと，話し手はA氏の挙動に対して探索意識を活性化させて注意する。その結果，現在目撃されているA氏の飲酒は，「先ほど見た時は飲んでいなかった状態だったのが，今は飲んでいる状態になっている」という形で，先ほどの状態からの逸脱として捉えられる。ここで重要なのは，「話し手がA氏の挙動に注意していたら云々」とはあくまで表現上の「見立て」であって，実際に話し手がA氏の挙動に注意している必要はないということである。

祈願発話の可能形が，可能形タの体験表現と同様，自己や近親者，感情移入の対象者のみという制限は（(25)(26)），祈願発話の中に，常日頃気に掛けているという見立ての探索課題（例［(自分は）来年も元気でいられるか？］）の実現を祈願する下位類があることを示してはいまいか。

(25) 来年も元気で　?います/ いられます　ように。

(26) a.［後援者が］　今度の選挙は，あの候補が　　勝ちます／　勝てます　ように。
b.［賭博師が］　今度の選挙は，あの候補が　　勝ちます／?勝てます　ように。

言及文献

Bergqvist, Henrik, and Dominique Knuchel. 2017. “Complexity in egophoric marking: From agents to attitude holders,” *Open Linguistics* 3, pp. 359-377.

Labov, William. 2001. “Uncovering the event structure of narrative.” In Deborah Tannen and James E. Alatis (eds.), *Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics 2001*, pp. 63-83, Washington, DC: Georgetown University Press.

羅　米良 (Luo Miliang)・定延利之 2021 「逸脱としての動作と変化」益岡隆志（監修），定延利之・高山善行・井上優（編）『［研究プロジェクト］時間と言語―文法研究の新たな可能性を求めて―』pp. 57-76, 東京：ひつじ書房

Sadanobu, Toshiyuki. 1998. “From time to space?: on construing a universe.” *Studia Universitatis Babes-Bolyai, Philologia* 43(4), pp. 47-68.

定延利之 2002a 「時間から空間へ？―<空間的分布を表す時間語彙>をめぐって―」生越直樹（編）『シリーズ言語科学 4 対照言語学』pp. 183-215, 東京：東京大学出版会

定延利之 2002b 「「インタラクションの文法」に向けて―現代日本語の疑似エビデンシャル―」『京都大学言語学研究』21, pp. 147-185.

定延利之 2003 「基準設定からみた動作動詞と変化動詞」日本認知科学会第 20 回大会口頭発表（2003 年 6 月 6 日，電気通信大学）

定延利之 2004 「ムードの「た」の過去性」『国際文化学研究』21, pp. 1-68.

定延利之 2006 「動態表現における体験と知識」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎（編）『日本語文法の新地平 1 形態・叙述内容編』pp. 51-67, 東京：くろしお出版

定延利之 2008 『煩悩の文法―体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話―』東京：筑摩書房［増補版, 東京：凡人社, 2016］

Sadanobu, Toshiyuki. 2010. “Event model without time shift,” *Studia Universitatis Babeş-Bolyai Philologia*, 55(3), pp. 19-33.

定延利之 2022 「受動文の視座」庵功雄（編）『日本語受動文の新しい捉え方』pp. 115-129, 東京：くろしお出版

San Roque, Lila, Simeon Floyd, and Elisabeth Norcliffe. 2018. “Egophoricity: An introduction.” In Floyd, Simeon, Elisabeth Norcliffe and Lila San Roque (eds.), *Egophoricity*, Amsterdam: Philadelphia: John Benjamins, pp. 1-77.

寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味 I』東京：くろしお出版

ことばの技巧を外から拓く
—会話・物語・マンガにおける言語使用—

甲田直美（東北大学），太田有紀（作新学院大学）
鯨井綾希（就実大学），出原健一（滋賀大学）

Naomi KODA, Yuki OTA, Ayaki KUJIRAI, Ken-ichi IDEHARA

1　本ワークショップの趣旨

言語の研究は言語学、日本語学等のことばを研究する分野で扱われてきた。一方で小説やマンガ、物語における技巧は、それぞれの作品研究において扱われることが多かった。本ワークショップでは、日常の言語使用から創作作品までにおけることばの技巧を取り上げ、言語使用におけることばの創意工夫を捉える。多様な媒体の研究を通してことばの技巧を探ることにより、創作作品や話者の技巧に潜むおもしろさの魅力を探る。「ことばの技巧を外から拓く」とは、これまで各ジャンルで検討されてきた技巧を、ジャンル横断的にワークショップ内で検討することにより、外の視点を得ることを試みたい。日常会話の技巧から話芸を、創作作品の技巧から日常言語での聞き手と視点の採り方、時間的経過性について論点を提示する。

2　ワークショップの背景と問題意識

日常の言語使用と創作作品では、ことばの創意工夫への意識自体が異なると考えられるかもしれない。たしかに創作作品においては作者は熟考して言葉を編み出している可能性が高い。しかしこの一方で、創作作品におけることばの観察から、言語使用一般への示唆を得られることも多い。逆に日常言語の観察から、創作作品への理解が深まることもあり得る。

例えば、小説における時間経験では、日本語の小説では過去形と非過去形の両方が混在する場合がある。現実には時間は一方向的であり、行き来することはないので、何らかの効果がありうると考えられる。そうすると前景化、背景化（Hopper and Thompson1980 等、甲田 2024 に解説）など、何らかの原理が働く言葉の綾に立ち止まる。ヤコブソン（Jakobson1973）によれば、日常言語と詩的言語との対比によって、いまだ知られざる言語の本質的特性が解明されうる、という。創作の言語において語りや登場人物の視点は多層化し、複雑なものとなりうる。しかし、日常言語と創作の言語は無関係ではない。ある技法を効果的であると読み手が受け取るとき、その基盤には日常の言語使用や経験があると考えられる。

このように言語を見たとき、日常のことばから創作の意匠が、創作のことばから日常の

ことばが明らかになりうるであろう。さらには、新たな作品ジャンルが生まれたとき、新たな技法が認識され、それを通して日常の言語への洞察が深まるであろう。

3　ワークショップの構成

第 1 発表(太田有紀)は会話におけるターンテーキングの状況やあいづちの使用をみる。話者交替におけるあいづちには、他者の発話を取り入れ、あるいは距離を保つという受け手の態度が現れている。地域を対比させることで、タイミング等の特定地域だけでは気づかなかった特徴や「語る」/「しゃべる」という概念を捉えていることは注目される。

第 2 発表(鯨井綾希)は計量的手法により物語と説明文を対比させ、物語のことばの解釈を図る。ことばは物語を理解する明示的指標であるが、解釈学的循環(Spitzer1948)から切り出し、登場人物の経験の時間的経過性を可視化する。時系列を含んで動的な変化を可視化している点が注目される。

第 3 発表(出原健一)ではマンガやライトノベルにおける作中人物、「語り手」、読者という問題を扱う。会話的語りが多くを占めることなど、媒体の特性と視点概念を用いることによって、知覚する作中人物と「語り手」概念の見直しを図る。視点概念を採用する際に発表者が描き方の順番(例：地の文→身体離脱ショット→主観ショット、3．4 節)に言及していること、自由間接話法に言及していることは注目される。

近年のマンガやライトノベルで試みられる読者への語りかけ(第 3 発表)や、日常の会話におけるあいづちの手法(第 1 発表)、そもそも物語言語の性質を動的に時間性として把握することとテキストマイニングの可能性(第 2 発表)、これらの発表をとおして、各ジャンルで検討されてきた技巧をより深く理解したいと考える。

参考文献

甲田直美(2024)『物語の言語学―語りに潜むことばの不思議』ひつじ書房

Hopper, Paul J. & Sandra Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language*, 56: pp.251-99.

Jakobson, Roman (1973) *Essais de Linguistique Générale*. Paris: Les Editions de Minuit. (田村すゞ子(他・訳) 『一般言語学』みすず書房 1973).

Spitzer, Leo(1948) *Linguistics and Literary History, Essays in Stylistics*. NJ: Princeton University Press.

会話の地域的特徴

太田　有紀

１．はじめに

東京方言と関西方言の談話研究はこれまでの方言学においてもなされているが、あいづちの出現頻度や形式、談話標識に基づく談話展開に関する研究などが多い。小林他（2017）では、方言学における会話研究は「談話の組み立て方」「談話標識等の出現傾向に基づく研究」「話者の発話態度を探る研究」の大きく３つにわけられ、会話研究がまだ十分になされていないとの指摘がある。発表者は、これまで方言学ではあまり用いられることのなかった会話分析学の視点から会話の地域的特徴を明らかにすることを試みてきた。本発表では大阪と東京の雑談を用いて、ターンテーキングの状況やあいづちの使用、先取り発話の出現傾向といった分析視座から会話の地域的性について論じるとともに、こうした現象が会話の性質（「語る」のか「しゃべる」のか）や巧拙に影響を与えている可能性について考えたい。

２．会話分析と方言の談話研究

会話分析は、相互行為の解明のために社会学者の H.Sacks、E.Schegloff、G.Jefferson らによって提唱された研究方法である。「一見無秩序に見える相互行為としての日常の発話行為についても「秩序装置」が働いているという前提のもとに、相互行為としての会話において当然期待され常識として実践されているやり取りの方法の実態を探ろうとする（林 2008）」ものが会話分析であり、「発話を社会的秩序が実践される中で起こる社会的行為と捉え、その行為（の意味）を理由づける体系的秩序（構成手順）とはどのようなものであるかを解明する（林 2008）」ことが研究の目的となる。会話分析は日常の自然な会話データを録音して、発話連鎖の中で会話を分析することから、現在は話し言葉研究の主流になりつつある。また、会話分析は日本語教育や対照言語の研究等で多く用いられ、分析・結果を日本語会話（あるいは日本語母語話者）の特徴として提示しているものも多い。しかし、日本語会話と言っても、その中にはバラエティがあり一様でないことは言うまでもない。したがって、今後はそうしたバラエティに目を向けつつ、そのバラエティに共通する特徴を見つけたうえで、日本語の特徴を描き出す必要があるように思われる。

さて、日本語の中のバラエティ研究と言えば方言学の分野であることは自明のことだが、談話展開の地域的な違いについての研究として久木田 1990 や琴 2005 など挙げられよう。いずれもの論文も説明場面を取り上げ、そこに現れる談話標識の使用を分析し展開の異なりを論じている。さらに、あいづち研究なども盛んに行われているが、言語形式の形と種類などが主である。こうした目につきやすい語形や語を中心に据えた研究も重要だが、会話には様々な現象が存在し、場面もまた多様である。会話分析からの視座は、そうした様々な要素（言語使用のメカニズムやストラテジー）に目を向けるためのきっかけとなり、方言学における談話研究においても有用であると考えられる。

３．研究事例（分析と結果）

本節では、会話分析の分析視座について実例を挙げながら説明するとともに、発表者のこれまでの研究で得られた会話の地域的特徴について簡単に紹介したい。

3.1 ターンテーキング（話者交替）・あいづち

例 1 は大阪の高年層男性の会話、例 2 は東京の高年層の会話例である。2 つの例ではターンテーキングが同程度現れているが、会話の流れは同じように見えるだろうか。また、あいづちの使用傾向は同じように見えるだろうか。

【例 1】電化製品の買い替え（大阪）

話者	発話
01M	へ：：：（5.0）ん：：（1.2）やうち＜せんたっきも＞潰れてん（0.7）
02U	°お：°（0.9）どこの買ったん（1.2）
03M	東芝かな（2.0）ややあの（0.3）も大変やねん＜せんたっき↑と（0.4）エアコンと（0.5）あの：：ウォシュレット＞（1.3）こんだけいっぺんに買い替えた（0.6）
04U	.hゆうてくれたらよかったのに：[：]
05M	[や]前もゆうたけどもうヤマダデンキやってんずっと（0.3）で閉店セールやっとってん
06U	°ん：：°（3.2）けど：あの*****の（0.5）先輩はすっごいほんま安いで（0.5）
07M	へ：：（2.8）
(06U)	ま閉店セール（. ）に勝てるかどうかわからんけ[ど：]

【例２】子供のころ（東京）

話者	発話
01T	＞だから：：＜ま - また元に戻っちゃうけども（0.7）我々のガキの頃はさ：（1.0）メンコだとかも：[あっ]たでしょ？＝
02S	[ん：]
03S	＝よくやった.（0.4）
04T	＞それで：＜それで（0.4）新富の方に.h出張に行って：＝
05S	＝°うん[うん]°
(04T)	[や]ーやったりとかさ：
06S	うちのとこもあれは.h（教会）＞あったでしょ＜？
07T	うん
08S	あそこの前に路地があってあっち[にず：：っと]あそこでさ：.hミカン箱＝
09T	[はいはいはい]
(08S)	＝持って来てさ：（0.5）[たたんで]（…）をね？あたたんでそれをで＝
10T	[ベーゴマ]
(08S)	＝こ - こう作っ[てさ：]

太田（印刷中）ではターンテーキングやあいづち、さらに隣接ペアいった点から大阪と東京の会話の特徴について考察した。その結果、大阪では東京よりもターンテーキングが多く出現する傾向が、東京の会話ではあいづちが多く出現する傾向がある可能性が示された。あいづちは、いつでも打てるというわけではなく、打つタイミングがあることは先行研究でも

指摘されており、あいづちが多くなればなるほど話し手の発話が多くなり「語り（聞き手と話し手が分れ、一人の話し手が主導権を握って会話をすすめる状況)」に近い性質を持つことが予測される。そして、あいづちの出現が少ないほど会話参加者が活発にターンテーキングを行うような「しゃべり（2 人でターンテーキングを頻繁に行いながら会話を作り上げる状況)」に近い性質を持つ可能性が考えられる。また、上昇音を伴った発話の使用とその返答（隣接ペア）を観察してみたところ、大阪の会話では質問や聞き返しといった聞き手からの働きかけの発話が多いが、東京の会話では話し手が聞き手に対し行う確認・同意要求が多用されていた。この確認・同意要求に対する反応も 2 地域での違いが観察されている。

3.2 先取り発話

会話では、話そうと思っていたことを相手（聞き手）が察して話し出すことがある。そうした発話は「先取り発話」(例 3 の 08M の下線部）などと呼ばれるが、この先取り発話が円滑なコミュニケーションに影響を与えるものであると発表者は考えている。

なぜなら、実質的な内容を持つ発話を会話の流れを阻害しないように取り入れる必要があるし、発話のタイミングや発話内容の正確性が一般的なあいづちよりも問われるからである。もし、発話のタイミングを間違えてしまったら、話し手の発話を妨害してしまうかもしれない。あるいは、先取り発話内容が間違えていた場合、それを修正するために話が逸れてしまうことも考えられる。また、先取り発話は、聞き手が話を聞いていること、話の内容を理解していること、共感を示すことなど聞き手の態度を話し手に表明するものでもあり、会話の円滑な進行に果たす役割は少なくない。

太田 (2024) では、若年層女性の会話データを対象にこの先取り発話の使用について調査したものであるが、分析・考察の結果、先取り発話が会話の円滑な進行に役立っている大阪と、先取り発話の出現は多いものの、大阪ほど会話の進行に役立っていない東京の状況が示されている。

【例 3】炭酸と子供の話し方

注	話者	発話
	01C	＝辛い辛[い辛い]んだ：[って]
	02A	[あ：：] [なんで]そんな言い方なん[おっさんやんhh]
	03C	[わからへんねん]ちゃうねんキイチそんな言い方やねん(0.5)これ辛いんだ[：とか]
	04A	[ん：：](1)ちょっと標準語？
	05C	うん(2.5)それがな：逆に：
	06A	うん
	07C	なんか：なんとかやねんみたいなことゆい - ゆい出すねんけど[最]近(0.8).hなんかhh[hh]
→	08A	[うん] <u>[合っ]てない</u>＝
	09C	＝うんhh[hhhh.hh]
	10A	[hhhhhh]似合ってない＝

4．おわりに

本発表では、実例を挙げながら会話の現象の出現状況から考えられる地域性について述

べてきた。これまでの会話分析による研究の多くは、日本語の地域性を考慮していないものが多いように思われる。しかしながら、日本語の中に存在するバリエーションを抜きにして日本語会話の特徴を示すことは難しいのではないだろうか。

会話分析学的アプローチで会話の地域性を明らかにすることはこれまであまり試みられてきていないが、こうした新たな視点からの研究を進めることは方言の談話研究のみならず、日本語の談話研究の活性化にも繋がっていくに違いない。話題との現象の関連性や年代、性別、データの本数など自身の進めている研究においては今後考慮すべき点は多いが、新たな視座を用いて研究を進めることで、これまで以上に地域性を含めた日本語の会話の特徴を具体的に描きだすことが可能になるのではないかと思われる。

【参考文献】

太田有紀（2024）「「先取り発話」の使用と地域差―大阪と東京の若年層女性の雑談の比較から－」『日本語変異論の現在』.ひつじ書房.

太田有紀（印刷中）「会話の進め方の地域性についての考察―大阪と東京の高年層男性の雑談を例に―」『語用論的方言学の始動』.ひつじ書房.

久木田恵. 1990.「東京方言の談話展開の方法」『国語学』162. Pp.100-90.

琴鐘愛. 2005.「日本語方言における談話標識の出現傾向―東京方言、大阪方言、仙台方言の比較―」『日本語の研究』1-2. Pp.1-17.

小林隆他.2017.『方言学の未来をひらくーオノマトペ・感動詞・談話・言語行動－』.ひつじ書房.

林宅雄. 2008.『談話分析のアプローチ』.研究社.

【転記記号】

事例中に使用している記号は串田他編（2005）を参考にした。

? 上昇調のイントネーション　↑上昇イントネーション

： 音が伸ばされている状態を示　= 途切れなく発話されていることを示す

hhh 笑いを示す　.h 吸気音を示す　*** 固有名詞

（…）／（文字）発話が不明な部分を示す　(.) 0.2 秒以下の沈黙

（0.3） 0.2 秒以上の沈黙の長さを括弧内の数字で示す

[2 人の発話の重なりの始まる場所

] 2 人の重なりの終わる場所

> < 記号で囲まれた発話は他より速度が速いことを示す

< > 記号で囲まれた発話は他より速度が遅いことを示す

° ° 記号で囲まれた発話は他より小声で話されていることを示す

付記：本発表の一部は、JSPS 日本学術振興会科学研究費（課題番号 23k12195）の助成を受けている。

語彙の計量分析から考える物語の時間経過性

鯨井綾希（就実大学）

1. はじめに

本発表では、「ことばの技巧」を計量分析という視点から探っていきたい。

テキストの計量は、計量文体論という枠組みのもと、言語研究・文学研究の双方で取り組まれてきた。また、そこでの計量は、言語研究では文書分類・文体類型の問題として、文学研究では作家の個性の問題として論じられてきた。他方、日本語学では計量語彙論の延長線上でテキストを捉える試みもなされてきており、個別的な文章に見られる内容のまとまりの形成や展開を計量する研究がある。計量文体論がテキストの静的な構造を問題とする一方で、計量語彙論はテキストの動的な変化を問題とする点で興味深い。

さらに近年では、山崎（2017）や髙﨑（2021）などが、語彙と文章の相互関係に関する分析をまとまった形で示しており、語彙と文章の関係が計量と解釈の両面から捉えられるようになっている。本発表では、そのような先行研究を踏まえ、定量的な分析と解釈を通して、計量語彙論（言語研究）とテキスト分析（文学研究）との発展的接続を試みる。

２．方法論

２．１　研究資料

本発表では、学校教科書に掲載されるテキストのうち、(1) の物語文と説明文を取り上げ、それらの見られる特徴を探る中で、両者に見られる内容展開上の表現的特徴を見出す。

（1）a. 物語文（作品名／出版社と学年）5 作品

星の花が降るころに／光村図書 1、字のない葉書／学校図書 1、タオル／教育出版 2、バースデイ・ガール／教育出版 3、私／教育出版 3

b. 説明文（作品名／出版社と学年）5 作品

モアイは語る／光村図書 1、作られた「物語」を超えて／光村図書 3、変わる動物園／学校図書 1、花の形に秘められたふしぎ／教育出版 2、ガイアの知性／教育出版 2

２．２　分析視点

本発表の分析は以下の 2 つの発想に基づく。いずれもテキスト中の語彙を利用したものである。本発表ではその語彙を名詞・動詞・形容詞・形容動詞に限定した範囲で捉える。

（2）a. 単語の共起を用いたテキスト語彙の関係ネットワークから文章の構造を見る

b. 新出語の登場に伴う当該位置の見出語の充足率の変化から文章の展開を見る

（2）に挙げた発想のどちらも、「文章」と呼ばれる（一応の）単位体の構成に関わる分析に繋がる。（2a）はテキスト中における語彙的な形状と密度を考える発想である。テキスト中に登場する語群が相互に共起して使われれば、複雑で密なネットワークになるだろうし、語から語への一回的な連結や相互不連結などが繰り返されれば、その結果は互いに関連の

薄い疎なネットワークになるだろう。もちろん現実には、両者が何らかの形で両立し、話題のまとまりとまとまりがいくつかの語によって繋がるといった形が想定される。

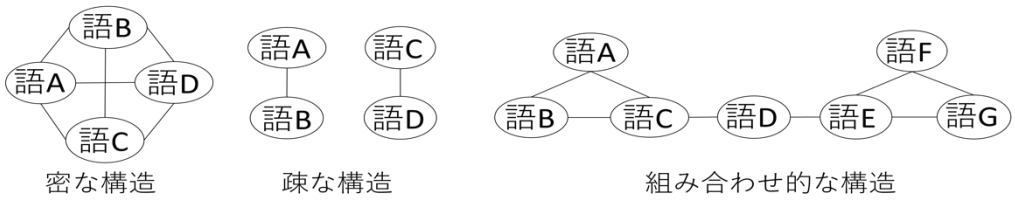


図 1：テキスト中の語の共起に基づくネットワークのイメージ

この想定の下で物語文と説明文に見られる語彙の共起関係ネットワークを見ることで、それぞれの文章が持つ言語表現上の技巧が見えてくる可能性がある。本発表では、Text Mining Studio（以降 TMS）というソフトウェアを使って上記の発想を具体化する。

続く（2b）は、新たな語が使われるということを言語表現上の「内容展開」であるとみなし、その変化の測定を通してテキストの形式から見た内容の特徴を探るものである。安江（1981）をはじめ、この発想は従来の計量語彙論の基本的な発想の一つであったと言える。

本発表では、語彙の無作為再配列という視点を導入した山崎（2017）や浅石（2020）に倣い、テキストの無作為再配列により作られた仮想の見出語（内容語）充足率の変化に照らしつつ、実際のテキストの見出語充足率の変化を見ていく。仮想の見出語充足率を定めるために、当該テキストの単位語総数と見出語ごとの頻度を前提にして、無作為な並べ替えに基づく当該箇所の充足率の計測を1000回試行し、その平均値を算出した。その平均値を以て仮想的な見出し語充足率とした。実際の充足率と仮想の充足率との差は、当該テキストに語彙の確率的な出現傾向とは異なる傾向が見られることを示す。その結果と解釈を契機にテキストの内容分析へ接近できると思われる。



図 2：２つの充足率(上)と両者の差の変化(下)の例

３．分析の結果と考察

３．１　共起語（係り受け）ネットワークに見られる物語文と説明文の相違点とその解釈

TMS を使って構築した物語文と説明文の共起語ネットワークが以下の図 3 である。図 3 を観察すると、説明文のネットワークが語彙間で密に連結されながら形成される傾向が見られるのに対して、物語文のネットワークは、軸となりそうな中心語から独立した単発的なネットワーク部分が多く、中心語近辺の語彙的集合性も相対的に疎になる傾向が見られる。このことから、物語文は特定の語を除けば、相対的に語彙の間の相互連結に重点を置いていないことが分かる。これは、テキストの意味的連結が説明文よりも語彙によって行われにくいことを意味する。では、物語文はいかなる形で内容をまとめているのであろうか。

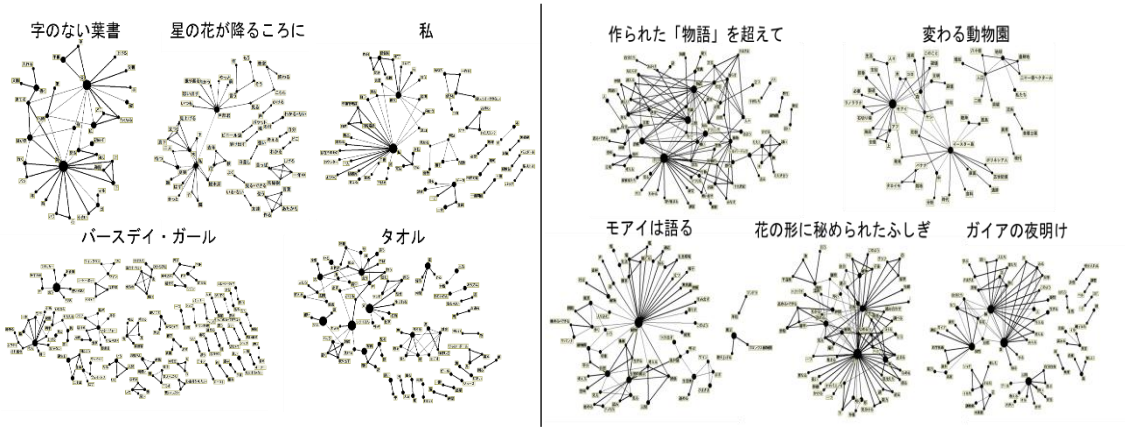


図 3：物語文（左）と説明文（右）の共起語ネットワーク

ここでは、物語文のネットワークの中心語の多くが登場人物であることに着目したい（図 4、なお「妹」は二人）。図 4 から、物語文における登場人物の存在が形式的な内容連結で重要な役目を担っていることが分かる。さらに、描かれる情景が登場人物を軸とした一回的な事象の連続により変化することで物語文が形成されていると考えれば、語彙の生起と相互関係は上図のネットワークに近づくはずである。

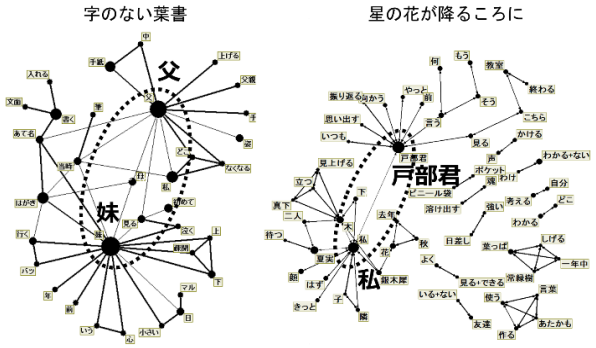


図 4：物語文の軸となる「登場人物」

以上の解釈に従えば、物語文は登場人物に視点を置くことと、そこを基点に次々に生じる単発的事象を系統立てて理解することという、語彙の相互連結を密にする説明文とは異なる言語外的要素を潜在的に有している可能性を指摘できる。とはいえ、実際のところこの解釈自体には何の目新しさもない。重要なのは、そのような質的な解釈可能性が、語彙のネットワークという形式的側面の総体化と可視化を通じて（再び）浮き出てくるという点である。

本発表では、特定の人物に焦点を当てた視点から一回的な事象が繰り返し生じることで経過する内容展開を、仮に物語に特有の「時間経過性」と名付けてみたい（ここでの「時間」とは何か、という問いはいったん置いておくとして）。

３．２　見出語の充足率の変化に見られる物語文と説明文の相違点とその解釈

前節の分析を「時間経過性」という観点で捉えるならば、続く分析ではテキストの動的展開に関する傾向把握に焦点が当たることになる。そこで本節では、内容進行に応じた見出語を時系列順に整理し、テキストに見られる語彙の出現傾向を定量的に探っていく。

2.2 節で説明した仮想の充足率と実際の充足率を計算し、それらを比較しながら単位語が出現するごとの計測上の差（実際の充足率-仮想の充足率）を示したものが図 5 である。図 5 でまず注目されるのは、説明文の多くに見られる、前半の下降傾向から後半の上昇傾向への充足率の差の変化である（「作られた「物語」を超えて」「変わる動物園」「モアイは語る」

「ガイアの夜明け」)。このことから、少なくとも語彙的変化の視点からは、説明文は前半に少数の見出語を繰り返し使用し内容の軸形成を行い、後半に異なる語を出して内容を多方面に拡張していくという論理構成を傾向として有していると考えることができる。

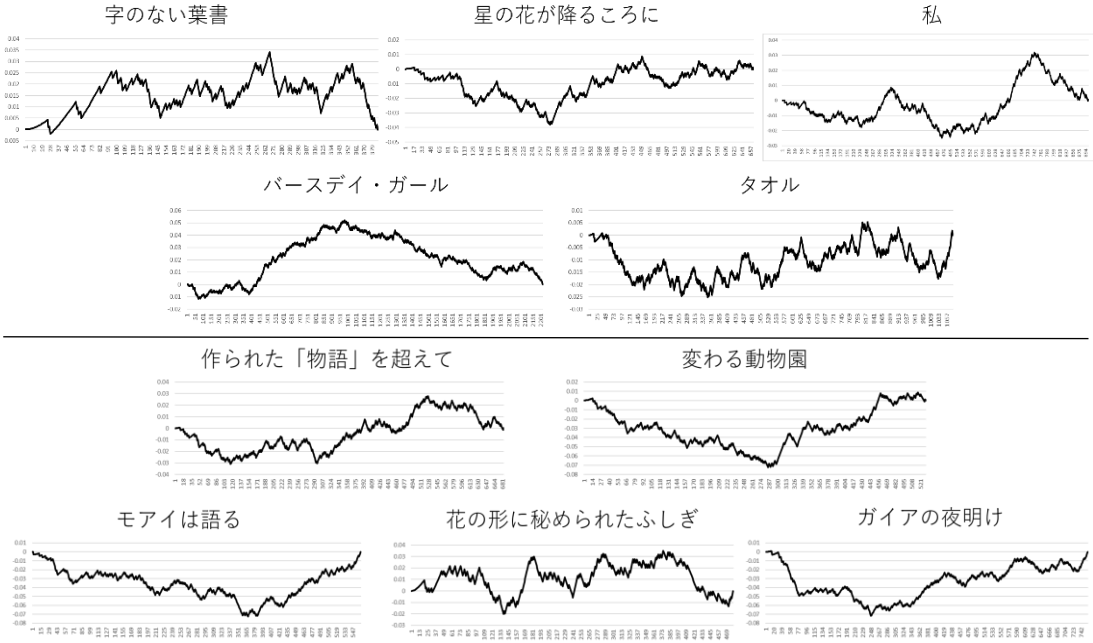


図 3：実測値と仮想値の差の変化（上：物語文、下：説明文）

他方で、本発表の議論の中心である物語文を見ると、必ずしも各作品の充足率の変化に類似したパターンを見出すことができない。むしろ「私」の後半部の急激な充足率の上昇や、「星の花が降るころに」の下降傾向から上昇傾向への変化、「バースデイ・ガール」の緩やかな上昇から下降への推移など、相対的に作品ごとの情報提示上の違いが際立っている。このような違いは、一貫した論の構成とは異なる、物語内の「時間経過性」をどのように描くかという作品ごとの描写（ストーリーやプロット）上の工夫を示唆しているように思われる。

４．おわりに

本発表では、「ことばの技巧」を考えるにあたって、学校教科書に掲載されていた物語文と説明文を取り上げ、それぞれの語彙を定量的に分析することで、その結果が文章の内容展開上の「技巧」に繋がる解釈を生み出す可能性を持つことを示した。

本発表は現時点では抽象化されたデータの姿とその蓋然的解釈にとどまる。しかし、ここで示したデータ上の特徴と解釈を踏まえつつ、その実態を再度探ることで個々の作品に潜在的に埋め込まれている「技巧」を発見・理解できたならば、こうした方法論は言語研究と文学研究が再度手をとり合うことを可能にする一つの手段になっていくように思われる。

・参考文献とソフトウェア

浅石卓真（2020）『教科書の中の知識』樹村房／山崎誠（2017）『テキストにおける語彙的結束性の計量的研究』和泉書院／髙﨑みどり（2021）『テクスト語彙論』ひつじ書房／安江佐和子（1981）「行文を追った異なり語数の動き」『東京女子大学日本文学』56／Text Mining Studio https://www.msi.co.jp/solution/tmstudio/top.html 2025/3/24 アクセス
（本発表は科研費 22K00549 の助成に基づく研究成果の一部である。）

マンガの作中人物が「語る」時

出原健一（滋賀大学）

0. 発表の概要

一人称語りのマンガやメタ的ギャグなどの例外を除けば、マンガ世界内の作中人物が現実世界の読者にあからさまに語りかけることはない。しかし細かく見てみると、直接ではないが、作中人物が読者を意識していると考えられる発言・内言を行うことがある。山口(2005)が指摘しているグルメマンガにおける味の説明などがその一例である。メイナード(2012)が、マンガ・アニメ的虚構世界を描くライトノベルについて、語り手・作中人物と読者の繋がりを前提にしているコミュニケーション志向メディアであると述べているように、マンガやライトノベルでは他のメディアよりも上記の現象が現れやすい。本発表では出原(2021)で言及したマンガ学の視点概念を参照しつつ、このような、いわば作中人物が「語り手」と重なり合う現象がマンガやライトノベルで広範に存在することを確認し、その表現技巧について考察する。

1. マンガの「語り」の技法

1.1 同一化技法

・「読者と作中人物の眼を重ねあわせる一人称の視点」（竹内 2005: 88）

・「マンガの語り手の誘導により読者の注意を特定の登場人物（およびその行為）に向けさせることで読者と語り手の間で（誘導的）共同注意を成立させ、さらにその直後にその登場人物の知覚（主に視界）・思考を提示することで読者と語り手および（疑似的に）登場人物との間に（追跡的）共同注意を成立させる技法」（出原 2021: 96）



図 1『School Rumble』第 12 巻 p.13

1.2 身体離脱ショット（泉 2008）

・「視点の数はひとつのコマにつき一種類、ということはありません。二種類以上の別の視点が同時に重ね合わせられたり、溶け合ったりもする」（同上: 33）

・「構図そのものは客観ショットのようでも、視点はキャラクターの意識に寄り添って「主観化」されている」（同上: 41）

・「キャラの視点から説明すれば「視点が身体の外側に半ば抜け出た」状態ですが、神の視点からすれば



図 2『神の雫』第 1 巻 p.128

「視点がキャラの内側に半ば潜り込んだ」逆さまの状態であるとも説明できるでしょう。まさに「半・主観」でありつつ「半・客観」でもあるのが、身体離脱(アウト・オブ・ボディ)の視点です。」(同上: 42)

2. ことばの「語り」の技法

2.1 英語の知覚描出(Brinton 1980):作中人物が知覚した「見え」を表現する技法

(1) "Look!" Fred turned round. Jack was coming across the street towards him. (同上: 370)

2.2 英語の自由間接話法:二重の視点

(2) She stared at him in speechless amazement. *How could he come back so soon? Why had he not informed her of his return?* But he was there waiting for her to throw herself into his arms.(彼女は驚きのあまり無言で彼を見つめた。どうしてこの人はこんなに早く帰って来られたのだろう。なぜ帰ることを前もって知らせてくれなかったのだろう[と彼女は思った]。しかしとにかく彼はそこにいて、彼女が腕の中に身を投げ出してくるのを待っていた)(江川 1991: 481)

2.3 cues(Brinton 1980)

・ Represented perception is often introduced by authorial description of a character's physical actions or of his perceptions…. More frequently, description of a character's perceptions only precedes represented perception. (同上: 371)

2.4 マンガとことばの平行性

・「語り手が、登場人物の行為・経験を表す表現を提示することで、読者との間で登場人物に対する誘導的共同注意を成立させ、さらにその直後にその登場人物の知覚・思考を提示することで読者と語り手及び(疑似的に)登場人物との間に追跡的共同注意を成立させる技法(小説では、知覚の場合は知覚描出、思考の場合は自由間接話法と従来呼ばれている)。(出原 2021:182-183 を一部省略)

3. 作中人物は誰に語るのか?

3.1 山口(2005)

・「作者(ないしは語り手)は、三人称的存在である登場人物の経験を二人称である読者に伝え、しかも、登場人物同士はたがいに伝達しあう。フィクションの語り(narrative)では、このように複雑なコミュニケーションが展開する。」(同上: 180)

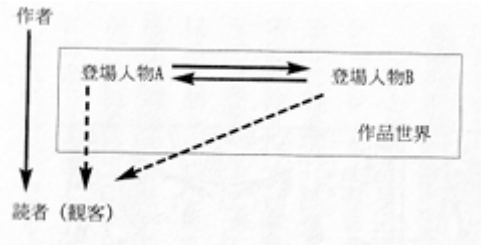


図 3 山口(2005: 189)

3.2 岡本(2018: 79-80):漫才のツッコミ

・内部指向性:発話が明示的に特定する受け手への情報伝達

・外部指向性:informative によって傍参与者 に理解可能なものとして伝達

3.3　ライトノベル論

・「ライトノベルとは、そのディスコースが会話化し、直接引用の形をした会話や会話的語りがページの多くを占める娯楽文芸である。(中略) ライトノベルは、文字を中心にした文芸ジャンルであるが、会話中心で、ビジュアルイメージを無視できない作品世界なのである。」(メイナード 2012: 30)

・「ライトノベルは、幾つかの繋がりを前提とし、それを増長させる性格を持つ。まず、語り手と読者の繋がり、作者と読者の繋がり、キャラクターと読者の繋がり、そして読者間の繋がりである。 (中略) 語り手は物語世界から時々抜け出して、直接読者に話しかけるような雰囲気を保っているのである。」(同上: 34-35)

(3)　羽島伊月は炬燵で寝転がって携帯ゲームをしたり本を読んだりしていた。

傍目にはゴロゴロしているようにしか見えないのだが、これも小説の執筆には必要なことなのだ。

現在伊月は『鮮紅の魔狩人（仮)』に代わる新しい企画のアイデアを練っている。

(中略)

したがって作家にとっては、遊んだりゴロゴロしたりすることもまた、大事な仕事なのである。本当なんです信じてください。(『妹さえ』第 1 巻 p.81)

・修辞機能に関して、ラノベでは「実況」、一般小説では「説明」が特徴的 (田中他 2025)

3.4　出原(2023)：「のだ」

(4)　「あれ？」

机の中を漁り、続いて鞄の中を覗き、止めに教室後方のロッカーの中を確認してから、政近は少し焦りを覚えた。

次の授業で使う参考書が見当たらないのだ。教室の時計を確認すると、次の授業が始まるまで残り二分弱。隣のクラスにいる妹に借りに行くとしても、少し迷惑な時間だろう。(『ろしでれ』 第 1 巻 p.13)

cf. キュー（地の文）→身体離脱ショット→主観ショット

3.5　出原(2024)：「と」

・「S1 の事態の主体（普通、主語）による知覚が S2 で反映しているとしたが、そこには表現主体の視点が重なり合っているのである。(坪本 1998: 124)

(5)　土岐健次郎の絡み酒から逃れ伊月の部屋をあとにした春斗が家に帰ると、台所のほうから甘ったるい匂いが漂ってきた。

少し前に伊月の部屋でも嗅いだのと同じ —— チョコレートの匂いだ。(『妹さえ』第 1 巻. p.167)

3.6　マンガの事例

・作中人物の内言が表される箇所に「外部指向」的な内言が現れる。



図 4『青のオーケストラ』第 2 巻 p.77



図 5『食戟のソーマ』第 36 巻 p.15

4. 展望

・マンガ・ライトノベルを用いたマルチモーダルな分析の可能性

参考文献 Brinton, Laurel. 1980. Represented Perception: A Study in Narrative Style. *Poetics* 9, 363-381.／出原健一. 2021. 『マンガ学からの言語研究　「視点」をめぐって』. ひつじ書房.／出原健一. 2023. 「ライトノベルにおける二重の語り―「のだ」を中心に―」. 『日本認知言語学会論文集』第 23 巻. 106-117.／出原健一. 2024. 「キュー内包文と身体離脱視点」. 『彦根論叢』No.440. 136-149.／泉信行. 2008. 『漫画をめくる冒険　[上巻・視点]』ピアノ・ファイア・パブリッシング.／メイナード、K. 泉子. 2012. 『ライトノベル表現論　会話・創造・遊びのディスコースの考察』. 明治書院.／岡本雅史. 2018. 「聞き手行動が孕む二重の他者指向性―漫才のツッコミから見る聞き手行動研究の射程」. 村田和代 編. 『聞き手行動のコミュニケーション学』. ひつじ書房.／竹内オサム. 2005. 『マンガ表現学入門』. 筑摩書房.／田中弥生 他. 2025. 「ライトノベルと一般小説の脱文脈化の観点からの分析」. 『社会言語科学会第 49 回大会発表論文集』. 227-230.／坪本篤朗. 1998. 「時と条件の文連結」. 赤塚紀子・坪本篤朗 編. 『モダリティと発話行為』第 2 章. 研究社出版.／山口治彦. 2005. 「語りで味わう　味ことばの謎とフィクションの構造」. 瀬戸賢一 他著.『味ことばの世界』. 162-205. 海鳴社.**事例引用**平坂読. 2015. 『妹さえいればいい』第 1 巻. ガガガ文庫.（『妹さえ』と表記）／燦燦 SUN. 2021. 『時々ボソッとロシア語でデレる隣のアーリャさん』第 1 巻. 角川スニーカー文庫.（『ろしでれ』と表記）**図版引用**亜樹直（作）、オキモト・シュウ（画）. 『神の雫』第 1 巻. 講談社.／阿久井真. 『青のオーケストラ』第 2, 11 巻. 小学館.／小林尽.『School Rumble』第 12 巻.　講談社.／附田祐斗（作）、佐伯俊（画）. 『食戟のソーマ』第 36 巻. 集英社.

東北方言のヴォイスから考える日本語の述語膠着性*

—伝統的な国語学と日本語学、そして理論言語学との交流の視座から—

高橋英也(たかはしひでや), 佐々智将(ささともまさ), 江村健介(えむらけんすけ)（以上、岩手県立大学）, 中嶌崇(なかじまたかし)（(一社)やまどり学園）

【全体趣旨】 日本語がいわゆる膠着性を示す言語に属することは、よく知られる事実であるが、膠着現象自体を研究対象とする取り組みは十分に行われてきたとは言い難い。世界の言語の多くが膠着語である事実を考えると、膠着性の基本原理の解明は重要な課題であるといえよう。しかしながら、日本語の文法体系の解明において、膠着性をもった述語連鎖を可能にする活用母音の位置づけについては、未だ完全な見解の一致には至っていない。

本ワークショップの趣旨は、日本語の述語膠着性の解明を、日本語研究の理論・枠組みを越えた共通の課題と捉え、伝統的な国語学、日本語学、そして理論言語学の交流の視座から説明理論の構築を展望することである。特に、受動・可能の述語形式である「ラレ」の形態統語論に焦点を当て、なぜ日本語における語彙・統語現象が膠着に帰結するのかを考察する。さらに、言語獲得と音韻論に基づく多角的かつ統合的な検討を通して、述語膠着性を司る文法メカニズムに接近することを狙う。本研究は分散形態論(Halle and Marantz 1993, Marantz 1997, 2001 など)を理論的枠組みとして援用するが、議論は異なる理論的取り組みにも通ずる汎用性を持つ。

【序論】 研究対象としての膠着現象の難しさは、少なくとも２つの方法論的問題に起因していると考えられる。まず第一に、表記の問題について指摘したい。仮名表記法では、母音、鼻音/n/、促音、拗音等を除く基本的音素(phoneme)が、子音(C)と母音(V)が結合したものとして表されるため、仮名表記に準じた研究下では、子音単独で起こる現象を想定することができない。このため、多くの微細な現象が、CV の音素的結合の下で隠されてしまう可能性がある。通時的に見ても母音が比較的単純な日本語では、母音交替のような現象が想定されるにせよ、子音が多くの語彙・文法的弁別性を担ってきたのは疑いの余地がない。例えば、*s, r, m, k* といった子音群は、通時的な語彙の形成と増加、および文法の発達の過程において重要な役割を果たしてきた（例：*hiro-**m**-a-ru/hiro-**m**-e-ru, hiro-**g(k)**-ar-u/ hiro-**g(k)**-e-ru* 等）。このよう状況がある中で、子音を単体で取り上げ、それに分析を与えられないことは、文法現象の説明上大きな制約となろう。

次に、もう一つの方法論的問題として、膠着現象を扱える文法理論の欠如について考えてみたい。語の膠着性と独立性はトレードオフの関係にある。実際、「太郎は苦い薬を飲ませられた」における「飲ませられた（語幹・使役・受動・アスペクト）」のような複雑述語は、音韻的には 1 つの「語」として取り扱われる。しかし、この「語」は、内部に使役サセや受動ラレといった、取り替え可能な様々な機能形態辞を含んで成立している。そうすると、これら機能形態辞が互いにどのように接尾し、述「語」形成に参画するかに関する説明が必要になろう。そしてそれを行う場合、必然的に機能形態辞のより詳細な分析に立ち入らざるを得ない。ところが、サセ・ラレは、伝統的に動詞語幹に接尾する単純な（すなわち内部構造を持たない）「助動詞」として扱われる見方が定着しており、それらに対して積極的に形態統語分析が行われることがほとんどなかった。これには先ほどの仮名表記問題も影響しているだろうが、サセ・ラレが動詞的性質を持ち、しかも基文の解釈に大きな影響を及ぼすほどのものならば、使役・受動表現の派生過

*本ワークショップの発表者は、現在、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究（C）（課題番号：22K00532、課題名：東北方言のヴォイスから見た日本語の述語膠着性、研究代表者：高橋英也（岩手県立大学））の助成による共同研究を行なっている。

程を理解するために、通常の動詞に行う程度の分析が最低でも与えられて然るべきだと思われる。再び「飲ませられた」を例にとると、そもそもなぜ使役サセがセとして表出するのかが明確ではない。一方、受動ラレは何も制約なしにそのまま表出するが、それはなぜだろうか。(1)を参照されたい。

(1) [[[[太郎 [苦い薬 [√*nom*]^{語根}-*a*]^{語幹}]^{基文} ***se***]^{使役} ***rare***]^{受動} *ta*]

さらに、「飲ませられた」には異形態「飲まされた」も存在するが、その場合、*nom-**as**-**are**-ta* あるいは *nom-**a**-**s**-**are**-ta* のどちらが正しいのだろうか。あるいは *nom-**a**-**sa**-**re**-ta* は間違いなのだろうか。こういった問題が解決されない限り、膠着現象の本当の姿は見えてこない。

このような諸問題を解決する可能性を持つのが分散形態論である。この理論の特徴は、語と文を同じ規則で派生される連続体として取り扱う点にある。分散形態論では、レキシコンを「例外の集合」と考え、それ以上の役割を与えていない。例えば、語根√*nom-*は、行為「飲む」という語彙的意味を表す語根として日本語のレキシコンに登録されているが、それは他の独立した規則や原理から導き出されるものではなく、いわば偶然によるものと仮定されている。√*nom-*は英語では√*drink-*であるが、これも同様である。すなわち、ある言語における特定の語彙的意味がそれを表す特定の語根と結びついて存在するという事実は、何物にも還元できないという意味で、「例外」とされるのである。逆にいえば、言語現象のほとんどは規則によって派生されている、とも言い換えることができる。では、その規則とは何であろうか。分散形態論では、それを単純な統語原理「併合」と考えている。「併合」は任意の２つの文法要素 A,B を結合させ、新しい文法要素 C を派生する操作であり、それと並行的に、文法要素 C の品詞、意味、音が決定される。再び「飲ませられた」を例にすると、語根√*nom-*と活用母音 *a* の併合が未然形を派生するといった具合である。語根√*nom-*は、レキシコン内に概念として存在するのみで、文法要素としては不全であり、述語としてそれ自体が言語表現に表出することはない。これが文法的に「解釈可能な」日本語の動詞語彙となるためには、動詞化素(verbalizer)としての統語的役割を担う機能辞 v と併合し、動詞として範疇化（[[√nom-] v]^{動詞}）されることがまず必要なのである。一旦√*nom-*の文法範疇が確定すると、この語根と結びついた概念（語彙的な意味特性）を具現化するため、目的語や主語といった他の文法要素が、併合機能により構造的に順次認可されていき、最終的に文「[$_s$太郎は] [$_o$苦い薬を] 飲ませられた」が完成する。その際、未然形に後接する使役・受動の形態素サセ・ラレについても、同様に併合機能で導入されることで複雑述語の構造派生が進行する。ただし、この時点では文は併合で構築された構造そのものであり、（統語構造を図示したいわゆる伝統的な樹形図における）端末接点には、文法素性のみが存在する状態である。文が発話され解釈されるためには、これら端末接点の直線化と、それらに含まれる素性の音韻化が必要であるが、それらは派生された構造が音韻部門と出会う時点（インターフェース）で行われると考えられている。このように、分散形態論にあっては、「語」と「文」は連続しており、二つを分ける必要は基本的にない。先に、膠着現象下では、統語的に複雑な構造を内包する複雑述語が「語」として扱われると述べた。分散形態論が、膠着現象の解明に果たす役割が期待されるのは、この「語」と「文」を分離しない理論的特徴からである。

本研究は、このような分散形態論の枠組みの下、日本語動詞（句）の形態論・統語論の研究においてかつて存在しなかった程に厳密な形態素レベルの分析を追求する事例研究といえる。実際、生成文法の研究史において、日本語は、自然言語の統一的理論の構築という観点から、その草生期より広く関心を集めてきた一方で、樹形図が持つ端末接点に対する語彙挿入に関しては、必ずしも十分な検討がなされてこなかったように思われる。日本語のヴォイスに目を向けると、動詞の自他、受動、使役、可能といった多様な述語形式の中にあって、繰り返し出現する形態素の一群がある。他動詞化・使役化の *s* 、自働詞化・受動化の *r* という 2 つの子音、そしていわゆる未然の *a* と下二（一）段化が具現する *e* という 2 つの母音である。これら 4 つの音要素の共起関係が示す文法的な諸特徴は、「受動・可能＝ラレ」「使役＝サセ」といった単純な一対一対応において捉える見方（[V ***(r)are / (s)ase***] *-ru*）のみでは十分に説明できない。方言文法に目を向けると、例えば渋谷 (2006) や竹田 (2020) らが観察するように、東北地方の諸方言の自発・受動・可能形式が、ル・ラル・ラレル・ラサルといった多様性を示すことが広く知られている。すなわち、

4 つの音素群 *s, r, a, e* を、共通日本語とは異なる連鎖で組み合わせているのである。この現象も、端末接点を顧みない単純な枠組みでは、取り上げることが難しい。さらに、上述の通り、膠着性をもった述語連鎖の理解と活用現象に関する考察は密接に関連するが、生成文法の枠組みでは限られた論考があるのみである（田川 2009, 西山 2012, 三原 2015 など）。

【目標】 本ワークショップでは、上述のような日本語のヴォイスと述語形式の関係に対するタクソノミー的立場は、理論・枠組みの如何に関わらず、重大かつ決定的な問題点を内包しており、放棄ないし変更されるべきであることを主張する。その上で、受動・可能ラレの形成に関与する形態論・統語論上の原始的な構成要素(formatives)として、以下の(2)を仮定する。すなわち、単一の形態素 *rare* として従来扱われてきた受動・可能ラレについて、語根に後接する機能形態辞 *a* と *e* の連鎖（と母音連鎖を回避する *r* 挿入）から成る *(r)-a-(r)-e* のように分析されるとする**形態分離仮説を**提案する（cf. 鷲尾 2005, Whitman 2008）。

(2) a. ***a***：動詞アル（生）に由来する機能形態辞で、事象の「起動」を表す。
b. ***i***：動詞ヰル（居）に由来する機能形態辞で、事象の「過程」を表す。
c. ***e***：活用母音 *a* と *i* の合成により派生された機能形態辞で、事象の「完遂」を表す。
d. ***r***：挿入子音として形態統語構造の有意な「境界」を標示するとともに母音連続を解消する。

a と *e* は、[[[[V ***(r)***]***-a***]***(r)***]***-e***]*-ru* のように、独立した機能形態辞として、一定の選択制限の下で動詞句構造の構築にかかる文法的役割を担うものと仮定する。すなわち、ラレが示す受動や可能の意味は、単一の語彙項目として付与された意味からもたらされるのではなく、むしろ、*a* と *e* それぞれに固有の統語的・意味的特性、およびそれらの連携に還元できるものとして捉え直すことができることを論じる。実際、この分析は、ラレの通時的・共時的展開に関して先行研究で繰り返し提唱されてきた諸説（「自発起源」説、「ル・ラル（ユ・ラユ）」説、「有・生」説、「得」説、「出来文」説、他）の洞察を再解釈する試みともいえる。形態分離仮説の下では、動詞句の形態統語構造の構成要素である機能形態辞による可能な組み合わせパターン、およびその音声・音韻的具現の帰結として、ラレにおける述語膠着性を定式化できる。最後に、ここでの議論の方向性が正しければ、方言文法における受動・可能形式の表層的な形態的多様性についても、それぞれを別個の例外的な語彙項目などと見なす必要は全くなく、機能形態辞相互の可能な組み合わせの実現形として自然に捉えられることが期待される。

---

1. 問題の所在：日本語における述語膠着性と動詞活用

(1) 活用とは、単語が文中のほかの要素との関係や文法的な意味を表し分けるために、単語の中心的な部分である語幹に語尾をつけることによって、様々な語形を作り出す現象である。（現代日本語文法 1: 87 より）

(2) 『日本語で長大な述語連鎖が可能になるのは「膠」としての活用語尾が隣接する２つの述語要素の組み合わせを定めているからである。（中略）要するに、日本語の形態論は語という枠を超えて、述語の統語構造全体を司っているのである。』（影山 2019: 18）

(3) 『理論言語学の論文中に描かれた樹形図には、末端に始めから正しい活用形が書かれており、理論がそこに間違った活用形を生成しないということは、いわば好意的に判断されているわけである。』（戸次 2010: 4）

(4) 「飲ま・せ・られ・た（語幹・使役・受動・アスペクト）」

2. 形態分離仮説と活用母音の形態統語論

2.1. 「未然形」の認定

(5) 動詞の活用形に関する形態論的規則（田川 2009: 33 より一部のみ抜粋）

a. **{V[+V]}　↔　Vcf に/a/を挿入 / _Neg**
b. {V[+V]}　↔　Vcf に/i/を挿入

(6)

	未然形分析[1]	非未然形分析
否定（書かない）	*kaka* ***a*** *-nai*	*kak -**a**nai*
受動・使役（書かれ/書かせ）	*kaka* ***a*** *-re/-se*	*kak -**a**re/-**a**se*

(7) 「使役の「行かせ」は未然形の「行か」に「せ」がつくと分析する。（中略）意味的に考えても矛盾する。「私が太郎を行かせた」は「確定」した事実を言っているのであり、「未然」ではない。こう考えると、*a* には未然の意味はなく・・・」（西山 2012: 160)

(8) a. 未然形「行かば」＝「もし行けば」（*ik-**a*** 仮定条件）
b. 已然形「行けば」＝「行ったので」（*ik-**e*** 確定条件：実現が含意）

(9) a. 注がれたビールを 飲ま/*nom-**a***/ずに残した （口をつけなかった/*飲み干さなかった）
b. 注がれたビールを 飲め/*nom-**e***/ずに残した （口をつけなかった/飲み干さなかった）

2.2. 理論的想定

(10) 分散形態論（Distributed Morphology: Halle and Marantz 1993, Marantz 1997, 2001, 他）
a. **Root Hypothesis**：語根√*root* と機能形態辞 (v, n, a, etc.) の併合が語の範疇を決定する。
b. **Single Engine Hypothesis**：語形成と文派生は統語論で並行的に進行する。
c. **Late Lexical Insertion**：語彙挿入は文法素性をターゲットとして PF で起こる。

(11) √*read*^**v** (read (V)) > [√*read*^**v**]^**a** (readable (Adj)) > [[√*read*^**v**]^**a**]^**n** (readability (N))

2.3. 提案

形態分離仮説

単一の形態素 *rare* として従来扱われてきた受動・可能ラレは、語根に後接する機能形態辞 *a* と *e* の連鎖（と母音連鎖を回避する *r* 挿入）から成る*(r)-a-(r)-e* と分析される。（中嶌 2014, 高橋・中嶌 2023）

活用母音 *a, i* の形態統語論

(12) 存在詞としての活用母音（山田 1954, 川端 1997）
a. ***a*** 「あり」（ラ下二） 「現れ出でる」**（生出）**
b. **w*o*** 「をり」（ラ変） 「（「ゐる」の状態化形式として）静止状態の維持」**（静的存在）**
c. ***wi*** 「ゐる」（ワ上一） 「静止状態への態勢変化」「一時的な静止・固着」**（動的存在）**
（「時代別国語辞典 上代編」,「古語大鑑第 1 巻」, 金水 2006, 畠山 2017）

(13) 活用母音 *a, i* は、①存在詞アル、キルに由来し、②統語的には動詞機能形態辞として具現し、③意味的には事象の成立における「起動」と「過程」を標示する。
a. 四段・**未然** [[[主体 [(対象) √*root*-**v**] *v*] X] Y] Z]..... （**起動**）
a
b. 四段・**連用**[2] [[[主体 [(対象) √*root*-v] ***v***] X] Y] Z]..... （**過程**）
i

[1] 未然形分析は伝統的な学校文法などに、一方、非未然形分析は Bloch (1946) をはじめとする構造主義的分析で採用されてきた。Shibatani (1990) は、語根 (root) と語幹 (stem) の区別に基づく構造を前提とするが、未然形分析の立場とみなせる。また、田川 (2009, 2012) は、「最終的にどの活用形が具現するかは、統語構造における情報によってのみ決定される。」との仮説の下で、統語環境と述語形態の対応の具現としての活用形を認め、分散形態論の枠組みにおける未然形 a 挿入分析 (5a) を提示している。また、三原 (2015) などのように活用形としての未然を認定しない立場もある。以下で述べるように、本研究の立場は、「未然」という自然類は想定せず、例えば[-realis]T のような素性の音声具現であるとはみなさない (cf. 西山 2012)。

[2] いわゆる連用形 *i* は、伝統的に挿入母音 (Davis and Tsujimura 1991) として扱われてきたが、西山(2012)、西山・長野(2020) は、挿入母音である場合に加えて、T に具現する不定時制辞として扱われるべきであるとも論じている。他方、田川(2009, 2012) は、分散形態論の枠組みにおける形態音韻規則 (5b) において、*i* が非該当形であるとしている。

(14) 動詞連用形由来の *i* 語尾派生名詞における行為者の含意[3]

a. 「絵描き」: 画家（行為者）/ 描画（行為）　　b. 「もの取り」: 泥棒（行為者）/ 盗み（行為）

(15) 連用形では、(i) 形態統語的には *v* をゼロ接辞が占める *v*P に相当する「小さな活用」であり、(ii) *i* は「緩衝母音 (epenthesis)」として表出する。（三原 2015: 5-6）

母音融合による活用母音 *e* の成立（服部 1976, 大野 1977, 1978, 1980 など）

(16) 乙類 *e* (←*a-i*)　[主体　[(対象)　√*root*-**v**]　***v***]　　（**使役性/動作主性/制御性**[4]）

a　***i***

(17) a.　{v, *v*}　↔　***/a-i/*** or ***/e/***　　b.　勧奨表現「飲まい/飲め」

(18) a.　主体 ≠ 対象　他動詞（使役性：生出をもたらす外的過程）

b.　主体＝対象　自動詞（再帰性：生出をもたらす内的過程）

(19) 甲類 *e* (←*i-a*)　[.....[主体　[(対象) √*root*-v]　***v***].....**v**]　（**実現性**）

i　***a***

(20) 初源的な段階の範囲内で古代人が最初に試みた自他対応表示（釘貫 1996）

a. 二音節動詞や一部の三音節動詞が高い割合　　b. 古代語動詞の大部分をカバー

甲乙 *e* の合一：下二段動詞の体系的一段化と可能動詞の成立

平安期までの甲乙 *e* の合一により、活用母音 *e* は、行為や事象の成立における（「制御性」「実現性」を包含する）「**完遂**」を表す新たな機能形態辞 GET として再解釈され、下二段活用の一段化を契機とした体系的な可能動詞派生が室町期以降に出現した。

(21) 機能形態辞 GET による可能動詞派生[5]

a.　[[主体　[(対象) √*root*-v]　***v***]　**GET**]

(i)　***e***　　（**主体による行為の完遂 → 可能動詞化**）

b.　[[[対象 √*root*-**v**]　*v*]　**GET**]

a　***e***　　（**対象の生出の完遂 → 反使役化・中間動詞化**）

(22) 可能動詞の起源に関する諸説

a.　「動詞連用形＋補助動詞ウ(エ)説」（渋谷 1993 など）

b.　「自発説」（釘貫 1991 など）

c.　「室町期から江戸期における下二段自動詞派生説」（青木 2010, 三宅 2016 など）

関西方言における「へん」否定表現[6]

(23) 行かへん, 行けへん, 行かれへん, 許さへん, 許せへん, 許されへん, 理解されへん, 理解せえへん

(24) a.　行きはせぬ → 行きはせん → 行きやへん/行きゃへん → 行かへん/行けへん

b.　　*ik-**i**-**ya**-hen*　　*ik-**a**-hen / ik-**e**-hen*

（金田一ほか 1981, 尾上 1999, 真田 2000, 上野 2003）

(25) 「へん」否定表現のバリエーションと地域による差異（https://kansai-ben.com/より）

a.　行けへん　　行かない（大阪市内・南大阪・大阪寄りの兵庫・和歌山）

行けない（京都・滋賀・奈良）

---

[3] 動詞由来の複合語については、伊藤・杉岡(2002)、由本(2009, 2014)など見られたい。

[4] 本研究での分析は、通時的に、*e* 他動詞は動作主性の顕在化を強く表す派生的動詞として現れたという事実（青木 2010）、また、他動詞化と自動詞化（反使役化）が具現する *e* が語彙概念構造における関数 CONTROL と同定されるという影山(1993, 1996)の洞察と矛盾しない。

[5] (21a)において、*v* が音声的に空の場合は「書ける」のような通常の可能動詞が、また *i* が挿入される場合は「書き得る」のような「動詞連用形＋補助動詞ウ/エ」が、それぞれ派生される。

[6]「行きひん, しいひん, 見いひん、」のような「〜ひん」による形式もある。

b. 行かへん　　行かない（北大阪・京都・滋賀・奈良・兵庫）
c. 行かれへん 行けない（大阪・兵庫・和歌山・大阪寄りの奈良）

(26) a. 「(乗り気がしないから）行かへんわ」
b. 「(ちょっと無理やな〜）行けへんわ」
c. 「(仕事があって申し訳ない、ごめんな〜）行かれへんわ」（申し訳なさのニュアンス）

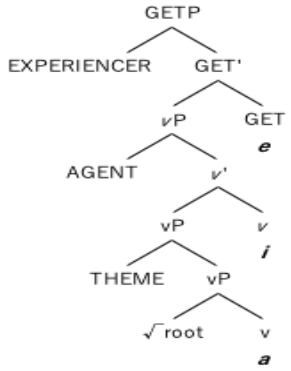
(27) a. *ik-**a**-hen* > 行為/事象の「生出」の否定
b. *ik-**e**-hen* > 行為/事象（の生出）に対する「実現・制御」の否定
c. *ik-**a-(r)-e**-hen* > 行為/事象の「生出」に対する「実現・制御」の否定

2.4. まとめ：活用母音の階層構造

活用母音 *a, i* は、存在詞の文法化に由来する機能形態辞であり、統語的に動詞句構造の構成要素(formative)を成す。意味的には、*a* が「生出」、*i* が「動的存在」を表し、動詞句の核となる語根が表す事象の成立における起動(inchoative)、過程(process)といったアスペクト性を標示する。活用母音 *a* と *i* の合成により、「制御」「実現」といった意味的概念と結びつき下二段活用を標示する活用母音 *e* が派生された。通時的には、甲乙 *e* の合一を経て、アスペクト的に「完遂」を示す機能辞 GET が成立し、生産的な可能動詞の派生が実現した。

(28) a. 四段・未然　[+起動]　[主体 [対象 √*root*-**v**] *v*]
a
b. 四段・連用　[+過程]　[主体 [対象 √*root*-v] ***v***]
i
c. 下二（一）段　[+制御]　[主体 [対象 √*root*-**v**] ***v***]
e
[+完遂]　[[主体 [対象 √*root*-v] *v*] **GET**]
e

(29)



a > *i* > (*e* >) *e* の重層性
↓
開始から終点に向かう事象のアスペクト構造に対応

3. 東北方言における２つの「短形」受動形式

(30) a. 太郎の子どもが 花子に しかられた　(直接受動)
b. 太郎が 花子に 泣かれた　(間接受動)

(31) [$_{vP}$ 受影者 [$_{VP}$ 下位事象] *rare*]（Howard and Niyekawa-Howard 1976, Kuroda 1979 など）

(32) **受動 *rare* の形態分離**
a. 受動文の意味 > 下位事象の生出 ＋ 受影者が被る影響性(affectedness)
b. (*r*)*are* > (*r*)*ar*+*e*

(33) ***r***：形態統語構造の「境界」を標示するデフォルトの挿入子音 (Labruine 2014, de Chane 2016)

(33) a. [$_{vP}$ [$_{vP}$ **太郎の子ども** [$_{v}$ √*shikar*-**v**]] *v*]
a ***r***

b. [$_{GETP}$ **太郎の子ども** [$_{vP}$ (花子) [$_{vP}$ ~~**太郎の子ども**~~ [$_{v}$ √*shikar*-**v**]] *v*] **GET**]
a ***r*** ***e***

b'. [$_{GETP}$ **太郎** [$_{vP}$ (花子) [$_{vP}$ **(自分の)子ども** [$_{v}$ √*shikar*-**v**]] *v*] **GET**]
a ***r*** ***e***

(34) 事象の「発生」「存在」を表す**軽動詞アルによる提示文**

a. 交差点で 事故が あった （出来事名詞＋アル）

b. 学会には 参加者が たくさん あった（出来事発生の動作主名詞＋アル）

(35) 出来文説（尾上 1998, 2003, 川村 2005, 2012）
主語に立つものを場とした、事柄を全体として発生・生起するものとして述べる形式

3.1. 福島方言の逆使役ラル（白岩 2012, 2017）

(36) a. （黒板さ） 字が {書がってる/?書がっちぇる}（非情物主語の直接受動）

b. 太郎は 母に {死なっちぇる/*死なってる} （人主語の間接受動）

(37) *黒板さ 変な字が {**太郎に(よって)/わざと/自然に**} 書がってる

(38) a. [$_{vP}$ [$_{vP}$ **変な字** [$_{v}$ √*kak*-**v**]] *v*]
a ***r***

b. [$_{GETP}$ **太郎** [$_{vP}$ (母) [$_{vP}$ [$_{v}$ √*shin*-**v**]] *v*] **GET**]
a ***r*** ***e***

3.2. 岩手県気仙地方方言のラエル受動（山浦 2000）

(39) *kadarareru*（語られる）とか *ugerarerú*（受けられる）のように *r* で始まる音節が三つも連続して用いられる場合、ケセン語では 2 番目の *r* を省略して発音することが多い。（中略）*kadarareru* は *kadarar'eru* となり、*ugerarerú* は *ugerar'erú* となる。山浦 (2000: 101)

(40) [$_{GETP}$ ..... [$_{vP}$ ..... [$_{vP}$ ..... √kadar-**v**] *v*] **GET**]
a (***r***) ***e***

4. 高トーンと機能辞/e/の関連について：岩手県宮古方言からの観察

4.1. はじめに

岩手県宮古方言の特徴の一つに**「エ足す可能形」**の存在がある。

(41) 宮古方言「エ足す可能形」

a. √*kak-* 書く √*kak-e-ru* 書ける（標準日本語） √*kak-**ee**-ru* 書けえる（エ足す）

b. √*asob-* 遊（ぶ） √*asob-e-ru* 遊べる √*asob-**ee**-ru* 遊べえる

c. √*mi-* 見（る） √*mi-r-e-ru* 見れる √*mi-r-**ee**-ru* 見れえる

・標準日本語の可能形は、語根(root)に母音 *e* を付け語幹(stem)を形成する。

・宮古方言では、語根に 2 つの母音、*ee* が続いて語幹を形成することができる。

(42) 先行研究

a. 高橋・江村(2015)(2016)(2019)、高橋・中嶌(2020)、高橋(2022)；
宮古エ足す可能形；2 つの機能辞（***v*** **と GET**）から構成

b. 田中(2003)；
宮古方言の音声（アクセント）に関する研究；(名詞) アクセント「重起重複：HLHL」

▶ エ足す可能形の音声データの収集・解析、アクセントパターンの理論音韻論からの解析（すなわち(42a)と(42b)のインターフェイス）は未だなされていない。

(43) 本節の目的

a. 宮古エ足す可能形の音声データの解析と音韻理論からの解析。

b. (43a)の結果を構文論への応用。音声・音韻は、構文論に何を提起しているのか考察。

(44) 提案の概要

a. *ee* 部分は、宮古方言のデフォルトである **H-L(Trochee)の「フット」を構成することがある**。

b. フットが形成されない場合、**フットに属さないアクセントモーラは *v* と GET の境界を示す役割を果たす**、という推察が可能。

4.2. 宮古方言データ

【課題】エ足す可能形の音声データの収集・解析、アクセントパターンの理論音韻論からの解析は未だなされていない。

(45) データ収集（岩手県立大学（滝沢・宮古キャンパス）在籍の学生からデータ収集）

a. レコーディングセッション１：2022 年 5 月（6 名）・セッション２：2024 年 1 月（10 名）

b. 協力者は岩手県立大学（滝沢・宮古）在学の宮古市近辺（旧宮古市、旧新里村、旧田老町、山田町、岩泉町）出身者。録音終了後に謝礼あり。

c. 協力者はワードリストを音読。調査語の例と結果は(46)に示す。

d. 録音は、防音施設で実施。滝沢では AV ホール、宮古ではカーペット敷きの LL 教室。

(46) 調査語の例と結果（アクセント核（最も高いトーンの母音は é で記述）

語根　現在肯定形 現在否定形（語幹＋ねえ（<ない））

a. √*kak*　√*kak-**é**e-ru*　√*kak-e**é**-nee*（「書けえねえ」√*kakee-nee* < √*kak-ee-nai*）

b. √*asob*　√*asob-**é**e-ru*　√*asob-e**é**-nee*

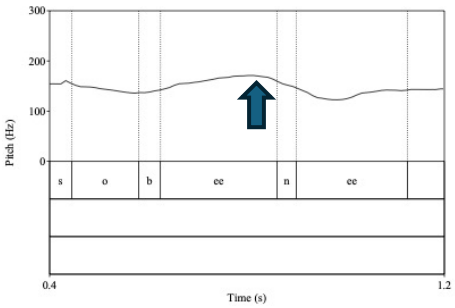
c. √*mi*　√*mi-r-**é**e-ru*　√*mi-r-e**é**-nee*

【結果】肯定形と否定形の間で**アクセント移動**が見られる（アクセント・高トーン母音は **é**）

・現在肯定形では、一貫して「最初・左側」の *e* にアクセントが置かれる。

・否定形では、i)肯定形と同じアクセントパターンと ii)**「２番目・右側」**の *e* にアクセントを置く話者も見られる。

(47) [eé] パターン[7]（2022 年話者 √*kak-ee-nee*（否定））



・ 矢印で示した通り *ee* の後半部のピッチが高くなっている。

・ よって、この話者の否定形の発音は[kak-eé-nee]であると結論づけられる。

◆ 同じパターンが、2022 年レコーデイングで 3 名(6 名中)、2024 年レコーディングで 5 名（10 名中）観察された。

◆ (46)の結果を踏まえ、アクセントの移動をどのように説明するか。

[7] 田中(2003)、Uwano (2012)にあるように北三陸・宮古方言のアクセント核(accent kernel)は「昇り核」（「下がり目」ではない）であるため、記述では[é] のシンボルを用いる。また(7)の計測でも、下がり目ではなく最も高い部分を計測した。計測には *Praat* (Boersma 2001)を利用した。

4.3. 音韻的解析

4.3.1. 観察 (A Preliminary Analysis)

(48) A Preliminary Analysis/Observation

a. √*kak-é-ru* (-2) （標準・可能形）　　b. √*kak-ée-ru* (-3)　　c. √*kak-eé-nee* (-3)

(49) 上記(48)が示すもの

a. アクセントの位置は、i)基本「右（語末）から３つ目の母音（モーラ）(-3)」、ii)語に３モーラ以上ない場合は、「右から２つ目のモーラ(-2)」にアクセントを置く。

b. 語末の母音・モーラにアクセントが置かれることはない（Non-Finality. cf. 窪薗 2023）

【疑問点】 (48b)と(48c)はなぜ「-3」で揃うのか？そのメカニズムは？

4.3.2. 音韻的解析：プロソディとフットからのアプローチ

(50) 提案

a. 現在肯定形 √*kak-**<ée>**-ru*　*ée* 部分が HL のフットを構成する

b. 否定形　√*kak-e**<é>**-nee*　*eé* 部分がフットの構造的に２つに分離。２つ目の *é* のみがフットを構成する。

(50)では、<>がフットの境界、-（ハイフン）が形態素の境界を示す。

◆ **フット(Phonological Foot)（脚）**

「卓立」（プロミネンス）の単位。アクセントがある母音・モーラはフットに含有される。

(51) 宮古方言におけるフット形成の原則

a. フット（アクセント核・メインフット）の右側と語幹の**右側は一致**する(cf. 菅沼 2022)

b. (51a)が満たされない場合、**可能なら HL フットを形成**し、フットと語幹の右側を一致させる

c. アクセント核・メインフットはできる限り語の右側（語末）に一致させる

d. アクセント核・最も高いトーンが語末に置かれることはない(cf. Non-Finality (49b))

(52)上記(51)の適用例

a. √*kak-e-ru*（標準可能形）
　√*kak-é-ru*　→　√*kak-**<é>**-ru*; (51a)により可能形接辞 *é* が単項(degenerated)フットを形成

b. √*kak-ée-ru*（エ足す可能形、肯定）
　√*kak-ée-ru*　→　√*kak-**<ée>**-ru*; (51b)により、HL フットを形成しフットと語幹末を一致
　*√*kak-<é>e-ru*; フットを形成しない場合、語幹とフットの右側が一致しない。

c. √*kak-ee-nee*（エ足す可能形、否定）
　√*kak-eé-nee*　→　√*kak-e**<é>**-nee*; 単項フットでもフットの右と語幹の右が一致
　*√*kak-<eé>-ru*; 宮古方言の「デフォルト」ではない LH フットが形成される。

(53)ここまでのまとめ

a. 宮古方言では、フット・アクセント核の右端と語幹の右端が一致する。
　→(52b)のように一致しない場合は、HL フットを形成して一致させる。

b. (53a)のため、語幹(-ee)と活用語尾(-ru)、否定語(-nee)を跨いだフット形成はされない。
　→3.4.節でより「一般化」を考える。

4.4. ディスカッション

4.4.1. 宮古方言の音韻的特徴について

(54) 田中(2003); 宮古方言は「重起重複」；高トーン母音・モーラが語内に２つ現れる

a. *karakasa* 「唐傘」　*kárakása*　→　*<kára><kása>*

b. *abobu* 「遊ぶ」*ásobú* → *<ásob><ú>*

c. *utagau* 「疑う」 *útagaú* → *<úta>ga<ú>*

▶ 田中(2003)の音声記述をもとにフットを考察すると、(54a)(54b)のように形成される。

・いずれも HL のフットを形成；HL フットが「デフォルト」であるという議論に合致

・いずれも語幹と活用語尾を跨いでのフット形成はなされない。

4.4.2. 構文論・形態論への応用

【疑問点】なぜ、フットは語幹を跨いで形成されないのか。

(55) 窪薗(2023)

（名詞＋名詞複合語では）フットは形態素ごとに作られる。形態素境は常にフットの境界でもあり、複数の形態素が 1 つのフットに収まることはない(p. 43)。

(56)上記(55)の√*kak-e<é>-nee* への応用 (cf. Sasa 2024)

kak	e	<é>	nee
Root	v	GET	

↑**【提案】もし<é>の左端が何らかの（形態素）境界と一致するなら GET を示す形態素（ヘッド）の境界と一致するのではないか。**

a. 肯定形の*<ée>*、否定形の*<é>*の右端は、語幹と活用語尾、否定辞との境界を示す。

b. 否定形の単項フット*<é>*の左端は、*v* と GET の境界を示す。
→GET の形態素（ヘッド）が、1 つの独立したフットに収められている。

【提案】 宮古方言「エ可能形」の *ee* は単なる母音の長母音化ではなく、**形態・構文的フレーズの境界を示している。** また、(56)で提案されている音韻的構造は、*v* の *e* と GET の *e* は独立していることを示している。

4.5. まとめと今後の課題

◆まとめ

宮古方言の音韻（プロソディ）構造は、形態・統語構造を反映している。

a. 否定形で現れる単項フットの左端は *v* と GET の境界を示している。

b. すなわち、宮古「エ足す可能形」で現れる*[ee]*の連続は、2 つのフレーズのヘッドの連続である**→GET のヘッドである[e]と、*v* のヘッドである[e]の独立性を示す**証拠。

▶ 今後の課題

a. もし、「フットは形態素ごとに作られる。形態素境は常にフットの境界でもあり、複数の形態素が 1 つのフットに収まることはない」（窪薗 2023）であるなら、なぜ肯定形で二項フットが形成されるのか；なぜ、*v* と GET の境界が肯定形では消滅してしまうのか。

b. 上記 a の解明を含めた、宮古方言の動詞アクセントのアクセントパターンの一般化。そしてそのフォーマルな解析（例えば最適性理論等の音韻理論を用いた分析）。

5. 可能動詞と下一段動詞の獲得過程—ラ抜き言葉、レ足す言葉、エラレ形式の理論的意義の観点から—

5.1 標準語における可能動詞[8]

(57) a. 読む/*yom-u*/ → 読める/√*yom-**e**-ru*/　　b. 書く/*kak-u*/ → 書ける/*kak-**e**-ru*/

(58) a. 着る/*ki-ru*/ → 着られる/*ki-**(r)are**-ru*/　　b. 寝る/*ne-ru*/ → 寝られる/*ne-**(r)are**-ru*/

(59) a. ラレル形式：「見られる」「食べられる」「来られる」(自発、尊敬、受け身、可能)
b. ラ抜き言葉：「見れる」「食べれる」「来れる」(可能)

(60) a. 可能動詞：接辞 *e* が後接して「可能」の意味を表す動詞 (高橋・江村 2015, 2016)
(e.g. 読む/*yom-u*/ → 読める/*yom-**e**-(r)u*/)
b. ラ抜き言葉：一段・カ変動詞に接辞 *e* が後接した可能動詞 (高橋・江村 2015, 2016)
(e.g. 曲げる/*mag-e-ru*/ →曲げれる/*mag-e-**(r)e**-(r)u*/)[9]

(61) 本節の目的:
a. 先行研究及び自然発話コーパスから得られるデータを観察し、月齢段階に応じた可能動詞の特徴を整理する。
b. (大人は産出しない誤用形も含めて) 子どもが産出する可能動詞が、ラレの形態分離仮説の下でどのように説明可能か検討する。

5.2 可能動詞の獲得過程 (大久保 1967, 野地 1974, 伊藤 1990, 渋谷 1994, 荒井 2006 など)

初期段階 (2〜2 歳半):

① 可能形態素を音声的に表出させることなく可能の意味の伝達を試みる。

(62) ゼロ可能形式 (下一段動詞)
a. シメ ϕ ナイワヨ　　(2;3)　cf. 閉められない (大久保 1967: 146)
b. ゼンブ タベ ϕ ルネ　　(2;1)　cf. 食べられる　(野地 1974-1977)

② *e* を伴った可能動詞の文法的な形態が産出され始める。

(63) *e* 可能動詞 (五段動詞/下一段動詞)
a. イケル/*ik-**e**-ru*/　　(2;2)　　(渋谷 1994: 29)
b. シメレナイノ？/*sime-**(r)e**-nai-no*/　　(2;3)　　(渋谷 1994: 31)

後期段階 (2 歳半以降): *(r)are* を伴った可能動詞を生産的に産出し始める。

(64) ラレル形式（五段動詞/下一段動詞）
a. イカレナイ/*ik-**are**-nai*/　　(2;11)　cf. 行けない　(大久保 1984)
b. アケラレナイ/*ake-**rare**-nai*/　　(2;6)　　(荒井 2006)

(65) レ足す言葉とエラレ形式
a. ゴハンニ　イケレル/*ik-**e-re**-ru*/　　(3;1) cf. 行ける　　(野地 1974-1977)
b. マテラレル/*mat-**e-rare**-ru*/　　(3;7) cf. 待てる　　(荒井 2006)

---

[8] 日本語では、述語動詞の可能動詞化が、可能を表す最も生産的な表現形式であるが、「動詞連用形 + ウル, エル」や、「動詞連体形 + コトガデキル」などの、その他の可能表現も存在する。可能動詞も含めたこれらの可能表現は、相互に置き換え可能な場合と置き換え不可能な場合があり、それらは動詞の形態的な特徴、文体、命題内容など、文法内外の要因によって決定される（中野 2008）。

[9] ラ抜き言葉の形成について、一般に、3 音節以上の動詞語幹に適用されると、「*考えれる」「*調べれる」のように、容認性が下がる (渡辺 1969)。また、文法外的な性質として、ラ抜き言葉は口語で用いられる傾向があることが知られている（山本 1984）。

(66) （東海地方などのラ抜き言葉を容認する一部方言を除いては容認度が低い）、(65a) のようないわゆるレ足す言葉や、(65b) のような接辞 *e* にさらに *(r)are* を後接させた（大人は産出しない）非文法的なエラレ形式が、一定の頻度で産出される。[10]

5.3 分離動詞句と可能動詞の文法 (Fuji et al. 2008 a, b)

(67) a. 太郎は集中して本を読める　　a' $[_{vP}$ 太郎 $[_{v'}$ $[_{VP}$ 本 *yom*] $e_{[+\text{potential}]}]]$
b. 僕は片手でシャツを着られる　　b' $[_{vP}$ 僕 $[_{v'}$ $[_{VP}$ シャツ *ki*] $rare_{[+\text{potential}]}]]$

(68) a. 太郎が本を花子に届ける　　a' $[_{vP}$ 太郎 $[_{v'}$ $[_{VP}$ 本 $[_{V'}$ 花子 *todok*]] $e_{[+\text{cause}]}]]$
b. 本が花子に届く　　b' $[_{vP}$ $[_{v'}$ $[_{VP}$ 本 $[_{V'}$ 花子 *todok*]] $\phi_{[-\text{cause}]}]]$

(69) a. 外項を選択・認可する *v* が、可能動詞化を駆動する [+ potential] を伴って派生に導入された帰結として、可能形態素である *e*/*(r)are* が *v* の主要部に具現する。
b. 自他交替が、動詞語幹への接辞の併合で形態的・音声的に区別される場合、他動詞及び自動詞形態素は *v* 主要部に具現する ([- cause]の場合、*v* 自体は音声的に顕在化しない)。

初期段階: ゼロ可能形式と e 可能動詞の間の非対称性

(70) 「閉める」において顕在化している *e* は、他動詞化もしくは可能動詞化を標示する形態素が動詞語幹に直接「併合」されたもので、「閉める」全体として V 主要部を占めているものと見なされる。

(71) この分析を踏まえると、例えば、「閉まる」に基づくゼロ可能形式も、（実際には意味論的・語用論的にも排除されるが）この月齢時で原理的に派生可能なはずであるが、利用可能なコーパスを確認すると、予測に反して、五段動詞がゼロ可能形式で用いられている事例は存在しない。(高橋・江村 2017)

(72) 子どもは、可能動詞の産出・処理を可能にする文法システムを確立する 5 歳頃までに、一貫して、(63b) のような一段活用よりも、むしろ (63a) のような五段動詞を基にした *e* 可能動詞の方を高い頻度で産出する。

(73) 初期段階の可能動詞の産出において、ゼロ可能形式の産出が下一段動詞に限定される一方で、*e* 可能動詞の産出において、五段動詞が有意に高い頻度を示すのは何故か？

後期段階: エラレ形式と下一段動詞の間の非対称性

(74) （可能形態素を含む）*v* 主要部の形態的・音声的な具現は、子どもにとって獲得が概して困難であるため、その適切な音声形式の出力ができるようになる時期（5 歳頃）までは、V 主要部を占める *e* 可能動詞に、学習過程にある、*v* 主要部の具現としての可能形態素 *(r)are* を誤って後接してしまうことで、エラレ形式が産出される。

(75) 渋谷 (1994) が観察している 「ナラベレラレルカナ/*narabe-**re-rare**-ru*/」のような下一段動詞を基にしたエラレ形式も一定程度産出されるはずであるが、実際には、予測に反して、そのような下一段動詞を基にしたエラレ形式の産出数はかなり低い頻度を示す。

(76) 後期段階のエラレ形式の産出において、五段動詞が有意に高い頻度を示すのは何故か？

---

[10] Fuji et al. (2008a, b) では、ラ抜き言葉やレ足す言葉、また五段動詞のラレル形式のような、（規範形ではないにしても）一部地域では容認可能な表現形式を、「非文法的な誤用」として一様に扱っている。しかし、子どもは、母語獲得の過程において、非規範的な形態の産出を含んだ段階を経ることがあり、方言間や言語間の差異を生じさせる文法内の可変部は、総じて早期に獲得されるとは限らない (cf. 杉崎 2015)。

5.4 ラレの形態分離仮説から辿る可能動詞の獲得過程

初期段階: 下一段動詞に限定されたゼロ可能形式と e 可能動詞

(77) 下二（一）段　　[+制御]　　[主体　[対象　√*root*-**v**]　***v***]
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　e
　　　　[+完遂]　　[[主体　[対象　√*root*-v]　*v*]　**GET**]
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　e

(78) a. 五段動詞のゼロ可能形式が許されないのは、そもそも五段動詞が形態素 *e* を含まないからである。(高橋・江村 2017)
　　b. 下一段動詞の形成に関わる形態素 *e*（機能辞 v-*v*）には、「+制御」が含意されることから、意味概念上、可能形態素 *e*（GET）と区別されにくく、子どもはこの段階において、両者を明確に区別することなく産出していると考えられる。

後期段階: 活用形に関わらないラレル形式、レ足す言葉、エラレ形式

(79) a. 非規範的なイカレナイ/*ik-**are**-nai*/ (ラレル形式)、イケレル/*ik-**e-re**-ru*/ (レ足す言葉)、マテラレル/*mat-**e-rare**-ru*/ (エラレ形式) を、子どもが経験 (一次言語資料) から得るとは考えにくい。
　　b. 非規範的なこれらの形式が一定期間にわたって、一定の頻度で観察される事実は、生得的なデフォルト値が存在しないことを示唆する。

(80) ある個人が獲得した文法の性質の一部は、生得的言語知識や経験に起因するのではなく、「偶然の産物」である可能性がある (= ランダム選択説)。

(81) 「ランダム選択による獲得が、他の様々な文法知識に関しても主張し得るものであるのであれば、その度合いに応じて生得的言語知識の必要性は薄れることになる」郷路 (2013: 59)[11]

(82) a. [GETP　[vP　[vP √*ik*　-**v**]　*v*]　**GET**]　(ラレル形式)
　　　　　　　　　a　***r***　***e***
　　b. [GETP　[vP　[vP √*ik-**get***　-v]　*v*]　**GET**]　(レ足す言葉)
　　　　　　　　　e　　***r***　***e***
　　c. [GETP　[vP　[vP √*ik-**get***　-**v**]　*v*]　**GET**]　(エラレ形式)
　　　　　　　　　e　***r***　***a***　***r***　***e***

(83) a. 「並べれられる/*narab-**e-re-rare**-ru*/」などの一段動詞に基づくエラレ形式は派生できない。

　　b. 非規範的なラレル形式、レ足す言葉、エラレ形式が生得的知識や経験に基づくものでなく、「利用可能な機能辞へのランダムな語彙挿入の反映」であるならば、本研究の分析は「UG の縮小」という点でミニマリストプログラム (Chomsky 1995 以降) の基本理念と矛盾しない。

(84) まとめと今後の課題
　　a. 誤用形も含めた可能動詞の獲得過程で観察される言語資料は、ラレの形態分離仮説を支持する経験的な証拠になる。
　　b. 当該仮説が正しい方向である限りにおいて、受動文の獲得過程においても、類似した特徴が見られることが予測されるため、検証の必要がある。

---

[11] Goro et al. (2007) の提案は、「ジョンはすべての本を読み忘れた」のような、補文中に含まれる数量詞の作用域解釈に関する、大人を参加者とした質問紙調査及び子ども参加者とした真偽値判断課題の結果に基づいている。

【主要参考文献】

青木博史 (2010)『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房. 大久保愛 (1967)『幼児言語の発達』東京堂出版. 大久愛 1984)『幼児言語の研究』あゆみ出版. 大野晋 (1957)『日本語の起源』岩波書店. 大野晋 (1978) 『日本語の文法を考える』岩波書店. 尾上圭介 (1998)「文法を考える 5 生出文 (1)」『日本語学』17-7: 76-83. 尾上圭介 (2003)「ラレル文の多義性と主語」『言語』32-4, 34-41. 影山太郎 (2019)「日本語の述語膠着とモジュール形態論」岸本秀樹・影山太郎（編）『レキシコン研究の新たなアプローチ』1-26. くろしお出版. 川端善明 (1997) 『活用の研究』清文堂出版. 川村大 (2012)『ラル形述語文の研究』くろしお出版. 川村大 (2005)「ラレル形述語をめぐって：古代語の観点から」『日本語文法』5, 39-56. 川村大 (2012)『ラル形述語文の研究』くろしお出版, 東京. 釘貫亨 (1982) 「上代日本語ラ行音考」『富山大学人文学部紀要』6: 192-206. 釘貫亨 (1996)『古代日本語の形態変化』和泉書院. 郷路拓也 (2013)「ミニマリストプログラムと言語獲得研究」『生成言語研究の現在』41-66. ひつじ書房. 柴谷方良 (1990)「ヴォイス」『日本語の文法 I 文の骨格』, 仁田義雄・益岡隆志（編）, 岩波書店, 東京. 渋谷勝巳 (1994)「幼児の可能表現の獲得」『無差』創刊号. 23-40. 渋谷勝己 (2006)「第 2 章 自発・可能」小林隆・佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂（編著）『シリーズ方言学 2 方言の文法』47-92. 岩波書店. 白岩広行 (2012)「福島方言の自発表現」『阪大日本語研究』24: 35-53. 白岩広行 (2017)「福島県伊達市方言談話資料別冊 福島方言の記述に向けて」『2014-16 年度科研費 研究成果報告書（研究課題番号 26770160）』 菅沼健太郎(2022) 「秋田県横手方言の有核動詞に関するアクセント規則-弱強フットを用いた分析-. 『言語研究』161. 高橋英也 (2022)「母音融合の形態統語論と可能形式の方言多様性」南山大学大学院人間文化研究科主催言語学ワークショップ『母音融合を軸とした動詞活用論の構築に向けて』発表ハンドアウト. 高橋英也・中嶌崇 (2023)「形態分離に基づく受動 RARE の分析」大関洋平・漆原朗（編）『分散形態論の新展開』83-109. 開拓社. 田川拓海 (2009)『分散形態論による動詞の活用と語形成の研究』博士論文. 筑波大学. 竹田晃子 (2020)『東北方言における述部文法形式』ひつじ書房. 田中宣廣 (2003) 「陸中宮古方言アクセントの実相」『国語学』 57-4: 44-59. 中嶌崇 (2014) 「膠着語の述「語」形成：語彙分離化の試み」, 発表ハンドアウト, 慶應言語学コロキアム. 益岡隆志 (1982)「日本語受動文の意味分析」『言語研究』82, 48-64. 三宅俊浩 (2016) 「可能動詞の成立」日本語の研究 12-2: 1-17. 山浦玄嗣 (2000)『ケセン語大辞典』無明舎出版. 鷲尾龍一 (2005)「受動表現の類型と起源について」『日本語文法』5: 3-20. Boersma, Paul (2001) Praat, a system for doing phonetics by computer. *Glot* International 5:9/10, 341-345. Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program.* Cambridge, MA: MIT Press. De Chene, Brent (2016) "Description and Explanation in Morphophonology: The Case of Japanese Verb Inflection," *Journal of East Asian Linguistics* 25: 37–80. Fuji, Chisato, Tomoko Hashimoto, and Keiko Murasugi (2008) "A VP-Shell Analysis for the Undergeneration and the Overgeneration in the Acquisition of Japanese Causatives and Potentials," *Nanzan Linguistics* 4: 21-41. Goro, Takuya, Tomohiro Fuji, Utako Minami, and Masatoshi Koizumi (2007) "The Acquisition of Anti-reconstruction and Grammar Variation in Adult Japanese," Paper presented at GLOW in Asia VII. Chinese University of Hong Kong. Halle, Morris. and Alec Marantz. (1993) Distributed Morphology and the Pieces of Inflection. In Ken Hale. and Samuel Jay Keyser. eds., *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvan Bromberger*, 111-176, MIT Press. Labrune, Laurence (2014) "The Phonology of Japanese /r/: A Panchronic Account," *Journal of East Asian Linguistics* 23, 1-25. Marantz, Alec. (1997) No Escape from Syntax: Don't Try a Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon, *UPenn Working Paper in Linguistics* 4: 201-22. Marantz, Alec. (2001) Words. ms., MIT. Sasa, Tomomasa (2024) "Emergence of an Iambic Foot in the Miyako Dialect: A Case Study of the /e/-Added Potential Forms." Paper presented at the Spring Conference 2024 of the Japan Phonological Society. Shibatani, Masayoshi. (1990) *The Languages of Japan*. Cambridge University Press. Takahashi, Hideya and Emura Kensuke (2019) The syntax of potential verbs in Japanese. *Proceedings of the 14th workshop on Atlantic formal linguistics*. 317-328. Takahashi, Hideya and Nakajima, Takashi (2020) Morphological Decomposition of Passive (r)are and the Trans-Predicate Hypothesis. *JELS* 37. 120-126. Uwano, Zendo. (2012) Three Types of Accent Kernels in Japanese. *Lingua* Vol. 122, Issue 13.

日本語学会 2025 年度春季大会シンポジウム

「会話文」とは何か

パネリスト

半沢 幹一（共立女子大学名誉教授）
髙﨑 みどり（お茶の水女子大学名誉教授）
松木 正恵（早稲田大学）

司会

苅宿 紀子（和光大学）

企画担当

苅宿 紀子（和光大学）
鴻野 知暁（大阪大学）

趣旨

文章とりわけ文学的な文章における位相差として，「地の文」に対し，「会話文」というものが設定されるのが普通である。その典型は，表記上はカギカッコによって，文法的には直接話法によって，文体的には口語体（話体）として，レトリック的には描写として，それぞれ規定され，「地の文」と差別化されてきた。しかし，そもそも文章中になぜ「会話文」が引用されるのか，あるいは「会話文」は「地の文」とどのように結び付けられて１つの文章を構成するのか，また，「会話文」と「地の文」の間に，いわゆる「心話文」や「間接話法」はどのように位置付けられるのかなど，明らかでない点が多い。

本シンポジウムでは「会話文」について，語彙・文法・文体などの観点から捉えていきたい。このような問題は，近代以前の文章にも及ぶことであり，語学のみならず，文学や国語教育・日本語教育にも関わろう。「会話文」に対する新たな問い直しを試みたい。

構成

趣旨説明・パネリストの紹介
報告１ 半沢 幹一 「なぜ「会話文」が問われるのか？」
報告２ 髙﨑 みどり「会話と「会話文」
―小説の会話文の相対化をめざして―」
報告３ 松木 正恵 「話法の連続性からみる地の文と「会話文」
―文学作品と新聞記事の比較をもとに―」
休憩
質疑応答・全体討論

なぜ「会話文」が問われるのか？

半沢幹一（共立女子大学名誉教授）

〔理由１〕「会話文」は、専門用語としての定義が不十分であるから。

１）新明解類語辞典

会話文：小説などで登場人物が話している言葉として書いた部分。

地の文：小説などで、引用文・会話文などを除いた文章。

２）日本語学大辞典

会話文：話された言葉を文字によって書き表した文または文章の一部分。

【参考】

地の文：物語や小説などの文章において、作者（語り手）が不特定多数の読者に向けて、主として３人称的に述べる部分であり、登場人物が主に他の登場人物に向けて１人称的に語る会話文とは対比、区別される部分である。

会話：立項無し。

【参考】

発話：「談話」や「会話」が、開始・展開・終結などの内容構成や参加者同士のやりとりで成り立つ相応の長さの話し言葉のまとまりを表すのに対して、「発話」はそうした談話や会話を構成する要素としての部分的なまとまりを表す語として多く用いられる。

３）言語学大辞典第６巻「術語編」

「会話文」も「 地の文」も立項無し。

〔理由２〕会話文は、言語行動としての「引用」であることが認知されていないから。

１）「引用」とは、当該の文脈に、それとは異なる文脈を持ち込むという言語行動である。これは特別なことではなく、言語獲得からして、それが他者あるいは自己の言語の模倣反復によるとすれば、「引用」と云うことができる。

２）「当該の文脈」とは、談話であれ文章であれ、その単位全体の構造を支えると認められる、基幹的な文脈のことであり、「それとは異なる文脈」とは、あくまでも、その基幹的な文脈を補完・補充する役割を果たすために引用された文脈のことである。

３）当該文脈と引用文脈との区別は、言語的にメタレベルで明示されるとは限らない。明示されない場合も、その中間的な場合もある。文章のジャンルによっては、その如何により倫理が問われることがあるいっぽう、レトリックとしてそれらを使い分けることもある。また、明示されない場合、当該文脈と引用文脈それぞれの表現自体としての差が認められないこともありうる。

４）当該文章に引き入れられる異文脈は、「引用文」と呼ばれ、その「引用文」のうち、会話としての文脈を引用しているのが「会話文」である。「会話文」に対する当該文脈は「地の文」と呼ばれる。ただし、「地の文」と「会話文」という関係で問題にされるのは、文章の中でも、小説などの文学的な文章に限られ、それ以外の文章ジャンルでは「地の文」相当の用語が存在しない。

5）引用という言語行動の目的は大きく分けて２つある。１つは、当該文脈の一部あるいは全体を補強的あるいは要約的に説明すること、もう１つは、当該文脈の表わす場面を具体的に描写すること、である。前者に相当するのが、学説、格言や名言、諺などの引用であり、後者に相当する１つが会話文である。ただし、引用ルールなどが問題にされたり、レトリックの「引用法」として取り上げられたりするのはもっぱら前者であって、会話文は扱われない。

6）引用文脈を成す言語主体は、当該文脈をコントロールする主体とは異なる場合も、同一主体の場合もありうる。ただし、同一主体であっても、別主体に準じて、それぞれの文脈視点が異なることが前提となる。たとえば、１人称視点の文章に引用される会話文の主体は書かれる視点、地の文の主体は書く視点であり、区別される。

〔理由３〕会話文は、コミュニケーションとして、然るべく位置付けられていないから。

1）会話文と地の文とでは、それぞれのコミュニケーションの設定が異なる。地の文は、書き手と読み手との、実際的かつ時差的なコミュニケーションであるのに対して、会話文は、登場人物同士の、擬似的かつ即時的な場面設定におけるコミュニケーションである。

2）引用される会話文も、また当該文脈の書き手自身によって表現されるものであり、会話文の主体も内容も場面も、書き手によって選択・設定されるものであるから、それも書き手と読み手とのコミュニケーションに含まれる。しかし、会話文は、地の文が一次的なそれであるのに対して、文章内の二次的なものであり、コミュニケーションレベルを異にする。

3）一次的なコミュニケーションを担う地の文に対して、二次的な会話文は引用文一般と同様に、とくに描写という点で、補完・補充の役割を担う。言い換えれば、地の文が主、会話文は従であり、地の文が文章にとって必須の文脈であるとすれば、会話文は任意の文脈である。任意であるゆえに、書き手あるいは文章の種類によっては、会話文を重視することもあれば、逆に軽視あるいは無視することもありうる。

〔理由４〕会話文と会話が同じものではないことが、必ずしも理解されていないから。

1）会話文は文章の１つであり、会話は談話の１つであるから、そもそも同じではありえないが、文字が音声を写すように、会話文は会話を文字によってそのまま写したものと見られている。しかし、会話文は実際の会話の文字による復元・再生を目的としたものもある一方で、そうでないものもある。

2）写すことを目的とする場合でも、そもそも文字は音声に伴う諸特徴を再現しえない、言語的に抽象化された媒体であり、その点では、会話のまったき復元・再生は不可能である。逆に、会話文を音声化する場合には、音声上の諸特徴が付加されないと、ただの「棒読み」と言われ、音声言語らしくはならない。

3）実際の会話の復元・再生を目的としない場合の会話文は、文学的な文章における創作として見られる。もとより、その場合は、会話文の引用元の文脈の存否・真偽が問われない。この点も、他の引用文と異なる点である。ただし、それ自体が会話文としてあるための、以下のような条件がある。

①地の文とは区別される、体裁・表記・表現などにおける、何らかの指標があること。
②会話文１例を、基本的に会話における「発話」１例に相当させ、「発話」が単独の場合と、ターンにより連続して、いわゆる「会話」が展開する場合があるのに応じて、会話文も単独で、あるいは連続的に複数で表現されること。ただし、連続の場合は、会話文の間に地の文のつなぎが入ったり、会話文が省略されたり地の文に置き換えられたりすることもある。
③会話文自体を構成するそれぞれの表現は、「発話らしさ」あるいは「会話らしさ」を演出するものであること。「発話らしさ」あるいは「会話らしさ」とは、談話と文章、あるいは音声言語と文字言語において、総体的に前者にその傾向が著しいと認められる類型的な特徴を有することを意味する。

〔理由５〕「語り」として論じられるのは地の文であり、会話文は対象とされないから。

１）「語り」が、語学においても文学においても盛んに論じられ、近年はさらにサブカルチャーにも及び、文化全般にわたる重要な概念となりつつある。
２）「語り」という語は本来、音声言語の談話に関するものであり、談話の中でも一定の様式を持つものを云う。それが、文字言語の文章に対しても、擬似的に援用され一般化して、もはや音声から文字へという由来関係が問われることはない。
３）文章とくに文学的文章における「語り」として取り上げられるのはもっぱら、書き手（これも「語り手」と擬似的に呼ばれる）による地の文であり、その語がよりふさわしいはずの会話文に及ぶことはほとんどない。これは、語られる物全体の書き手（語り手）による地の文こそが「語り」とみなされているからに他ならない。
４）引用される会話文自体が「語り」になっていることも当然、想定しうる。実際に、文章の一部が一人語りの会話文で成り立っている作品も存在するにもかかわらず、従来の「語り」論では、それは１挿話としてのみ処理される。違いは、文章全体の枠組みを成すか否か、語る主体の視点が作品の外にあるか内にあるかによる。しかし、「語り」があくまでも表現の様式性を表わすのならば、会話文にも適用しうるであろうし、地の文とは異なる様式性も見いだせよう。

〔理由６〕「話法」という文法的な問題が会話文のありようとどのように関わるのかが不明であるから。

１）文法用語としての「話法」は、談話に限らず文章にも用いられる。これは要するに引用の仕方のことである。
２）「話法」には、「直接話法」と「間接話法」の大きく２種類がある。「直接」と「間接」という対比に明らかなように、引用の仕方が直接的か間接的かということである。西洋語においては、時制や人称などに関する文法的な制約の有無によって区別されるが、日本語の場合には、その制約が緩いため、とくに、引用文が１文として独立している文脈では、少なくとも文法的には区別しがたい。
３）会話文の引用においても、「直接話法」と「間接話法」の両方がありうる。ただし、「間接話法」は、会話文を地の文に同化させる話法であるから、会話文としての異文脈性を希薄化させることになり、その程度差はあるにしても、会話文として積極的に示す表現

意図を認めがたい。その点からは、会話文の典型は「直接話法」によるものであり、「間接話法」は地の文のありようの問題として考えるべきである。

4）もし「間接話法」において、会話文が問題になるとしたら、それは独話の場合であり、音声化されたものとして表現されているか否かが問われる。そこに、会話文と地の文の中間に位置付けられる「心話文（心内文）」も関連してくる。実際の文章においては、意図の有無を問わず、これらの区別が曖昧な場合がある。このような違いは、会話文として積極的に示すことに関与的か否かによる。

〔理由７〕会話文がどのような位相を反映するか、整理されていないから。

1）会話文の位相は、次のⅠ～Ⅲの３つの階層から成る。

2）位相Ⅰ：言語単位における談話と文章

会話　：談話に含まれる。音声による、独話以外を包括する、一般的な用語。

会話文：文章に含まれる。文字による、おもに文学的な文章や作文における用語。

なお、次の２点を補足する。

①実際の会話をそのまま文字化したものは、「会話文」ではなく、「文字化資料」あるいは「口述筆記」と呼ばれる。

②文章でも、演劇台本・戯曲などでは、「台詞（せりふ）」と呼ばれて、「会話文」とは区別される。「台詞」は舞台で役者により音声化されるためのものであり、その目的のない「会話文」とは異なる。

3）位相Ⅱ：文章における地の文と会話文

会話文：描写が中心：会話場面の様相

【参考】心話文：内面描写。

地の文：説明が中心：場面の展開／描写としては外面描写。

4）位相Ⅲ：会話文自体の表現

発話主体の違い：社会的属性、役割語あるいはキャラ語。

発話場面の違い：場面の改まり度や会話に関わる人間関係による待遇差。

〔理由８〕会話文の引用はカギカッコによって示されると考えられているから。

1）会話文の引用を示す形式として、一般にまず挙げられるのがその表記である。

2）表記による、引用文の明示は、おもにはカギカッコなどの符号、あるいは改行・字下げなどによってなされ、当該文脈と視覚的に区別される。しかし、それが一般化するのは、近代になってからであり、それ以前は、地の文と区別する表記はされなかった。ただし、会話文とは区別される台詞を記す演劇台本類には表記上の区別が古くから認められ、江戸戯作もそれに準じる。

3）引用文のうち、会話文に特定されるのは、表記のみによってではない。カギカッコなどで、その前後が括られていても、他の種類の引用文あるいはその符号の他の用法ということもありうる。会話文の特定には、表記以上に優先されるべき引用形式がある。

4）会話文を引用する表現形式としては、地の文の１文に含まれる場合と、地の文とは独立した１文として示される場合とがある。どちらであれ、それは会話文１例に限らず、複数になることもある。そのうえで、それらが会話文と認定されるのは、その前ある

いは後の文脈において、発話に関わる表現が会話文の「引用マーカー」として用いられている場合である。

5）会話文の「引用マーカー」の典型となるのは、引用の格助詞「と」および、それに続く「いふ」や「はなす」などの発話動詞である。その他に、「さけぶ」や「ささやく」・「声」「言葉」など、発声・発語に関わる語も含まれる。これに、会話文の発話主体が明示されれば、会話文としての認定度はより高まる。ただし、これらの表現があれば、必ず会話文とみなされるわけではなく、地の文との接続の仕方によっては、「間接話法」とみなされる場合もある。

〔理由９〕会話文の表現には口語が反映されているとみなされがちであるから。

1）引用文が会話文と特定されるには、その引用形式だけでなく、会話文自体の表現においても、地の文とは相対的に区別される「発話らしさ」あるいは「会話らしさ」が実現されている必要がある。ただし、引用形式があることによって、それらのらしさが乏しくても、会話文と認められる場合もなくはない。

2）「らしさ」実現に関わる語・表現として、顕著なものとして、次の２つが挙げられる。これらが認められる引用文は、会話文として認められる蓋然性が高い。

①「発話らしさ」としての、発話場面に関わる直示的な表現。具体的には、コソアの指示語による現場用法、登場人物同士における話し手と聞き手を示す１・２人称である。これらは発話場面ならではであって、３人称視点の文章の地の文には見られない。その発話場面は実際のモデルをふまえたものもあれば、虚構されたものもあるが、その違いは問われない。問われるのは、「らしさ」のリアリティである。

②「会話らしさ」としての、発話相互のインタラクションを示す言葉。それは、対相手のモダリティ表現に端的に表わされる。たとえば、相手への呼び掛け、質問と回答、命令・禁止・依頼と、それに対する応答の表現、待遇表現、終助詞などである。これらも、読み手を対象とする地の文には、特別の場合を除き、見られない。

3）自然発話には、言い間違い、言い淀み、繰り返し、飛躍、文法的なねじれなど、音声の性質上、生じやすい不整表現がしばしば認められるが、会話文においては、よほどの場合を除き、それらは取り入れられない。あくまでも「らしさ」を文章表現上に意図的に実現させるためのものであって、実際の発話そのものとは異なったコントロールがされている。

4）なお付言すれば、「会話体」という語があるが、これは会話文そのものに関してではなく、地の文の文体のことである。「口語体」は地の文と会話文のどちらにも用いられるが、以上の要素はそれに当てはまらない。

〔理由 10〕会話文は語学的な研究対象として適切に扱われていないから。

1）「文字化資料」はあくまでも談話研究のための資料であって、普通、文章とはみなされない。それに対し、文章としての形式・内容上のまとまりがあり、かつ読まれることを目的とするものが、文章研究の資料となる。会話文が研究対象となるのはそういう資料においてであるが、会話文が含まれる文章は限定的であり、かつ会話文の引用も任意的であるから、資料的な選択が前提となる。

2）その中にあって、会話文に特化する形で研究対象とされてきたのは、文語・書き言葉に対する口語・話し言葉としての、音声・語彙・文法・文体などの分野においてである。ただし、これは音声資料の代替とせざるをえない、時代的に不可避的な側面によるものである。しかし、当然ながら、会話文は、口語の、さらには会話事実そのものの反映とは言えない。会話文は文章における位相の１つとして、地の文とは区別して、位置付けられるべきものであるにもかかわらず、従来の研究においては、その区別が特別視されたり、逆に等閑視されたりしてきたように見受けられる。

3）「位相」とは、主体あるいは場面による言語様相の異なりを表わし、その位相差は言語内のさまざまな単位・要素に及ぶだけでなく、言語行動やコミュニケーションのありようにまで関わる。たとえば、近年流行の役割語の研究が対象とするのは、小説の会話文であり、戯曲の台詞であり、マンガの吹き出しである。どれにも共通するのは、登場人物の会話として擬似的・虚構的に創作されたものという点であり、だからこそ「役割語」とも称されるのであり、会話文という位相だからこそその研究が可能であると言えるのである。ただし、そのような会話文に対する認識に基づいての研究なのかについては、疑問無しとはしない。会話文という位相を支えているのは、現実の、または文字通りの発話でも会話でもない、文章におけるそれぞれの発話主体の「発話らしさ」あるいは「会話らしさ」という類型性・様式性である。

4）ここで注意すべきは、会話文という位相は、文章の中に引用される限りにおいて、成り立つという点である。それが文章全体に及ぶならば、会話文という位相を設けるまでもない。つまり、地の文あっての会話文なのであり、この両者の関係性のうえで会話文という位相が意味を持つのである。

5）その意味とは、文章構成上の機能という点から、もっぱら描写表現に関わる。描写と説明という区別は、より対象・事実寄りか、より主体・意見寄りかという、相対的なものにすぎないが、文章はその配分はともかく、この両方の表現によって成り立っているものである。会話文自体を研究対象として取り上げるのは、結果として、引用文の位置付けを通して、文章全体の様相特性を明らかにすることであると言えよう。

〔理由 11〕作文教育において、会話文に関する知見が示されていないから。

1）「作文」つまり文章を書くことに関する教育は、国語教育においても、日本語教育においても、重要な位置を占める。作文には、生活文やエッセイあるいは創作も含まれ、そのような文章には、会話文が引用されるのが普通である。

2）これまでの作文教育において、たとえば、書き出しの会話文引用の効果が指摘されることはあっても、実際に、文章全体において、会話文をどこに、どのように、どの程度用いればよいかという、具体的な指導に欠けていたきらいがある。作文教育が論理的な説明を重視する文章の書き方にシフトする傾向がある昨今は、なおさらである。

3）また、会話文そのものの表現についても、地の文との区別や、方言などの利用に関する評価基準が示されていないという問題もある。

4）これらは、元をただせば、経験的にも、理論的にも、会話文に対する教育的な知見が用意されてこなかったことによるものと考えられる。

会話と「会話文」―小説の会話文の相対化をめざして

髙崎（たかさき）みどり（お茶の水女子大学名誉教授）

１．はじめに

本発表は、「会話文とは何か」というテーマに対して、特に小説のなかの会話文を対象としていくつかの角度から考えてみようとするものである。小説作品はいわゆる「書き言葉」に属するが、会話という言語行動自体は「話し言葉」に属するものである。一般的には、「書き言葉」というものは「話し言葉」に対して、野村（2011：8）の指摘にあるように

１， 内容が整理され、文体が洗練される

２， 上品になる。パブリックな場の表現である

３， 対・聞き手表現が減じる

といった面をもつ媒体である。そこに何故、そうでない媒体を持ち込むのであろうか。かどかどしいカギかっこや、「と言った」「と話した」などの“発言動詞”を付してまで、書き言葉と話し言葉のインターフェイスの場を設けようとするのであろうか。

一人称語りの小説についてではあるが、ロッジ（1997：34）は

> いかにも喋っているような雰囲気は、実は、「本当の」作者が計算に計算を重ねて、丹念に推敲を加えた結果である。かりに現実の話しぶりを忠実に模倣した語り口で書いたとしたら、会話を録音してそのままテープを起こしたものと同じで、ほとんど理解不可能な代物しか出てこないだろう。計算して作り出したものこそが、本当らしさ、誠実な響き、真実を語っているという印象を生み出すのである。

と指摘するが、これはカギかっこで括られた直接話法の会話文にもあてはまるだろう。めざすところは、虚構のなかに“本当らしさ”の印象を与える文体を作り上げることであって、リアル会話の忠実な再現としての文体ではない。

それでは小説のなかの会話文は、リアルな会話とどのような言語的な相違があり、文体的な相違を作り上げているのであろうか。書き言葉としての整理・洗練のために何を落とし、何を加えているのか。一つの小説作品のなかで、“本当らしさ”の他に、会話文はどのような機能を果たしているのか。そして「話法」的な観点からみれば、直接話法の他にもいくつかの種類の話法があるが、それらはどのように組み合わさって会話描写を構成しているのか。こうした観点で、いくつかの先行研究や具体的な作品を扱いながら、小説の会話文とは何か、ということにつき、考察する。

２．リアルな会話と小説の会話文の比較（表はパワーポイントで示す）

山崎（2022）では、「日本語日常会話コーパス（CEJC）」（モニター公開版：2018 年度版＋2020 年度版）と「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」の図書館サブコーパスに含まれる小説の会話文を比較し、品詞構成や高頻度語、特徴語などについて比較考察している。その比較結果の概要を摘記する。

① 品詞構成比についてではCEJCの方が感動詞・副詞の割合が多い。
② 感動詞の中で相対的に特徴がある語は、CEJCでは、【感動詞－フィラー】「あの」「その」「えーと」、【感動詞－一般】「うん」「あっ」「ああ」等、バラエティが豊富。副詞もCEJCは「そう」「まあ」「一寸」等、バラエティが豊富。　BCCWJの方は比較的に感動詞・副詞ともにバラエティが少ない。　＊感動詞は「一般」と「フィラー」を分けている。
③ 品詞構成比についてはBCCWJの方が名詞・動詞・助詞の割合が多い。
④ 名詞の中で相対的に特徴があるのは代名詞で、BCCWJ:「私」「貴方」「僕」「君」等のバラエティ、動詞で「殺す」「居る」「為る」等、助詞で格助詞・係助詞・副助詞・接続助詞・終助詞と、種類も豊富。CEJCの方は比較的にこれらのバラエティが少ない。
⑤ 「言いよどみ」の頻度は、CEJCで17位で、BCCWJでは1873位である。

以上の語彙の様相からみると、相対的にであるが、小説の会話文は、人や動作の情報やその関係性を示す語の使用が見られ、一方、会話は、場の支援で替えられる代名詞や動詞の情報を落とし、無意味な語や発声や沈黙等の“非流暢さ”を多用することでコミュニケーション上のニュアンス伝達や雰囲気の共有・同調を行なう傾向を有しているといえよう。

３．小説の会話文についての各分野研究者の見解（1例のみ紹介、あとはパワポ画面で）

リーチ、ショート（2003：62－67）は、「自然なたどたどしさ」のせいで「現実の会話は文学の材料にはなりそうにもなく、言語の美的な力に対して鑑識眼を持つ者にとっては、乱雑きわまりない陳腐なものだと言える。」とし、「小説の話法は、読者がそれを見て、ある状況の特徴を示しているとわかるような言葉で表現され、独特のリアリズムや独特の真正性を示すものである。」、また、(D.H.Lawrence の会話文について)「直接述べるよりも主に推論を通して、わずかなスペースのなかで多くの意味を読者に提示している」とする。

４．会話文における位相の強調（表や用例はパワーポイントで示す）

髙﨑（1981）でも小規模ながら、録音文字起こしの会話と小説の会話文の語彙などの出方を比較し（注１）、実際の会話ではそれほどなかった、いわゆる女性らしい言葉遣いとされるものが、小説会話文のほうには「～だわ」「～のよ」「ありませんもの」等特に発話末で多くみられたことを指摘した。また、山崎（2019）では、BCCWJの小説会話文の会話モード（方言）について、「関西方言」が圧倒的に多い、と指摘する。こうしたことを含めて、小説の会話文の文体には必要に応じての“位相の強調”という面もあるのではないかと思われる。

４－１．操作される“女性性”

まず、村上春樹「ノルウェイの森」における直子の会話文を100発話採って、CEJCの4種類のコーパス（注2）の女性の各100発話と、発話末について比較してみた。その結果、直子の発話には、【のね・のよ・わね・わよね・なの・かしら・でしょう？】といった女性多用文末が多くみられたが、CEJCは、4種のコーパス計100×4の女性発話においては、【の・ね・よね・のよね・よ・でしょ】がみられる程度であった。

石上（2013）では、「雪国」（川端康成）での、島村と駒子の相互に向けられた発話のなかで、駒子は「わ」「の」「のよ」「わよ」を多用して、女性性を構築していると指摘している。

一方、吉田（1963）では、「自然主義的な名文」として徳田秋声「黴」における女性の発話や発話態度の描写箇所を挙げて、女性の性格や階級につき「それを叙述として説明せず、外部からの観察でおしてゆき、読者になっとくさせる方法が、具体的でよしとされたのである。」と述べる。対照的に、夏目漱石「明暗」の主人公津田の妹お秀が、津田に向かって言う言葉が長大で理屈っぽいのを、「いわゆる life-like な会話では全くない。そこにも漱石の小説文の特色が見てとれる。」としている。

やはり、どのように女性の人物像を造型するかで、“外部の観察”としての会話文の“女性らしさ”が加減されるのであろう。

ところで、翻訳小説では、「女性登場人物の発言を女ことばに翻訳する傾向」のあることがつとに指摘されている（中村 2013：190）。そうした傾向は明治期の翻訳試行錯誤期から始まっていた。たとえば、加藤・丸山（1991）によると、森鷗外は戯曲を翻訳（注 3）した時、口説く男から逃げ帰ったヒロインのエミリヤの台詞を「もうこゝまで来ればおちついた」と訳したのを、石橋忍月が「もうこゝまで来れば大丈夫」とすべきだと批判したことに反駁して「げに大丈夫は安全なり。しかはあれどエミリヤは令嬢なり。おちついたりといふ語と硬軟奈何。若こゝまで来りやあ大丈夫といはゞ、盗人の逃げ来りていふ言葉のやうならむ」と言っている。

谷川（2008）では、「異国の女」という章で、明治期翻訳小説の女性作中人物の言葉遣いについて「ことばの男女差と情意性をあくまで要請する日本語の中で、希薄な情意性と軽微な差異しかもたない作中人物たちのことばを保持していくことは、しかし、けっして容易なことではない。」と指摘している。

三浦（2018）では、バーネット原作「小公子」の若松賤子訳において、女性登場人物には「わ」「だわ」という終助詞の使用は見られないこと、セドリックの母のエロル夫人は「だよ」「よ」の使用が多いことを指摘し、「ここでは優しく教え諭すように話をするエロル夫人の人物像が表現されている」とする（注 4）。これは訳者若松賤子自身の判断であり、人物像をより明確に訳出するためのストラテジーであろう。

翻訳の姿勢には原文に忠実な姿勢の訳出と、翻訳先の言語にとっての自然さを優先する場合とがあるが、日本語の会話における“女性語”への期待の存在により、後者を優先せざるをえない場合も少なくなかったかと思われる。このような、翻訳小説の会話文の仕立て方は、会話を通しての外面的観察から登場人物の人間的要素を推論させる手段としての会話文の存在意義を、改めて照らし出すものと言えよう。

４－２．関西弁の取り込み―操作される関西弁

先にあげた若松訳「小公子」の会話訳文には、方言的な語、何処のものともわからない“疑似方言”的な語が含まれている場合がある。会話文に方言を取り込むということはどんな意味があるのだろうか。三浦（2018）によると、登場人物ごとの訳出パターンとして、原文が非規範的英語表現ではないのに疑似方言で訳出される場合がある。原文の反映でなく、訳文において若松自身がその人物を規範的な話し方をしない人物として描出するということに

なる。すなわち、会話文を“脇役”的な登場人物の、類型的で単純な人物描写として利用している、といえる。

さて、方言の中でも会話文でよく描写される関西弁の取り込みについて見ていこう。

田辺聖子の作品は会話文が多く、地の文も話し言葉口調が混じるものが多いが、その中でも関西弁で語られる作品が多く、髙﨑（2006）によると、地の文にも語彙レベルや登場人物の心内表現として会話部分の関西弁から滲出したように見える関西弁口調が見えることもある。田辺自身の発言としても「発想自体、大阪弁で発想しているものだから、いまになって標準語や東京風アクセントで小説を考えられない。」（「猫なで日記」）という。

関西弁使用は、風土へのこだわりということばかりではなく、言語資源として関西弁の特質を使い切るというストラテジーなのであろう。同じく関西弁の会話が印象に残る谷崎潤一郎「細雪」は、「」内では関西弁を、間接話法的なやりとりや心内を表わす地の文では、非関西弁で、というふうに区別されている。

最近の小説でも関西弁の取り込みは見られる。原田マハ「旅をあきらめた友と、その母への手紙」という短編で、姫路市出身の「私」と、友達で小豆島出身、現在大阪に住む「ナガラ」の会話、携帯メールのやりとり、電話でのやりとり、ナガラの母親あてのお見舞いの手紙のそれぞれにおいて、関西弁の使用不使用やその程度に操作性がうかがわれ、親しさと改まりの調節がなされていることに気付く。

登場人物の会話の関西弁使用に関連して、もう一つ、小説ではないが随筆（高橋源一郎「母の死」注 5）を取り上げる。髙﨑（2007）でとりあげたものだが、この随筆は、会話引用が多く、実際に電話や会話で発せられた話しことばを、簡略化・要約化して、「」をつけない間接話法で示している。「」が使われて肉声として描写される会話文は少なく、結尾のほうの 2 文のみである。要するに、この随筆テクストは、肉声をなるべく感じさせない描写として会話文を使っている、という、会話文本来の機能からすれば矛盾しているような使い方なのである。そして、最後の文で、「この一週間、病室ではずっと大阪弁で話していたのだ。」と、病室という場での「わたし」の発話の基調となる“コード”が大阪弁であったことが初めて明かされる。書き手が「」使用を避けた理由の１つに、“大阪弁”コードを持ち込みたくないという理由があったことが推測される。私的な会話場面を公的な書き言葉に開いていく、きわめて個人的な体験を不特定多数の読み手に開いていく過程で操作された会話描写といえる。

５．会話文の割合とその意味－地の文との関係性（表や用例はパワーポイントで）

山崎（2022）では、前述の調査で、すべての文数に占める会話文の割合平均を 43.9%としている。規模は小さいが前述の髙﨑（1981）で使用した「夫婦の情景」でも追加調査したところ 48.4%であった（注６）。森岡（1988）では、文章の読みやすさに関連して会話文のパーセンテージを調査し、そのうち「文芸読物（中央公論・世界・改造・文藝春秋・新潮）」は 15.0%であるとし、「低学年、娯楽的なものほど、文中に会話を含む率が高い。」とする。樺島・壽岳（1965）巻末に、各文体項目について各作品から 80 文を無作為抽出してデータ

をとった「現代小説 100 作品の分析表」があり、そのうちの「引用文の比率」（注 7）は、0%から 90%までさまざまでフレが大きいが、20～30%前後が多いようだ。会話文が多いと“人間的要素”が発揮され、わかりやすさ、親しみやすさに貢献することとなり、それを狙った作品に多用され、対地の文比率もあがってくるのだろう。

「文体」というと会話文を除いた地の文を対象とすることも行われてきたが、逆に会話文のありかたに、文体を見出す方法もある。量的な面では芳賀・安本（1968）の「会話型」「文章型」という文体特徴の軸がある。また岡村（1963）では谷崎潤一郎の文体について、語り手の存在が本来異質な会話文と地の文を融合させるとし、また物語によく出てくる「半間接話法」を取り入れていることも指摘している。漱石は会話要素が多く「個々の人物にはいり込んで動かし、人物間の連鎖反応を利用する。」とし、鷗外は会話文が少なく「対話も、話し手聞き手の位置が固定され、双方が反応しあってお互いを浮き彫りする効果をねらっていない。また口頭語らしさをもあまり写さず、文章語のような正確な語法を用いる」とする。会話文の存在が地の文と関係しあって作品の文体を作りあげているものと思われる。

６．話法について（図表はパワーポイントで示す）

リーチ、ショート（2003）は「小説家がある行為、あるいは発話行為が起こったことを伝達する時、読者は完全に小説家の視点から出来事を見ていることは明らかである。しかし、より拘束された端から、より自由なものへと、発話表出の連続的変化（cline）に沿って移動するにつれて、小説家の介在がだんだん目立たなくなるように思われ、ついに FDS＊という究極のものにおいては、小説家は隠れ、登場人物たちに完全に自由に語らせているように見えるようになる。」という。　　＊FDS は自由直接話法のこと

話法についての研究をみると「坊ちゃん」（夏目漱石　明治 39 年）の会話文について、林（1975）は、対話の性格や話法の形式で分類し「会話場面だけを分析的にあとづけることで、小説全体の筋運びの方法や人物の相互関係、位置づけなどが、はっきりしてきた」とする。中村（2010）では、会話文に、現実の発言から心内語・思考内容に至る種々の層を設定し、具体性の強弱や概念化の程度を測るなどして、会話構造と物語の構図の関係をみている。

なお、会話のほかに登場人物の思考を表出・伝達する話法も小説の描写には重要である。心理の伝え方として、現実にはありえない登場人物の内面の感情に入り込んだ表現が小説では重要な役割を果たす。そこには形のない想念が言葉になり得て、言葉を伝える話法に載せることができるという小説の約束がある。語り手の視点を通したことによる内面描写などさまざまな工夫が話法と併行して行われる。

「坊ちゃん」でいえば、冒頭「親譲りの無鉄砲で～」で始まる一段落目には「人」「同級生」「おやぢ」「おれ」の発話が間接話法的に詰め込まれている。語り手が「おれ」なので、作品内の坊ちゃんの発話や地の文の“あくたれ”や“ののしり”も、「巻き舌」の「べらんめい調」として直接話法的に響いてくる。しかしよく読むとその中には直接人に向かって言っているのではない心内の表現にとどまる場合もあったりする。いろいろな話法が組み合わさって、言葉や思いや語りが一続きになって勢いづいた文体で一気に読ませるのである。

７．まとめと今後の課題

コーパスにみるリアルな会話には、録音録画した現実の時間の流れや場面がある。小説の中の時間の流れは可能性としてはより大規模な時間や場面の連続でありうるが、会話シーンはその中からほんの一部を取り出したように見せ、省略した多くの時間や場面を想像させる。会話にしばしばあって、会話らしさと解される言いよどみや躊躇いは、会話文で「……」や「―」を使って表すこともできるし、「～と、ためらいがちに言った」などを発話に添えることもできる。小説の会話文は、“書き言葉”にはない、“話しことばの表現力、推論を誘う力”といったものを生かそうとする、書き手たちの自然な営為ではないのだろうか。

人情本や黄表紙などの、会話文は口語文、地の文は文語文であった近世小説から転換して、語り手が介在することで地の文を口語文とすることが可能になった言文一致体の試み（野口 1980）の苦心と比較すれば、最近の小説はずっとなめらかに地の文と会話文が融けこんでいるように思える。やり残した課題として、そうした言文一致体と小説の会話文の関係があり、今後も追究していきたい。

注１　髙﨑みどり 1981「小説の中の会話文」『ことば』2、86-97　現代日本語研究会
小説「夫婦の情景」（曽野綾子　昭和 58 年））の会話文と、国立国語研究所の談話資料文字起こし「ツーテンジャックの遊び方」「服地買い」「モーニング買い」を総自立語数 1951 語ずつ採り、小説の会話文と録音文字起こしの会話との比較をし、指示語や接続詞、平均文長、最終文末等について分析した。

注２　「日本語日常会話コーパス（CEJC）」の C001-001 から 5 人の女性、C001-007 から 2 人の女性、T006-004 から 2 人の女性、T010-003 から 1 人の女性の発話をそれぞれ 100 ずつとった。CEJC は種々の場面における自然な日常会話をバランスよく収めた、動画付きコーパス。詳しい解説は、小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 2022『国立国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト報告書　6『日本語日常会話コーパス』―設計・構築・特徴―』（国立国語研究所）を参照のこと。

注３　レッシングの「エミーリア・ガロッティ」を翻訳して、明治 22 年から 25 年まで「柵草紙」に「戯曲折薔薇」として発表した。この鷗外の反駁は「国民新聞」（明治 24 年 3 月 18 日―21 日）に掲載。

注４　三浦（2018）によると森田思軒は若松の会話文訳出について「尤も服する所は談話ダイアログなり」（『女学雑誌』明治 24 年 292 号）と高く評価した。

注５　高橋源一郎「母の死」『文藝春秋』2003 年 2 月号　巻頭随筆　文藝春秋社

注６　注１の調査の対象を含む冒頭から 3 篇の会話文の文数を地の文の文数で割った比率。

注７　引用文の比率とは、同書で「作品中にカッコでかこまれた会話の引用がどれくらい含まれているかである。会話でなくてもカッコでかこんだり、行を別にして引用であることを明らかにしてある文は引用文とした。」として、引用文の文字数を【(引用文＋地の文）の文字数】で割った比率をさす。

（お詫び）文献・参考資料は、多岐にわたるためここでは割愛し、発表用パワーポイントに記します。

話法の連続性からみる地の文と「会話文」

―文学作品と新聞記事の比較をもとに―

松木 正恵（早稲田大学）

1　話法の整理

1－1　「直接話法」「間接話法」「自由直接話法」「自由間接話法（体験話法）」等の連続性

Ⅰ 英語における話法…ダイクシス（人称・時・場所等）・法・引用符等の客観的な指標を明示する欧米語の話法でも、語り手の介入度の差異により漸次的連続性(c1ine)を形成。

語り手による発話行為の報告⇒間接話法⇒自由間接話法⇒直接話法⇒自由直接話法
（基準）

語り手による思考行為の報告⇒間接思考⇒自由間接思考⇒直接思考⇒自由直接思考
（基準）　（Leech & Short(1981)による）

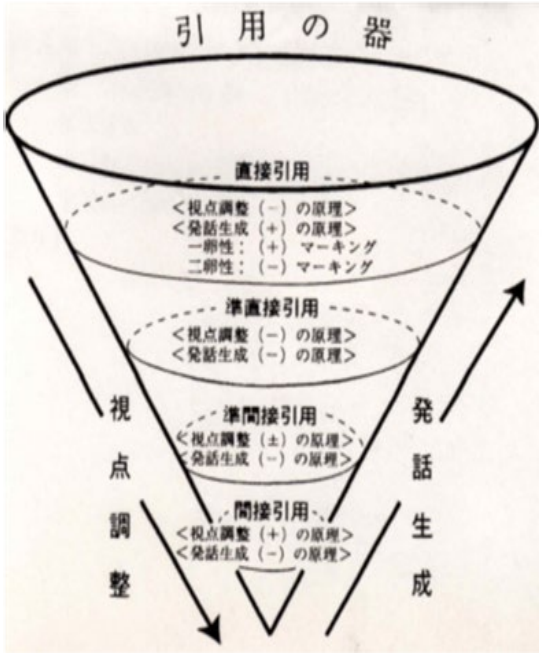
Ⅱ 体験話法の基本特性…語り手が、スカーラ上の作中人物寄りに視点を近づけて作中人物の思考・意識を再現するとき体験話法を用いる。

語り手　　作中人物
基準点（間接話法性）　（自由直接話法性）
スカーラ ●――――――――――――――●
間接話法　　体験話法　　自由直接話法　（三瓶（1996）p. 632）

1－2　日本語の話法の捉え方

Ⅰ 引用の器…「直接引用」「準直接引用」「準間接引用」「間接引用」の連続性（鎌田(2000)）

Ⅱ 話法の体系…話法とは、伝達の場と異なる場で成立した発話や思考を報告するいくつもの異なった伝達方式。（砂川（2003））



（鎌田（2000）p. 177）

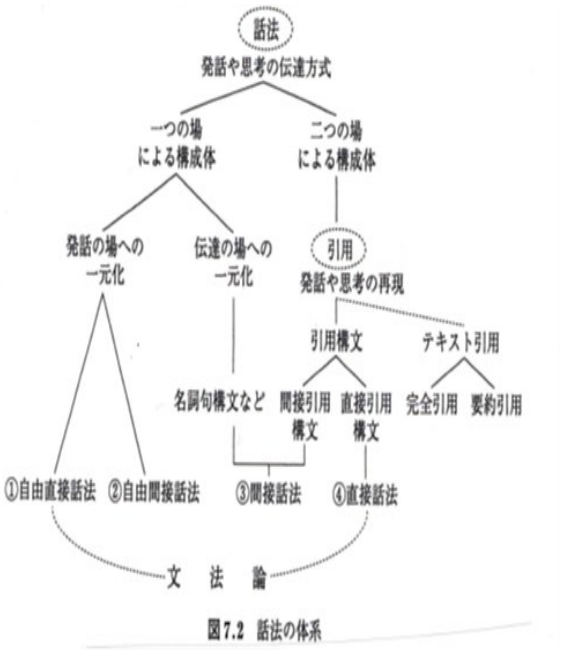


図7.2 話法の体系

（砂川（2003）p. 154）

Ⅲ 語り手の作中人物の内面への介入度…述部表現、人称、指示詞、作中人物の身分・地位に合った言葉遣い等が関わる。現在形で表される主観表現、自称詞で表される思考主の人称等、作中人物の視点寄りの要素が多ければ多いほど作中人物の肉声に近い表現になる。一方、過去形・他称詞等語り手の客観的な視点による要素が多ければ、語り手の手で整理されて間接化した形式になる。(顧那 (2005) p. 47　以下は、その掲載例を改変したもの)

① 太郎は「たとえ相手が社長だろうと、俺は人にからかわれたくない。」と言った。(直接話法)
② たとえ相手が社長だろうと、俺は人にからかわれたくない。(自由直接話法)
③ たとえ相手が社長だろうと、自分は人にからかわれたくない。(自由直接話法)
④ たとえ相手が社長だろうと、彼は人にからかわれたくない。(自由間接話法)
⑤ たとえ相手が社長だろうと、太郎は人にからかわれたくない。(自由間接話法)
⑥ たとえ相手が社長だろうと、自分は人にからかわれたくなかった。(自由間接話法)
⑦ たとえ相手が社長だろうと、彼は人にからかわれたくなかった。(地の文的)
⑧ たとえ相手が社長だろうと、太郎は人にからかわれたくなかった。(地の文的)
⑨ 太郎は、たとえ相手が社長だろうと彼は人にからかわれたくないと言った。(間接話法)

Ⅳ 登場人物の主観的把握による事態把握に基づく日本語固有の「話法」(山岡 (2009) p. 68)

・意識の主体である(ゼロ化された)話し手(特に、登場人物)が他人や自分の発話内容・思考内容を「今」まさに「ここ」で語る方法➔日本の伝統的な内的独白調子の「話法」の概念に基づく擬似的な「直接話法」「間接話法」等。(英語の「話法」を模倣した「話法もどき」)
・報告節は省略されやすく、あっても原発話者を指示する固有名詞(三人称代名詞)は省略。
・報告節の動詞の時制は、過去時制のタ形ではなく、テンス現在のル形または完了のタ形。
➔日本語には、客観的な事態把握に基づく英語流の「話法」というものは存在しない。
従って、英語流の直接話法 (思考)、間接話法 (思考) も存在しない。(同上 pp. 67〜68)
・日本語の**引用符の働き**は、英語のように発話内容が直接的か間接的かとは関係なく、「会話らしさ」の印象を与える、擬似的な客観性を与えようとすることにある。(同上 p. 65)

１－３　話法の連続性と地の文・「会話文」

Ⅰ 地の文と「草子地」・話法の関係性

・「草子地」の定義…物語の地の文において、感想・注記・批評・説明など、作者と思われるものが物語の表面に出て、直接発言している部分、あるいは読者を意識した作者の姿勢が認められる部分を草子地という。(中野 (1971) p. 111) ➔話法との関係は？
・「草子地」の範囲…近代の論者たちにおいて「草子地」がどうしても「地の文」全体にまでおし拡げられる傾向にある〜 (中略)「草子地」概念はまさしく地の文一般に解消するしかなくなってくる。(高橋 (1982) p. 229〜230) ➔地の文とは何か？
・地の文と自由直接話法の心内文との連続性 (福沢 (2015) p. 205)
・「現代日本語では、全ての文は潜在的に体験話法 (自由間接話法) である。」(同上 p. 225)

Ⅱ 地の文と「会話文」の位置づけ

・地の文とは？…文学的文章にのみ言われるが、新聞記事の文章の場合は？
・「会話文」とは？…「心内文・内的独白」との違いは？引用符の有無との関係は？

２　小説「アフターダーク」(村上春樹) における会話文と地の文

２－１　「アフターダーク」に現れる「引用符付き会話文」の諸形態

Ⅰ 「アフターダーク」の会話文の特徴…粗稿は台詞と ト書きから成るシナリオの体裁

➔そのシナリオを小説にするために行われたのは、ト書きを地の文らしく書き込むこと。それは、台詞をほぼそのまま会話文として通用させるためか。(はんざわ (2024) p. 3)

➔どちらも虚構として創造されたものでありながら、実際に音声化・談話化されるシナリオの台詞と、文章として読まれるのみの小説の会話文とでは、成り立ちが違う。(同上)

Ⅱ 「アフターダーク」における会話文の引用形式 (はんざわ (2024) p. 7)

A：前後が改行され、地の文から独立している。(会話文として最も目立つ)

B：改行されるが、その後に改行されずに、地の文が続く。

C：地の文の後に、改行されずに続き、その後に改行される。

D：改行されずに、前後を地の文に挟まれる。(会話文としては目立たない)

Ⅲ 「アフターダーク」の「引用符付き会話文」についての共起動詞による分類

①「発話動詞」類と共起する会話文

(1) 彼は声をかける、「ねえ、間違ってたらごめん。君は浅井エリの妹じゃない？」(中略)

「前に一度会ったよね」と男は続ける。「えーと、君の名前はたしかユリちゃん。お姉さんと一字違いなんだ」

彼女は用心深い視線を維持したまま、事実を簡潔に訂正する。「マリ」[第 1 章　以下章数字のみ記載]

(2) ウェイトレスが水を持ってくると、彼はチキンサラダと、カリカリに焼いたトーストを注文する。「すごくかりかりにね」と強調する。「黒こげになる寸前くらいに」。それに食後のコーヒーをつける。[1]

(3) やがて頃合いを見計らってカオルが咳払いし、沈黙を破る。

「あのさ、もしあんたたちがそいつをみつけ出したら、ひとことうちに教えてくれるかな？」

男は左手でハンドルを握り、右手をヘルメットの上に軽く置いている。

「もしこの男をみつけ出したら、あんたにひとこと知らせる？」と男は機械的に復唱する。[6]

★例(3)の視点の調整…＜カオルの直接話法＞「あのさ、もしあんたたちがそいつをみつけ出したら、ひとことうちに教えてくれるかな？」

＜男の直接話法＞「もし(俺たち)がこの男をみつけ出したら、あんたにひとこと知らせる？」

②「発話随伴行為動詞」と共起する会話文

(4) 男は人差し指を宙に向ける＜想起＞。「そうそう、マリちゃんだ。エリとマリ。一字違い。僕のことはきっと覚えてないよね？」[1]

(5) マリは少しだけ顔をしかめる＜否定感情＞。「そういうことって、まず最初に尋ねるものじゃないの？」

男は言われたことの意味について考える＜推測＞。「誰かと待ち合わせしているの？」[1]

③「行為動詞」と共起する会話文

(6) テーブルの上の勘定書をとろうとするが、その前に女が手を伸ばす＜次会話が行為の理由＞)。

「これはうちが払うよ」[3]

④ 共起動詞の現れない会話文

(7) カオルが半ばやけっぱちで、どこかのアイコンをほとんど力まかせにダブル・クリックすると、ややあって、10 時 48 分の画面がモニター画面に現れる。

「やったね」

コムギ「すごいっすね。為せばなるっつうか」

コオロギ「コンピュータもきっと、びびりよったんですわ」[6]

Ⅳ 「アフターダーク」における会話文の引用形式と共起動詞による分類との対応関係

Ａ→「発話・行為動詞」と一部共起/Ｂ→主に「発話動詞」と共起/Ｄ→「発話動詞」と一部共起
Ｃ→「発話動詞」・「発話随伴行為動詞」・「行為動詞」の全てと共起

Ⅴ 長い会話文(過去の出来事の語り)中の非タ形・タ形…草子地的な話法の出現

(8)高橋はコーヒーカップをソーサーに戻す。「①二年前のことだけど、立川で放火殺人事件があった。②男が老夫婦を鉈で殺して、預金通帳と印鑑を奪い、証拠を隠滅するために家に火をつけたんだ。③風が強い夜で、近所の家が四軒焼けた。④こいつは死刑判決を受けた。(中略)⑮だから死刑判決がおりても誰も驚かない。⑯僕だって驚かなかった。⑰裁判長が判決主文を読み上げるのを聞いて、メモを取りながら、まあ当然だろうなと思っていた。⑱で、裁判が終わって、霞ヶ関の駅から地下鉄に乗ってうちに帰ってきて、机の前に座って裁判のメモを整理し始めたんだけど、そのときに僕は突然、どうしようもない気持ちになった。⑲なんていえばいいんだろう。⑳世界中の電圧がすっと下降してしまったみたいな感じだった。㉑すべてが一段階暗くなり、一段階冷たくなった。㉒身体が細かく震え始めて、止まらなくなった。㉓そのうちにうっすら涙まで出てきた。㉔どうしてだろう。㉕説明できない。㉖その男が死刑判決を受けて、どうして僕がそんなにうろたえなくちゃならないんだ？ ㉗だってさ、そいつは救いがたくろくでもないやつだったんだ。㉘その男と僕とのあいだには、何の共通点もつながりもないはずだ。㉙なのに、なぜこんなに深く感情を乱されるんだろう？」[9]

★「直接話法」⑰(テイタ形・思考) ★「自由直接話法」⑲㉔㉙(ル形・自問)・㉕(ル形・感情)
★「自由間接話法」…⑱⑳(タ形・感情)・㉖(ノダ形・自問)・㉗㉘(ノダ形/ハズダ形・主張)

２－２ 「アフターダーク」の地の文における「引用符なし会話文」の諸形態

Ⅰ「アフターダーク」(講談社、2004 年)の地の文の特徴

・視点人物を「私たち」という１人称複数にしている点
・地の文における文末がすべてル形になっている点

Ⅱ 「アフターダーク」の地の文に現れる会話文についての話法による分類

① 草子地―直接話法・間接話法

(9)「逃げるんだ」と私たちは声に出して叫んでしまう。中立を保たなくてはならないというルールを思わず忘れてしまう。その声はもちろん彼女には届かない。[14]

(10) こちら側からただ受動的にテレビの画面を眺めていることに、私たちは次第に飽き足らなくなってくる。自分の目で直接、その部屋の内部を確かめたいと思う。エリの見せ始めたかすかな動きを、おそらくは意識の胎動を、より間近に見てみたいと思う。その意味をより具体的に推測してみたいと思う。[10]

② 草子地―自由直接話法(疑問文・自問自答・断定・反駁)(→自由間接話法(回答・説明))

(11) 浅井エリの部屋。

浅井エリはいつの間にか、こちら側にいる。自分の部屋の自分のベッドに戻って、そこで眠っている。(中略) 彼女はあの謎の部屋からうまく脱出することができたのだろうか？ドアはうまく開いたのだろうか？[16]

(12) カメラのレンズはその意志を汲むように被写体に接近していく。エリの口もとがアップになる。私たちは息をひそめ、テレビの画面を見つめる。次にやってくるはずのものを辛抱強く待ち受ける。再び唇の震えがある。瞬間的な筋肉のひきつり。そう、さっきと同じ動きだ。間違いない。目の錯覚なんかじゃない。浅井エリの身に、何かが起こりつつあるのだ。[10]

③ 草子地―自由間接話法(感覚・推量・推測・断定・判断・注釈・比喩等)

(13) 服装は清潔で、こざっぱりしている。(中略) シャツもネクタイも高価なものに見える。おそらくブランド品だろう。顔立ちには知的な印象があり、育ちも悪くなさそうだ。[7]

(14) 私たちの視点は架空のカメラとして、部屋の中にあるそのような事物を、ひとつひとつ拾い上げ、時間をかけて丹念に映し出していく。私たちは目に見えない無名の侵入者である。私たちは見る。耳を澄ませる。においを嗅ぐ。しかし物理的にはその場所に存在しないし、痕跡を残すこともない。言うなれば、正統的なタイムトラベラーと同じルールを、私たちは守っているわけだ。[2]

④ 草子地―自由直接話法（メタ言語）

(15) 異なった世界のベッドの上で、エリはこの部屋にいたときと同様、昏々と眠り続けている。まったく同じように美しく、同じように濃密に。自分が（あるいは自分の肉体が、というべきなのだろうか）何ものかの手でテレビの画面の中に運び込まれてしまったことに、彼女は気づいていない。[8]

⑤ 作中人物の心内発話―間接話法・自由直接話法・自由間接話法

(16) 彼女は窓を開けようとするが、窓は開かない。（中略）ひょっとしてこれは船かもしれない、と彼女は思う。そういう考えが頭に浮かぶ。身体の中に穏やかな揺れのようなものを感じるからだ。私は今、大きな船に乗っているのかもしれない。[10]

(17) 彼女の意識は避けがたい変化が訪れたことを認識し、いやいやながらもそれを受容しようとしている。わずかに吐き気を感じる＜感覚動詞の人称制限＞。胃が収縮し、何かがせり上がってくるような感覚がある＜感覚動詞の人称制限＞。でも長い呼吸を何度か繰り返して、それをやり過ごす。ようやく吐き気が去ると、かわりにいくつかの別の種類の不快感が明らかになる＜感覚動詞の人称制限＞。手足のしびれ、かすかな耳鳴り、筋肉の痛み。あまりに長い時間、ひとつの姿勢で眠っていたせいだ。[10]

(18) 「すかいらーく」の洗面所でマリが手を洗っている。（中略）それから鏡に顔を近づける。何かが起こるのを予期しているような目で、鏡に映った自分の顔を見つめている。そこにあるどんな細かい変化も見落とすまいと。でも何も起こらない。[5]

⑥ 作中物の発話―直接話法

(19) 歩こうとするが、まっすぐ前に進むことができない。（中略）でも努力して、一歩一歩前に進んでいく。のっぺりとしたリノリウム張りの床は、きわめて事務的に彼女を査定し、詰問する。おまえは誰でここで何をしている、と彼らは冷ややかに問う。[10]

Ⅲ 「アフターダーク」の地の文中の「引用符なし会話文」の特徴

・語り手が顔を出す草子地と作中人物の心内発話を描写した部分があり、特に前者が頻出するのが特徴だが、文末が全てル形で間接化の根拠となるタ形を欠くため話法の区別が難しい。代名詞・指示詞・感情表現・文末表現等、使用可能な指標が限定されるからである。

２－３ 「アフターダーク」に現れる「引用符付き会話文」「引用符なし会話文」の違い

・「引用符付き会話文」…「アフターダーク」においては、地の文からの独立度に差のある会話文が連鎖的に出現。特に、会話文が地の文に埋没しているＤタイプが極端に少ない。

★Ａ（地の文から独立）＞Ｃ（地の文→会話文）＞Ｂ（会話文→地の文）＞Ｄ（地の文に埋没）

＜670 例＞　＜288 例＞　＜282 例＞　＜8 例＞

cf. ＜「アフターダーク」における会話文の各タイプの用例数＞（はんざわ (2024) p. 8 より）

・「引用符なし会話文」…草子地（語り手のコメント）と作中人物の心内発話が地の文中に多用される。ト書きを地の文らしく書き直す際に、それらを直接話法→自由直接話法→自由間接話法→間接話法と描き分けることで、語り手の介入度の多様性を表現している。

３ 新聞記事（『朝日新聞デジタル』）における会話文と地の文

３－１ 新聞記事における「引用符付き会話文」の諸形態

Ⅰ 引用と認められるもの

① 発話動詞・発話随伴行為動詞と共起する引用

(20) 父は「(男性が) 帰ってきて、一緒に暮らしている」と話したという。男性が仕事をしているのかどうかを聞くと、「自転車で行っているみたいやけど、ようしゃべらんから、わからんわ」。(2025.2.8)

(21) 女性は振り返る。「今考えれば、人が動いているのにお金がかからないことはないですよね。私がバカだったんですよ」(2025.2.17)

② 行為動詞と共起する引用

(22) 男性は半年前、紹介業をやめた。「自分自身、人身売買のようだと思っていた」(2025.2.17)

③ 共起動詞のない引用

(23) 北海道から訪れた高校3年の男子生徒は「海外留学を考えたが、金銭面で難しい。ここなら、留学するよりも安い学費（年間の授業料約70万円）で海外の大学と同じ環境で勉強ができる」。海外で日本語教師になる夢を抱く福岡県の高校3年の女子生徒も「立地はまったく気にならない。やりたい勉強ができることが、すべてです」。(2024.12.21)

Ⅱ 疑似的な引用

① 発話動詞・発話随伴行為動詞と共起する疑似引用

(24) 保護者からは「家で黙りがちだった子どもが、発表の練習を通じ、家族で会話することが増えた」「自分から進んで調べ物をしたり、ニュースを解説してくれたりするようになった」とうれしい声も届いた。(2025.2.13)

② 感覚・認識動詞と共起する疑似引用

(25) 「『恋愛対象』や『結婚相手』のフェーズから、もう私は完全に外れたんだな」。35歳を過ぎると、周囲からのプレッシャーも感じなくなった。(2024.9.16)

③ 行為動詞と共起する疑似引用

(26) 「スマホを使って、参加型にしたらどうか。スマホを触っていれば眠っているヒマもない」。22年、クイズ形式の参加型授業を始めた＜前会話が行為の理由＞。(2025.2.13)

④ 共起動詞のないもの

(27) 母親は、自分の友人が孫と遊びに行ったことなどを折に触れて口にする。実家に戻ると、テレビで流れる「はじめてのおつかい」を、父親が食い入るように見ていたこともある。「両親なりに、私がいくつで結婚して、何年後には孫が生まれて、みたいなライフプランがあったのかも知れないな」(2024.9.16)

３－２ 新聞記事における「引用符なし会話文」の諸形態

① 発話動詞と共起するもの

(28) 孤独死に詳しい日本福祉大の斉藤雅茂教授（社会福祉学）は、現役世代の特に単身者の場合、高齢者のようにヘルパーなどの日常的な変化に気づける人が少なく、死亡から発見まで見つかりにくいリスクがあると指摘する。(2025.2.8)

(29) メディアでは「女子力」という言葉が盛んに流れ、食事を作ったり家事をしたりするのが苦手な自分はダメだと言われているようだった。(2024.9.16)

②「という」

(30) 結城教授によると、(中略) 介護・診療報酬が高額になるような高齢者は、施設にとって大きな収益源となる「良い顧客」で、入所すれば医療も独占でき、効率的に多額の診療報酬を得られる仕組みがあるという。(2025.2.17)

③ 認識動詞と共起するもの

(31) 親の介護が必要になったらどうするか。引退するまでに、いくらためておかなければならないのか…。
　周りの人とつながりはあっても、そうした心の奥にある不安を打ち明けることはできない。現役世代の抱く「孤独」は、きっとそんなところにあるのだと、女性は感じる。(2024.9.16)

④ 共起動詞のないもの

(32) 自分の子には、病気を遺伝させたくない――。遺伝しない受精卵を子宮に戻す着床前検査を申請したら、検査会社から「できません」という回答が返ってきた。(2024.8.28)

３－３　新聞記事における「引用符付き会話文」「引用符なし会話文」の違い

・「引用符付き会話文」…新聞記事では、情報量的には会話文を目立たせる必要はないため、会話文が地の文に埋没したＤタイプは多いが、会話だけが独立したＡタイプは少ない。また、Ｂタイプは典型的な「～と＋発話動詞」型として定着しており、逆に発話動詞等が先に置かれてそれに会話文が続くＣタイプはバリエーションが多く、表現の幅が広い。
　新聞記事では、その描写の性質から会話文は必須ではなく、名詞化・間接化するなどして表現を客観化することが多いが、会話文を適宜導入することで、リアルでかつ前後の記述に証拠性・根拠性を付与する効果を生む。そのため、ダイクシス表現・丁寧体・縮約表現・終助詞・モダリティや方言等も付与して会話らしさが増すよう工夫されている。
・「引用符なし会話文」…Ｄタイプがより多くなり、会話らしさの指標も目立たず地の文に埋没した例が多い。ただ、引用符は未使用でも、会話文を「…」や「―」を使用して問題提起的に提示し、それに回答する体裁で文章が構成されるＡ・Ｂタイプも存在する。
・会話文の連続性…新聞では、「引用符付き会話文」と「引用符なし会話文」はほぼ連続的で、同じ発話動詞を用いた会話文でも引用符の有無は恣意的に選択可能。新聞記事といっても多様なため、リアリティ重視か客観性重視か、筆者の描き方によって差が大きい。

４　会話文とは何か？

「会話文」を定義するのは予想外に難しい。引用符の有無は明示的だが会話文らしさを支える一つの要素に過ぎない。引用符や会話らしいマーカーが施された会話文らしい会話文（直接話法的）から、話し手が背景化した自由直接話法的表現、語り手や筆者の視点から描く自由間接話法的表現、更には地の文に埋没・同化しがちな間接話法的表現、と会話文は多様かつ連続的な様相を見せるからである。その延長上には、会話文と地の文が連続的という見方も成り立つ。会話文のあり方から地の文を捉え直すことも必要なのではないだろうか。

[参考文献]鎌田修(2000)『日本語の引用』(ひつじ書房)/顧那(2005)「自由直接話法と自由間接話法における語り手の視点」『言語と文化』6/砂川有里子(2003)「話法における主観表現」『朝倉日本語講座５　文法1』朝倉書店/高橋亨(1982)『源氏物語の対位法』東京大学出版会/中野幸一(1971)「源氏物語における草子地」『源氏物語講座 第一巻 主題と方法』有精堂/はんざわかんいち(2024)「小説の会話文はシナリオの台詞と何が違うか？―村上春樹小説「アフターダーク」を通して考える―」(未公刊)/福沢将樹(2015)『ナラトロジーの言語学：表現主体の多層性』ひつじ書房/福沢将樹(2018)「草子地を再考する―〈注釈〉という機能を中心に―」『表現研究』108/三瓶裕文(1996)「日本語とドイツ語の体験話法について―間接話法と自由直接話法の間で―」『一橋論叢』115-3/山岡實(2009)「日英語「話法」の比較―日本語における「話法」とは―」『言語と文化』8/Leech, G. N. and M. H. Short. (1981) *Style in Fiction.* Longman.(筧壽雄監修『小説の文体―英米小説への言語学的アプローチ』研究社, 2003)

日本語学会2025年度春季大会予稿集
発行日（ウェブ公開日）：2025年4月18日
大会会期：2025年5月10日・11日

大会実行委員

会場校　齋藤文俊（大会実行委員長），宮地朝子（副委員長），志波彩子，杉村泰，李乃琦

大会企画運営委員会　高木千恵（委員長），庵功雄（副委員長），矢田勉（副委員長），池上尚，太田陽子，小川晋史，苅宿紀子，久保薗愛，鴻野知暁，佐伯暁子，坂井美日，田村早苗，堤良一，中川奈津子，宮澤太聡（委員長補佐），森勇太（委員長補佐），幸松英恵

事務局委員会　川瀬卓（事務局長），富岡宏太，野間純平

広報委員会　市村太郎，村山実和子